茨城県教育財団文化財調査報告第253集

田島遺跡
（田島下地区）

一般国道６号千代田石岡バイパス
(かすみがうら市市川～石岡市東大橋)
事業地内埋蔵文化財調査報告書１

平成１８年３月

国土交通省
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県では均衡ある地域発展と地域交流圏の形成を図るため，人・物・情報・技術等が活発に交流できる開発を目指しています。そのためには県内の高速交通網を早期に形成するとともに，アクセス道路や地域間を結ぶ国道などの道路整備が計画的・効率的に進められています。

千代田石岡バイパスは，石岡市内を中心に発生している交通渋滞を解消するため，土浦市中貫地先から石岡市東大橋地先に至る延長15.7㎞のバイパスとして計画されたものです。この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である田島遺跡（田島下地区）が確認されました。

財団法人茨城県教育財団は，国土交通省常陸河川国道事務所から埋蔵文化財の発掘調査について委託を受け，平成16年１月５日から平成17年３月31日までの間，二次に渡り発掘調査を実施しました。

本書は，田島遺跡（田島下地区）の調査成果を収録したもので，本書が学術的な研究資料としてはもとより，郷土の歴史に対する理解を深め，ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，委託者である国土交通省常陸河川国道事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し，厚く御礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，石岡市教育委員会をはじめ，関係各位からいただいた御指導，御協力に対し，感謝申し上げます。

平成18年３月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　稲　葉　節　生

例　　言

1　本書は，国土交通省の委託により，財団法人茨城県教育財団が平成16年１月から平成17年３月まで発掘調査を実施した，茨城県石岡市大字石岡字田島下15,657番地ほかに所在する田島遺跡（田島下地区）の発掘調査報告書である。

2　発掘期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査　平成16年１月５日～平成16年３月31日（第一次）

平成16年10月１日～平成17年３月31日（第二次）

整理　平成17年４月１日～平成17年９月30日

3　発掘調査は，調査課長川井正一のもと，以下の者が担当した。

第一次

首席調査員兼班長	萩野谷　悟	平成16年１月１日～平成16年３月31日
主任調査員	飯泉　達司	
主任調査員	石川　義信	

第二次

首席調査員兼班長	荒井　保雄	平成16年10月１日～平成17年３月31日
首席調査員	川又　清明	
主任調査員	飯泉　達司	
主任調査員	後藤　孝行	平成17年１月１日～平成17年３月31日
主任調査員	皆川　　修	平成17年２月１日～平成17年３月31日
主任調査員	石川　武志	平成17年３月１日～平成17年３月31日
主任調査員	浦和　俊郎	平成16年10月１日～平成17年３月31日
主任調査員	寺内　久永	平成16年11月１日～平成17年１月31日
主任調査員	田月　淳一	平成17年１月１日～平成17年２月28日

4　整理及び本書の執筆・編集は，整理第二課長大森雅之のもと，主任調査員飯泉達司が担当した。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し，Ｘ＝＋19,920m，Ｙ＝＋39,840mの交点を基準点（A1a1）とした。なお，抄録の北緯・東経（　）書きは世界測地系座標による。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西・南北に各々10等分し，４m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C‥‥，西から東へ１，２，３‥‥とし，「Ａ１区」，「Ｂ２区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は，北から南へa，b，c‥‥j，西から東へ1，2，3‥‥0とし，名称は，大調査区の名称を冠して「A1a1区」，「B2b2区」のように呼称した。

2　実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構　ＳＩ－住居跡　ＳＢ－掘立柱建物跡　ＳＫ－土坑　ＳＤ－溝跡　ＰＦ－水田跡　ＳＡ－杭列
ＳＥ－井戸跡　ＨＧ－遺物包含層　Ｐ－ピット　ＳＸ－不明遺構　Ｋ－撹乱

遺物　Ｐ－土器・陶器 DP－土製品 Ｑ－石器・石製品 Ｍ－金属製品 TP－拓本記録土器
Ｗ－木製品　Ｔ－瓦　Ｎ－自然遺物

土層　Ｋ－撹乱

3　土層と遺物における色調の判定には，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

4　遺構・遺物実測図の作成方法については，次のとおりである。

（１）遺構全体図は200分の1，遺構実測図は60分の１又は80分の１の縮尺を基本に掲載した。

（２）遺物実測図は３分の１の縮尺を基本とした。

（３）遺構・遺物実測図中の表示は，次のとおりである。

□施釉　□煤・漆　■竈・粘土・炭化物・黒色処理　■油煙　▒繊維土器断面
● 土器・拓本土器　○ 土製品　□ 石器・石製品　△ 金属製品　☆ 自然物　－－－硬化面　▲木製品

5　遺物観察表の作成方法については，次のとおりである。

（１）計測値の（　）内の数値は現存値を，［　］内の数値は推定値を示した。単位は，法量については㎝，重量についてはｇで示した。

（２）備考の欄は，残存率，写真図版番号(ＰＬ)及びその他必要と思われる事項を記した。

6 「主軸」は，竈を通る軸線あるいは長軸（径）を通る軸線とし，その主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した（例　N－10°－E)。なお，推定方向は［　］を付して示した。

抄　　録

ふ り が な	たじまいせき（たじましたちく）
書　　名	田島遺跡（田島下地区）
副 書 名	一般国道６号千代田石岡バイパス（かすみがうら市市川～石岡市東大橋）事業地内埋蔵文化財調査報告書
巻　　次	１
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第253集
著 者 名	飯泉達司
編 集 機 関	財団法人　茨城県教育財団
所 在 地	〒310-0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の２　　ＴＥＬ　029-225-6587
発 行 日	2006（平成18）年３月24日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
田島遺跡 （田島下地区）	茨城県石岡市大字 石岡字田島下 15,657番地ほか	08205 ｜ 146	36度 10分 36秒 〔36度 10分 47秒〕	140度 16分 46秒 〔140度 16分 34秒〕	4 ～ 5m	20040105 ～ 20040331 20041001 ～ 20050331	9,319㎡	一般国道６号千代田石岡バイパス（かすみがうら市市川～石岡市東大橋）建設工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田島遺跡 （田島下地区）	集落跡	古　墳	竪穴住居跡 ５軒	土師器片，須恵器片，灰釉陶器片，石製品（臼玉），土製品（紡錘車，土玉），鉄製品（刀子），木製品（井戸枠，柱根）	
		奈良・平安	竪穴住居跡 １軒 掘立柱建物跡 10棟 井戸跡 ２基		
		中・近世	掘立柱建物跡 ５棟 方形竪穴遺構 １基 井戸跡 ６基	土師器片，須恵器片，緑・灰釉陶器片（皿，碗），陶磁器片	
	生産跡	古代～近世	水田面 10区画 土坑 ２基 溝跡 12条	須恵器片，土師器片，古銭，蹄鉄	
	遺物包含層	縄　文	１層	縄文土器片（深鉢），種子（胡桃）	
		奈良・平安	１層	須恵器片，土師器片，緑・灰釉陶器片（皿，碗，浄瓶）	
	その他	不　明	土坑 258基 溝跡 ７条 不明遺構 １基	須恵器片，土師器片，陶磁器片（香炉）	

要　約	標高４ｍほどを境にして畑と水田に利用されている。畑部では古墳時代後期から中世の集落跡が確認されている。また，水田部では縄文時代前期と奈良時代から平安時代の遺物包含層，古代から近世にかけての水田跡が検出されている。

目　　次

序
例　言
凡　例
抄　録
目　次
第１章　調査経緯 ……1
　第１節　調査に至る経緯 ……1
　第２節　調査経過 ……1
第２章　位置と環境 ……2
　第１節　地理的環境 ……2
　第２節　歴史的環境 ……2
第３章　調査の成果 ……7
　第１節 遺跡の概要 ……7
　第２節 基本層序 ……7
　第３節　遺構と遺物 ……8
　　1　住居跡 ……8
　　（1）古墳時代 ……8
　　（2）奈良時代 ……15
　　2　掘立柱建物跡 ……17
　　（1）奈良時代・平安時代 ……17
　　（2）中・近世 ……33
　　3　井戸跡 ……38
　　（1）平安時代 ……38
　　（2）中・近世 ……45
　　4　水田跡 ……51
　　5　遺物包含層 ……74
　　（1）縄文時代 ……74
　　（2）奈良時代・平安時代 ……90
　　6　その他の遺構と遺物 ……98
　　（1）方形竪穴遺構 ……98
　　（2）溝跡 ……99
　　（3）不明遺構 ……109
　　（4）土坑 ……110
　　（5）遺構外出土遺物 ……121
　第４節　まとめ ……126
付　章　『田島遺跡の自然科学分析』……132
写真図版 ……139
付　図

第１章　調　査　経　緯

第１節　調査に至る経緯

平成10年11月12日，建設省関東地方建設局常陸工事事務所（現国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所）長は，茨城県教育委員会教育長に対して一般国道６号千代田石岡バイパス（かすみがうら市市川～石岡市東大橋）における埋蔵文化財の所在の有無及び取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は，平成11年２月８日～３月３日，平成12年３月９～10日，９月20日に試掘調査を実施し，遺跡の所在を確認した。平成12年11月21日，茨城県教育委員会教育長は，国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長あてに，事業地内に田島遺跡（田島下地区）が所在する旨を回答した。

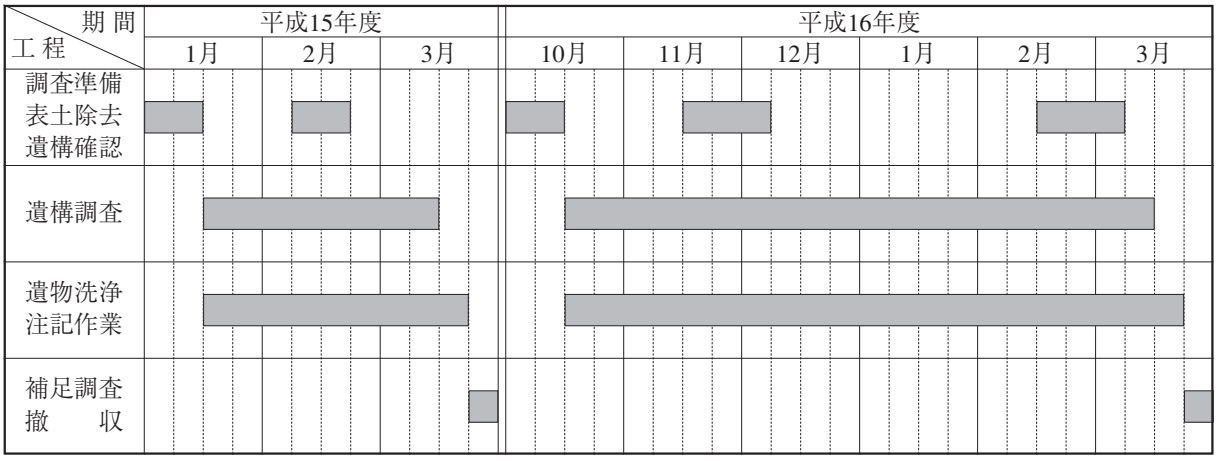
平成15年３月10日，国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長は，茨城県教育委員会教育長に対して，文化財保護法第57条の３第１項の規定に基づき，土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は，計画変更が困難であることから，記録保存のための発掘調査が必要であると判断し，国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長あてに，工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成15年３月13日，国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長は，茨城県教育委員会教育長に対して，一般国道６号千代田石岡バイパスに係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成15年３月20日，茨城県教育委員会教育長は，国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長あてに，田島遺跡（田島下地区）について，発掘調査の範囲及び面積等について回答し，併せて埋蔵文化財の調査機関として，財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は，国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成16年１月１日～３月31日及び平成16年10月１日～平成17年３月31日まで田島遺跡（田島下地区）の発掘調査を実施することとなった。

第２節　調査経過

調査は，第一次が平成16年１月５日から平成16年３月31日，第二次が平成16年10月１日から平成17年３月31まで実施した。その概要を表で記載する。



第2章　位 置 と 環 境

第1節　地理的環境

田島遺跡（田島下地区）は，茨城県石岡市大字石岡字田島下15,657番地ほかに所在している。

霞ヶ浦の北西，県中央部に広がる洪積台地を主体とした市域は，恋瀬川の低地を挟んで石岡・高浜地区と三村・関川地区に大別される。石岡市街地は恋瀬川の北に広がる台地上に発達している。

石岡市街地の南部を流れる恋瀬川は加波山に源を発し，東南方向に流れながら，霞ヶ浦の高浜入に注いでいる。恋瀬川の両岸には標高20～30mのゆるやかな台地が広がっており，台地の周辺部では所々に谷が入り込み，谷津が形成されている。

地質の概略は，基盤となる手野層があり，その上に成田層，さらに竜ヶ崎砂礫層，常総粘土層，関東ローム層が重なっている[1)]。

田島遺跡（田島下地区）は，恋瀬川左岸の谷津が発達した標高４～５ｍの低地に位置している。台地の付け根部には標高３～５ｍほどの低地が河川に沿って帯状に広がっており，現在は標高４ｍを境に水田と畑地に利用され，良好な農耕地帯となっている。

第2節　歴史的環境

当遺跡周辺には旧石器時代から近世にかけて多くの遺跡が存在している[2)]。

旧石器時代は，三村の正月平遺跡からナイフ形石器の出土が確認されており，現在のところ二万年以前と考えられ，周辺遺跡では最古と考えられている。さらに，常陸風土記の丘建設に伴う発掘調査が実施された宮平遺跡からは，頁岩製のナイフ形石器が出土している。その他，十三塚Ｃ遺跡や弾正Ｃ遺跡からも細石刃が採集されている。これらは恋瀬川や園部川，天の川流域の台地上に分布しており，住居跡などの生活痕は確認されていないが，周辺で集落が営まれていたことがうかがえる[3)]。

縄文時代の遺跡は，草創期から後期にかけて確認されている。当遺跡周辺では，外城遺跡〈28〉，小目代遺跡〈32〉，三面寺遺跡〈43〉，田崎遺跡〈46〉などがある。これらの遺跡も旧石器時代と同じような所に立地しており，恋瀬川から霞ヶ浦にかけて舌状に延びた台地上に多く分布している。

弥生時代にはいると生活や文化に変化が見られるようになる。水田耕作による農耕文化の始まりである。石川山崎鹿島神社境内では，土器底部に稲作が行われていたことを実証する籾痕が残されている弥生式土器が発見されている[4)]。弥生時代の遺跡については，恋瀬川や園部川に面する台地縁辺の平坦地に集中しており，入りくんだ谷津の地形を利用して農耕生活を営み，集落を構成していたことをうかがい知ることができる。当遺跡からも弥生時代の土器片が数片確認されている。弥生時代の遺跡は割合的に少ないが，市域内においては，兵崎遺跡〈36〉，田崎遺跡，中津川遺跡〈48〉などが確認されている。

古墳時代に入ると多くの遺跡が確認されている。集落跡のみならず古墳も多く，18群，132基の古墳が確認されている。その多くは恋瀬川沿いに位置している。特に中津川地区から高浜にかけて舟塚山古墳をはじめ，愛宕山古墳，大日塚古墳など大形の古墳を含む舟塚山古墳群〈49〉が存在している。集落跡も古墳周辺の台地上に分布しており，この地における有力豪族の存在がうかがえる[5)]。主な集落の遺跡としては，石岡別所遺跡〈41〉[6)]，宮久保遺跡などがある。当遺跡からも集落跡が検出されている。

奈良時代になると大宝律令発布により国・郡・里制がとられるようになる。常陸国の国府は，『和名抄』に「常陸国府，在茨城郡，行程上三十日，下十五日」とあり，茨城郡に存在していたことが記されている[7]。国府の所在地には諸説があるが，石岡小学校付近説が定着し，現在調査が進められている。この時代の遺跡としては，鹿の子遺跡〈８〉[8]，茨城廃寺跡〈31〉，茨城郡衙跡〈29〉などがある。特に鹿の子遺跡からは，漆紙文書が発見され，当時の様子を知る貴重な資料として注目されている。

中世になり武家が台頭するようになると，やがて勢力争いが起こり戦国の世へと流れていく過程の中で，城郭の築造が各地に見られるようになる。石岡では，鎌倉時代に大掾氏が外城の地に石岡城を築城した。南北朝時代には，大掾氏と小田氏との間で抗争の激化がみられるようになり，八代詮国は現在の石岡小学校所在地に城を移し府中城〈24〉とした。これにより石岡城は，府中城の出城としての性格を強めた（外城遺跡）。その他，市域には高野浜城跡や三村城跡などがあるが，これらはこのときに築造された出城跡である。

大掾氏や小田氏等の抗争の中，中世末期は北から勢力を伸長してきた佐竹氏の支配下に入り，やがて徳川家康が江戸に幕府を開くと，徳川頼隆が府中城主となり城下町が形成された。古来から水陸交通に恵まれていた石岡の地は，周辺集落や各地からの物産集散地としての性格を色濃くし，特に酒・醤油などの醸造業を中心とした商人層の活躍が目覚ましく，常磐線から分岐する鹿島鉄道は，こうした商人層の資本力が背景にみられる。

※本文中の〈　〉内の番号は第１図及び周辺遺跡一覧表の該当遺跡番号と同じである。

註

1）日本の地質『関東地方』編集委員会『日本の地質３　関東地方』　共立出版　1986年10月

2）茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編，地図編）』　茨城県教育委員会　2001年３月

3）石岡市文化財関係資料編纂会『常府石岡の歴史』　石岡市教育委員会　1997年３月

4）石岡市史編纂委員会『石岡市史』（上巻）　石岡市　1990年７月

5）註３）に同じ

6）後藤孝行「石岡別所遺跡　一般県道石岡つくば線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」
『茨城県教育財団文化財調査報告』第244集　2004年３月

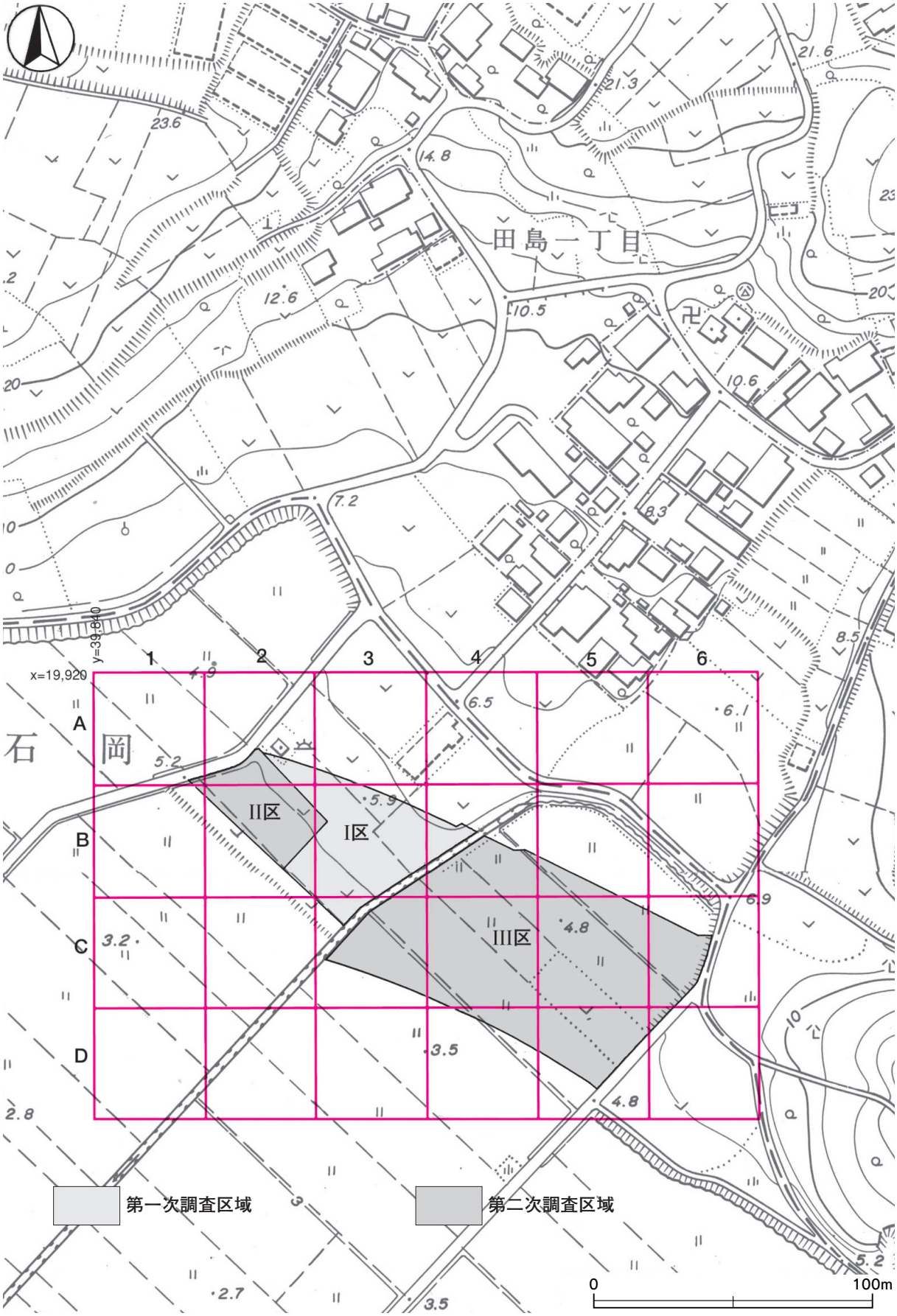
7）註２）に同じ

8）佐藤正好，渡辺俊夫「常磐自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(4)　宮部遺跡，鹿の子Ａ遺跡，砂川遺跡」
『茨城県教育財団文化財調査報告』第16集　1982年３月
佐藤正好，川井正一「常磐自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(5)　鹿の子Ｃ遺跡」
『茨城県教育財団文化財調査報告』第20集　1983年３月

第１図　田島遺跡（田島下地区）周辺遺跡分布図

表１　田島遺跡（田島下地区）周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
①	田島遺跡(田島下地区)		○		○	○	○	○	26	通安寺遺跡		○	○		○		○
2	正上内遺跡		○			○		○	27	富田遺跡		○			○	○	○
3	こもしき遺跡		○			○			28	外城遺跡		○	○		○	○	○
4	柏原北遺跡		○			○			29	茨城郡衙跡					○		
5	谷向遺跡		○			○		○	30	富田東塚							○
6	北ノ谷谷津遺跡					○	○	○	31	茨城廃寺跡					○		
7	木間塚遺跡		○			○	○	○	32	小目代遺跡		○			○	○	○
8	鹿の子遺跡		○	○	○	○	○	○	33	税所屋敷遺跡		○	○		○		○
9	高根遺跡		○		○	○		○	34	山王遺跡				○	○		
10	餓鬼塚遺跡		○	○	○	○			35	兵崎箕輪遺跡		○			○	○	
11	宮部遺跡		○			○	○	○	36	兵崎遺跡		○	○		○		
12	常陸国分尼寺跡					○			37	新池台遺跡		○					
13	尼寺ヶ原遺跡		○			○	○	○	38	木間塚古墳群				○			
14	一本杉遺跡			○		○		○	39	愛宕神社古墳				○			
15	北ノ谷遺跡		○			○		○	40	大谷津遺跡		○			○	○	○
16	国分遺跡		○			○	○	○	41	石岡別所遺跡		○	○	○	○	○	
17	常陸国分寺跡					○			42	別所古墳群				○			
18	木間長者屋敷遺跡		○			○	○		43	三面寺遺跡		○			○	○	
19	杉ノ井遺跡			○		○		○	44	田島遺跡				○	○	○	○
20	東ノ辻遺跡		○			○		○	45	茨城古墳				○			
21	白久台遺跡		○						46	田崎遺跡		○	○		○		
22	大塚遺跡					○		○	47	石岡田崎遺跡		○			○		
23	常陸国衙跡					○			48	中津川遺跡		○	○	○	○	○	○
24	府中城跡						○		49	舟塚山古墳群				○			
25	幸町遺跡		○		○	○	○		50	鹿の子大塚山古墳				○			



第２図　田島遺跡（田島下地区）調査区設定図

第３章　調 査 の 成 果

第１節　遺跡の概要

当遺跡は，平成15～16年度にかけて二次に渡り調査が行われた。標高４～５ｍの低地に位置しており，現在は標高約４ｍを境にして畑地と水田地に分けて土地利用されている。第一次調査では畑部，第二次調査では水田部を中心に調査が行われた。

畑部からは古墳時代後期から中世にかけての集落跡が確認された。確認された遺構は，古墳時代後期の竪穴住居跡５軒，奈良時代の竪穴住居跡１軒，掘立柱建物跡10棟，井戸跡２基，中世の掘立柱建物跡５棟，方形竪穴遺構１基，井戸跡６基，その他，時期不明の土坑228基，溝跡２条が確認されている。

水田部からは，古代から近世にかけて利用されていたと考えられる水田跡10区画と，縄文時代前期の遺物包含層，奈良時代から平安時代を中心とした遺物包含層の２層が確認されている。その他，土坑32基，溝跡17条が確認されている。

主な遺物は，縄文土器片，土師器片（坏，甕），須恵器片（坏，高台付坏，蓋，甕，円面硯），灰釉陶器片（碗，小皿，浄瓶），土師質土器（かわらけ，内耳鍋），土製品（瓦，土鈴，土玉），金属製品（古銭，釘，刀子），石器・石製品（砥石，臼玉，五輪塔，宝篋印塔），木製品（棗玉，井戸枠，杭）などである。

第２節　基本層序

テストピットは西区のB3c0に設置した。テストピットの地表面の標高は5.6ｍで地表から1.75ｍ掘り下げた。土層は７層に細分され，第１・２層は表土，第３層は関東ローム層，第４・５層は常総粘土層，第６層は竜ヶ崎層に対比される。

第1層は黒褐色の耕作土層で，ローム粒子をわずかに含み，粘性・締まりはともに弱い。層厚は20㎝ほどである。

第2層は褐色の耕作土層で，粘性・締まりともに弱い。層厚は７㎝ほどである。

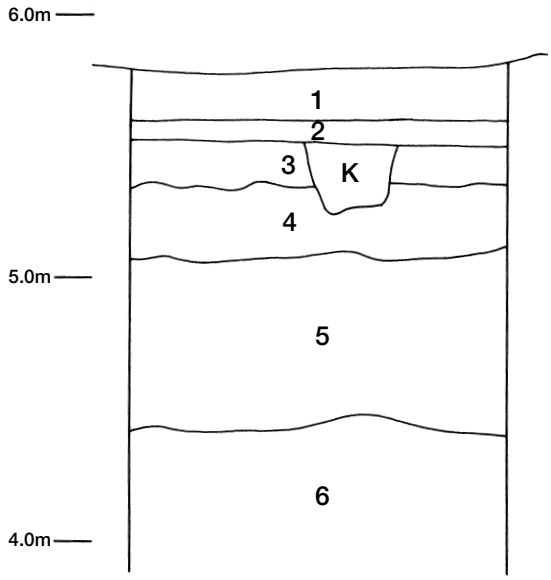
第3層はにぶい褐色のローム層で，粘性は普通，締まりはやや強い。層厚は15～20㎝ほどである。

第4層は黄褐色の粘土層で，粘性・締まりともに強く鉄分が含まれている。層厚は25～30㎝ほどである。

第５層は灰オリーブ色の粘土層で，粘性・締まりともに強い。層厚は60㎝ほどである。

第6層は灰オリーブ色の砂粒層で，粘性・締まりともに強い。粘土粒子も含まれている。

遺構は第３層の上面で確認した。



第３図　基本土層図

第３節　遺構と遺物

１　住居跡

竪穴住居跡が６軒確認された。以下，検出された遺構と遺物について記述する。

（１）古墳時代

第1号住居跡（第４・５図）

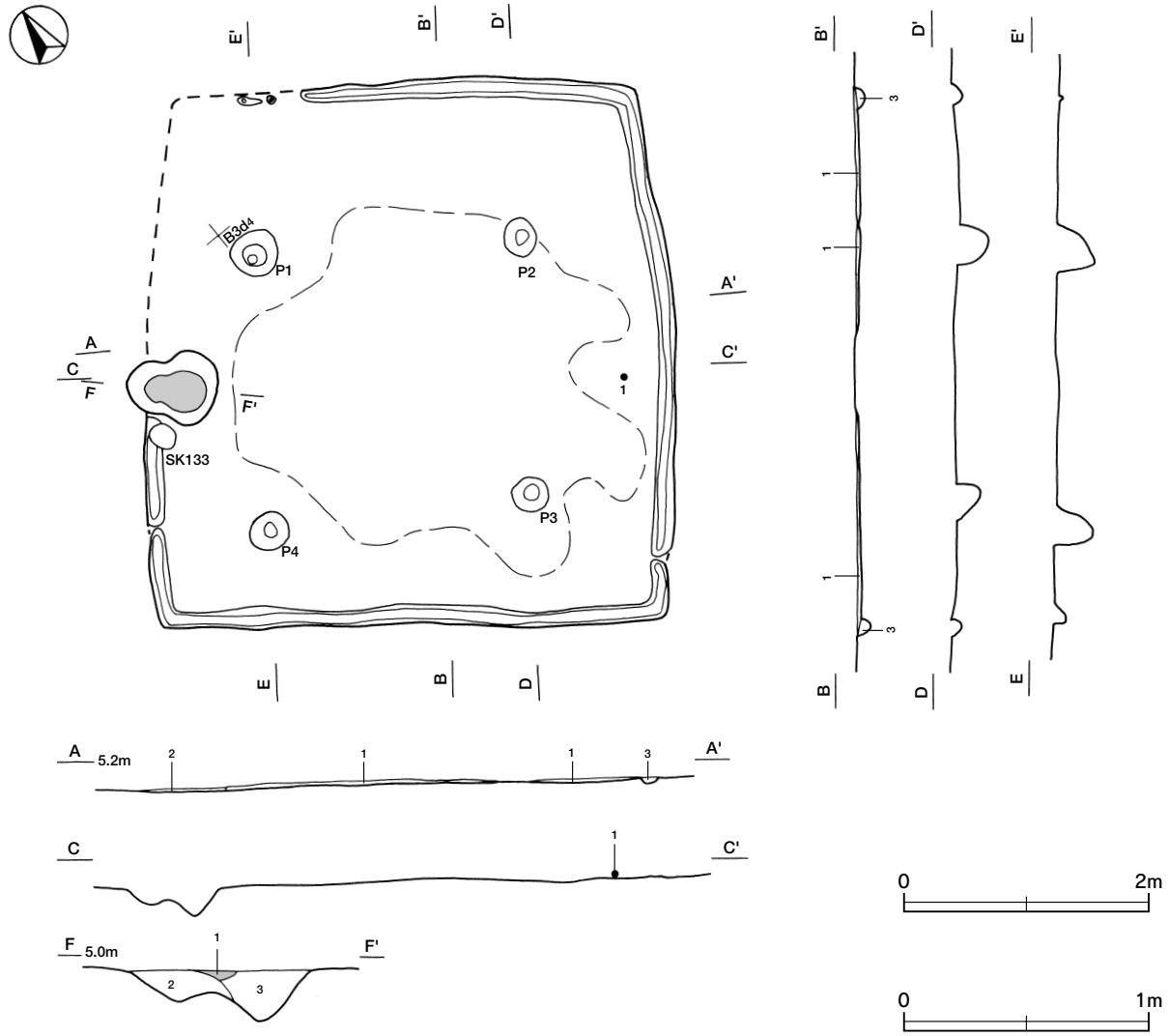
位置　調査Ⅰ区のB3d4区で，平坦地に位置している。

重複関係　第133号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸4.49ｍ，短軸4.38ｍの方形で，主軸方向はＮ－51°－Ｗである。壁高は４～11㎝で，やや外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，主柱穴の内側が良く踏み固められている。壁溝は北部を除いて巡っている。

竈　北西壁の中央部に付設されている。削平され残存状況が悪く，火床部のみが確認された。火床部は，床面を10～20㎝皿状に掘りくぼめ，ローム土を埋め戻して構築しており，火熱を受けて赤変硬化している。



第４図　第１号住居跡実測図

竈土層解説
1　にぶい赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量，炭化物微量
2　極暗褐色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
3　黒 褐 色　焼土ブロック・炭化物少量，ロームブロック微量

ピット　４か所。Ｐ１～Ｐ4は深さ22～35㎝で，主柱穴と考えられる。

覆土　３層に分層される。各層にローム土が混入していることから人為堆積と考えられる。

土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック微量
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子・粘土粒子微量
3　黒 褐 色　ローム粒子少量

遺物出土状況　ほとんどが細片のため図示できないが，土師器片33点（坏３，甕30）が出土している。１は南東壁際中央部の床面から出土している。

所見　出土土器は土師器片のみで，須恵器の出土が認められないことや，竈が検出されていることから，時期は後期と考えられるが，出土遺物は細片のため，明確な時期判断は困難である。

第５図　第１号住居跡出土遺物実測図

第１号住居跡出土遺物観察表（第５図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
1	土師器	甕	－	(5.7)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ　体部内面ナデ	南東壁際中央部	

第３号住居跡（第６図）

位置　調査Ⅰ区のB3c6区で，平坦地に位置している。

重複関係　第２・８号掘立柱建物，第21～23・154・156～161・166号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　耕作により削平され，壁は残存していない。確認された床面から，長軸4.20ｍ，短軸4.10ｍほどの方形と推定される。主軸方向はＮ－37°－Ｗである。

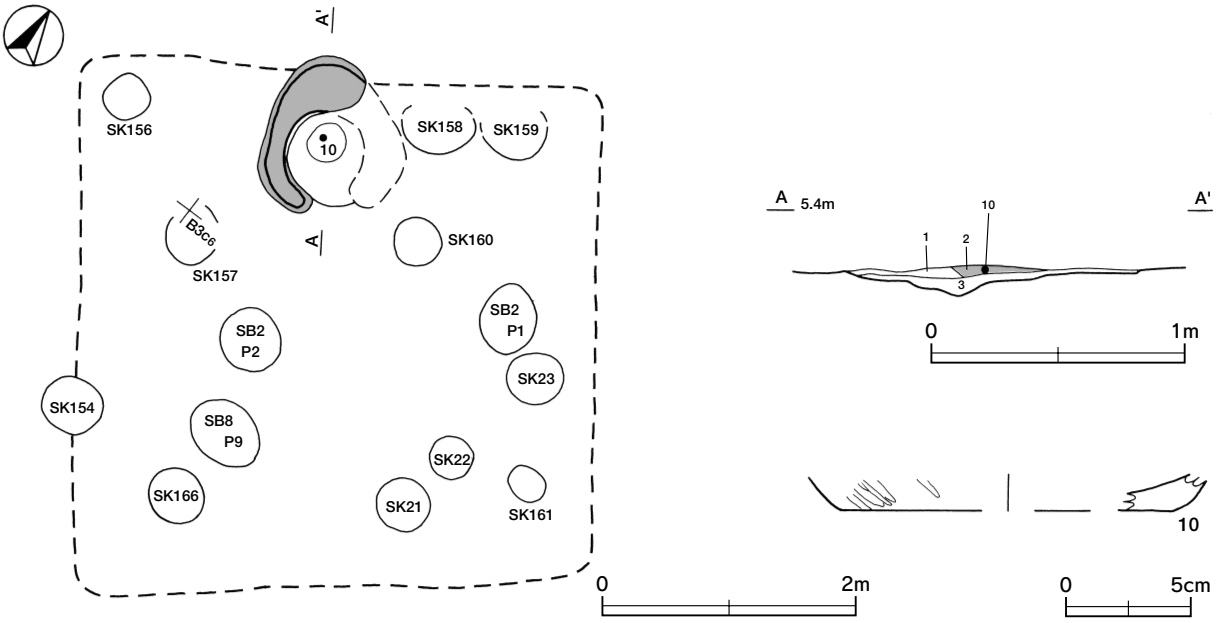
床　極暗褐色の床面で，ほぼ平坦である。

竈　北西壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで115㎝で，袖部は左袖部のみが残存しており，幅は推定で110㎝程度と考えられる。火床部は，床面から20㎝ほど皿状に掘りくぼめ，ローム土を埋め戻して構築しており，火熱を受けて硬化している。袖部は火床部の上に砂質粘土で構築されている。煙道部は壁外に20㎝ほど掘り込まれ，外傾して立ち上がっている。

竈土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
2　暗 褐 色　砂質粘土粒子中量，ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量

遺物出土状況　細片のため図示できないが，土師器片10点（甕・甑）が出土している。

所見　重複関係と出土土器から時期は後期と推定されるが，出土土器が細片のため，明確な時期判断は困難である。



第６図　第３号住居跡・出土遺物実測図

第３号住居跡出土遺物観察表（第６図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
10	土師器	甕	－	(1.5)	[13.2]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底面・体部外面ヘラ磨き	竈内	

第４号住居跡（第７図）

位置　調査Ⅰ区のB3d6区で，平坦地に位置している。

重複関係　第８・９号掘立柱建物，第40・173号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.76m，短軸3.62mの方形で，主軸方向はＮ－17°－Ｗである。壁高は２～８㎝で，やや外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，主柱穴の内側が良く踏み固められている。壁溝は部分的に巡っている。

竈　北西壁中央部よりやや北東側に位置している。耕作により削平され，火床部のみが確認された。火床部は，床面から15～25㎝ほど皿状に掘りくぼめ，ローム土を埋め戻して構築しており，火床面は火熱を受けて硬化している。

竈土層解説
1　暗 褐 色　ローム粒子少量
2　極暗褐色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
3　黒 褐 色　炭化粒子少量，焼土ブロック微量
4　暗オリーブ色　砂質粘土粒子中量，焼土粒子微量

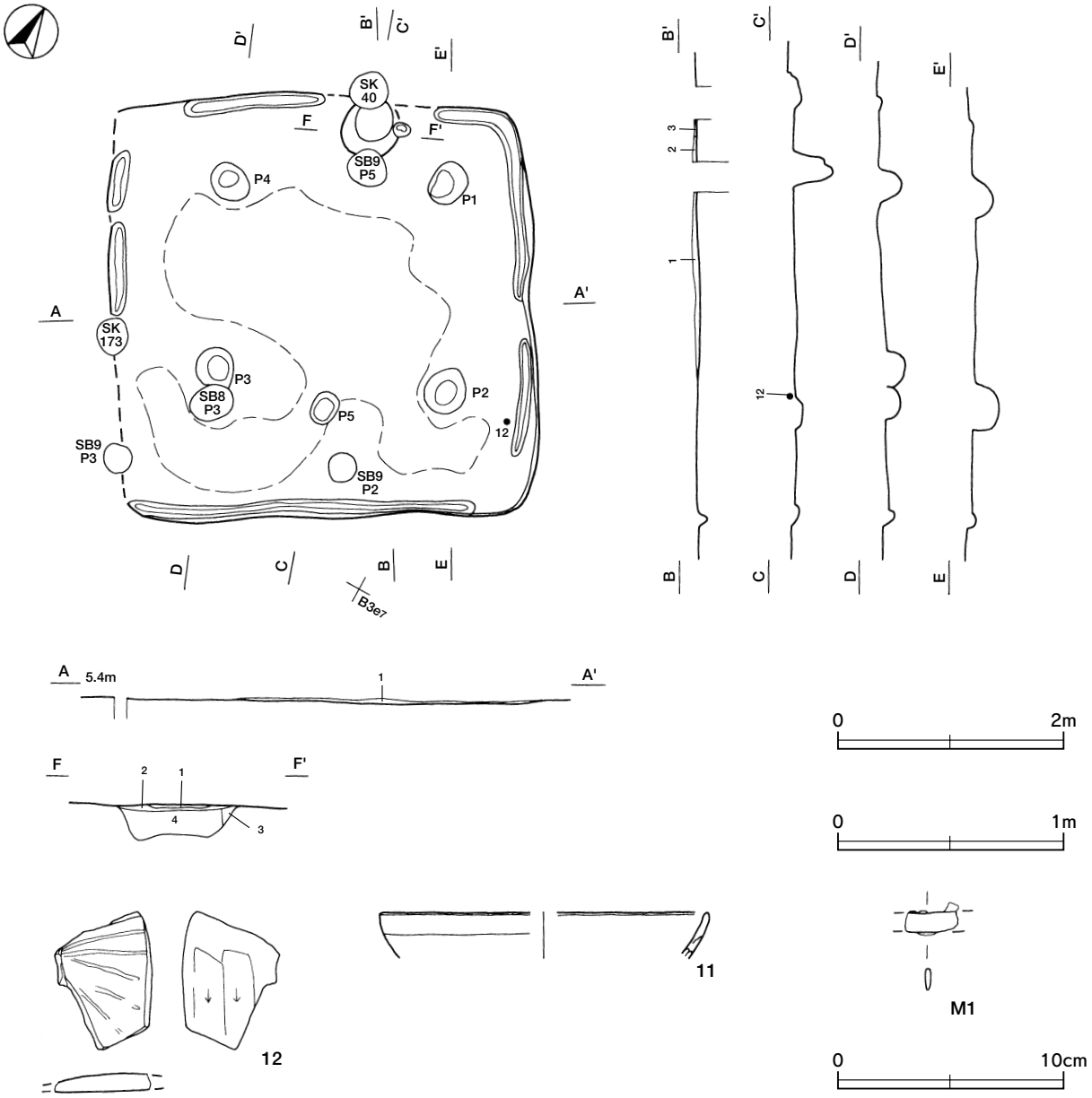
ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ4は深さ16～20㎝で，配置及び規模から主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ５㎝ほどで，南東壁寄りのほぼ中央に位置し，竈と向かい合う位置にあることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　３層に分層される。各層にローム土が混入していることから人為堆積と考えられる。

土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
2　黒 褐 色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒 褐 色　焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片40点（坏３，甕37），刀子１点が出土している。11・Ｍ１は覆土中，12は南東コーナー部の覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器から７世紀後葉と考えられる。



第７図　第４号住居跡・出土遺物実測図

第４号住居跡出土遺物観察表（第７図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
11	土師器	坏	［14.4］	（2.0）	－	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ　体部内・外面ナデ	覆土中	
12	土師器	坏	－	－	－	長石・赤色粒子	明赤褐	普通	内面放射状のヘラ磨き　外面ヘラ削り	南東ｺｰﾅｰ部	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M1	刀子	（2.4）	（1.1）	（0.2）	（1.58）	鉄	刀身部欠損　断面長方形	覆土中	PL23

第６号住居跡（第８・９図）

位置　調査Ⅰ区のB3e9区で，平坦地に位置している。

重複関係　第７号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸4.33ｍ，短軸4.23ｍの方形で，主軸方向はＮ－33°－Ｗである。壁高は５～８㎝で，やや外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，主柱穴の内側が良く踏み固められている。壁溝は，ほぼ全周している。

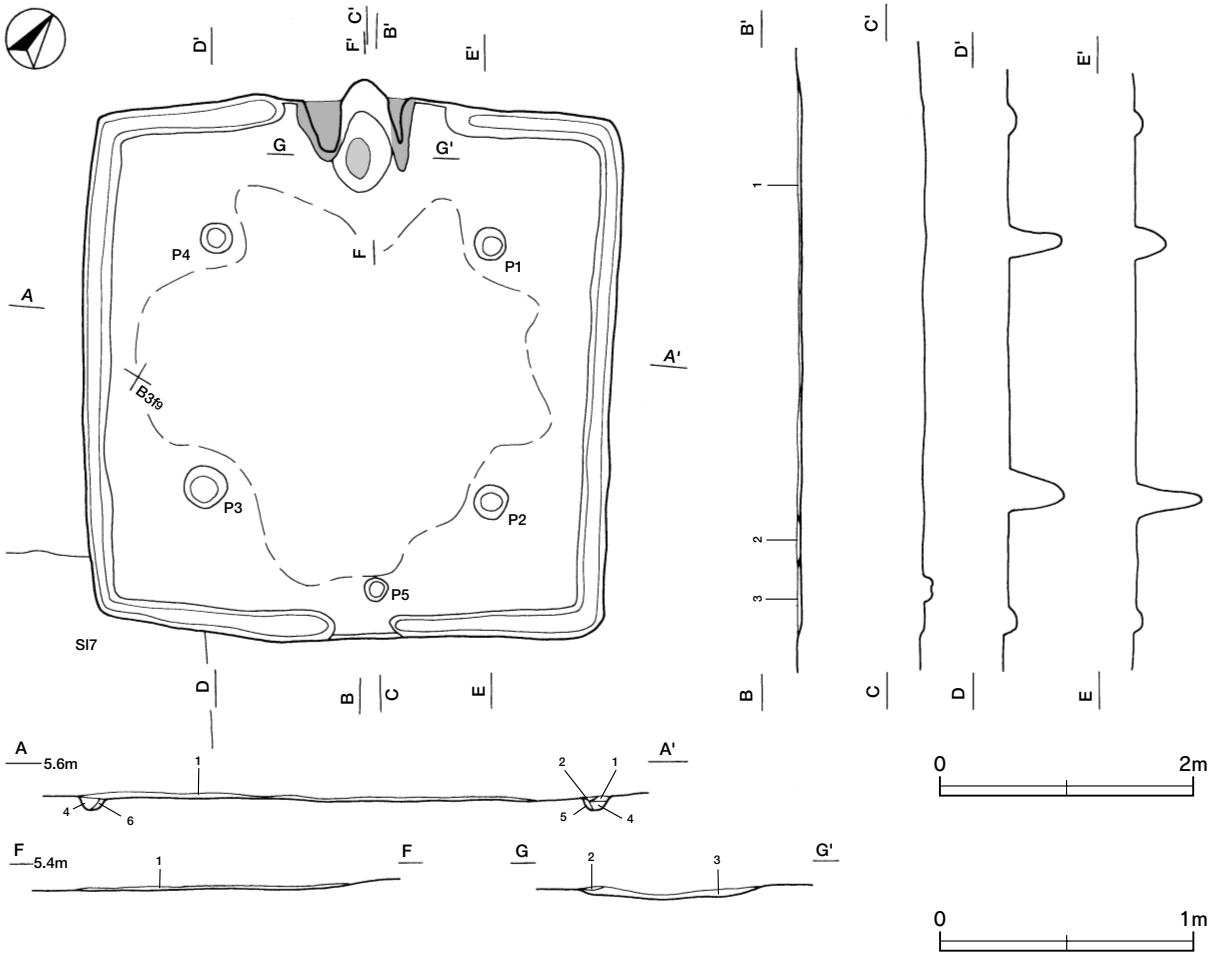
竈　北西壁中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで90㎝，袖部幅90㎝である。火床部は５㎝ほどの深さで，やや広く皿状に掘りくぼめ，ローム土を埋め戻して構築しており，火床面は火熱を受けて硬化している。袖部は火床部の上に砂質粘土で構築されている。煙道部は壁外に15㎝ほど掘り込まれ，火床部からゆるやかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化粒子少量，ローム粒子微量
2　オリーブ褐色　砂質粘土粒子中量，焼土粒子微量
3　暗 褐 色　焼土ブロック中量，炭化物少量

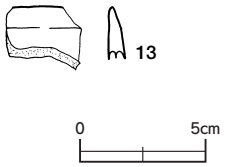
ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ4は深さ23～52㎝で，主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ５㎝で，南東壁寄りの中央に位置し，竈と向かい合う位置にあることや壁溝がないことから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　６層に分層される。ブロック状に堆積しており，ロームブロックの混入が認められることから人為堆積と考えられる。



第８図　第６号住居跡実測図

土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック少量
2　褐　　色　ロームブロック，粘土ブロック少量
3　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック少量
4　黒 褐 色　ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量
5　褐　　色　ロームブロック微量
6　褐　　色　ロームブロック・炭化物少量



第9図 第6号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片88点（坏２，甕86），須恵器片２点（坏）が出土している。13は覆土中から出土している。

所見　時期は，重複関係と出土土器から７世紀後葉と考えられる。

第６号住居跡出土遺物観察表（第９図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
13	土師器	坏	－	(2.0)	－	長石・石英・雲母	赤褐色	普通	口縁部横ナデ	覆土中	

第７号住居跡（第10図）

位置　調査Ⅰ区のB3f9区で，平坦地に位置している。

重複関係　第６号住居，第88号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸4.20ｍ，短軸3.99ｍの方形で，主軸方向はＮ－38°－Ｗである。壁高は１～10㎝で，やや外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，主柱穴の内側がよく踏み固められている。壁溝が全周している。

竈　北西壁中央部よりやや北西側に位置している。規模は，焚口部から煙道部まで145㎝，袖部幅75㎝である。火床部は，床面から17㎝ほど皿状に掘りくぼめ，ローム土を埋め戻して構築されており，火床面は火熱を受けて赤変硬化している。袖部は火床部の上面に砂質粘土で構築されている。煙道部は壁外へ22㎝掘り込まれ，外傾して立ち上がっている。

竈土層解説
1　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物微量
2　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土ブロック・砂質粘土ブロック微量
3　赤　　色　焼土粒子中量，炭化粒子少量
4　にぶい黄褐色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
5　暗赤褐色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量，砂質粘土粒子微量
6　オリーブ褐色　砂質粘土粒子中量，焼土粒子微量

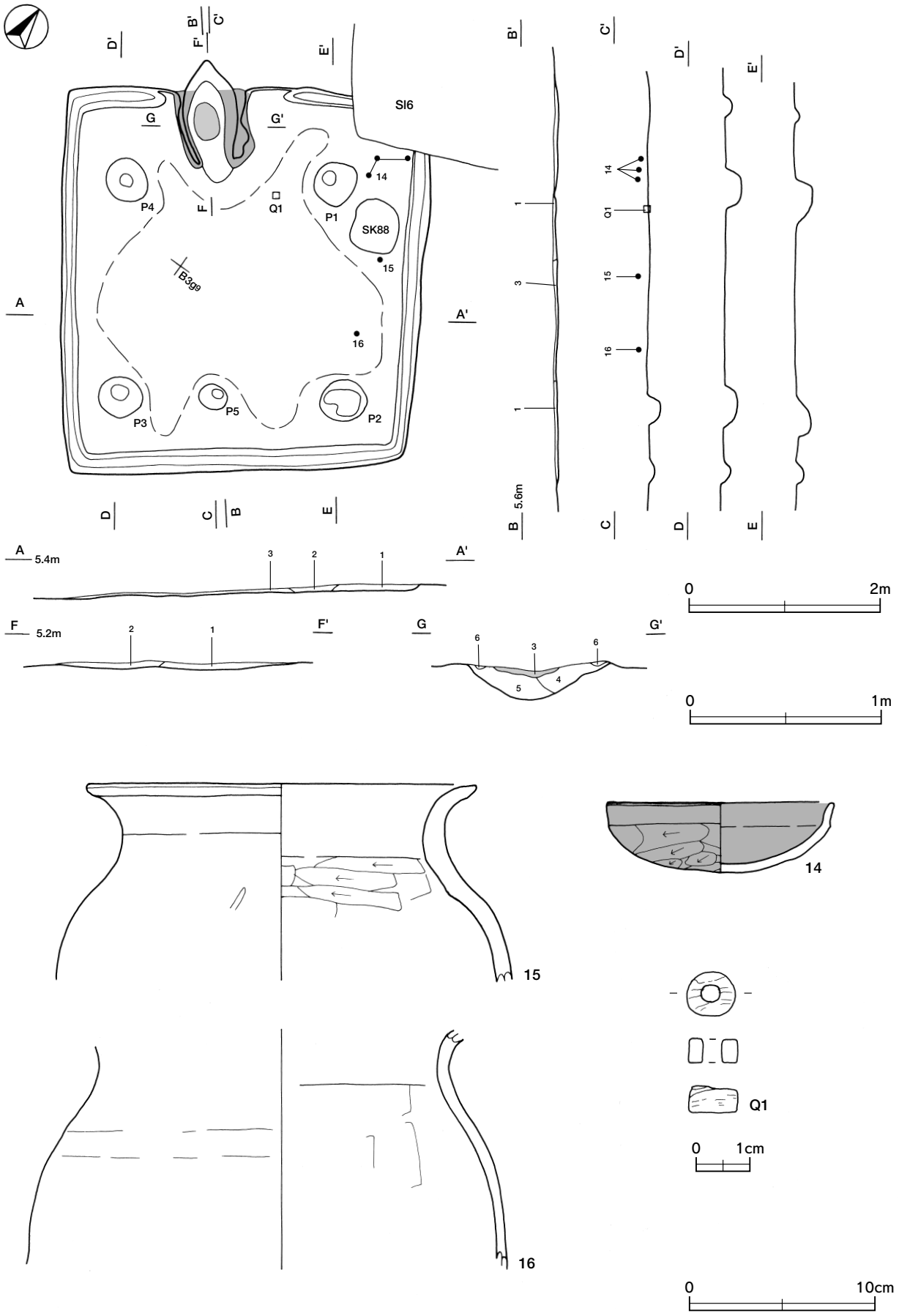
ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ4は深さ13～19㎝で，主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ14㎝で，南西壁寄りの中央に位置し，竈と向かい合う位置にあることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　３層に分層される。ブロック状に堆積していることから人為堆積と考えられる。

土層解説
1　極暗褐色　ロームブロック少量
2　黒 褐 色　ローム粒子少量
3　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片212点（坏18，甕189，甑5），臼玉１点が出土している。14は北部コーナー付近，15・16は北東壁付近，Ｑ１は竈手前の床面からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から６世紀後葉と考えられる。



第10図　第７号住居跡・出土遺物実測図

第７号住居跡出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
14	土師器	杯	12.2	3.7	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ　体部外面ヘラ削り　内面ナデ	北コーナー部	80%　ＰＬ12
15	土師器	甕	21.0	(10.7)	－	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部外面ヘラ磨き痕　内面ヘラ削り	北東壁付近	15%
16	土師器	甕	－	(13.0)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ　内面ヘラナデ	北東壁付近	

番号	器種	径	厚さ	口径	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q1	臼玉	0.9	0.5	0.4	0.5	滑石	側面が直線的な円筒状　片面穿孔	竈手前床面	

（２）奈良時代

第２号住居跡（第11図）

位置　調査Ｉ区のB3g5区で，平坦地に位置している。

重複関係　第10号掘立柱建物，第230号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸4.42ｍ，短軸4.27ｍの方形で，主軸方向はＮ－45°－Ｗである。壁高は４～８㎝で，やや外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，主柱穴の内側が良く踏み固められている。壁溝が全周している。

竈　北西壁中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで100㎝，袖部幅100㎝である。火床部は20㎝ほど皿状に掘りくぼめ，ローム土を埋め戻して構築しており，火床面は火熱を受けて赤変硬化している。袖部は火床部の上に砂質粘土で構築している。煙道部は，壁外に20㎝ほど掘り込まれ，火床部からゆるやかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　褐　　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗 褐 色　焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
4　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
5　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子微量
6　黒 褐 色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
7　暗 褐 色　焼土粒子少量，炭化物・ローム粒子微量
8　褐　　色　ローム粒子少量，焼土ブロック微量
9　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
10　黒 褐 色　焼土粒子少量，ロームブロック・炭化粒子微量
11　褐　　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
12　黒 褐 色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
13　暗 褐 色　砂質粘土粒子中量，ローム粒子微量
14　暗 褐 色　砂質粘土粒子少量，焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
15　褐　　色　ロームブロック・焼土ブロック微量
16　暗 褐 色　焼土ブロック・ローム粒子微量
17　褐　　色　ローム粒子少量，焼土粒子・砂質粘土粒子微量

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ4は深さ18～39㎝で，主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ10㎝で，南東壁寄りの中央に位置し，竈と向かい合う位置にあることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

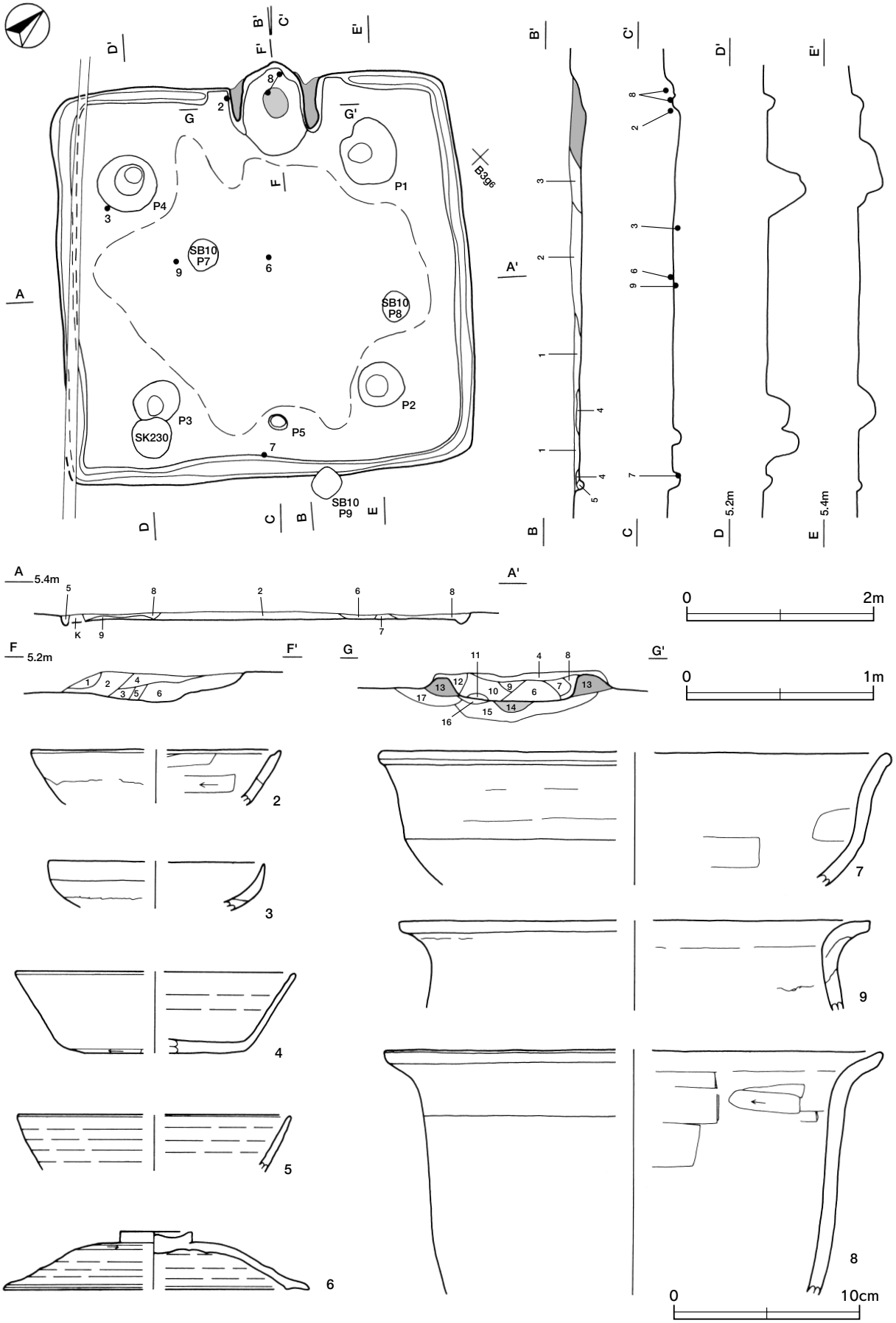
覆土　10層に分層される。ブロック状に堆積しており，各層に焼土・粘土ブロックが混入していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

1　暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
2　暗 褐 色　ローム粒子少量，粘土ブロック・焼土粒子微量
3　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量
4　暗 褐 色　粘土ブロック少量，ローム粒子・焼土粒子微量
5　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土ブロック微量
6　黒 褐 色　ローム粒子・炭化粒子微量
7　暗 褐 色　粘土ブロック中量，ローム粒子微量
8　暗 褐 色　ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量
9　黒 褐 色　粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
10　暗 褐 色　ローム粒子少量，粘土ブロック微量

遺物出土状況　土師器片128点（坏17，鉢８，甕103），須恵器片27点（坏16，蓋7，甕４）が出土している。２は竈内と南西部の覆土中，６は中央部の床面，７は南東壁際中央部の覆土下層から出土している。８は竈内と覆土中から出土した３点の細片が接合されている。

所見　廃絶時期は，出土土器から８世紀初頭と考えられる。



第11図　第２号住居跡・出土遺物実測図

第２号住居跡出土遺物観察表（第11図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
2	土師器	坏	［13.4］	（2.9）	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面ナデ　輪積み痕　内面口縁部沈線１条　ヘラナデ	竈内・覆土中	10%
3	土師器	坏	［11.4］	（2.5）	－	長石・雲母・白色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ　体部外面ナデ　輪積み痕	Ｐ４付近床面	
4	須恵器	坏	［15.1］	（4.4）	［7.6］	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端回転ヘラ削り　底部回転ヘラ切り	覆土中	30%
5	須恵器	坏	［14.6］	（3.0）	－	長石・石英・白色粒子	黄灰	普通	内・外面ロクロナデ	覆土中	
6	須恵器	蓋	［16.2］	3.1	－	長石・石英・雲母	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り	中央部床面	30%　ＰＬ13
7	土師器	鉢	［27.2］	（7.1）	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部ヘラナデ後ナデ　体部外面ナデ	南東壁際中央部	
8	土師器	甑	［26.5］	（13.1）	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ　内面ヘラナデ	竈内・覆土中	
9	土師器	甕	［25.3］	（4.8）	－	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ　内面輪積み痕	中央部床面	

表２　住居跡一覧表

番号	位　置	主軸方向	平面形	規　模（m）長軸×短軸	壁 高（cm）	床面	内　部　施　設						覆土	出　土　遺　物	備　考（時　期）
							壁溝	主柱穴	貯蔵穴	ピット	入口	竈			
1	B3d4	N－51°－W	方形	4.49×4.38	4～11	平坦	［全周］	4	－	－	－	1	人為	土師器片（坏，甕）	古墳時代後期
2	B3g5	N－45°－W	方形	4.42×4.27	4～8	平坦	全周	4	－	1	1	1	人為	土師器片（坏，鉢，甕），須恵器片（坏，蓋，甕）	８世紀初頭
3	B3c6	N－37°－W	［方形］	［4.21×4.12］	－	平坦	－	－	－	－	－	1	－	土師器片（甕）	古墳時代後期
4	B3d6	N－17°－W	方形	3.76×3.62	2～8	平坦	全周	4	－	－	1	1	人為	土師器片（坏，甕），刀子	７世紀後葉
6	B3e9	N－33°－W	方形	4.33×4.23	5～8	平坦	全周	4	－	－	1	1	人為	土師器片（坏，甕），須恵器片（坏）	７世紀後葉
7	B3f9	N－38°－W	方形	4.20×3.99	1～10	平坦	全周	4	－	－	1	1	人為	土師器片（坏，甕，甑），臼玉	６世紀後葉

２　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡が15棟確認された。以下，検出された遺構と遺物について記述する。

（１）奈良・平安時代

第２号掘立柱建物跡（第12図）

位置　調査Ⅰ区のB3b5区で，平坦地に位置している。

重複関係　第８号掘立柱建物に掘り込まれている。

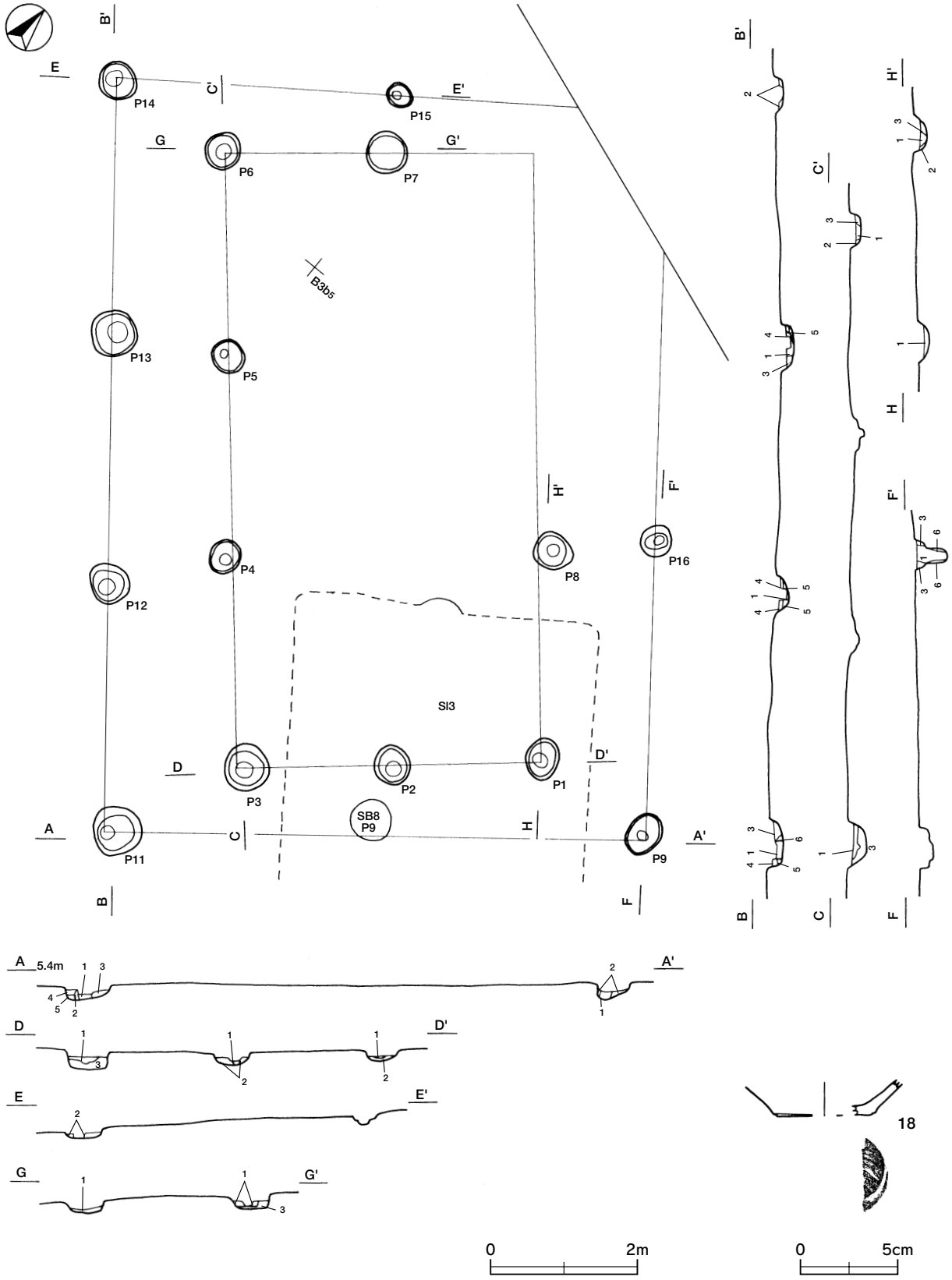
規模と構造　桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向はＮ－38°－Ｗである。規模は桁行が8.20m，梁行が3.96mである。また，身舎の周辺には庇または目隠し状の施設と考えられる柱穴が確認されている。身舎の柱間寸法は，桁間2.73m（９尺），梁間1.98m（6.5尺）を基調としている。周辺にある柱穴のうち南西側の並びは3.02m（10尺）を基調としているが，その他はまちまちである。

柱穴　平面形はいずれも円形を呈し，深さは15～44cmである。柱痕は土層断面図中の第１層が相当する。その他の層は，ローム土を主体とした埋土で，柱痕と比べて締まりが強い。

土層解説（各柱穴共通）
１　黒 褐 色　ローム粒子少量
２　黒 褐 色　ロームブロック微量
３　暗 褐 色　ロームブロック少量
４　黒 褐 色　ローム粒子少量
５　黒 褐 色　ローム粒子微量
６　黒 褐 色　ロームブロック・粘土ブロック微量

遺物出土状況　土師器片21点（椀６，甕15），須恵器片３点（坏２，蓋１），灰釉陶器片１点が出土している。18はＰ11の埋土から出土している。

所見　細片のため図示できないが，Ｐ６・Ｐ９・Ｐ12の埋土からの出土土器から，時期は11世紀頃と考えられる。



第12図　第２号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第２号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第12図）

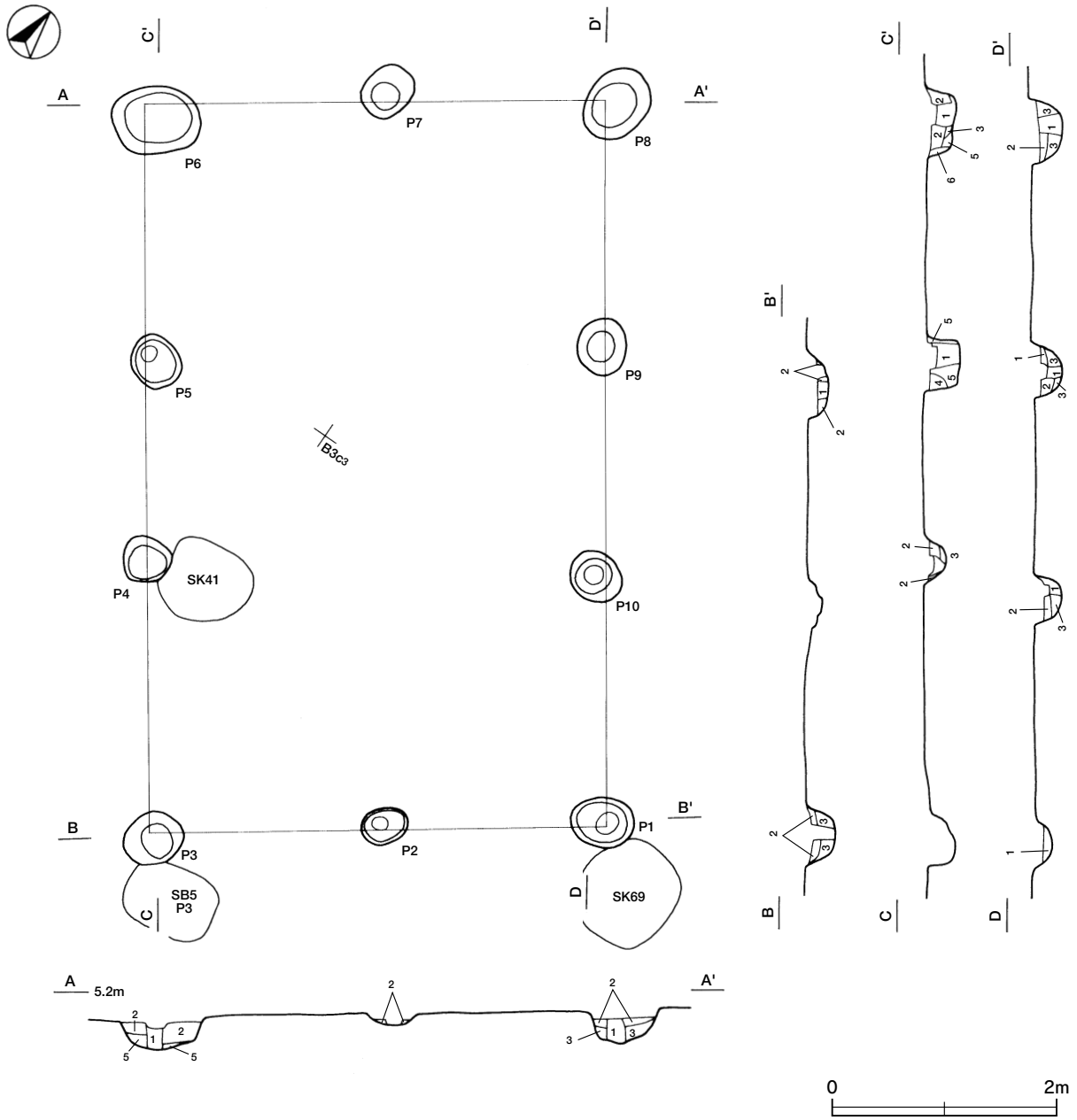
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
18	土師器	小皿	－	(1.7)	[5.2]	長石・石英・雲母	橙	普通	内・外面ナデ　底部糸切り	P11埋土中	

第３号掘立柱建物跡（第13・14図）

位置　調査Ⅰ区のB3c3区で，平坦地に位置している。

重複関係　第41・69号土坑を掘り込み，第５号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と構造　桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向はＮ－38°－Ｗである。規模は桁行6.42m，梁行4.10mである。柱間寸法は桁間が2.14m，梁間が2.05mで，７尺を基調としている。



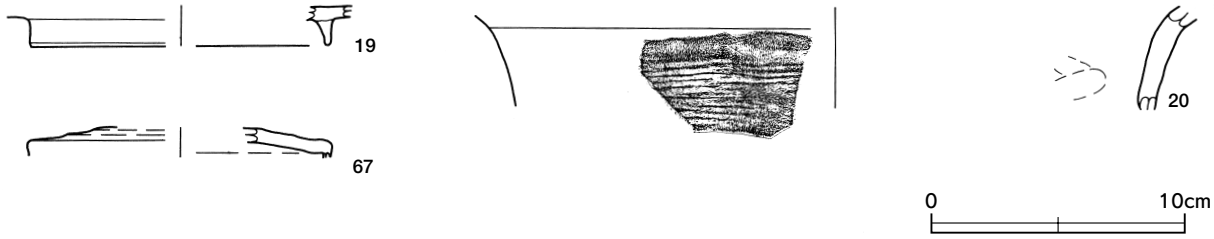
第13図　第３号掘立柱建物跡実測図

柱穴　平面形はいずれも円形を呈し，深さは15～30cmである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第１層が相当し，締まりが弱い。その他の層は粘土を混入したローム土を主体とした埋土で，突き固められた痕跡はほとんど認められず，締まりが柱抜き取り痕と比べてわずかに強い程度である。

土層解説（各柱穴共通）
1　黒 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子・粘土粒子微量
2　暗 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック微量
3　暗 褐 色　ロームブロック微量
4　黒 褐 色　ロームブロック少量
5　黒 褐 色　粘土ブロック少量，ローム粒子微量
6　黒 褐 色　ローム粒子微量

遺物出土状況　土師器片49点（坏２，甕47），須恵器片21点（坏13，高台付坏１，蓋３，甕３，甑１）が出土している。19はＰ３，20はＰ１の埋土，67はＰ４の抜土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，柱抜き取り痕から出土した土器から，9世紀前葉に廃絶したと考えられる。



第14図　第３号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第３号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
19	須恵器	盤	－	(1.6)	[12.0]	長石・石英・白色粒子	灰白	普通	高台貼り付け	Ｐ３埋土中	
20	須恵器	甑	－	(3.6)	－	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外面平行叩き　内面指頭痕	Ｐ１埋土中	
67	須恵器	蓋	－	(1.2)	－	長石・石英	灰	普通	ロクロナデ　口縁端部を下方向に屈曲	Ｐ４抜土中	

第４号掘立柱建物跡（第15図）

位置　調査Ｉ区のB3b1区で，平坦地に位置している。

重複関係　第62号土坑に掘り込まれている。

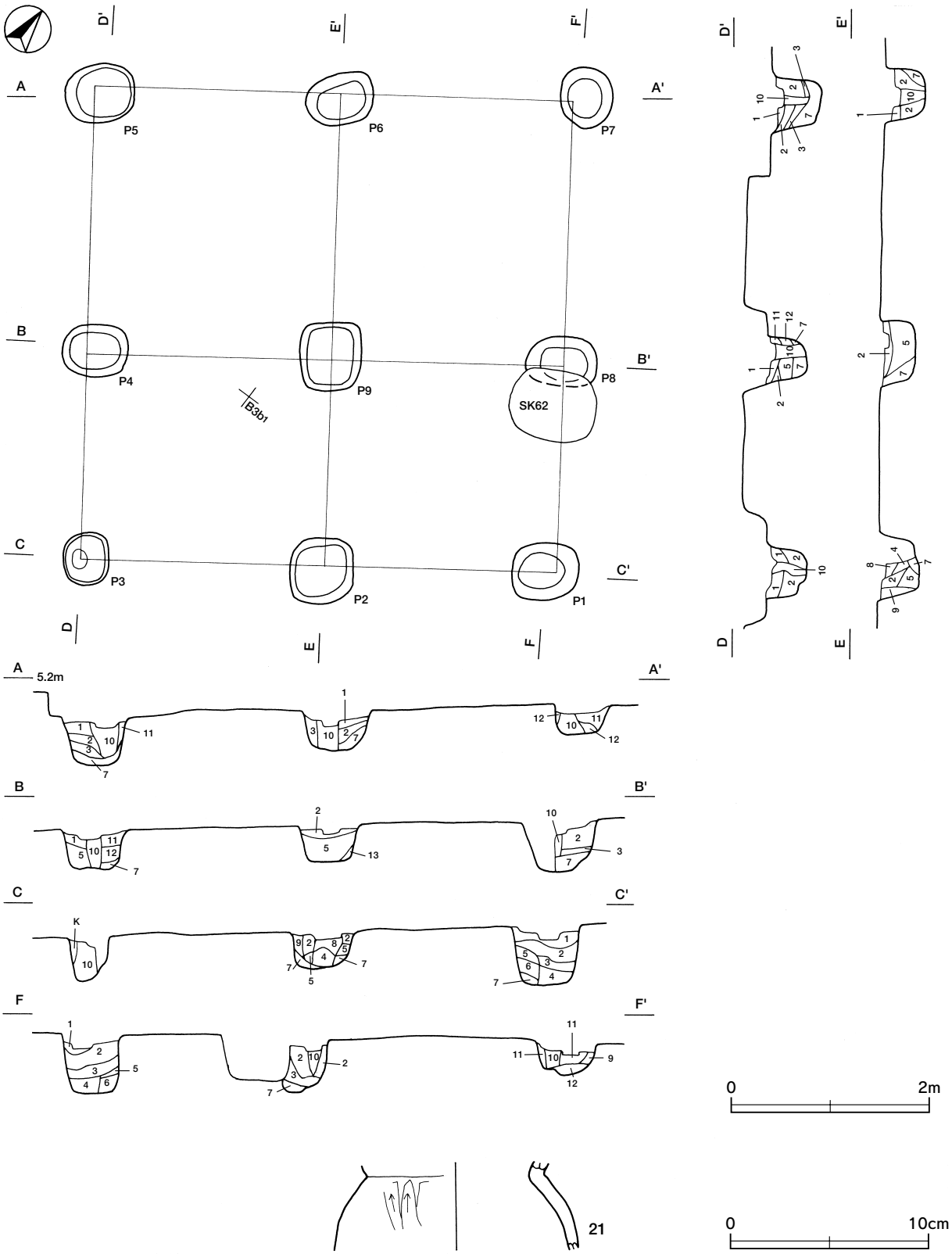
規模と構造　桁行２間，梁行２間の総柱建物跡で，桁行方向はＮ－55°－Ｗである。規模は桁行・梁行ともに4.84ｍで，柱間寸法は各間でばらついているが，2.42ｍ（８尺）を基調としている。

柱穴　平面形は円形のＰ７を除き方形もしくは長方形を呈し，深さは10～38cmである。柱の抜き取り痕は土層断面図中の第10層が相当し，締まりが弱い。その他の層は，ローム土と粘土を主体とした埋土で突き固められており，柱の抜き取り痕と比べて締まりが強い。

土層解説（各柱穴共通）
1　黒 褐 色　粘土粒子少量，ローム粒子微量
2　黒 褐 色　ロームブロック・粘土ブロック少量
3　黒 褐 色　粘土ブロック中量，ロームブロック少量
4　黒　　色　ロームブロック微量
5　黒 褐 色　ロームブロック・粘土粒子微量
6　黒 褐 色　粘土ブロック中量，砂粒微量
7　黒　　色　粘土ブロック・ローム粒子微量
8　黒 褐 色　ロームブロック・粘土ブロック微量
9　黒 褐 色　ローム粒子・粘土粒子微量
10　黒　　色　ローム粒子微量
11　黒 褐 色　粘土粒子少量，ローム粒子微量
12　黒 褐 色　ロームブロック・粘土粒子少量
13　黒 褐 色　ロームブロック・粘土粒子微量

遺物出土状況　土師器片59点（坏２，甕57），須恵器片３点（甕）が出土している。21はＰ１の埋土から出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀前葉と考えられる。



第15図　第４号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第４号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第15図）

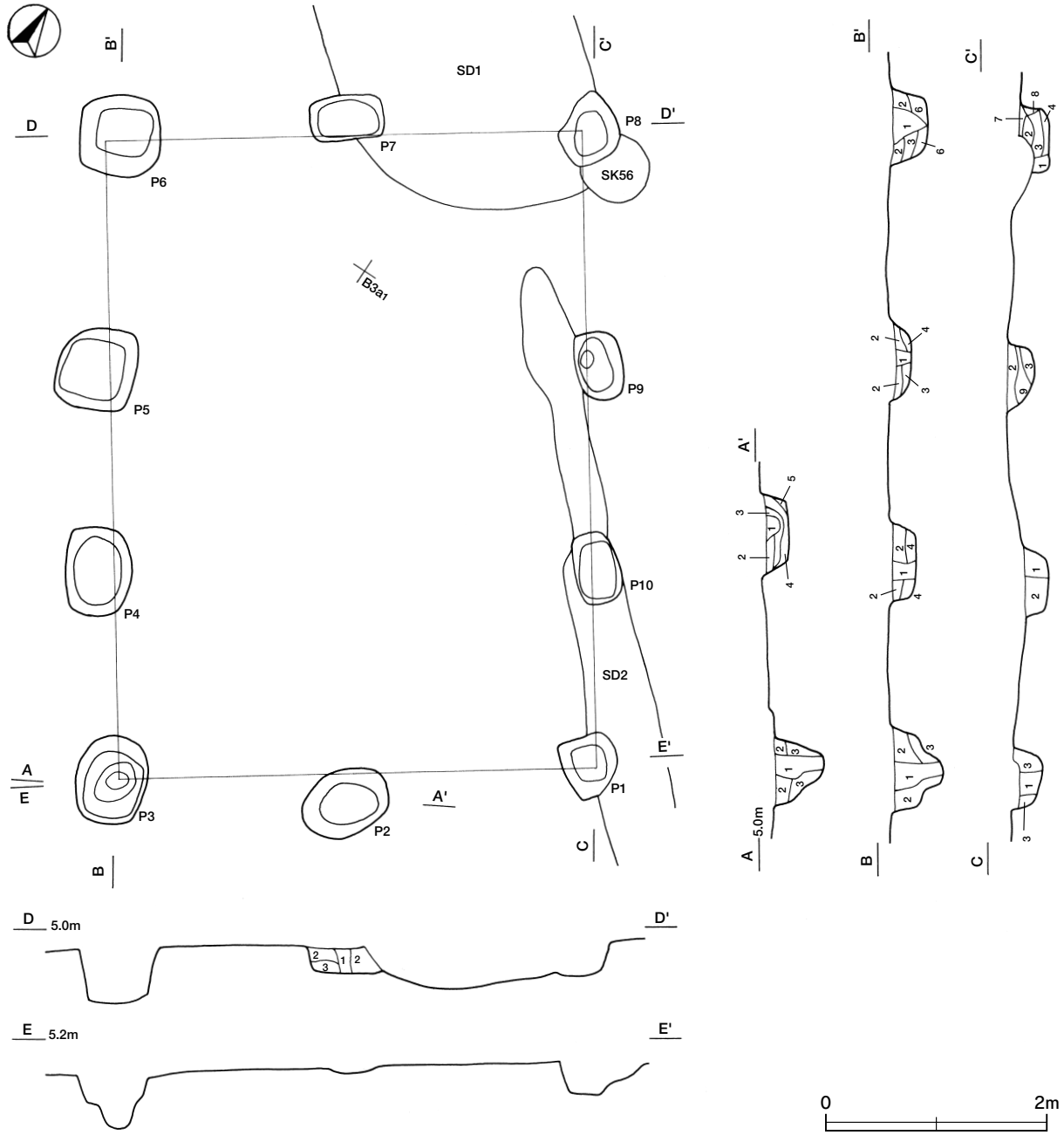
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
21	土師器	小形甕	－	(4.5)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ	Ｐ１埋土中	

第６号掘立柱建物跡（第16・17図）

位置　調査Ｉ区のB3a1区で，平坦地に位置している。

重複関係　第１・２号溝，第56号土抗に掘り込まれている。

規模と構造　桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向はＮ－33°－Ｗである。規模は桁行が5.94ｍ，梁



第16図　第６号掘立柱建物跡実測図

行が4.38mほどで，柱間寸法は桁間が1.98m（6.5尺），梁間が2.19m（７尺）を基調としている。

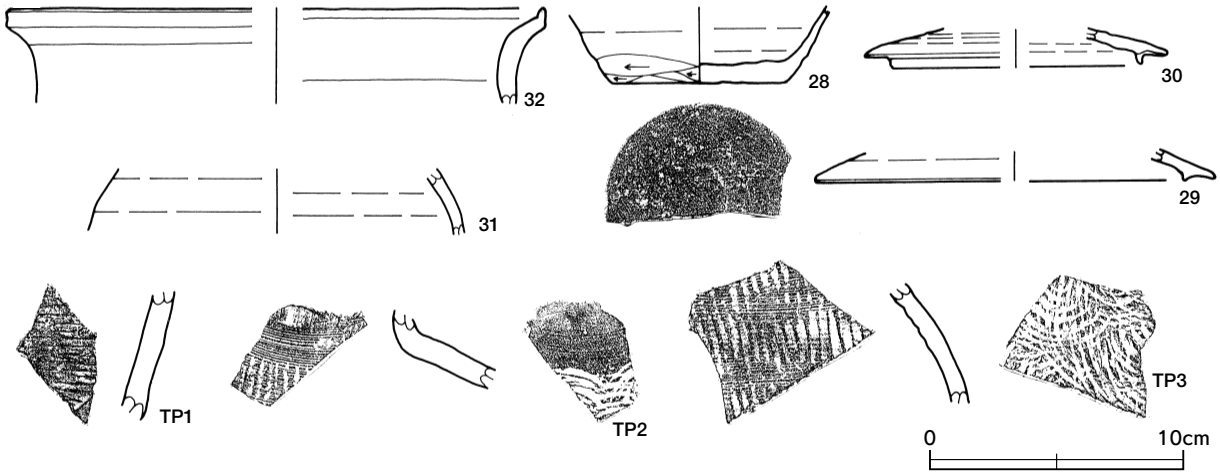
柱穴　平面形はいずれも円形を呈し，深さは17～50cmである。柱の抜き取り痕は土層断面図中の第１層が相当し，締まりが弱い。その他の層は，ローム土と粘土を主体とした埋土で突き固められており，柱の抜き取り痕と比べて締まりが強い。

土層解説（各柱穴共通）

1　黒 褐 色　ロームブロック・粘土ブロック微量
2　黒 褐 色　ローム粒子少量，粘土ブロック微量
3　黒 褐 色　ロームブロック・粘土ブロック少量
4　黒 褐 色　粘土ブロック・ローム粒子微量
5　黒 褐 色　粘土ブロック少量，ロームブロック微量
6　褐 灰 色　粘土粒子多量
7　褐　　色　粘土ブロック・ローム粒子少量
8　にぶい黄褐色　粘土ブロック・砂粒少量
9　暗 褐 色　粘土ブロック中量，ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片102点（坏15，甕・甑87），須恵器片21点（坏６，高台付坏３，蓋４，甕８）が出土している。28はＰ７，29・32はＰ５，30はＰ４のそれぞれ埋土から，31はＰ10の抜き取り痕から出土している。

所見　時期は，出土土器と重複関係から８世紀後葉と考えられる。



第17図　第６号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第６号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第17図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
28	須恵器	坏	－	(3.0)	7.0	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	Ｐ7埋土中	30%
29	須恵器	蓋	[15.7]	(2.2)	－	長石・石英・赤色粒子	橙	不良	ロクロナデ	Ｐ5埋土中	
30	須恵器	蓋	[12.0]	(1.5)	－	長石・石英	灰	普通	ロクロナデ	Ｐ4埋土中	
31	須恵器	瓶ヵ	－	(2.6)	－	緻密・黒色粒子	灰白	良好	ロクロナデ	Ｐ10抜土中	
32	土師器	甕	[21.0]	(3.7)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	Ｐ5埋土中	
TP1	須恵器	甑ヵ	－	(5.1)	－	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外面平行叩き　内面ナデ	Ｐ3埋土中	
TP2	須恵器	甕	－	(3.1)	－	長石・石英	青灰	普通	体部外面平行叩き後　カキ目　内面同心円状の当て具痕	Ｐ5埋土中	
TP3	須恵器	甕	－	(4.7)	－	長石・石英	青灰	普通	体部外面平行叩き後　カキ目　内面同心円状の当て具痕	Ｐ10埋土中	TP2と同一個体

第11号掘立柱建物跡（第18図）

位置　調査Ⅱ区のB2b7区で，平坦地に位置している。

重複関係　第14号掘立柱建物に掘り込まれ，第15号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と構造　桁行２間，梁行２間の総柱建物跡で，桁行方向はＮ－39°－Ｗである。規模は桁行が4.58m，梁

行が4.22mで，柱間寸法は桁間2.29m（7.5尺），梁間2.11m（７尺）を基調としている。

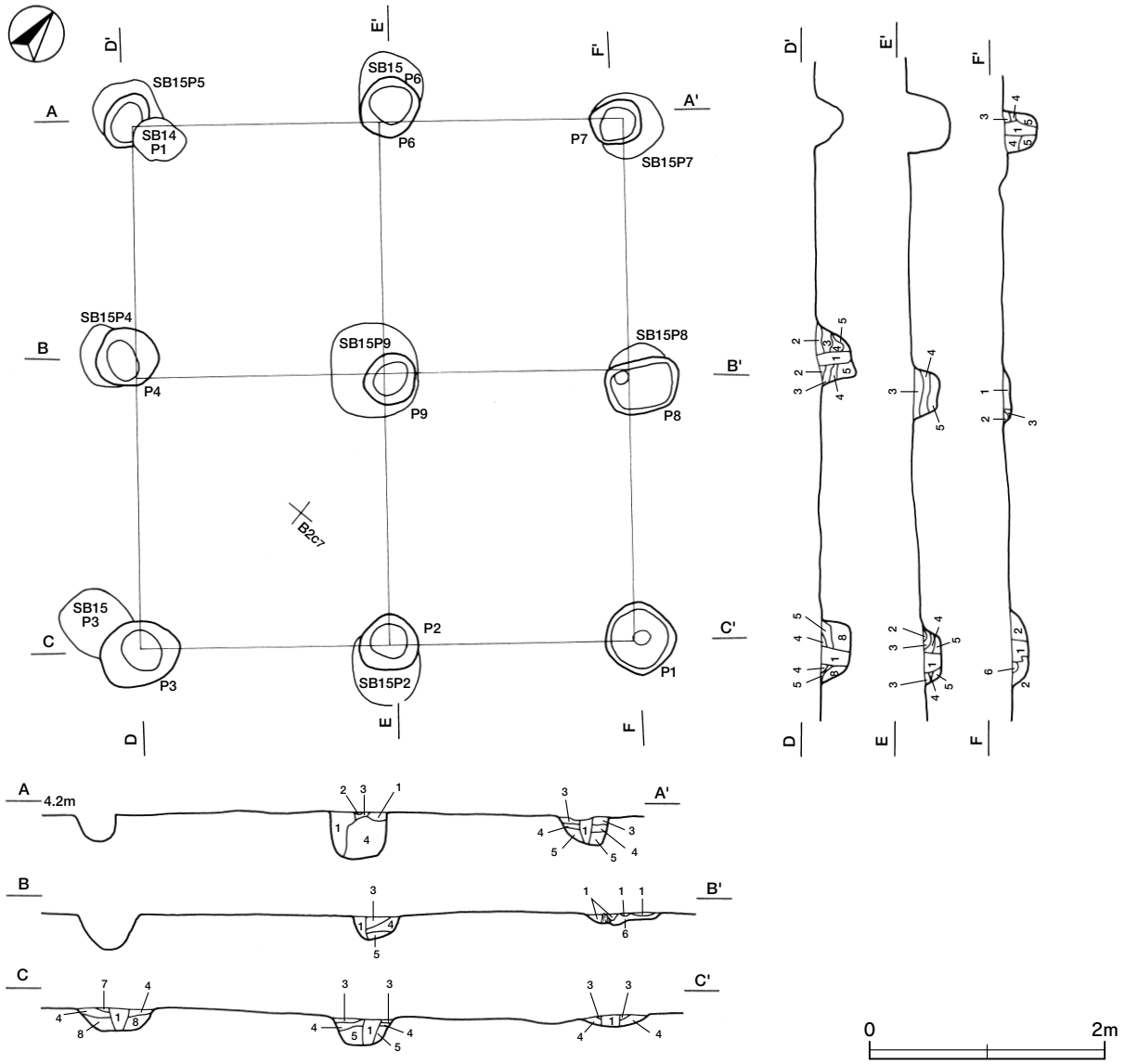
柱穴　平面形は方形もしくは長方形を呈し，深さは７～40cmである。柱痕は土層断面図中の第１層が相当し，締まりが弱い。その他の層は，粘土とローム土を主体とした埋土で，柱痕と比べて締まりがかなり強く，突き固められている。

土層解説（各柱穴共通）

1　黒　　色　粘土ブロック少量，ローム粒子微量
2　にぶい黄褐色　粘土ブロック中量，ローム粒子少量
3　黒 褐 色　ローム粒子・粘土粒子微量
4　黒　　色　粘土ブロック少量，黒色土ブロック・ローム粒子微量
5　黒　　色　粘土ブロック・ローム粒子微量
6　褐 灰 色　粘土ブロック中量，ローム粒子微量
7　暗 褐 色　粘土ブロック少量
8　褐　　色　粘土ブロック中量

遺物出土状況　土師器片５点（坏２，甕・甑３），須恵器片１点（坏）が出土している。細片のため図示できないが，須恵器片（坏）がＰ５の埋土から出土している。

所見　各柱穴が第15号掘立柱建物跡の柱穴と重複していることから，第15号掘立柱建物跡柱穴を利用して建て替えが行われたものと考えられる。時期は，出土土器と重複関係から８世紀中葉頃と考えられる。



第18図　第11号掘立柱建物跡実測図

第14号掘立柱建物跡（第19・20図）

位置　調査Ⅱ区のB2b5区で，平坦地に位置している。

重複関係　第11・15号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と構造　桁行２間，梁行２間の総柱建物跡で，桁行方向はＮ－38°－Ｗである。規模は桁行が3.60m，梁行が3.36mほどで，柱間寸法は桁間1.80m（６尺），梁間1.65m（5.5尺）を基調としている。

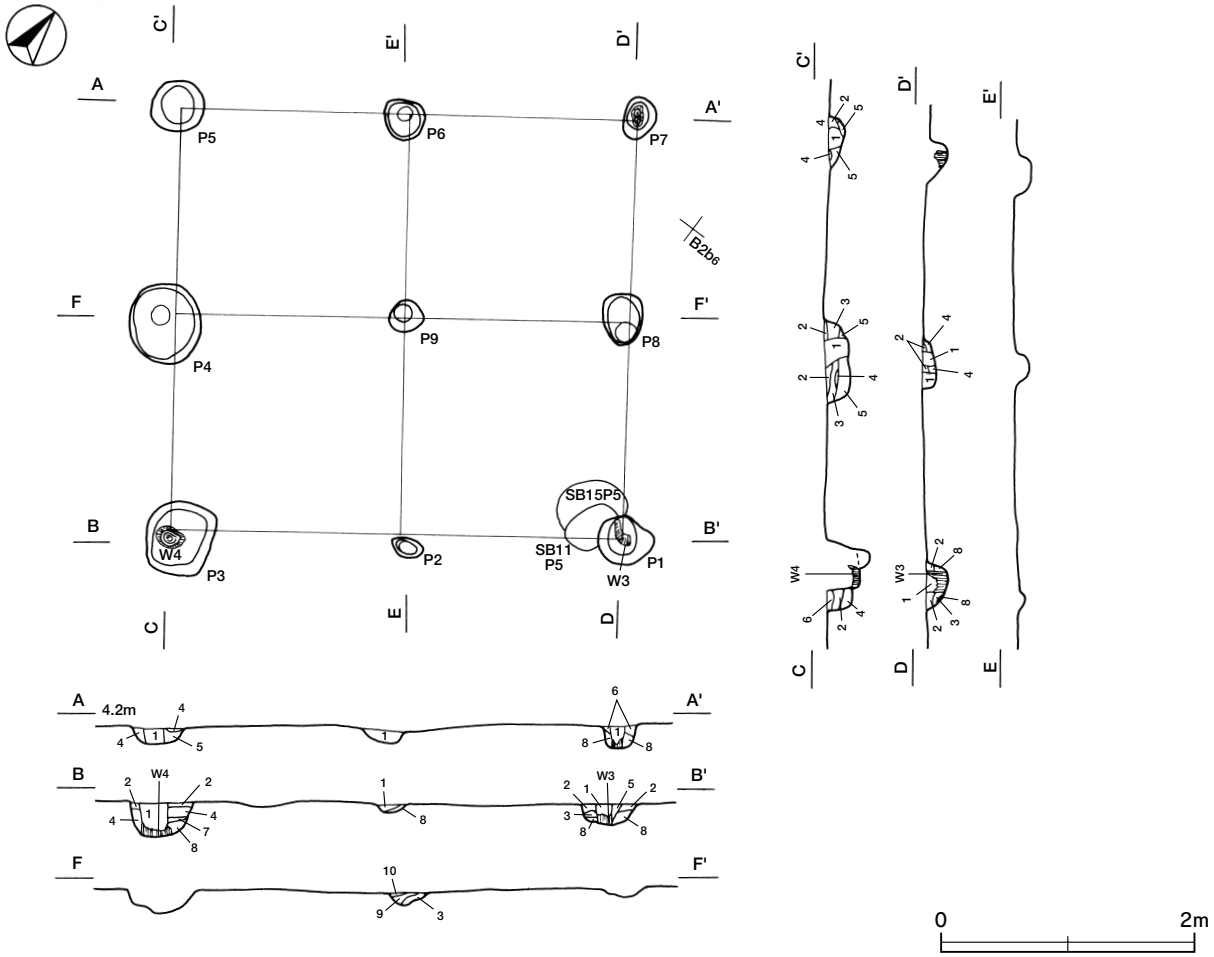
柱穴　平面形は長方形のＰ３を除き円形を呈し，深さは６～25cmである。柱痕は土層断面図中の第１層が相当し，締まりが弱い。その他の層は，粘土とローム土を主体とした埋土で，柱痕と比べて締まりがかなり強く，突き固められている。

土層解説（各柱穴共通）

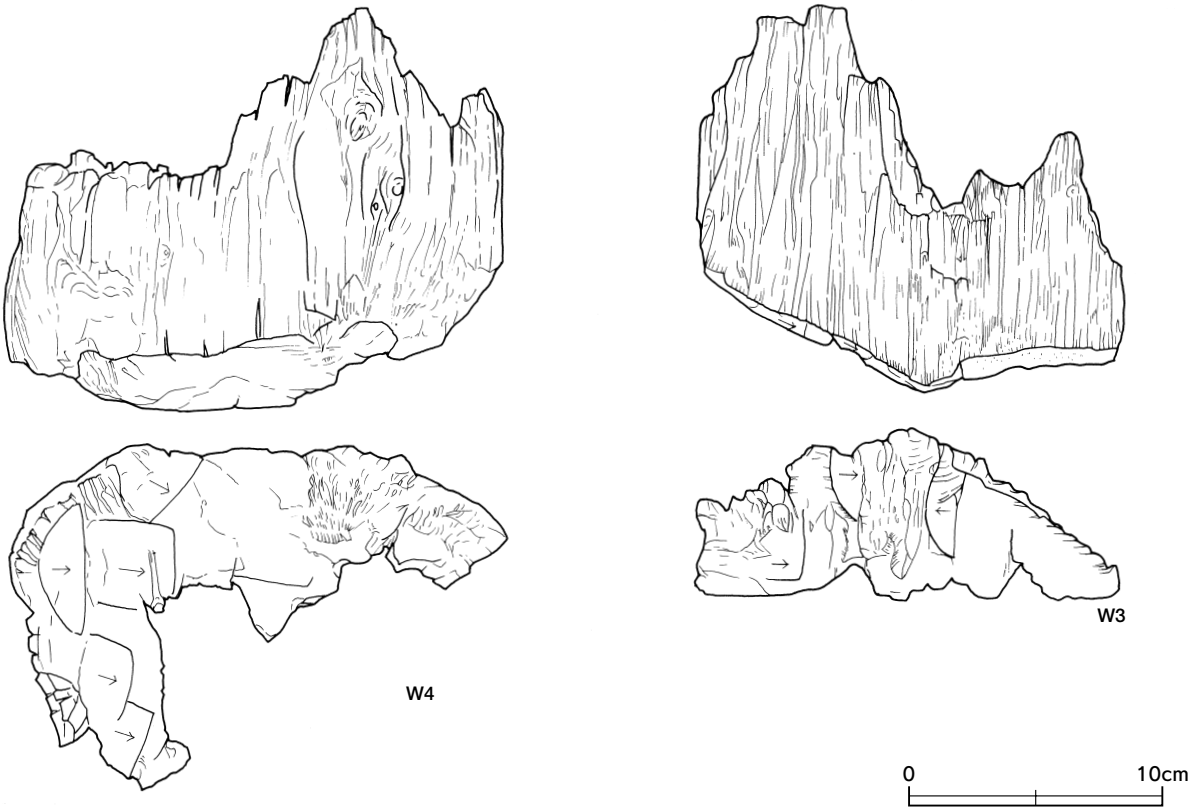
1　黒 褐 色　粘土ブロック・ローム粒子少量，焼土ブロック微量
2　黒 褐 色　ローム粒子少量，粘土粒子微量
3　暗 褐 色　粘土ブロック中量，ローム粒子少量
4　黒　　色　粘土ブロック少量
5　褐　　色　粘土粒子中量，ローム粒子微量
6　黒 褐 色　粘土ブロック・ローム粒子少量
7　黒　　色　粘土ブロック中量
8　褐 灰 色　粘土粒子多量
9　暗 褐 色　粘土ブロック・ローム粒子少量
10　灰 褐 色　粘土ブロック・ローム粒子少量

遺物出土状況　土師器片18点（甕・甑），須恵器片２点（坏，甕），Ｐ１，Ｐ３，Ｐ７で柱根が出土している。Ｗ３はＰ１，Ｗ４はＰ３の柱根である。

所見　柱は20㎝ほどの丸材で，栗材を使用している。時期は，出土土器と重複関係から８世紀後期と考えられる。



第19図　第14号掘立柱建物跡実測図



第20図　第14号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第14号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第20図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	特　　徴	出土位置	備　考
W3	柱	(15.1)	(16.8)	(6.8)	丸材　底面に手斧状工具による削り痕　栗材	P 1	PL24
W4	柱	(15.8)	(19.5)	(13.6)	丸材　底面に手斧状工具による削り痕　栗材	P 3	PL24

第15号掘立柱建物跡（第21図）

位置　調査Ⅱ区のB2b7区で，平坦地に位置している。

重複関係　第11・14号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と構造　桁行２間，梁行２間の総柱建物跡で，桁行方向はN－54°－Wである。規模は桁行が4.54m，梁行が4.36mで，柱間寸法は桁間2.27m（7.5尺），梁間2.23mを基調としている。

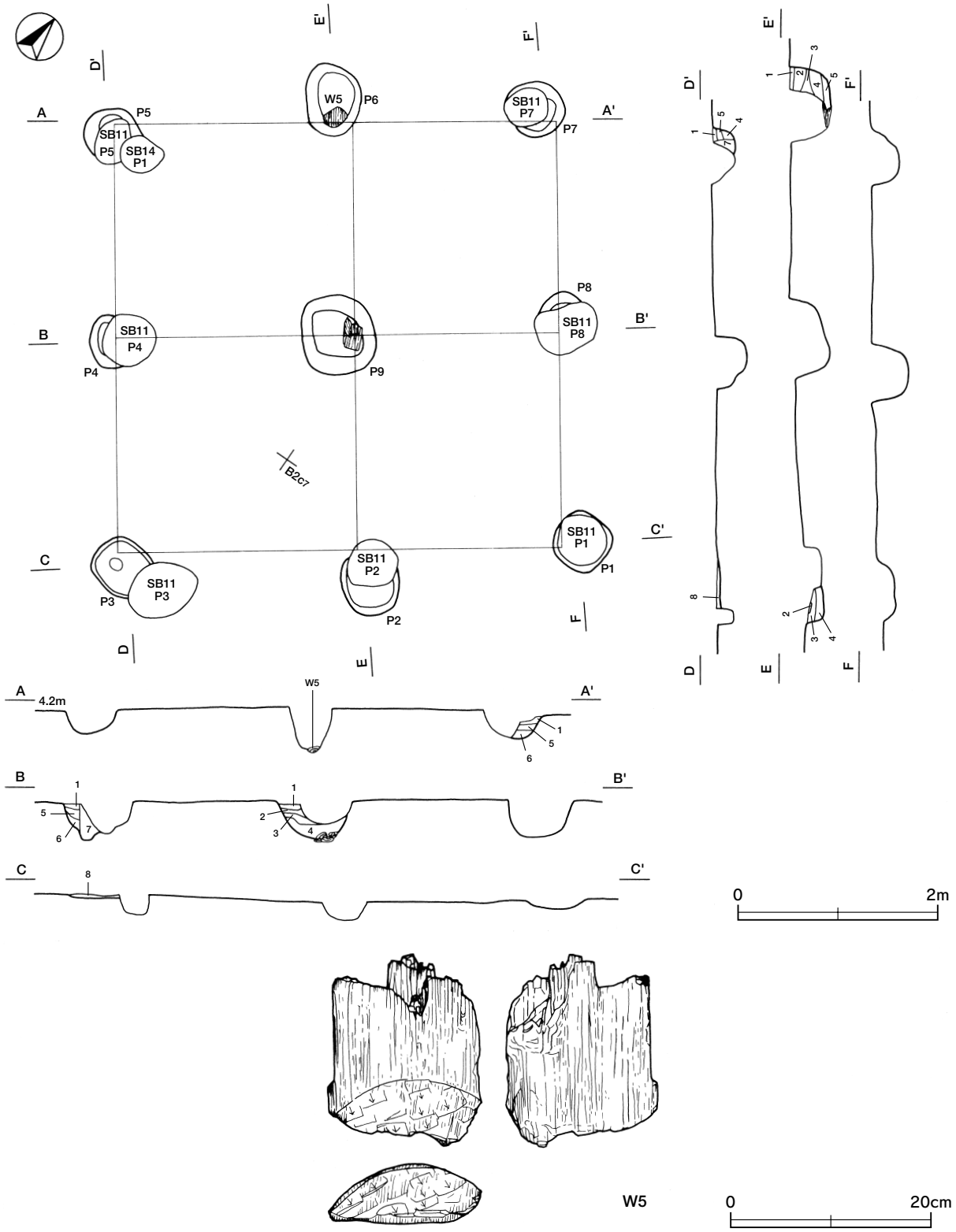
柱穴　平面形は方形もしくは長方形を呈し，深さは４～40cmである。柱痕は土層断面図中の第１層が相当する。その他の層は，褐色または灰白色の粘土を主体とした埋土で，柱痕と比べて締まりがかなり強く，突き固められている。

土層解説（各柱穴共通）
1　黒　　色　褐色粘土ブロック・灰白色粘土ブロック少量
2　にぶい黄褐色　黒色土ブロック・褐色粘土粒子・灰白色粘土粒子少量
3　灰黄褐色　灰白色粘土粒子中量，褐色粘土粒子・黒色土粒子微量
4　褐 灰 色　灰白色粘土粒子中量，褐色粘土粒子微量
5　黒 褐 色　褐色粘土ブロック少量，灰白色粘土ブロック微量
6　黒 褐 色　褐色粘土粒子少量，灰白色粘土粒子微量
7　黒 褐 色　褐色粘土ブロック・灰白色粘土粒子少量
8　暗 褐 色　褐色粘土ブロック・黒色土粒子微量

遺物出土状況　細片のため図示できないが土師器片２点（甕・甑），礎板４点が出土している。W５はP６の

底面から出土している。また，Ｐ９の底面からも廃材を利用したと考えられる礎板３点が出土している。

所見　Ｐ６とＰ９の底面から出土した礎板は，柱の高さを調整するために敷かれたものと考えられる。出土した土器は細片であるため，重複関係と規模及び構造から推定すると，第４号掘立柱建物と同時期に機能していたと考えられる。時期は，８世紀前葉と考えられる。



第21図　第15号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

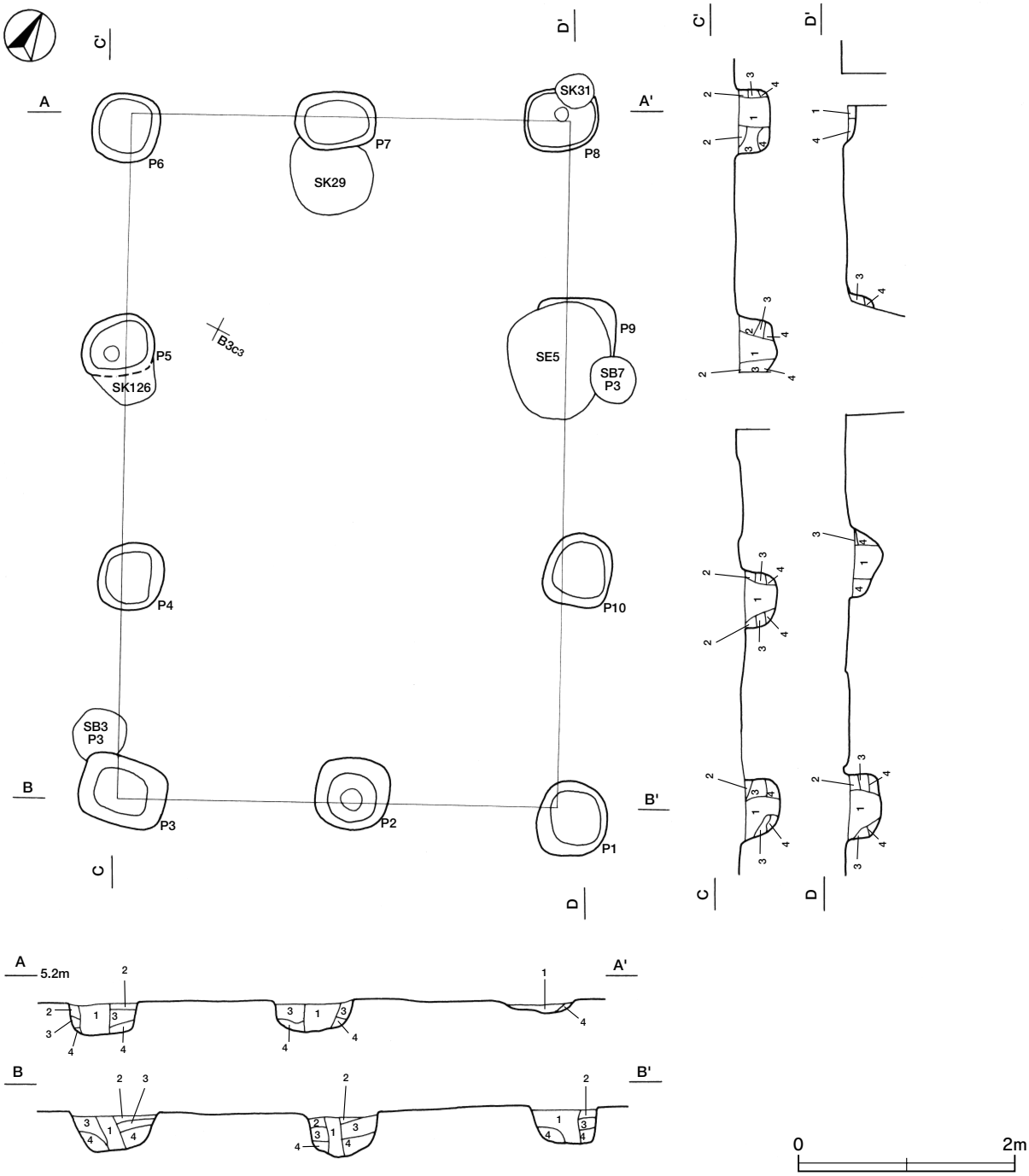
第15号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第21図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	特　　徴	出土位置	備　考
W5	礎板	19.0	15.1	5.7	表裏面柾目　底面に手斧状工具による削り痕　栗材	Ｐ６底面	

第５号掘立柱建物跡（第22・23図）

位置　調査Ｉ区のB3c3区で，平坦地に位置している。

重複関係　第３号掘立柱建物跡，第29号土坑を掘り込み，第７号掘立柱建物，第５号井戸，第31・126号土坑に掘り込まれている。



第22図　第５号掘立柱建物跡実測図

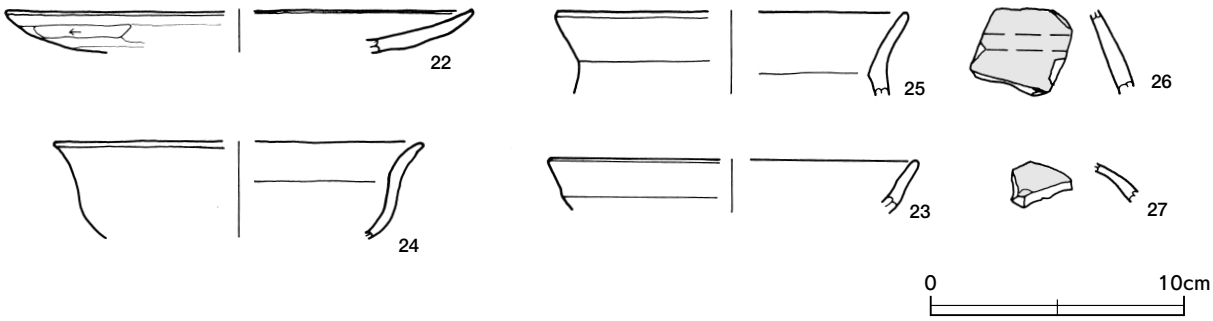
規模と構造　桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向はＮ－28°－Ｗである。規模は桁行が6.36ｍ，梁行が4.24ｍで，柱間寸法は桁間・梁間ともに2.12ｍ（７尺）を基調としている。

柱穴　平面形は方形もしくは長方形を呈し，深さは10～38cmである。柱の抜き取り痕は土層断面図中の第１層が相当し，締まりが弱い。その他の層はローム土を主体とした埋土で，突き固められた痕跡は認められないが，柱抜き取り痕と比べてわずかに締まりが強い。

土層解説（各柱穴共通）
1　黒 褐 色　ロームブロック少量，炭化物・焼土粒子微量
2　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　極暗褐色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
4　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片99点（坏６，甕93），須恵器片15点（坏13，甕２），灰釉陶器片１点（瓶ヵ）が出土している。23はＰ６，24はＰ１，25はＰ２，27はＰ10の埋土，26はＰ３の抜き取り痕から出土している。

所見　第３号掘立柱建物跡のＰ３を基点に，やや北側にずらして建てられていることから，第３号掘立柱建物からの建て替えが想定される。時期は，出土土器と重複関係から９世紀後葉と考えられる。



第23図　第５号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第５号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第23図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
22	土師器	坏	［18.4］	（1.7）	－	長石・石英	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ	Ｐ３埋土中	
23	須恵器	坏	［14.6］	（2.1）	－	長石・石英・雲母	褐灰	普通	内・外面ロクロナデ	Ｐ６埋土中	
24	土師器	椀	［14.4］	（3.8）	－	長石・石英・雲母	橙	普通	内・外面ナデ	Ｐ１埋土中	
25	土師器	甕	［14.0］	（3.3）	－	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ　体部外面ナデ	Ｐ２埋土中	
26	灰釉陶器	瓶ヵ	－	（3.3）	－	長石・黒色粒子	灰白	普通	ロクロナデ	Ｐ３抜土中	
27	灰釉陶器	壺ヵ	－	（1.3）	－	石英・黒色粒子	灰白	普通	ロクロナデ	Ｐ10埋土中	

第10号掘立柱建物跡（第24図）

位置　調査Ｉ区のB3h6区で，平坦地に位置している。

重複関係　第２号住居跡を掘り込んでいる。

規模と構造　桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向はＮ－26°－Ｗである。規模は桁行が6.38ｍ，梁行が4.04ｍで，柱間寸法は桁間・梁間ともに1.96ｍで6.5尺を基調としているが，Ｐ４とＰ５，Ｐ９とＰ10間は2.44ｍ（８尺）となっている。

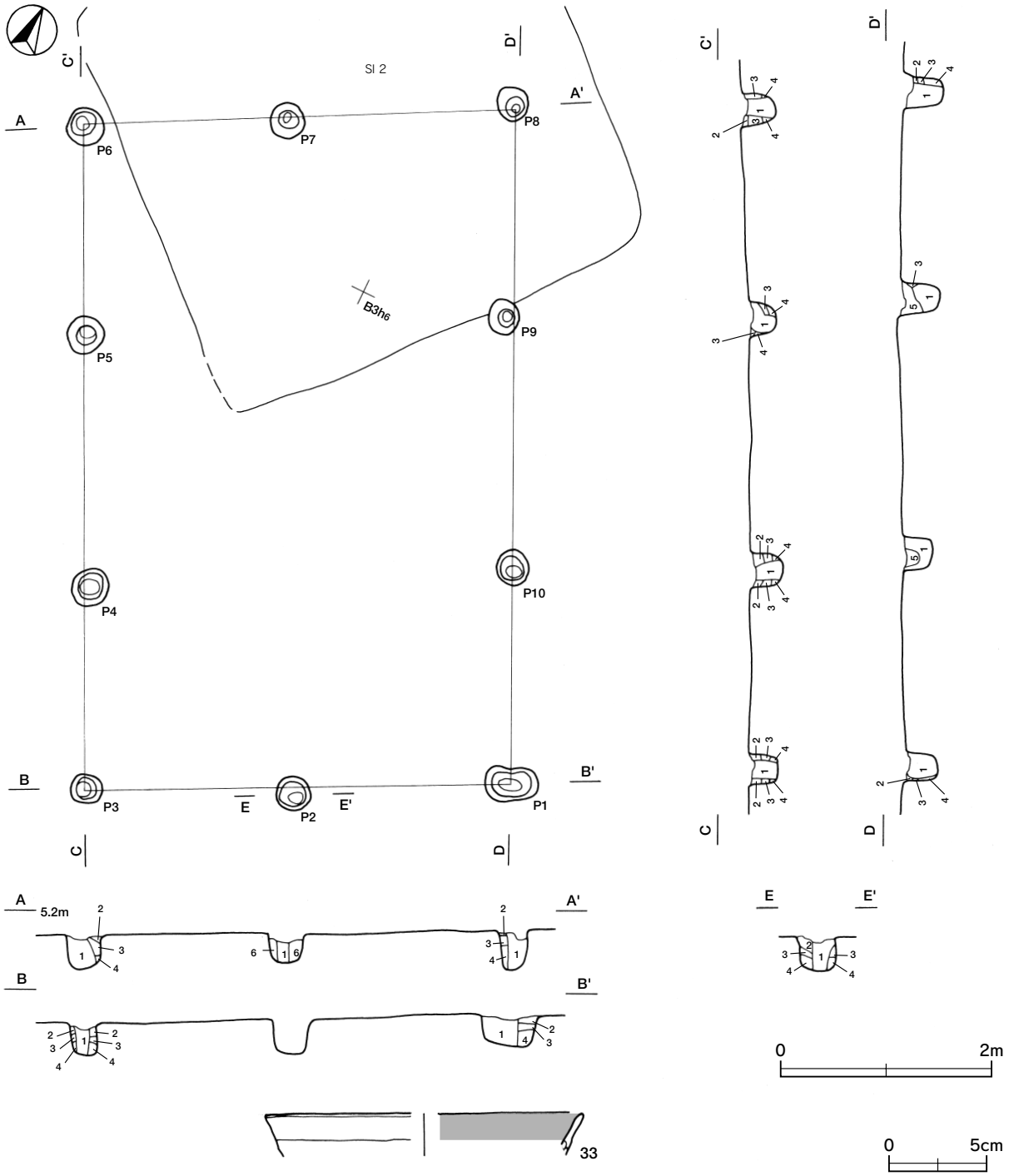
柱穴　平面形はいずれも円形を呈し，深さは25～40cmである。柱痕は土層断面図中の第１層が相当し，締まりが弱い。その他の層は，ローム土を主体とした埋土で突き固められており，柱痕と比べて締まりが強い。

土層解説（各柱穴共通）

1　黒 褐 色　ロームブロック少量
2　暗 褐 色　粘土ブロック微量
3　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
4　暗 褐 色　粘土ブロック微量
5　黒 褐 色　ロームブロック少量
6　暗 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック微量

遺物出土状況　土師器片39点（椀６，甕・甑33），須恵器片４点（蓋１，甕３）が出土している。33はＰ６の埋土から出土している。

所見　桁間に特徴がみられ，桁行の中央部を広く設定していることから，出入口を意識した設計と考えられる。時期は，出土土器と重複関係から10世紀前葉と考えられる。



第24図　第10号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第10号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第24図）

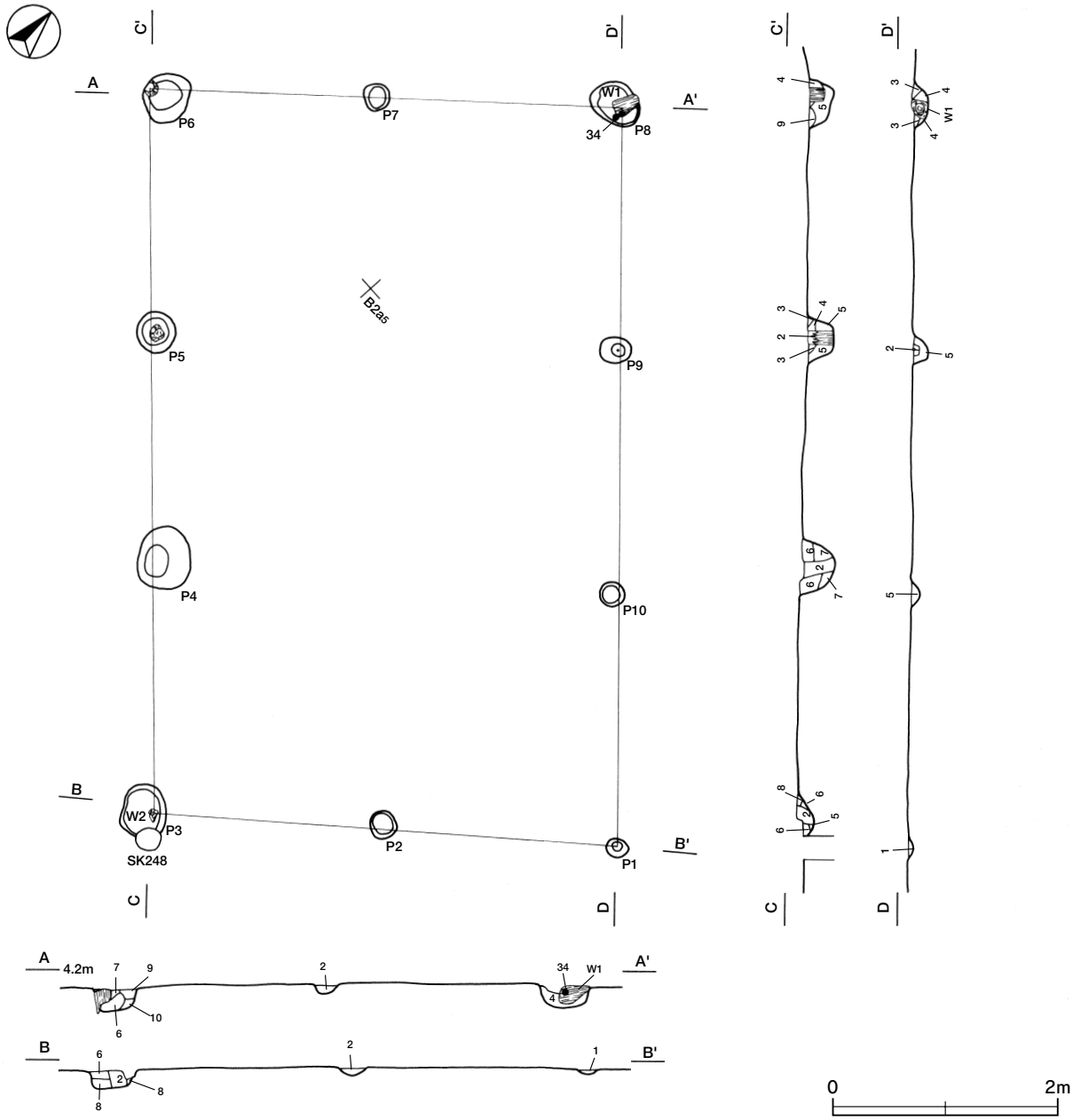
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
33	土師器	椀	［15.0］	（2.0）	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	外面ロクロナデ　内面ヘラ磨き	Ｐ６埋土中	

第12号掘立柱建物跡（第25・26図）

位置　調査Ｉ区のB2a5区で，平坦地に位置している。

重複関係　第216号土抗に掘り込まれている。

規模と構造　桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向はＮ－57°－Ｗである。規模は桁行が6.62ｍ，梁行が4.18ｍで，柱間寸法は桁間2.20ｍ，梁間2.09ｍ（７尺）を基調としている。



第25図　第12号掘立柱建物跡実測図

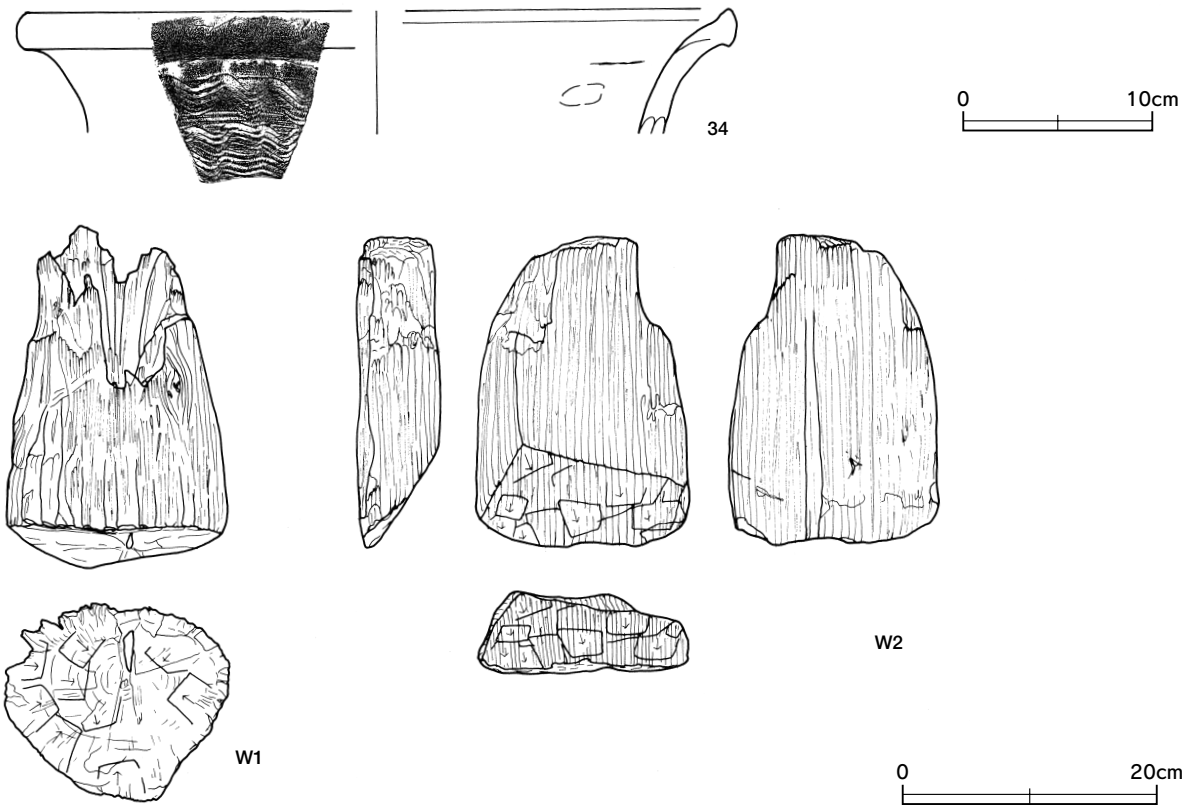
柱穴　平面形はいずれも円形を呈し，深さは５～30cmである。柱痕は土層断面図中の第２層が相当し，締まりが弱い。その他の層は，粘土を主体とした埋土で，柱痕と比べて締まりがかなり強く，突き固められている。

土層解説（各柱穴共通）

1　褐　　色　ローム粒子多量
2　黒 褐 色　粘土ブロック少量
3　褐　　色　粘土粒子中量，ローム粒子微量
4　灰黄褐色　粘土ブロック少量，ローム粒子微量
5　灰　　色　粘土粒子多量
6　黒 褐 色　粘土ブロック・ローム粒子少量
7　黒 褐 色　粘土ブロック少量，ローム粒子微量
8　暗 褐 色　粘土ブロック・ローム粒子少量
9　にぶい黄褐色　粘土粒子多量
10　黄 褐 色　粘土ブロック中量，ローム粒子微量

遺物出土状況　土師器片２点（甕），須恵器片１点（甕），柱根５点が出土している。34はＰ８の埋土から出土している。Ｐ３・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ８・Ｐ９からは柱根が確認されている。

所見　出土した柱根は径20cmほどで，丸材が使用されている。使用されている柱から想定して，倉庫的な用途が考えられる。時期は，出土土器と重複関係から９世紀前半と考えられる。



第26図　第12号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第12号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第26図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
34	須恵器	甕	［37.0］	（6.7）	－	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部外面に３条の沈線　櫛歯状工具による波状文２条	Ｐ８埋土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	特　　徴	出土位置	備　考
W1	柱	（27.3）	17.7	15.8	丸材　底部斧状工具による削り痕	Ｐ８	ＰＬ24
W2	礎板	24.4	17.8	6.4	心材　４面柾目　木口面に斧状工具による削り痕　再利用ヵ	Ｐ３底面	

（2）中・近世

第１号掘立柱建物跡（第27図）

位置　調査Ⅰ区のB3d9区で，平坦地に位置している。

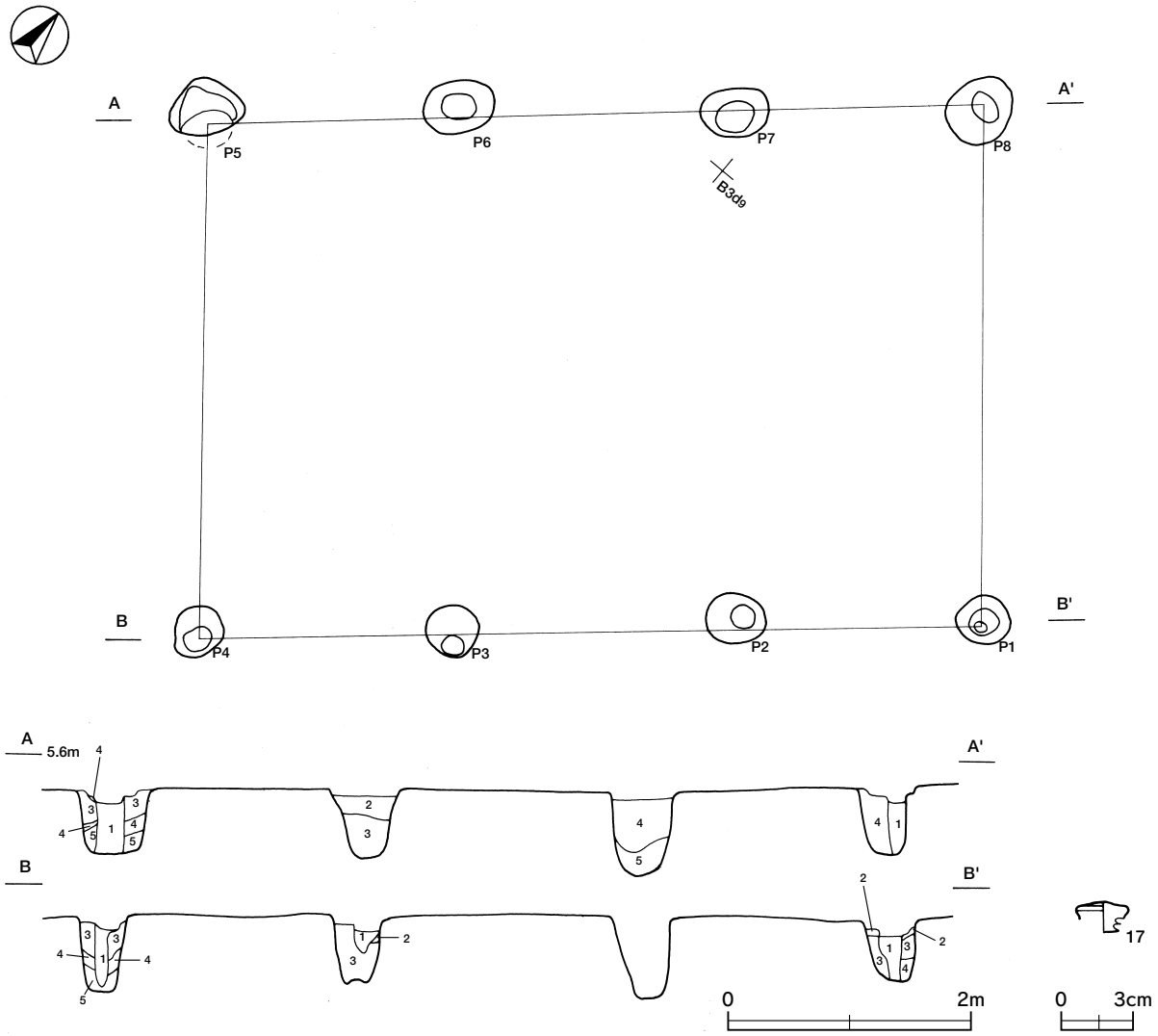
規模と構造　桁行３間，梁行１間の側柱建物跡で，桁行方向はＮ－49°－Ｅである。規模は桁行が6.46m，梁行が4.26mで，桁行の柱間寸法は2.00m，2.10m，2.36mでばらつきがみられる。

柱穴　平面形はいずれも円形を呈し，深さは56～68cmである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第１層が相当し，締まりが弱い。その他の層は，ローム土と白色粘土を主体とした埋土で，突き固められている。

土層解説（各柱穴共通）
1　黒 褐 色　粘土ブロック・ローム粒子微量
2　暗 褐 色　ロームブロック・粘土ブロック少量
3　褐　　色　ロームブロック・粘土ブロック少量
4　暗 褐 色　ロームブロック中量
5　暗 褐 色　粘土ブロック微量

遺物出土状況　土師質土器片８点（鍋），須恵器片１点（蓋）が出土している。17はＰ４の埋土から出土している。

所見　Ｐ４の埋土からは，17と土師質土器片（鍋）が共伴して出土している。Ｐ５の埋土からは土師質土器片が出土していることから，廃絶時期は中世と考えられる。



第27図　第１号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第１号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第27図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
17	須恵器	蓋	－	(1.3)	－	長石・石英・雲母	黄灰	普通	つまみ部ロクロナデ	Ｐ４埋土中	

第７号掘立柱建物跡（第28図）

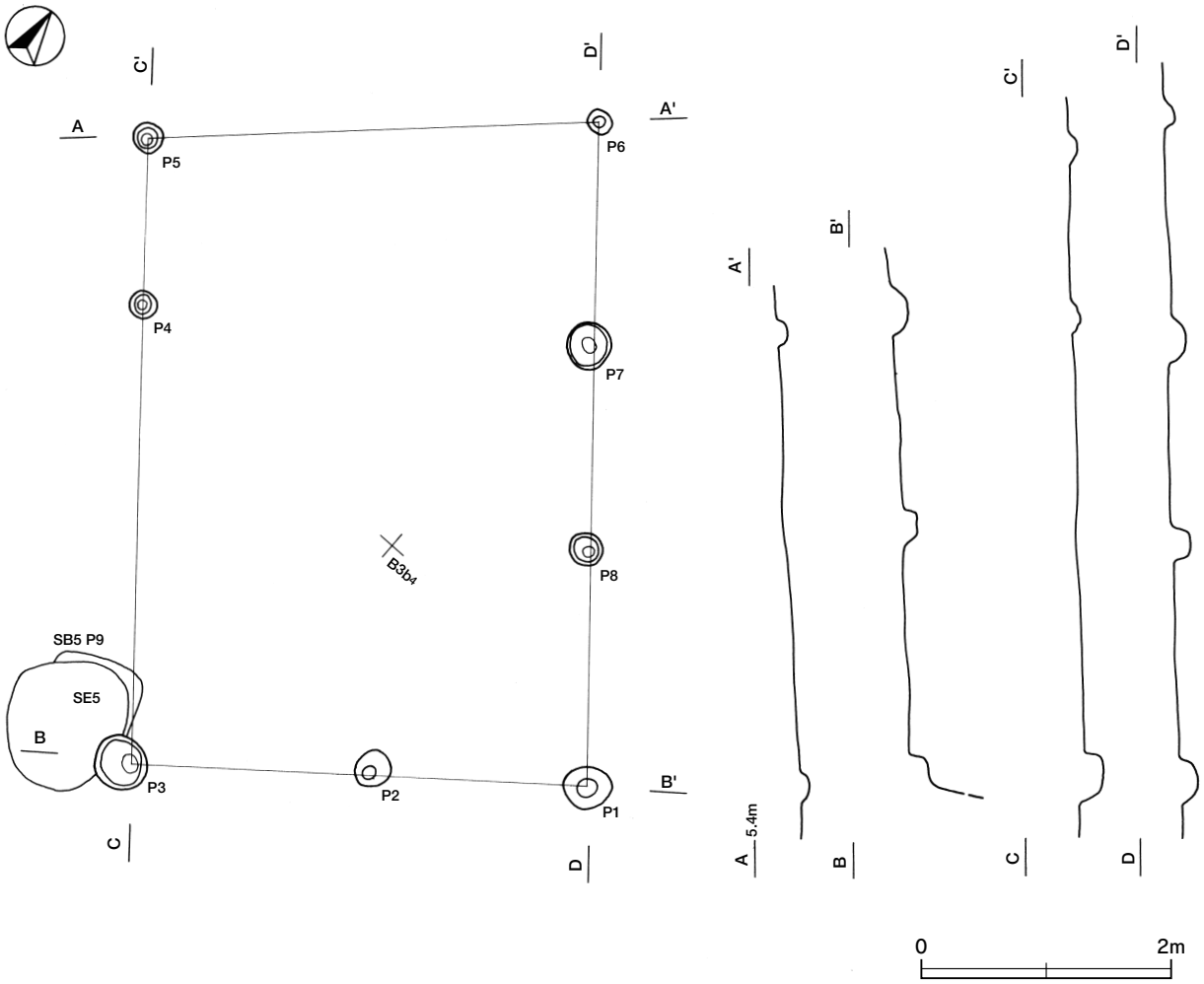
位置　調査Ｉ区のB3a3区で，平坦地に位置している。

重複関係　第５号掘立柱建物跡，第５号井戸跡（ＳＫ－30）を掘り込んでいる。

規模と構造　桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向はＮ－39°－Ｗである。規模は，桁行が東側5.28ｍ，西側5.06ｍでやや歪んでおり，梁行は3.62ｍである。柱間寸法は６尺を基調としているが，Ｐ４とＰ５の間は1.45ｍ，Ｐ７とＰ８の間では1.65ｍでばらつきがある。

柱穴　平面形は円形を呈し，深さは７～16cmである。検出された柱穴ではそれぞれ柱のあたりが確認されている。

所見　当遺跡で見られる古代の掘立柱建物跡の掘り方と比較すると規模が小さい。時期は，重複関係から中世以降と考えられる。



第28図　第７号掘立柱建物跡実測図

第８号掘立柱建物跡（第29図）

位置　調査Ⅰ区のB3d6区で，平坦地に位置している。

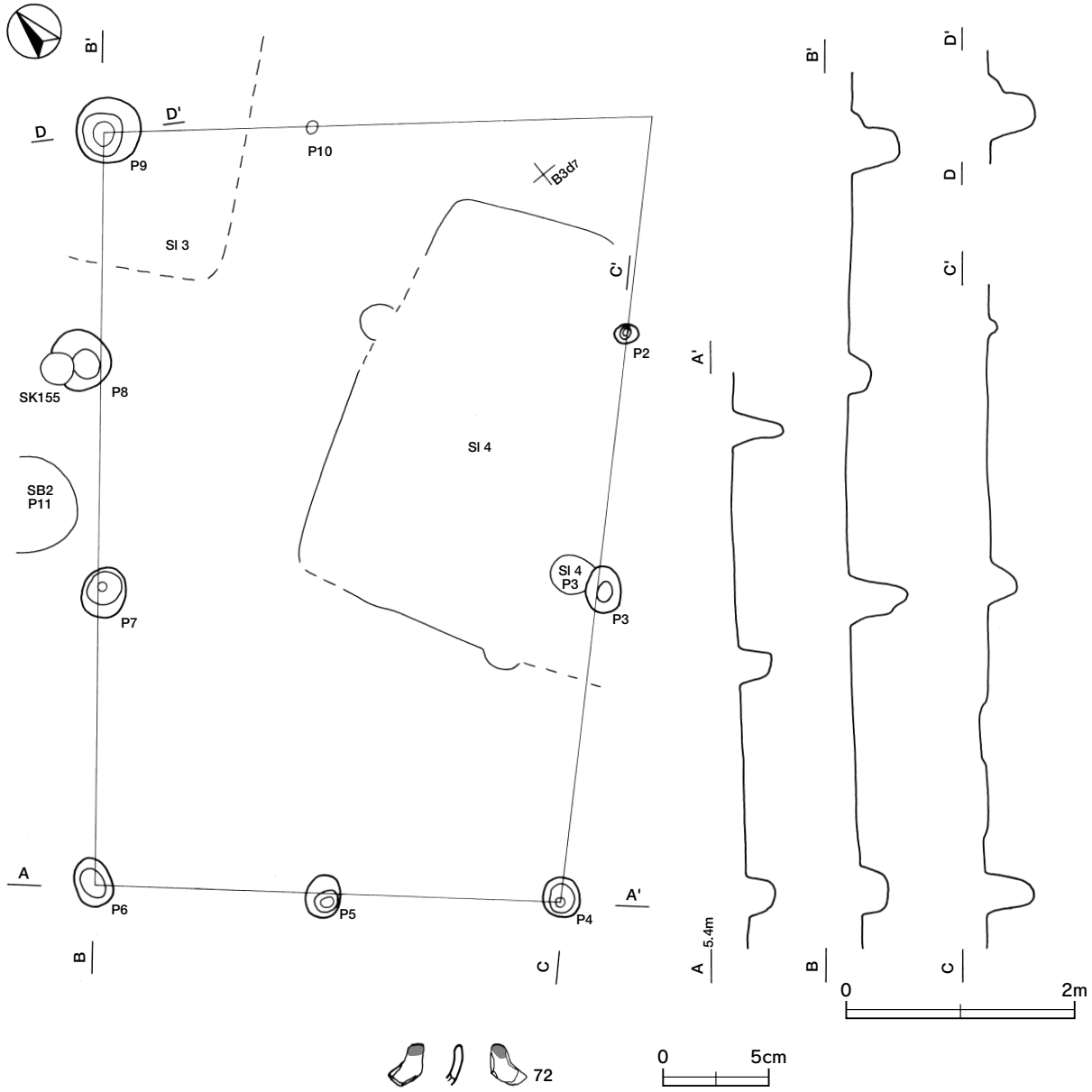
重複関係　第３・４号住居跡，第２号掘立柱建物跡を掘り込み，第155号土坑に掘り込まれている。

規模と構造　桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向はＮ－40°－Ｅである。規模は桁行が6.50ｍ，梁行が4.10ｍで，柱間寸法は，1.90ｍ，2.00ｍ，2.10ｍ，2.30ｍ，2.60ｍと間尺にばらつきがみられる。

柱穴　平面形はいずれも円形を呈し，深さは８～50cmである。Ｐ２・Ｐ３・Ｐ５・Ｐ７・Ｐ９・Ｐ10には柱のあたりが確認されている。

遺物出土状況　土師器片９点（坏１，甕・甑８），土師質土器片２点（小皿）が出土している。72はＰ６の埋土から出土している。

所見　当遺跡でみられる古代の掘立柱建物跡の掘り方と比較して，規模が小さく華奢である。時期は，重複関係と出土土器から中世以降と考えられる。



第29図　第８号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第８号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第29図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
72	土師質土器	小皿	－	(1.2)	－	長石・雲母	橙	普通	内・外面ナデ	Ｐ６埋土中	油煙付着

第９号掘立柱建物跡（第30図）

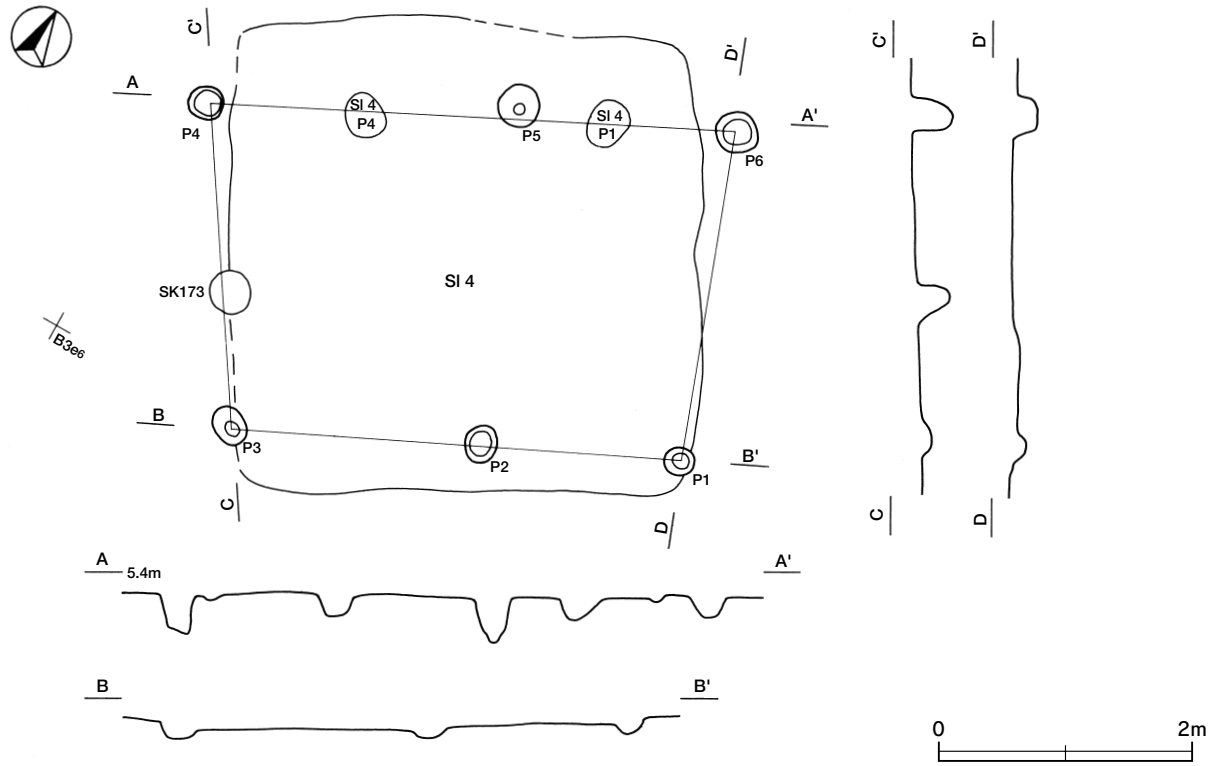
位置　調査Ｉ区のB3d6区で，平坦地に位置している。

重複関係　第４号住居跡を掘り込んでいる。

規模と構造　桁行２間，梁行１間の側柱建物跡で，桁行方向はＮ－63°－Ｅである。規模は北側の桁行が4.20ｍ，南側の桁行が3.54ｍ，梁行が2.60ｍでやや歪み，平面形は台形に近い長方形になっている。桁間寸法は1.56ｍ，1.72ｍ，1.98ｍ，2.48ｍで，ばらつきがみられる。

柱穴　平面形はいずれも円形を呈し，深さは６～35cmである。Ｐ３・Ｐ５で柱のあたりが確認されている。

所見　当遺跡にみられる古代の掘立柱建物跡の掘り方と比較して規模が小さく，華奢である。時期は，重複関係と規模から中世以降と考えられる。



第30図　第９号掘立柱建物跡実測図

第13号掘立柱建物跡（第31図）

位置　調査Ｉ区のB2d8区で，平坦地に位置している。

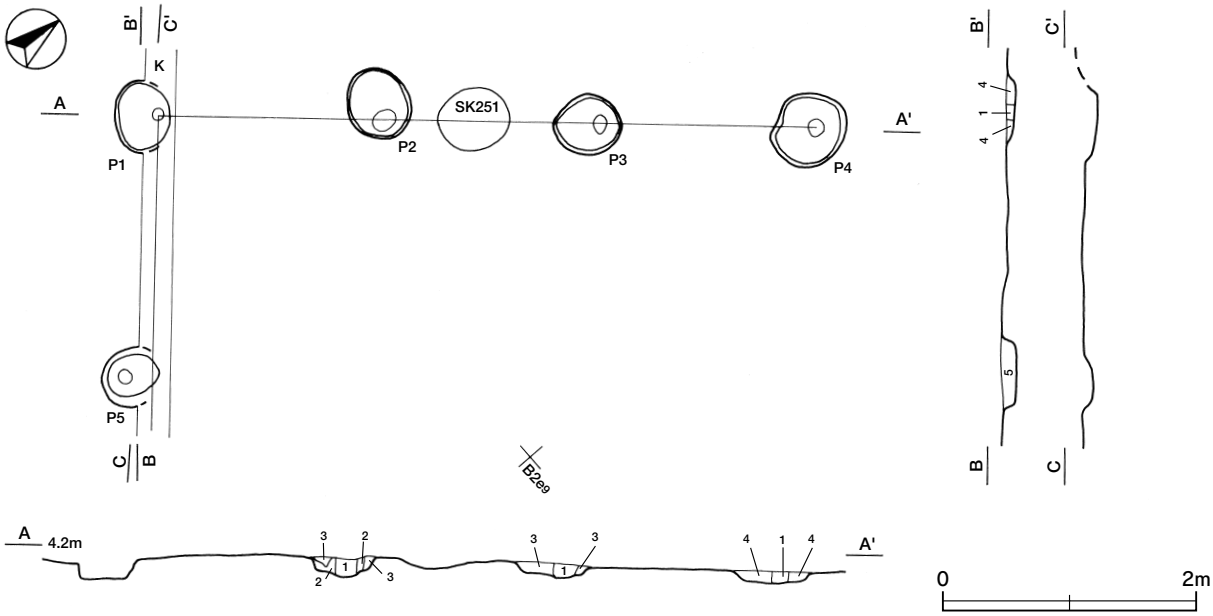
規模と構造　桁行３間，梁行１間だけが確認された。確認された柱穴位置から桁行方向をＮ－42°－Ｅとする側柱建物跡と推定される。規模は桁行が5.20ｍで，柱間寸法は1.70，1.80ｍとばらつきがある。梁間は2.10ｍ

である。

柱穴　平面形はいずれも円形を呈し，深さは８～14cmである。柱の抜き取り痕は土層断面図中の第１層が相当する。その他の層は，砂質粘土を主体とした埋土で，柱の抜き取り痕と比べて締まりが強く，突き固められている。

土層解説（各柱穴共通）
1　黒 褐 色　粘土粒子多量
2　にぶい黄橙色　砂質粘土粒子多量
3　黒　　色　粘土粒子多量
4　浅黄橙色　粘土粒子多量
5　暗黄灰色　粘土粒子多量，砂粒中量，炭化粒子少量

所見　当遺跡でみられる古代の側柱建物跡は桁行方向を北西としているが，本跡は桁行方向を北東に向けている。第１・８号掘立柱建物跡と本跡は，同じ桁行方向であることから同時期の中世である可能性が考えられる。



第31図　第13号掘立柱建物跡実測図

表３　掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	方　向	桁×梁	規模（m）	面積（m²）	桁行柱間（m）	梁行柱間（m）	柱　穴（cm） 構造	柱穴	平面形	深さ	出　土　遺　物	備　考（時　期）
1	B3d9	N―49°―E	3×1	6.46×4.26	27.5	2.00, 2.10, 2.36	4.26	側柱	8	円形	56～68	須恵器片（蓋），土師質片（鍋）	中世
2	B3b5	N―38°―W	3×2	8.20×3.96	32.5	2.73	1.98	側柱	9	円形	15～25	土師器片（椀，甕），須恵器片（坏，蓋），灰釉陶器片	11世紀頃
3	B3c3	N―34°―W	3×2	6.42×4.10	26.3	2.14	2.05	側柱	10	円形	12～30	土師器片（坏，甕），須恵器片（坏，高台付坏，蓋，甕，甑）	8世紀後葉
4	A3b1	N―55°―E	2×2	4.84×4.84	23.4	2.42	2.42	総柱	9	円形，方形，長方形	31～50	土師器片（坏，甕），須恵器片（甕）	8世紀前葉
5	B3c3	N―28°―W	3×2	6.36×4.24	26.9	2.12	2.12	側柱	10	方形，長方形	10～38	土師器片（坏，甕），須恵器片（坏，甕），灰釉陶器片（瓶か）	9世紀後葉
6	B3a1	N―33°―W	3×2	5.94×4.38	26.0	1.98	2.19	側柱	10	円形	17～50	土師器片（坏，甕・甑），須恵器（坏，高台付坏，蓋，甕）	8世紀後葉
7	B3a3	N―49°―E	3×2	5.28, 5.06×3.62	19.1	1.45, 1.65, 1.80	1.80	側柱	8	円形	7～16		中世
8	B3d6	N―40°―E	3×2	6.50×4.10	26.7	1.90, 2.00, 2.30, 2.60	2.00, 2.10	側柱	8	円形	8～50	土師器片（坏，甕・甑），土師質土器片（かわらけ）	中世
9	B3d6	N―63°―E	2×1	3.54×2.60	9.2	1.56, 1.72, 1.98	2.48	側柱	6	円形	6～35		中世
10	B3h6	N―26°―W	3×2	6.38×4.04	25.8	1.96, 2.44	1.96	側柱	10	円形	25～40	土師器片（椀，甕・甑），須恵器片（蓋，甕）	10世紀前葉
11	B2b7	N―60°―W	2×2	4.58×4.22	19.3	2.29	2.11	総柱	9	方形，長方形	7～40	土師器片（坏，甕・甑），須恵器片（坏）	8世紀中葉
12	B2a5	N―57°―W	3×2	6.62×4.18	27.7	2.2	2.09	側柱	10	円形	5～30	土師器片（甕），須恵器片（甕），柱根	9世紀前半
13	B2d8	N―49°―E	3×(1)	5.20×(1.70)	(8.8)	1.70, 1.80	2.10	側柱	5	円形	8～14		中世
14	B2b5	N―38°―W	2×2	3.60×3.36	12.1	1.80	1.65	総柱	9	円形，長方形	6～25	土師器片（甕・甑），須恵器片（坏，甕），柱根	8世紀後期
15	B2b7	N―54°―W	2×2	4.54×4.36	19.8	2.27	2.23	総柱	9	方形，長方形	4～40	土師器片（甕・甑）	8世紀前葉

3　井戸跡

井戸跡が８基確認された。以下，検出された遺構と遺物について記述する。

（１）平安時代

第１号井戸跡（第32・33図）

位置　調査Ⅱ区のB2a3区で，平坦地に位置している。

規模と形状　長径3.30m，短径2.76mの楕円形で，長軸方向はＮ－34°－Ｗである。深さは1.40mで，漏斗状に掘り込んでいる。また，南東部では枠の一部が検出された。枠は径６㎝ほどの木杭と径４㎝ほどの竹杭で横木を押さえた構造をしている。

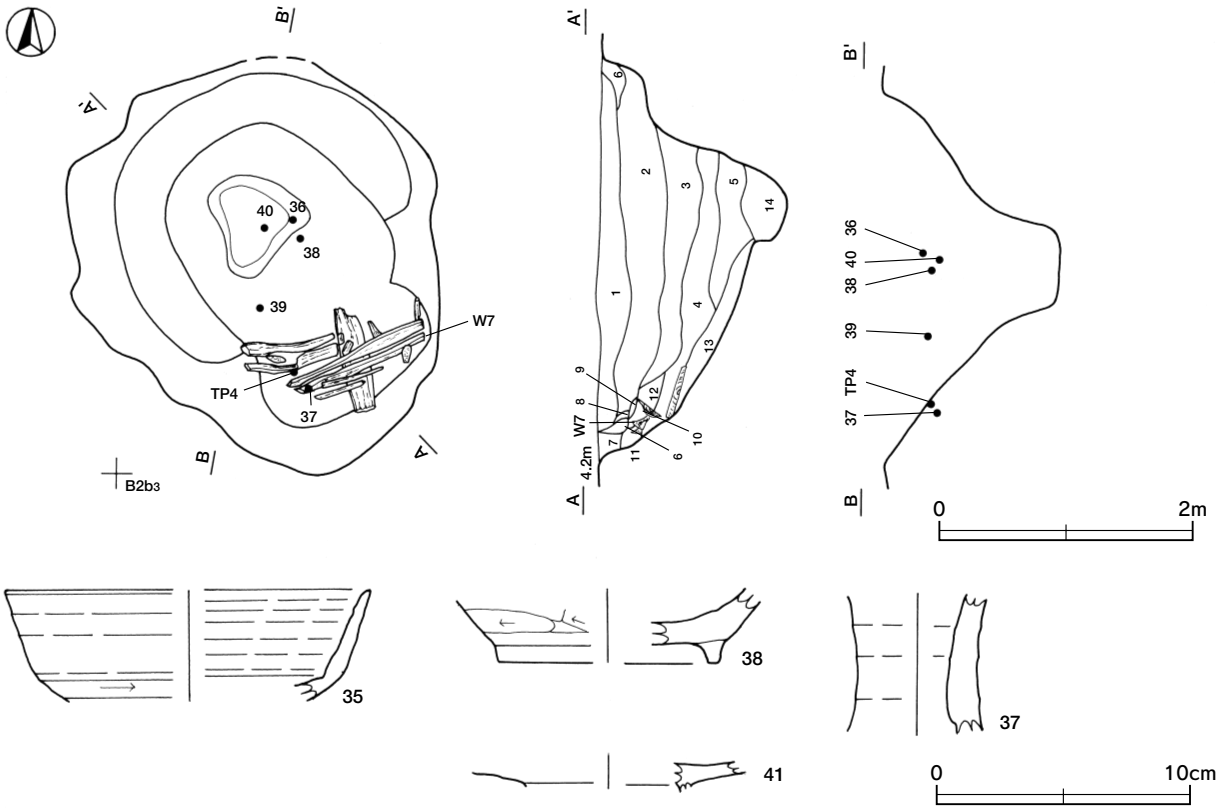
覆土　14層からなる。第13・14層は自然堆積で，その他は炭化粒子などを含んでいることから人為堆積である。

土層解説

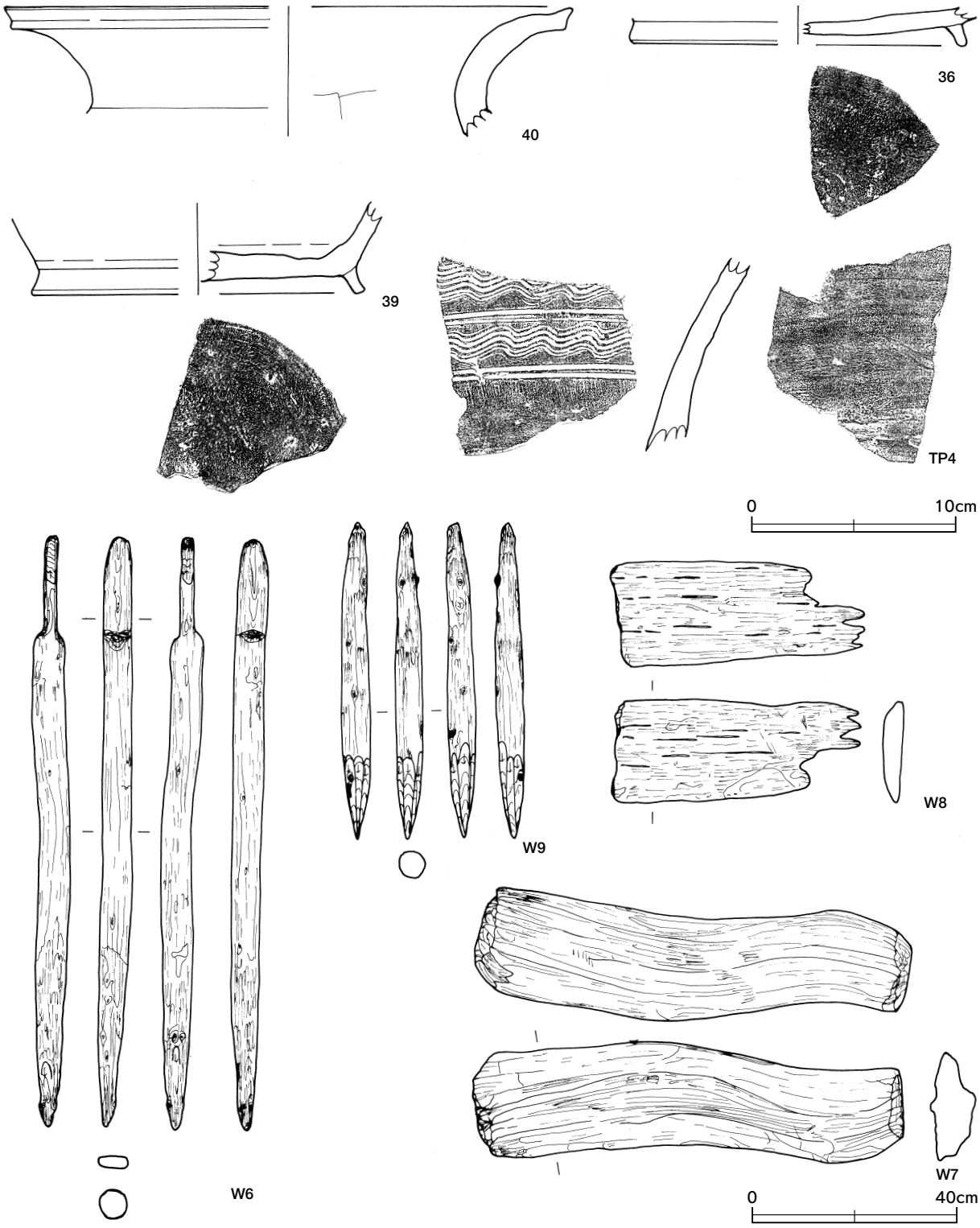
1	黒褐色	鉄分多量，炭化物・砂粒少量	
2	黒　色	鉄分中量，炭化粒子少量	
3	黒　色	腐食物多量，鉄分少量	
4	黒　色	砂粒少量	
5	褐灰色	粘土粒子多量，細礫少量	
6	にぶい黄褐色	粘土粒子多量，鉄分中量	
7	黒　色	粘土粒子少量	
8	暗褐色	粘土粒子少量	
9	黄灰色	粘土粒子中量，砂粒少量	
10	灰　色	粘土粒子多量，細礫少量	
11	黒褐色	砂粒・細礫少量，粘土粒子微量	
12	黒褐色	腐食物中量，細礫少量	
13	褐灰色	腐食物多量，焼土ブロック少量	
14	黒　色	細礫少量	

遺物出土状況　土師器片58点(坏８，高坏１，椀１，甕48)，須恵器片41点(坏９，高台付坏１，盤１，壺４，甕26)，灰釉陶器片１点(皿)，鉄滓２点，木製品(杭，枠)，竹片５点，礫21点が出土している。36・38～40，Ｗ６～Ｗ９は南東部，37は南側の覆土上層から出土している。

所見　廃絶時期は，出土土器から９世紀後葉と考えられる。



第32図　第１号井戸跡・出土遺物実測図



第33図　第１号井戸跡出土遺物実測図

第１号井戸跡出土遺物観察表（第32・33図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
35	須恵器	高台付坏	［14.5］	（4.5）	－	長石・石英	灰	普通	体部外面下端回転ヘラ削り　内面底部ヘラナデ	覆土中	
36	須恵器	盤	－	（1.9）	［16.0］	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ切り後　高台貼り付け	中央部覆土中層	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
37	須恵器	長頸瓶	－	(5.6)	－	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	頸部ロクロナデ	南壁際覆土中層	
38	須恵器	瓶	－	(3.0)	－	長石・石英	灰白	普通	体部外面ヘラ削り　高台貼り付け後ナデ	中央部覆土中層	
39	須恵器	短頸壺	－	(4.6)	[16.0]	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ　高台貼り付け	中央部覆土中層	底部内面自然釉付着
40	須恵器	甕	[27.7]	(6.4)	－	長石・黒色粒子	灰	良好	口縁部ロクロナデ　体部内面ヘラナデ	中央部覆土中層	内・外面自然釉付着
41	灰釉陶器	皿	－	(1.2)	－	緻密・黒色粒子	灰白・灰オリーブ	良好	高台貼り付け	覆土中	
TP4	須恵器	甕	－	(9.4)	－	長石・石英	灰	普通	頸部外面2条の沈線2段　区画内に櫛歯状工具による波状文　内面ヘラナデ	南壁際覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	特　　徴	出土位置	備　考
W6	木杭	116.4	5.8	6.0	丸材　先端部鉈状工具による削り痕　頭部鑿状工具による工具痕　廃材利用ヵ	南壁際上層	
W7	板材	(86.6)	24.2	8.8	辺材　鋸による工具痕ヵ	南壁際上層	
W8	板材	(50.7)	19.8	3.9	辺材　表裏面炭化	南壁際上層	
W9	木杭	62.1	5.2	5.3	丸材　先端部は鉈状工具による削り	南壁際上層	

第２号井戸跡（第34～37図）「ＳＫ－100」

位置　調査Ｉ区のB4e1区で，平坦地に位置している。

重複関係　第236号土抗を掘り込んでいる。

規模と形状　方形に掘り込んだ後，北西部をさらに円筒状に掘り込んだ二段になっている。方形部の規模は長軸5.23ｍ，短軸5.04ｍで，深さは64㎝である。円筒部は径2.60ｍで，方形部の底面からさらに1.50ｍほど掘り下げている。長軸方向はＮ－47°－Ｗである。円筒状に掘り込まれた南部には，テラス状に平場が設けられている。また，機能時には全周していたと推定される井戸枠が南側にだけ遺存している。使用された木材は，径20㎝ほどの丸材を半截した柱と，厚さ５～７㎝ほどの板材を使い，丸材が板材を挟むように円形に並べられ，下端を杭で止めている。

ピット　２か所。Ｐ１とＰ２は深さ10㎝である。

覆土　28層からなる。第20・21層は自然堆積であるが，その他はブロック土を含むことから，人為堆積である。

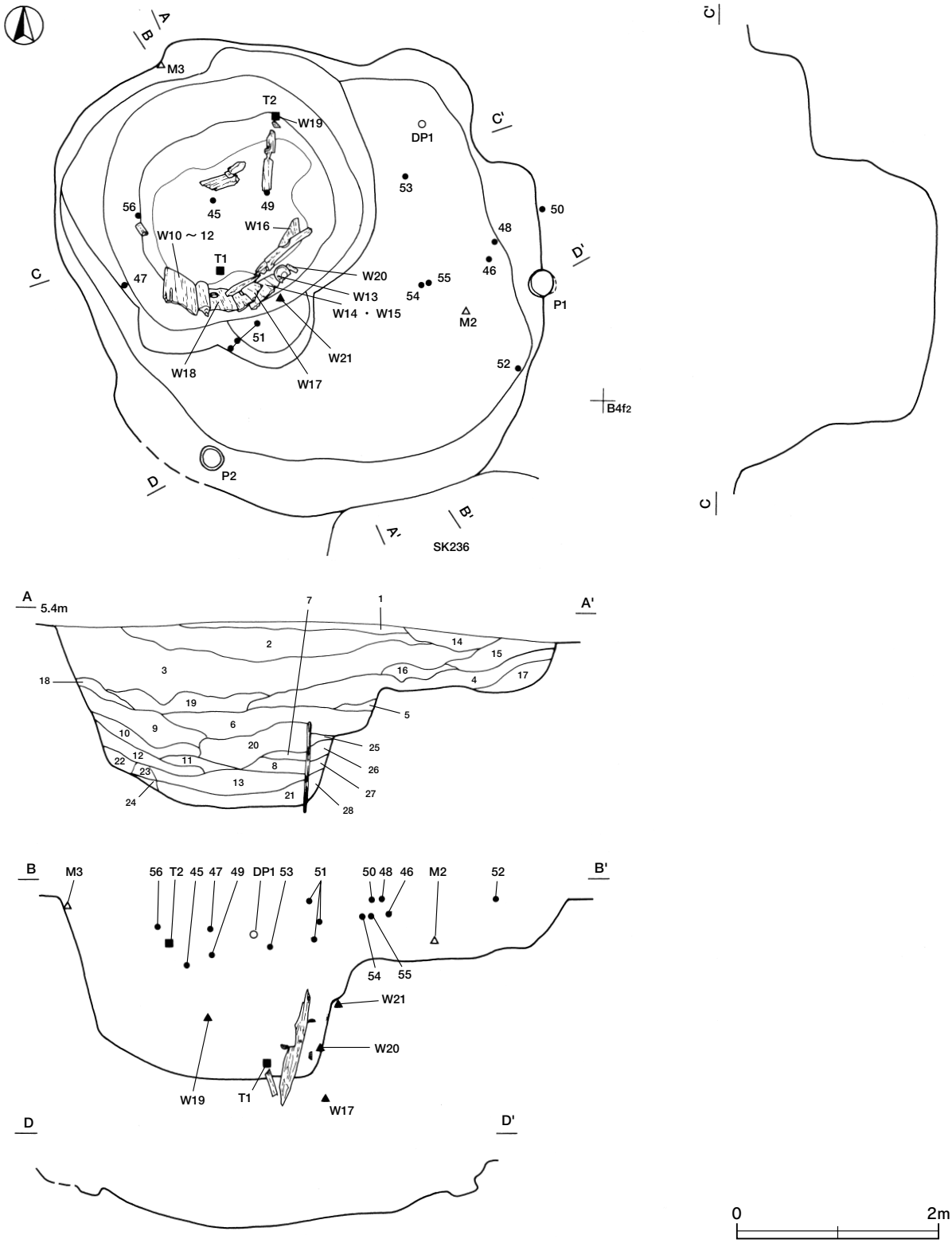
土層解説

1　暗 褐 色　ロームブロック微量
2　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
3　極暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
4　黒 褐 色　炭化粒子・鉄分少量，粘土粒子微量
5　にぶい赤褐色　鉄分中量，粘土粒子少量
6　黒 褐 色　粘土ブロック少量，粘土ブロック・炭化物微量
7　黒 褐 色　粘土ブロック・鉄分微量
8　オリーブ黒色　砂粒・木片少量，鉄分微量
9　暗赤褐色　炭化物・木片・鉄分少量
10　黒 褐 色　粘土粒子・砂粒・木片微量
11　極暗褐色　粘土ブロック中量，砂粒・木片微量
12　黒 褐 色　粘土ブロック中量
13　灰　　色　粘土ブロック多量
14　黒 褐 色　焼土ブロック少量，炭化物微量
15　黒　　色　焼土ブロック・炭化粒子・細礫少量，ローム粒子微量
16　黒 褐 色　焼土ブロック・炭化粒子微量
17　極暗褐色　焼土ブロック・鉄分少量，炭化物・粘土粒子微量
18　黒 褐 色　粘土ブロック中量，鉄分少量
19　暗 褐 色　粘土ブロック少量，炭化物・鉄分微量
20　黒 褐 色　焼土ブロック・炭化物微量
21　黒　　色　砂粒・粘土粒子少量
22　緑 灰 色　粘土粒子多量，鉄分微量
23　黒　　色　粘土ブロック少量，砂粒・木片微量
24　暗緑灰色　粘土粒子中量，砂粒微量
25　オリーブ黒色　砂粒・粘土粒子・鉄分少量，木片微量
26　黒 褐 色　砂粒・粘土粒子微量
27　オリーブ黒色　粘土ブロック・砂粒少量
28　オリーブ黒色　砂粒・粘土粒子少量

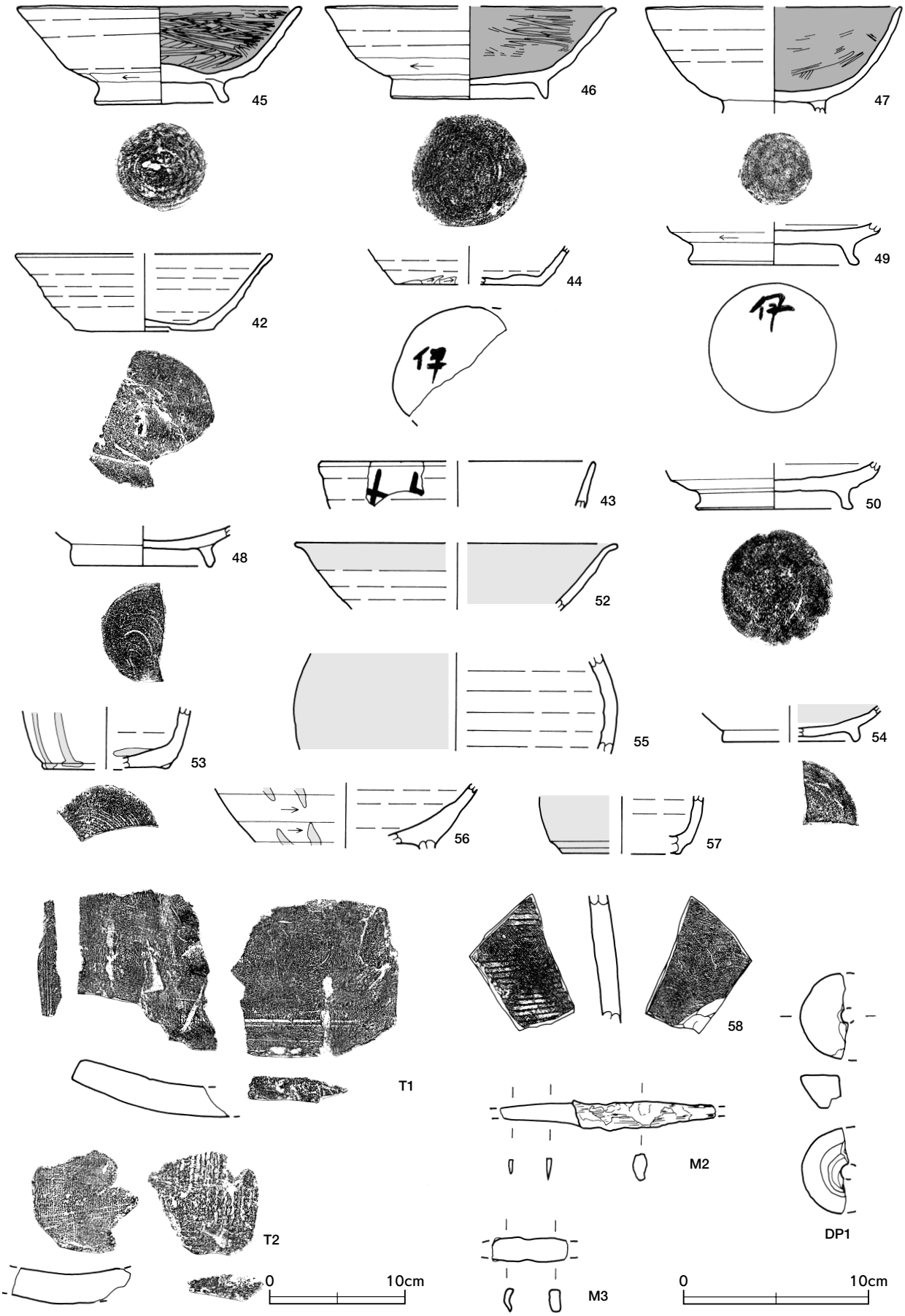
遺物出土状況　土師器片2,162点（坏266，高台付坏50，甕1,846），須恵器片466点（坏161，高台付坏12，蓋50，瓶１，甕242），灰釉陶器片46点，木製品12点（井戸枠10，曲物ヵ２），瓦片25点，土製紡錘車１点，土玉２点，刀子２点，鉄滓35点，馬骨１点，土師質土器片78点が出土している。45は中央部の覆土中層，46は東壁際の覆土上層，43・49は墨書土器で中央部の覆土中層，53～55（灰釉陶器片）は東側の覆土中層から出土している。また，51は覆土の中層と上層から出土した土器片が接合している。覆土の上層部からは中世の土師質土器（皿）

が出土している。

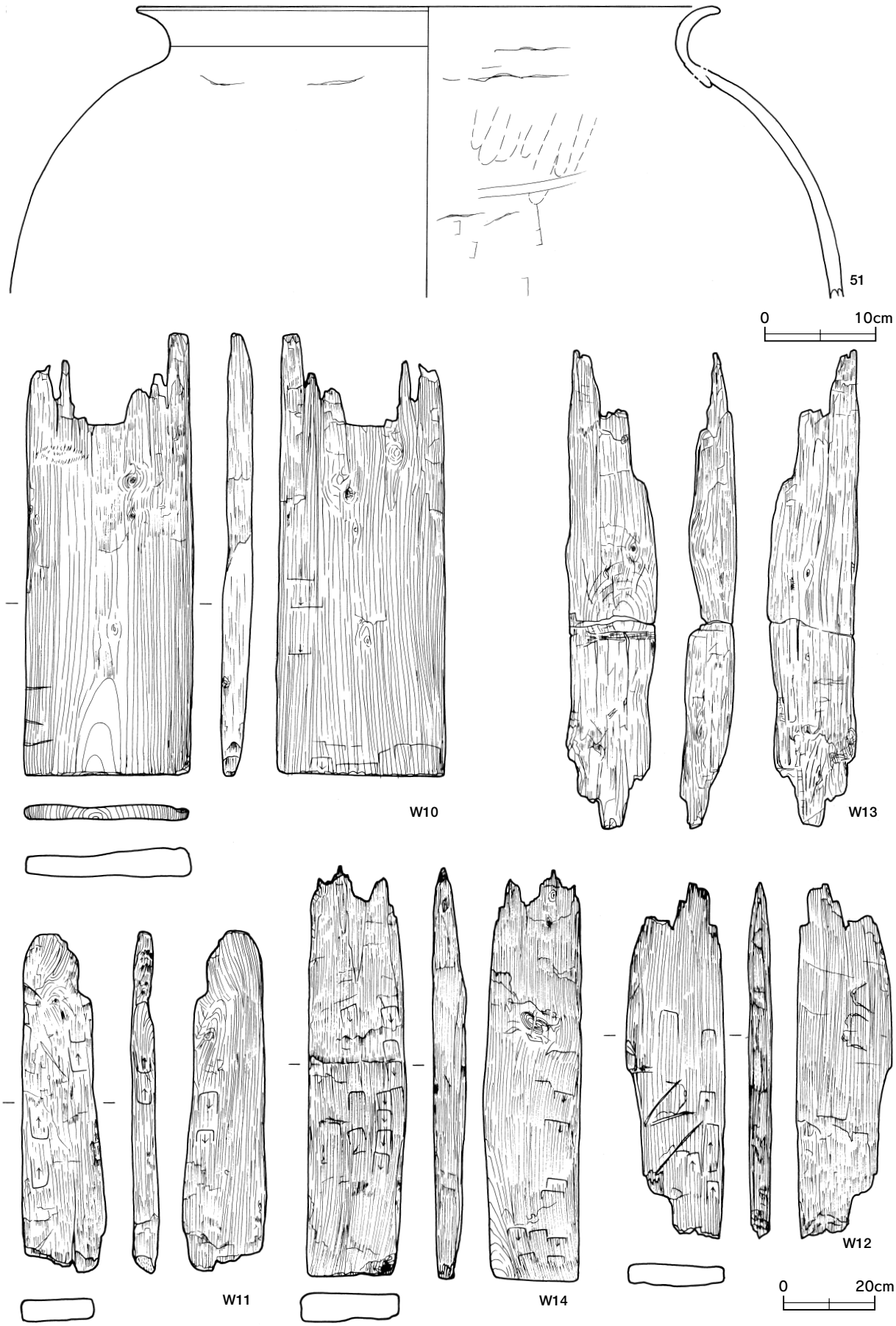
所見　方形に掘り込んだ後，円筒状に掘り込まれており構造的に特徴がある。遺構内にピットも確認されており，上屋構造を持っていた可能性もある。柱に使われた丸材の１本には切れ込みが施され，梯子の形状をしている。時期は，出土した土器片が細片であることから投棄したものと推定され，９世紀後葉には廃絶されたものと考えられる。



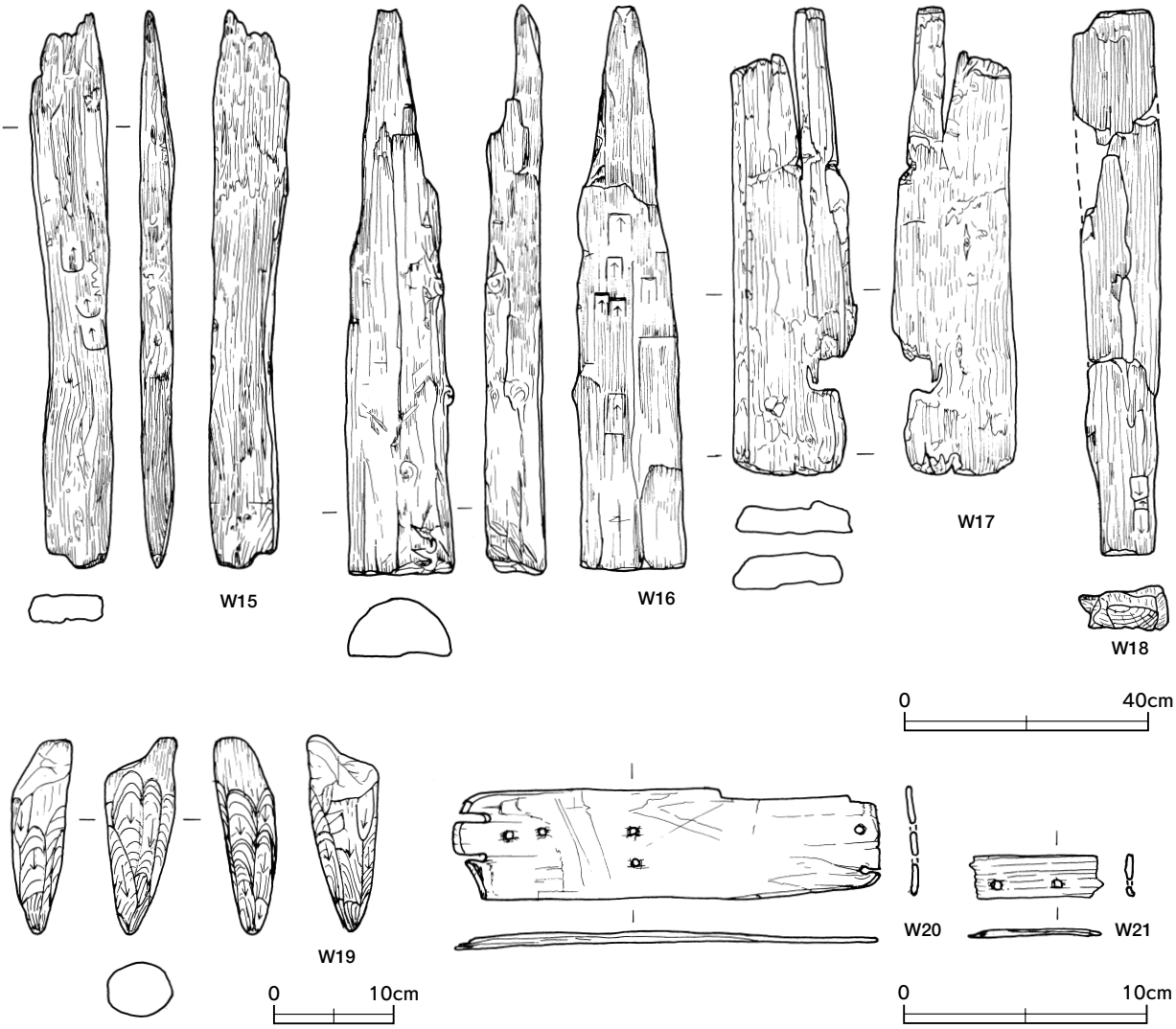
第34図　第２号井戸跡実測図



第35図　第２号井戸跡出土遺物実測図（１）



第36図　第２号井戸跡出土遺物実測図（２）



第37図　第２号井戸跡出土遺物実測図（３）

第２号井戸跡出土遺物観察表（第35～37図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
42	須恵器	坏	［13.7］	5.2	7.5	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り	覆土下層	20%　ＰＬ11
43	須恵器	坏	［14.8］	（2.5）	－	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部内・外面ロクロナデ	中央部覆土中層	体部外面墨書「□□」　ＰＬ16
44	須恵器	坏	－	（2.1）	［8.0］	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外面下端手持ちヘラ削り　底部回転ヘラ切り後　一方向のヘラ削り	覆土下層	10%　底部外面墨書「伊」ＰＬ16
45	土師器	椀	15.3	5.4	6.9	長石・石英・雲母	灰褐	普通	高台貼り付け後体部下端回転ヘラ削り	中央部覆土中層	50%　ＰＬ12
46	土師器	椀	［15.6］	4.9	8.5	長石・石英・雲母	橙	普通	底部ヘラ切り後高台貼り付け　体部外面下端ヘラ削り　内面ヘラ磨き	東壁際上層	50%　ＰＬ12
47	土師器	椀	［13.8］	（5.8）	－	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ロクロナデ　内面ヘラ磨き　底部高台貼り付け	南西壁際上層	40%　ＰＬ12
48	灰釉陶器	碗	－	（2.2）	［7.4］	緻密・白色粒子	褐灰	良好	底部回転糸切り後高台貼り付け	東壁際上層	ＰＬ14
49	須恵器	高台付坏	－	（2.3）	9.0	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	中央部覆土中層	底部外面墨書「伊」　ＰＬ16
50	須恵器	高台付坏	－	（2.5）	8.6	長石・石英・細礫	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	東壁際上層	
51	須恵器	甕	［51.6］	（26.0）	－	長石・石英	灰	普通	体部外面ヘラナデ後一列の叩き　内面ヘラナデ　指頭痕　輪積み痕	中央部上層	
52	灰釉陶器	碗	［17.0］	（3.6）	－	長石・黒色粒子・緻密	灰黄・灰オリーブ	良好	内・外面ロクロナデ　釉は刷毛塗り	南東壁際上層	ＰＬ14
53	灰釉陶器	長頸瓶	－	（3.4）	［6.8］	長石・黒色粒子・緻密	灰白・灰オリーブ	良好	体部内・外面ロクロナデ　底部回転糸切り後高台貼り付け	東側中層	底部内面に降灰による釉 ＰＬ14
54	灰釉陶器	碗	－	（2.0）	［7.2］	白色粒子・緻密	灰白	良好	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け　釉は刷毛塗り	東側覆土中層	底部内面に重ね焼き痕 ＰＬ14
55	灰釉陶器	瓶	－	（5.4）	－	長石・緻密	灰白・灰オリーブ	良好	内・外面ロクロナデ　施釉方法は不明	東側覆土中層	
56	須恵器	瓶	－	（3.5）	－	長石・白色粒子	灰オリーブ	普通	高台貼り付け　体部外面下端ヘラナデ	西側上層	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
57	灰釉陶器	瓶	－	(3.1)	[6.5]	石英・緻密	にぶい黄橙・灰オリーブ	良好	ロクロナデ　施釉方法は不明	覆土中	
58	須恵器	甕	－	(7.4)	－	黒色粒子・緻密	灰白・灰オリーブ	良好	外面平行叩き　内面同心円状の当て具痕	西側上層	外面降灰による釉付着

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
DP1	紡錘車	4.6	(2.5)	1.8	(18.6)	長石・石英・赤色粒子	ナデ　円錐台形　下面凹み	北東部上層	ＰＬ21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M2	刀子	(11.7)	1.6	0.8	(15.7)	鉄	断面三角形　茎部木質遺存	南東部上層	ＰＬ23
M3	刀子	(4.1)	(1.5)	(0.7)	(8.9)	鉄	茎部断面長方形　刀身部の一部遺存	北部上層	ＰＬ23

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
T1	平瓦	(11.3)	(10.8)	(2.1)	(400)	長石・石英・雲母	灰	普通	凹面布目痕　角面取り　凸面・側面ヘラ削り	中央部底面	
T2	平瓦	(7.4)	(7.1)	(2.2)	(179.5)	長石・石英	灰	普通	凹面布目痕　凸面縄目の叩き　側面ヘラ削り	北部覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	特　　徴	出土位置	備　考
W10	板材	(94.6)	35.5	6.0	芯材　表裏面柾目　鑿状工具による削り痕，先端部は薄くなる	中央部	ＰＬ23
W11	板材	72.9	17.9	5.9	芯材　表裏面の木目は柾目　幅4cmの鑿状工具による削り痕	中央部	
W12	板材	(76.3)	25.4	4.9	芯材　表裏面の木目は縦目　幅3.5cmの鑿状工具による削り痕	中央部	
W13	柱材	102.5	19.8	10.2	丸材を半截　表面にＬ字状の切れ込み　梯子の転用ヵ	中央部	
W14	板材	(88.1)	21.0	7.8	芯材　表裏面の木目は柾目　幅3.5cmの鑿状工具による削り痕　先端部は薄くなる	中央部	
W15	板材	(91.5)	13.1	6.0	芯材でやや樹皮側　表裏面に鑿状工具による削り痕　先端部は薄くなる	中央部	
W16	柱材	(93.7)	17.2	9.6	丸材を半截　裏面に斧状工具による削り痕	中央部	
W17	板材	(77.1)	20.2	5.7	芯材でやや樹皮側　表裏面に鑿状工具による削り痕　右木端に枘穴有り	中央部	
W18	板材	(90.0)	14.2	6.7	辺材　表面柾目　裏面板目　鑿状工具による削り痕　先端部は薄くなる	中央部	
W19	杭	(15.8)	(6.0)	(5.1)	丸材　先端部に鉈状工具による削り痕	中央部	
W20	曲物ヵ	(17.4)	4.5	0.3	板目の辺材　８か所穿孔　孔形は円形と四角形の二種類	中央部	
W21	曲物ヵ	(1.8)	(5.6)	0.3	板目の辺材　２か所穿孔　孔形は四角形	中央部	W20と同一個体ヵ

（２）中・近世

第３号井戸跡（第38図）「ＳＫ－３」

位置　調査Ｉ区のB3e5区で，平坦地に位置している。

規模と形状　長径1.18ｍ，短径1.08ｍの円形で，長径方向はＮ－19°－Ｗである。深さは1.87ｍで，円筒状にローム層を掘り抜き，粘土層まで掘り込んでいる。

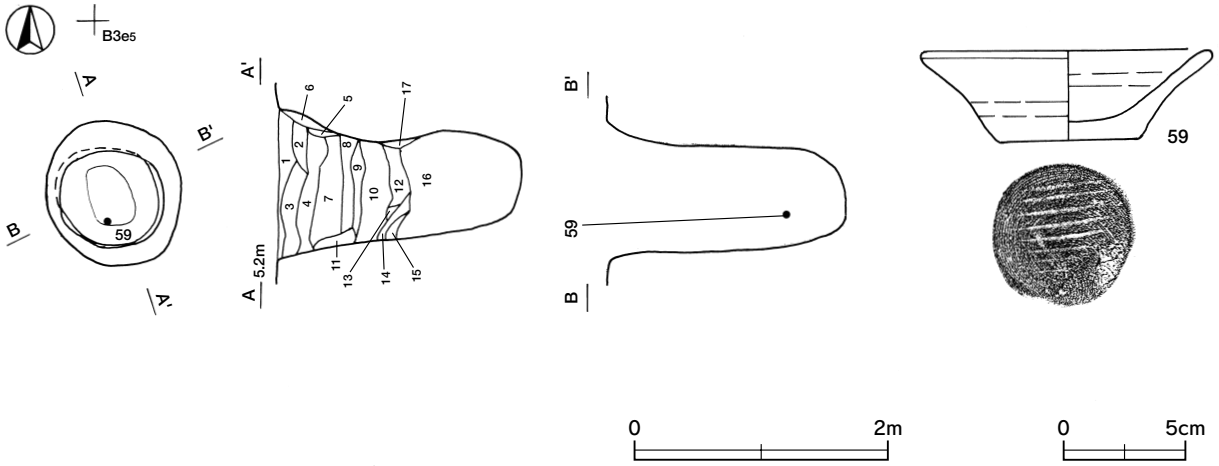
覆土　17層からなる。焼土ブロックや投棄された土器片，木片を含む層があることから，人為堆積である。

土層解説

1　暗 褐 色　ローム粒子微量
2　黒 褐 色　ローム粒子微量
3　黒 褐 色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
4　黒 褐 色　粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量
5　暗 褐 色　ローム粒子・粘土粒子微量
6　暗 褐 色　ローム粒子少量，粘土粒子微量
7　黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量
8　黒 褐 色　ローム粒子微量
9　暗 褐 色　ローム粒子少量
10　黒　　色　ローム粒子微量
11　暗 褐 色　ロームブロック微量
12　黒　　色　粘土粒子微量
13　にぶい褐色　粘土ブロック中量，ローム粒子微量
14　黒 褐 色　ローム粒子少量
15　褐　　色　ローム粒子少量，粘土粒子微量
16　黒 褐 色　粘土ブロック・ローム粒子微量
17　黒 褐 色　粘土ブロック少量，砂粒微量

遺物出土状況　土師器片89点（甕），須恵器片12点（甕），土師質土器片19点（皿１，鍋18），鉄滓２点が出土している。59はやや南側の覆土下層から出土している。

所見　時期は，遺構の形状と土師質土器（小皿・鍋）が出土していることから中世と考えられる。



第38図　第３号井戸跡・出土遺物実測図

第３号井戸跡出土遺物観察表（第38図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
59	土師質土器	小皿	11.3	3.6	5.6	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部内・外面ナデ　底部回転糸切り	南側覆土下層	100%

第４号井戸跡（第39・40図）「ＳＫ－17」

位置　調査Ｉ区のB3a3区で，平坦地に位置している。

重複関係　第18号土坑に掘り込まれている。

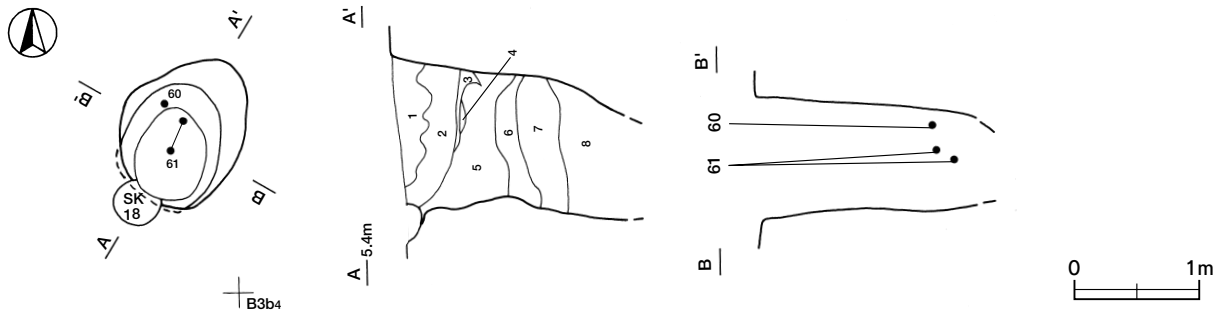
規模と形状　長径1.20m，短径0.87mの楕円形で，長径方向はＮ－35°－Ｅである。深さは1.70m以上である。湧水のため底面まで掘り下げることができなかったが，円筒状にローム層を掘り抜き，粘土層まで掘り込んでいることが確認された。

覆土　８層からなる。焼土ブロックや投棄された土器片を含む層があることから，人為堆積である。

土層解説

1　黒 褐 色　粘土ブロック・砂礫少量，ロームブロック・焼土粒子微量
2　灰 褐 色　砂粒多量，粘土ブロック・細礫微量
3　明 褐 色　砂粒微量
4　にぶい黄橙色　砂粒・鉄分多量，粘土ブロック微量
5　黒 褐 色　粘土ブロック少量，ロームブロック・砂粒微量
6　黒　　色　粘土ブロック・ローム粒子微量
7　黒 褐 色　ロームブロック中量
8　黒　　色　ロームブロック微量

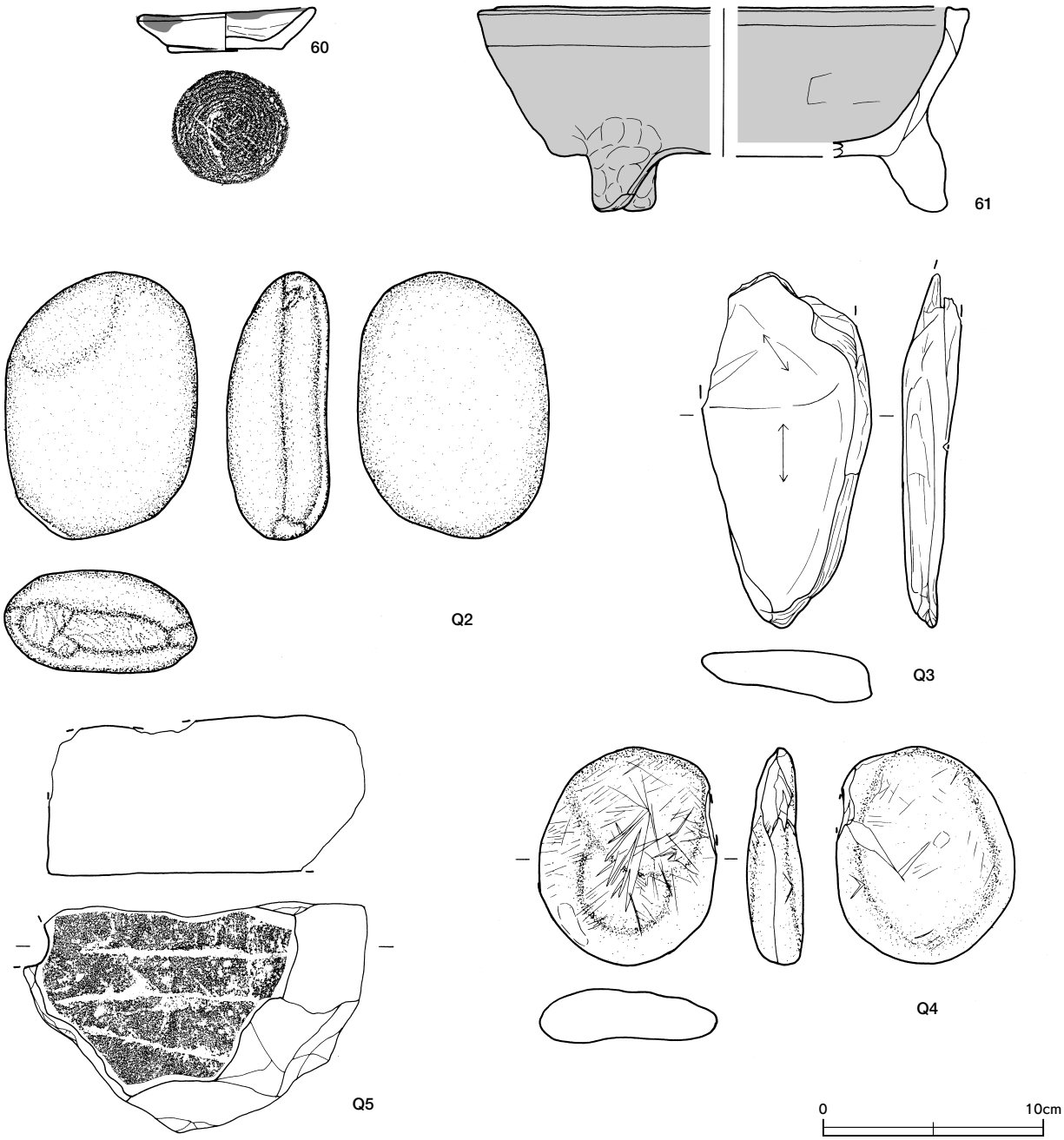
遺物出土状況　土師器片９点（坏４，甕５），須恵器片４点（蓋１，甕３），陶器片３点（常滑），石器・石製



第39図　第４号井戸跡実測図

品24点（磨石15，敲石２，砥石３，臼１，五輪塔３），火熱痕のある石３点が出土している。60は北側，61は北側と中央部の覆土下層，Ｑ２～Ｑ５は覆土下層から出土している。

所見　時期は，遺構の形状と土師質土器（小皿，三足鍋）が出土していることから中世と考えられる。



第40図　第４号井戸跡出土遺物実測図

第４号井戸跡出土遺物観察表（第40図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
60	土師質土器	小皿	7.8	1.9	5.1	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	体部内・外面ナデ　底部糸切り	北側下層	100% 油煙付着 PL11
61	土師質土器	三足鍋	［21.9］	9.2	［15.5］	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ　体部内・外面ナデ 脚部貼り付け　指頭痕	北側・中央部下層	10% 煤付着

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q２	磨石	12.0	8.6	4.6	710	安山岩	両面・両端部使用	覆土下層	
Q３	砥石	(16.0)	7.6	2.3	(320)	粘板岩	砥面１面２方向に使用	覆土下層	
Q４	砥石	9.7	8.0	2.4	(270)	安山岩	磨石からの転用　１面に刃物状の研ぎ痕	覆土下層	
Q５	臼	－	(15.3)	7.1	(1,250)	花崗岩	上臼　放射状の擂目　中央部に芯穴有り	覆土下層	

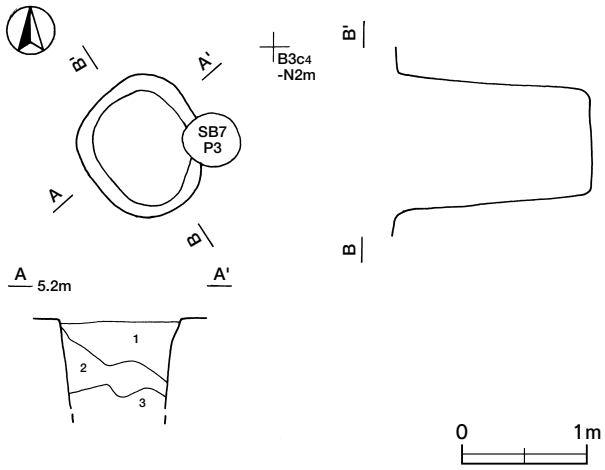
第５号井戸跡（第41図）「ＳＫ－30」

位置　調査Ｉ区のB3b3区で，平坦地に位置している。

重複関係　第７号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状　長径1.12ｍ，短径0.94ｍの楕円形で，長径方向はＮ－８°－Ｅである。深さは1.51ｍで円筒状にローム層を掘り抜き，粘土層まで掘り込んでいる。

覆土　崩落したため３層だけ確認された。ロームブロックや焼土ブロックを含む層があることから，人為堆積である。



第41図　第５号井戸跡実測図

土層解説

1　黒 褐 色　粘土ブロック少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　　色　ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子微量
3　黒 褐 色　焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子微量

遺物出土状況　細片のため図示できないが，土師器片３点（甕），須恵器片３点（甕），土師質土器片５点（皿２，鍋３），常滑片１点（甕）が出土している。

所見　遺構の形状と土師質土器片及び常滑片が出土していることから，廃絶時期は中世と考えられる。

第６号井戸跡（第42図）「ＳＫ－50」

位置　調査Ｉ区B3b4区に位置し，平坦地に立地している。

規模と形状　長径0.88ｍ，短径0.84ｍの円形で，長径方向はＮ－41°－Ｗである。0.90ｍまで掘り下げたが，湧水のため底面まで掘り下げることができなかった。円筒状にローム層を掘り抜き，粘土層まで掘り込んでいることが確認された。

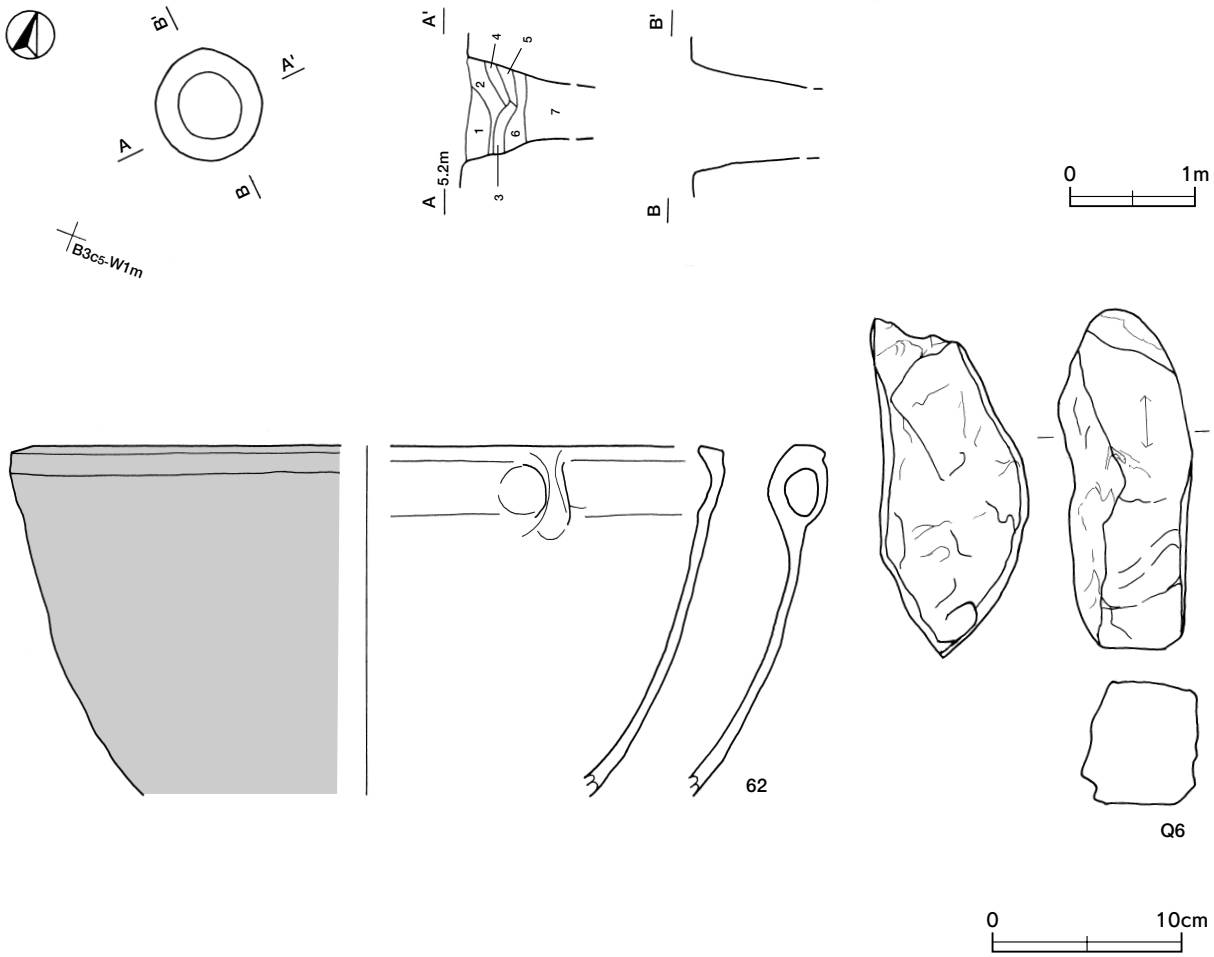
覆土　７層だけ確認された。焼土ブロックや粘土ブロック，投棄された遺物を含む層が存在していることから，人為堆積である。

土層解説

1　黒 褐 色　粘土ブロック中量，ロームブロック少量，焼土粒子微量
2　黒 褐 色　焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子微量
3　暗 褐 色　ローム粒子少量
4　黒 褐 色　ローム粒子少量
5　黒 褐 色　ローム粒子微量
6　黒 褐 色　ロームブロック・粘土ブロック微量
7　黒 褐 色　粘土ブロック少量

遺物出土状況　須恵器片１（甕），土師質土器片34点（内耳鍋），砥石１点，礫４点が出土している。62とＱ６は覆土中から出土している。

所見　廃絶時期は，遺構の形状と土師質土器（内耳鍋）が出土していることから中世後半と考えられる。



第42図　第６号井戸跡・出土遺物実測図

第６号井戸跡出土遺物観察表（第42図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
62	土師質土器	内耳鍋	［35.2］	（18.4）	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ　体部内・外面ナデ　内耳１か所遺存	覆土中	外面煤付着

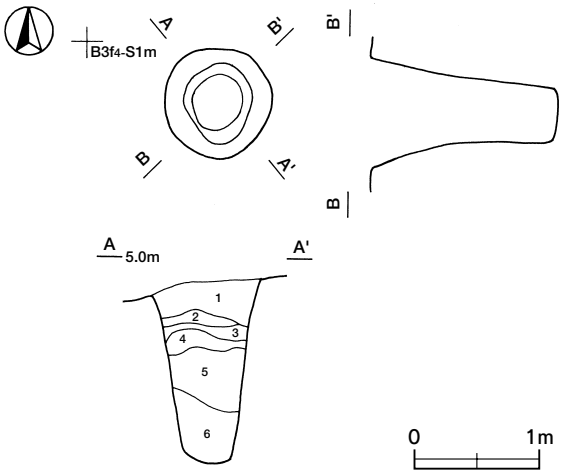
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Ｑ６	砥石	18.1	6.9	8.0	1,190	凝灰岩	砥面１面	覆土中	

第７号井戸跡（第43図）「ＳＫ－176」

位置　調査Ⅰ区のB3f4区で，平坦地に位置している。

規模と形状　長径0.87ｍ，短径0.81ｍの円形で，長径方向はＮ－11°－Ｗである。深さは1.46ｍで，円筒状にローム層を掘り抜き，粘土層まで掘り込んでいる。

覆土　６層からなる。各層に粘土ブロックが含まれ，不自然な堆積状態であることから，人為堆積である。



第43図　第７号井戸跡実測図

土層解説

1　黒 褐 色　焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子微量
2　黒 褐 色　粘土ブロック少量，ロームブロック・炭化粒子微量
3　黒 褐 色　粘土ブロック中量
4　黒 褐 色　粘土ブロック少量，ロームブロック微量
5　黒 褐 色　粘土ブロック中量，ロームブロック微量
6　極暗褐色　粘土ブロック微量

遺物出土状況　細片のため図示できないが，土師器片79点（甕・甑），須恵器片14点（甕），土師質土器片５点（鍋３，擂鉢２），土玉１点，鉄滓１点，礫６点が出土している。

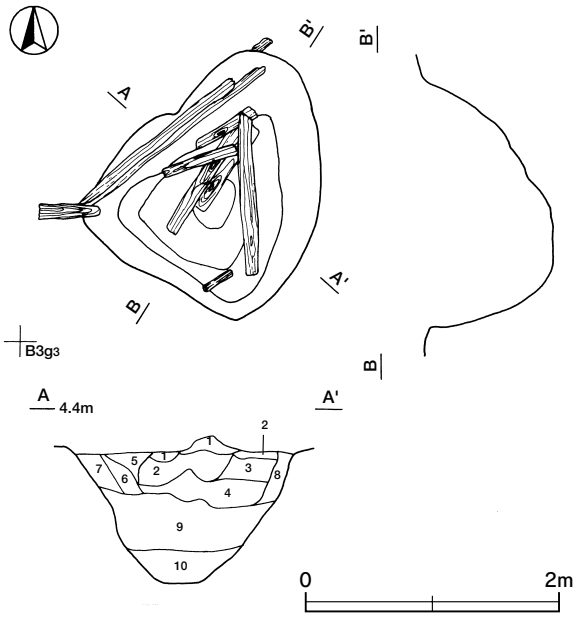
所見　廃絶時期は，遺構の形状と土師質土器（鍋，擂鉢）が出土していることから中世後半と考えられる。

第８号井戸跡（第44図）「ＳＫ－235」

位置　調査Ｉ区のB3f3区で，平坦地に位置している。

規模と形状　長径1.97ｍ，短径1.68ｍの不定形で，長径方向はＮ－30°－Ｅである。深さは1.03ｍで，断面Ｕ字状に掘り込まれている。また，北側で枠の一部が検出された。

覆土　10層からなる。第９・10層は自然堆積であるが，第１～８層は不自然な堆積状態を示し，ブロック状の粘土が含まれていることから，人為堆積である。



第44図　第８号井戸跡実測図

土層解説

1　灰 褐 色　鉄分少量，ロームブロック・砂粒微量
2　灰 褐 色　砂粒・鉄分少量
3　褐 灰 色　砂粒中量，鉄分少量，粘土ブロック微量
4　褐 灰 色　砂粒・鉄分中量，粘土ブロック微量
5　褐 灰 色　粘土ブロック・砂粒・鉄分微量
6　灰　　色　砂粒・鉄分少量，粘土ブロック微量
7　灰　　色　砂粒少量
8　黒 褐 色　砂粒・鉄分少量
9　灰　　色　砂粒少量，粘土ブロック微量
10　灰　　色　砂粒多量

遺物出土状況　細片のため図示できないが，磁器片４点（碗２，皿１，徳利１），木製品（枠）が出土している。

所見　木板で枠が組まれている。枠に使用された木材は，径20㎝ほどの丸材の外側の部位が使用されている。板の厚さは２～４㎝ほどで，片側だけ鋸状の工具により加工されている。丸材の外側を切り落とした廃材を利用したものと考えられる。廃絶時期は，出土遺物から近代以降と考えられる。

表４　井戸跡一覧表

番号	位　置	長径方向	平面形	規　　模		壁面	底面	覆土	出　土　遺　物	備　考
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(m)					(時　期)
1	B2f9	N―48°―W	楕円形	1.20×1.10	1.5	外傾	皿状	人為	土師器片，須恵器片，灰釉陶器片(皿)，木製品(杭，枠)	９世紀後葉
2	B4e1	N―47°―W	方形 円形	5.23×5.04 2.60×1.50	0.64 1.50	外傾	平坦	人為	土師器片，須恵器片，灰釉陶器片，木製品(枠，札ヵ)，土製品(紡錘車，土玉)，刀子，馬骨	９世紀後葉
3	B3e5	－	円形	1.18×1.08	1.87	垂直	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片(皿，鍋)，鉄滓	中世
4	B3b4	N―35°―E	楕円形	1.20×0.87	1.70以上	垂直	－	人為	土師器片，須恵器片，陶器片(常滑)，石器・石製品(磨石，敲石，砥石，臼，五輪塔)	中世
5	B3c4	N―35°―E	楕円形	1.12×0.94	1.51	垂直	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片(皿，鍋)，常滑片	中世
6	B3b4	－	円形	0.88×0.84	0.90以上	垂直	平坦	人為	須恵器片，土師質土器片(内耳鍋)	中世後半
7	B3f4	－	円形	0.87×0.81	1.46	垂直	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片(鍋，擂鉢)	中世後半
8	B3f3	N－30°―E	不定形	1.79×1.68	1.03	外傾	皿状	人為	磁器片(碗，皿，徳利)，木枠	近代以降

４　水田跡

調査Ⅲ区では，古代から近代まで利用されていたと考えられる水田跡が確認された。以下，遺構及び遺物について記述する。

（１）概要

当遺跡の中で，外城遺跡と三面寺遺跡の間の谷地部分は遺跡として周知されていなかったが，試掘調査により集落跡及び水田跡が検出された。

検出された水田跡は２面あり，第一次面は現代の水田耕作土の直下，第二次面は第一次面の直下で検出されている。

第一次面の水田跡の遺存状態は，耕作による影響を受けて良好ではない。調査により確認された水田の区画は４区画である。畦は，現代の耕作により撹拌され確認することができなかったが，水田への取配水路が確認された。水田面の標高は，4.0～4.5mである。北から南に緩やかに傾斜している。

第二次面の水田跡の遺存状態は，第一次面同様，撹拌を受け良好ではない。確認された水田の区画は６区画である。検出された畦は，第一次面の耕作により撹乱されており，ほとんど残っていない。残存していた畦の一部は，高さが0.5～1.0㎝で判断しにくい状況であった。水田面の標高は，3.6～4.4mで北から南に向かって緩やかに傾斜している。

第三次面では水田跡を検出することができなかったが，土壌分析の結果によると「イネ属の植物珪酸体だけでなく，籾に形成される穎珪酸体も検出されており，イネ属植物珪酸体の含有率は，現代の水田耕土と同等もしくはそれ以上混入していると思われる」とある。また，「土層断面にも大きな変化が見られ，水田耕作に伴う土地改変などが行われたことも考えられる」と報告されており，第三次面にも水田跡があったと考えられる。以上のことから，古代に開墾されてから現代に至るまで水田として利用されてきたことをうかがい知ることができる。

（２）試掘調査の概略と水田跡の堆積土

ア　試掘調査

試掘調査は，調査の経過で記述したように平成11年２月８日～３月３日，平成12年３月９日～10日，９月20日に実施した。試掘の結果，台地部分で集落跡，谷地部分では遺物包含層が確認された。その後，

平成16年１月に谷地部で幅１ｍの試掘坑を南北方向に１か所，東西方向に２か所設定して遺構の有無を確認した。

その結果，谷地部において，ほぼ全面で水田跡と遺物包含層（奈良時代～平安時代，縄文時代）を確認することができた。

イ　基本土層（付図）

水田跡での堆積土は，現地表面から８層の堆積層がみられる。第１～３層までは現在の水田耕作土で，耕作土，田床土等に分層できる。第４層上面が第一次面，第５層上面が第二次面，第６～８層は第三次面である。

土層解説（各層共通）

1　にぶい黄色　稲根中量，藻少量
2　暗オリーブ褐色　稲根少量
3　暗 褐 色　砂粒・鉄分・稲根少量
4　暗 褐 色　鉄分中量，稲根少量
5　灰黄褐色　鉄分中量，ロームブロック・炭化物・細礫・貝殻微量
6　黒 褐 色　鉄分少量，細礫微量
7　黒 褐 色　鉄分少量，砂粒・木片微量
8　黒 褐 色　炭化物・粘土粒子・鉄分・木片微量
9　オリーブ褐色　焼土粒子・砂粒・粘土粒子少量，鉄分微量
10　黒 褐 色　木片多量，砂粒中量，焼土粒子・粘土粒子微量
11　灰オリーブ色　砂粒・木片少量
12　極暗赤褐色　木片中量，砂粒少量，粘土粒子・鉄分微量
13　暗赤褐色　木片少量，砂粒・粘土粒子微量
14　オリーブ黒色　粘土粒子・砂粒少量，木片微量
15　オリーブ褐色　砂粒多量，粘土粒子微量
16　にぶい黄褐色　砂粒中量，細礫少量
17　灰　　色　粘土粒子多量，鉄分・木片少量
18　黒 褐 色　砂粒中量，粘土粒子少量，木片微量
19　灰 褐 色　鉄分少量，細礫・木片微量
20　極暗褐色　砂粒・粘土粒子・鉄分・細礫少量
21　黒 褐 色　鉄分・細礫少量，砂粒微量
22　黄 褐 色　砂粒・鉄分中量，粘土粒子少量
23　黒 褐 色　木片少量，砂粒微量
24　褐　　色　ローム粒子・砂粒中量，炭化粒子微量
25　にぶい黄色　砂質粘土粒子多量，鉄分少量
26　暗 褐 色　鉄分少量，稲根微量
27　黒　　色　粘土粒子・木片少量
28　黒 褐 色　砂粒・粘土粒子少量，鉄分・組礫微量
29　灰　　色　砂粒中量，粘土粒子少量
30　オリーブ褐色　砂粒多量，細礫微量
31　褐 灰 色　粘土粒子中量，砂粒・鉄分少量
32　明青灰色　粘土粒子多量，砂粒中量，黒色土粒子微量
33　オリーブ黒色　砂粒多量，粘土粒子中量，細礫微量
34　オリーブ黄色　細礫中量，砂粒少量
35　褐　　色　稲根・藻少量
36　暗 褐 色　藻微量
37　黒 褐 色　藻・鉄分微量

（３）第一次面水田跡「ＰＦ－１～４」（第45・46・55～58・付図）

a　被覆土と水田の残存状態

遺跡の周辺は，現在も水田地帯になっている。基本土層をみると，現代の耕作による撹拌により畦などの高まりは確認できない。

耕作土面もその影響を受けており，床土部分が残っているだけであるが，水田跡に伴うと考えられる溝跡が，北西部で３条（第７・８・９号溝跡），東部で３条（第４・５・20号溝跡）検出された。

第４・５・20号溝跡は東側台地の裾部に沿っている。これらの溝跡の北東側台地裾部には，現在も水路が機能していることから，第４・５・20号溝跡も台地裾部に沿って流れていた水路であった可能性が考えられる。

検出された６条の溝跡の軸線は南北を指しているが，第７号溝跡は東西に走行している。調査区の中央部は耕作による撹拌の影響が大きく，溝跡も確認できなかったが，第７号溝跡が直線的に延びていたものと推定される。さらに，第７号溝跡は第４・５・20号溝跡に接続すると考えられ，西側への水の取配水路として機能していたものと考えられる。

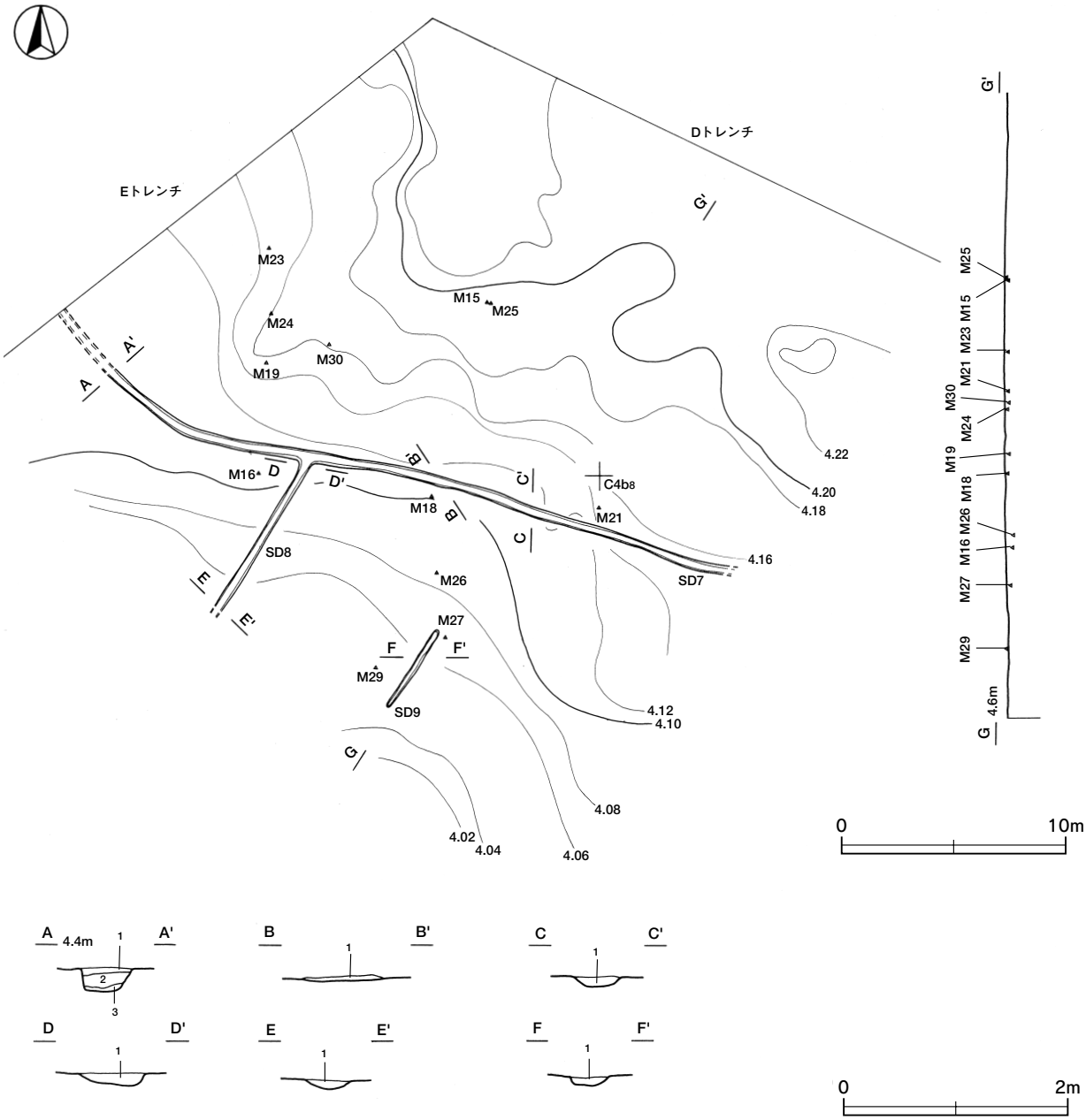
第８号溝跡は，第７号溝跡とＴ字に直交している。第９号溝跡は一部のみしか確認できなかったが，第８号溝跡の東側を平行するように延びており，第７号溝跡に接続していたと推定される。

この第７・８・９号溝跡は，水田を区画していた畦沿いに設けられていたと考えられることから，第７号溝跡が水田面を南北に区画し，第８・９号溝跡が東西を区画することにより，第一次調査面には４

区画の水田跡があったと推定される。

b　区画

水田を区画する畦は，確認できなかったが，畦沿いに設けられていたと考えられる溝跡（第７・８・９号）が確認された。



第45図　水田一次面①　第７・８・９号溝跡実測図

第７号溝跡（第45図・付図）

位置　調査Ⅲ区のB4j2～C4c9区で，東西の台地裾部に挟まれた谷地部に位置している。

規模と形状　上幅0.35～1.0m，下幅0.25～0.6m，深さ10～40㎝で，ほぼ直線的に延びている。長さは29.0mが確認され，東から西にかけて低くなっている。東西の比高は11㎝である。

覆土　３層に分層される。黒色土ブロックの混入が認められることから人為堆積である。

土層解説
１　灰 褐 色　鉄分中量，黒色土ブロック少量，砂粒微量　　３　黒　　色　鉄分・細礫微量
２　灰黄褐色　鉄分少量，黒色土ブロック少量，細礫・砂粒微量

出土遺物　細片のため図示できないが，土師器片39点（甕・甑），須恵器片14点（坏２，蓋１，甕・甑11），磁器片１点（碗）が出土している。

第８号溝跡（第45図・付図）

位置　調査Ⅲ区のC4a4～C4c3区で，西側の台地裾部に沿って位置している。

規模と形状　上幅0.4～0.8ｍ，下幅0.2～0.5ｍ，深さ７～12㎝で，直線的に延びている。長さは7.5ｍが確認され，北から南にかけて低くなっている。南北の比高は４㎝である。

覆土　単一層である。薄いため，堆積状況は不明である。

土層解説
１　黒 褐 色　鉄分中量，炭化物微量

第９号溝跡（第45図・付図）

位置　調査Ⅲ区のC4c6～C4d5区で，谷地中央部の緩やかな斜面に位置している。

規模と形状　上幅0.3ｍ，下幅0.2ｍ，深さ５～10㎝で，直線的に延びている。確認された長さは4.5ｍで，北から南にかけて低くなっている。南北の比高は８㎝である。

覆土　単一層である。薄いため，堆積状況は不明である。

土層解説
１　灰 褐 色　鉄分中量，砂粒微量

出土遺物　細片のため図示できないが，土師器片４点（甕・甑），須恵器片８点（坏７，高台付坏１），土師質土器片13点（鍋）が出土している。

c　取配水方法

水田への取水は，東側の台地裾部に沿って北から南西方向に走行する第４・５・20号溝跡から第７・８・９号溝跡へ配水され，第１～４号水田跡の区画に配水されたと推測することができる。また，第４・５・20号溝跡は，第297号土抗につながっており，水田への水量調節を行っていた可能性も考えられる。水口については確認されていない。

第４号溝跡（第46図・付図）

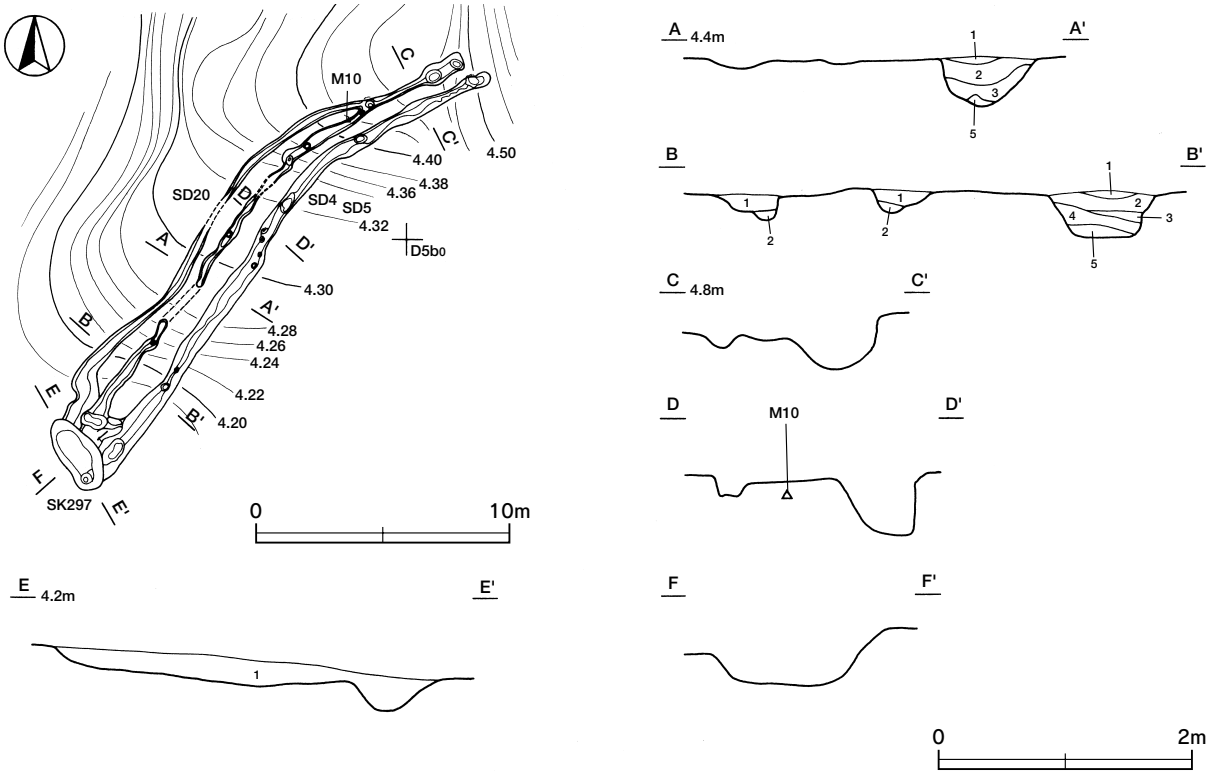
位置　調査Ⅲ区のC5j0～D5d7区で，東側の台地裾部に沿って北東から南に走行している。

重複関係　第20号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状　上幅0.25～0.5ｍ，下幅0.1～0.4ｍ，深さ10～20㎝で，弓状に延びている。確認された長さは23.0ｍで，北東から南にかけて低くなっている。南北の比高は65㎝である。

覆土　２層に分層される。各層に土器片を含み，ほぼ水平に堆積していることから人為堆積である。

土層解説
１　暗オリーブ褐色　砂粒多量，ローム粒子微量　　２　暗オリーブ褐色　砂粒多量，細礫少量



第46図　水田一次面②　第４・５・20号溝跡，第297号土坑実測図

出土遺物　土師器片29点（坏７，椀１，甕・甑21），須恵器片29点（坏５，高台付坏４，蓋５，甕・甑15），陶磁器片166点（碗・皿165，蓋１），土師質土器片55点（小皿10，鍋44，鉢１），瓦質土器片４点（鉢），土玉１点，石器２点（砥石，磨石），金属製品２点（楔，切羽），瓦片20点が出土している。M10は中央部の底面，74～79は覆土中から出土している。

第５号溝跡（第46図・付図）

位置　調査Ⅲ区のC5j0～D5d7区で，東側の台地裾部に沿って北東から南に走行している。

規模と形状　上幅0.4～1.05m，下幅0.2～0.45m，深さ35～45㎝で，弓状に延びている。確認された長さは25.0mで，北東から南に向けて低くなっている。南北の比高は34㎝である。

覆土　５層に分層される。各層に土器片を含み，ほぼ水平に堆積していることから人為堆積である。

土層解説

1　暗 褐 色　砂粒中量，鉄分少量
2　黒 褐 色　鉄分少量，ローム粒子・砂粒微量
3　暗 褐 色　砂粒多量
4　暗 褐 色　砂粒中量，ローム粒子・炭化粒子微量
5　灰オリーブ色　粘土ブロック多量

出土遺物　土師器片114点（坏14，甕・甑100），須恵器片24点（高台付坏４，高盤１，瓶１，鉢１，甕・甑17），陶磁器片13点（碗９，皿４），土師質土器片１点（内耳鍋），瓦質土器片１点（鉢），瓦片８点，鉄滓２点，古銭１点，砥石１点が出土している。80・81は覆土中から，M12は中央部の底面から出土している。

第20号溝跡（第46図・付図）

位置　調査Ⅲ区のC5j9～D5c6区で，東側の台地裾部に沿って北東から南に走行している。

重複関係　第４号溝跡に掘り込まれている。

規模と形状　上幅0.2～0.6m，下幅0.15～0.25m，深さ８～25㎝で，弓状に延びている。確認された長さは18.0mで，北東から南にかけて低くなっている。南北の比高は63㎝である。

覆土　２層に分層される。各層に土器片を含み，ほぼ平行に堆積していることから人為堆積である。

土層解説
１　暗 褐 色　ローム粒子・砂粒微量　　２　灰黄褐色　砂粒多量

出土遺物　細片のため図示できないが，土師器片22点（坏２，甕・甑20），須恵器片10点（蓋１，甕・甑９），常滑片４点（甕）が出土している。

第297号土坑（第46図・付図）

位置　調査Ⅲ区のD5d6区で，東側の台地裾部に位置している。

規模と形状　長径3.10m，短径1.40mの楕円形を呈し，深さは50㎝である。長径方向はＮ－55°－Ｗである。

覆土　単一層である。黒色土ブロックを含んでいることから人為堆積である。

土層解説
１　暗 褐 色　黒色土ブロック・砂粒少量

d　水田面からの出土遺物

土師器片1,742点（坏280，椀16，甕・甑1,446），須恵器片919点（坏323，高台付坏61，蓋68，盤４，甕・甑463），土師質土器片143点（内耳鍋55，皿81，鉢７），陶磁器片199点，古銭12点，金属製品３点（煙管１，切羽１，蹄鉄１）が出土している。M15～30は水田面，74・75・77～79は第４号溝跡の覆土中，80・81は第５号溝跡の覆土中から出土している。

e　所見

現代の水田耕作による撹拌のため水田面の広がりや区画の規格性は不明である。しかしながら，水田区画については，谷地の緩斜面を利用した取配水を優先する区割りがなされていたと考えられる。時期は出土遺物から江戸時代から明治時代と考えられる。

（４）第二次調査面水田跡「ＰＦ－５～10」（第47～49・52～57図・付図）

a　被覆土と水田の残存状態

第一次面直下で，基本土層の第５層に相当する。第一次面水田の耕作等による影響を受けて，耕作土面は遺存していないが，作業道を兼ねたと考えられる大畦と部分的ではあるが，水田を区画するクロ的な畦が確認された。

大畦は調査区域の南部に位置し，東側台地の裾部から西に延びている。大畦の南側には，杭列（第１号杭列）が検出された。この杭列は大畦の土止めに使われたものと考えられる。大畦の最大幅は，1.6mあることから作業道を兼ねた畦と推定される。この大畦は東西方向に走っていることから，大畦を境にして南北に水田が広がっていたと考えられる。

東西を区画するクロ的な畦は検出されなかった。しかし，床土と思われる面には鉄分が酸化して赤褐色に変化した部分と，黒色のまま酸化反応を示さない部分があり，黒色部は帯状に延びていることが確認された。植物の根周辺には鉄分が集まり，その鉄分が酸化して赤褐色に変化する現象がある。調査域に見られた赤褐色の広がりも同じ現象によるものと考えられ，多量の鉄分が含まれていると考えられることから植物の群生が想定される。その反面，黒色の部分には鉄分が少なく植物の不毛帯であったと考えられる。黒色の部分は直線的に帯状を呈していることから，区画のためのクロ跡と推定される。黒色帯は，大畦から北方向に２本，南方向に１本確認されたことにより，北側には３区画（第５～７号水田跡），南側には２区画（第９・10号水田跡）の水田があったと考えられる。また，調査区の北東部ではＬ字状に構築された畦が確認され，１区画の水田があったと考えられ，第二次面では６区画の水田があったと考えられる。

第二次面の水田に伴う溝は，東側台地の裾部に沿って３条（第13・18・19号溝跡）検出された。いずれも第８号水田跡の東側の畦と軸線を共にしており，取配水路として機能していたものと考えられる。また，第19号溝跡の東には杭列（第２号杭列）が確認された。東側の台地に面していることから，取配水路の埋没防止に使われたことが推定される。

b　区画

第８号水田跡で畦が，第５～７，９・10号水田跡で，作業道を兼ねるような大畦が確認され，６区画の水田があったと考えられる。また，大畦の南側と東側には，土止めに用いられた杭列が確認されている。

大畦（第47図・付図）

位置　調査Ⅲ区のC3c9～D5b3区で，東西の台地裾部に挟まれた谷地部に位置している。

規模　高さ0.01～0.35m，幅0.3～1.6mで，長さ69.5mが確認された。

覆土　８層に分層される。粘土とローム土で版築されており，突き固められている。

土層解説（各土層共通）

1　暗 褐 色　ローム粒子・黒色土粒子微量
2　黒 褐 色　黒色土粒子中量，鉄分少量
3　黒 褐 色　粘土粒子・黒色土粒子・鉄分微量
4　黒 褐 色　粘土ブロック少量，黒色土粒子微量
5　暗赤褐色　粘土ブロック多量，黒色土粒子少量，砂粒微量
6　黒 褐 色　粘土ブロック中量，黒色土粒子少量，砂粒微量
7　黒 褐 色　粘土ブロック中量，黒色土粒子・砂粒少量
8　極暗褐色　粘土ブロック・黒色土粒子・鉄分少量，砂粒微量

第１号杭列跡「ＳＡ－３」（第47・49・52～54図・付図）

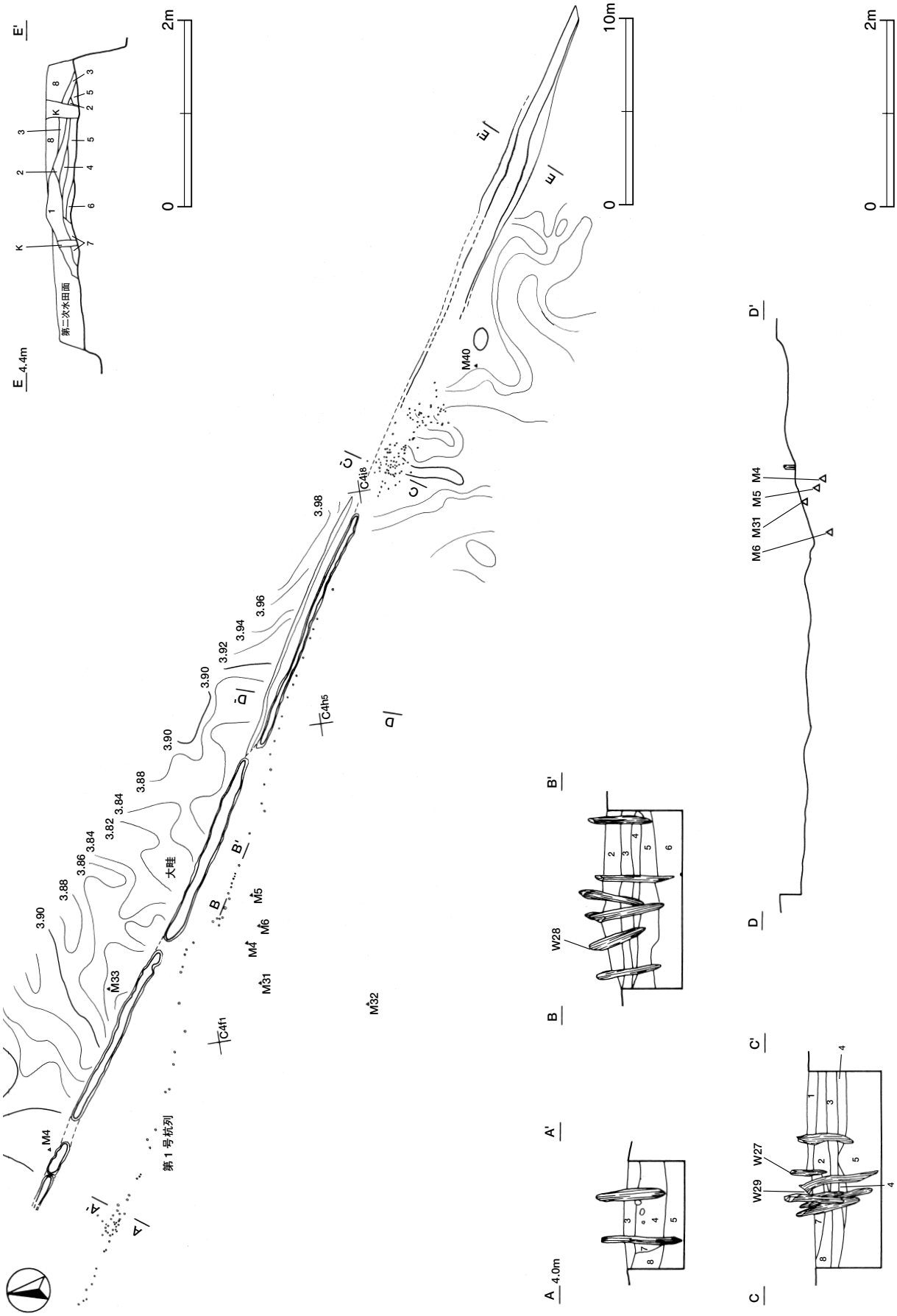
位置　調査Ⅲ区のC3c7～C4i8区で，東西の台地裾部に挟まれた谷地部に位置している。

規模　径５～10㎝の丸杭が，東西46mにわたって確認された。杭間は0.15～1.5mほどの間隔で不規則に並んでいる。また，C3d8区では部分的に２列に並び，C4i8区では乱立していて不規則である。

土層断面　８層に分層される。鉈状の工具で尖らせた丸杭を直接打ち込み，杭の先端は砂質粘土層まで達している。

土層解説（各土層共通）第１～６層はそれぞれ基本土層の第６・７・８・22・28・33層に相当する。

1　黒 褐 色　鉄分少量，細礫微量
2　黒 褐 色　鉄分少量，砂粒・木片微量
3　黒 褐 色　炭化物・粘土粒子・鉄分・木片微量
4　黄 褐 色　砂粒・鉄分中量，粘土粒子少量
5　黒 褐 色　砂粒・粘土粒子少量，鉄分・細礫微量
6　ｵﾘｰﾌﾞ黒色　砂粒多量，粘土粒子中量，細礫少量
7　黒 褐 色　砂粒・粘土粒子・鉄分微量
8　褐　　色　鉄分・細礫微量



第47図　水田二次面①　大畦，第１号杭列跡実測図

出土遺物　土師器片141点（坏21，椀１，甕・甑119），須恵器片133点（坏17，高台付坏24，盤９，甕・甑83），常滑片16点（甕），古瀬戸片５点（瓶），土師質土器片46点（皿12，内耳鍋32，鉢２），石製品27点（五輪塔25，宝篋院塔２），古銭３点，煙管３点，木杭257点，鉄滓５点，土玉１点が出土している。63～66，Ｑ７～15は大畦の中央部よりやや東側で，土止めの杭列の間から出土している。大畦の沈下防止に補強材として用いられたと考えられる。

第２号杭列跡「ＳＡ－４」（第48・54図・付図）

位置　調査Ⅲ区のC5j9～D5b7区で，東側台地裾部の緩斜面部に位置している

規模　径５～10㎝の杭が，北東から南西の20ｍにわたって確認された。杭間は0.4～1.0ｍの間隔で一列に配されている。

土層断面　単一層に分層される。鉈状の工具で尖らせた丸杭を直接打ち込み，杭の先端は砂質粘土層まで達している。

土層解説　基本土層の第22層に相当する。
１　黄 褐 色　砂粒・鉄分中量，粘土粒子少量

出土遺物　木杭が48点出土している。

第８号水田畦（第48・55・56図・付図）

位置　調査Ⅲ区のC5c8～C5f9で，標高4.14～4.44ｍの谷地部に位置している。

規模と形状　南東側7.0ｍ，南西側16.2ｍで，Ｌ字状を呈している。調査区域外に延びているため全容は不明であるが，方形または長方形に巡っていたと考えられる。断面形は皿状を呈し，黒色土と粘土で構築されている。

土層解説（各土層共通）
１　黒　　色　黒色土粒子多量，粘土ブロック・鉄分少量，炭化粒子微量
２　黒　　色　黒色土粒子多量，鉄分微量

c　取配水方法

取水施設は確認できなかったが，地形を利用した水田跡であることから，谷頭である北側及び東西に位置する台地側から導水していたと考えられる。出土土器は細片のため図示できないが，第13・18・19号溝跡からは水田跡と同時期の土器片が出土していることから，第５～10号水田跡に伴う取配水路の可能性も考えられる。水口については検出されていない。

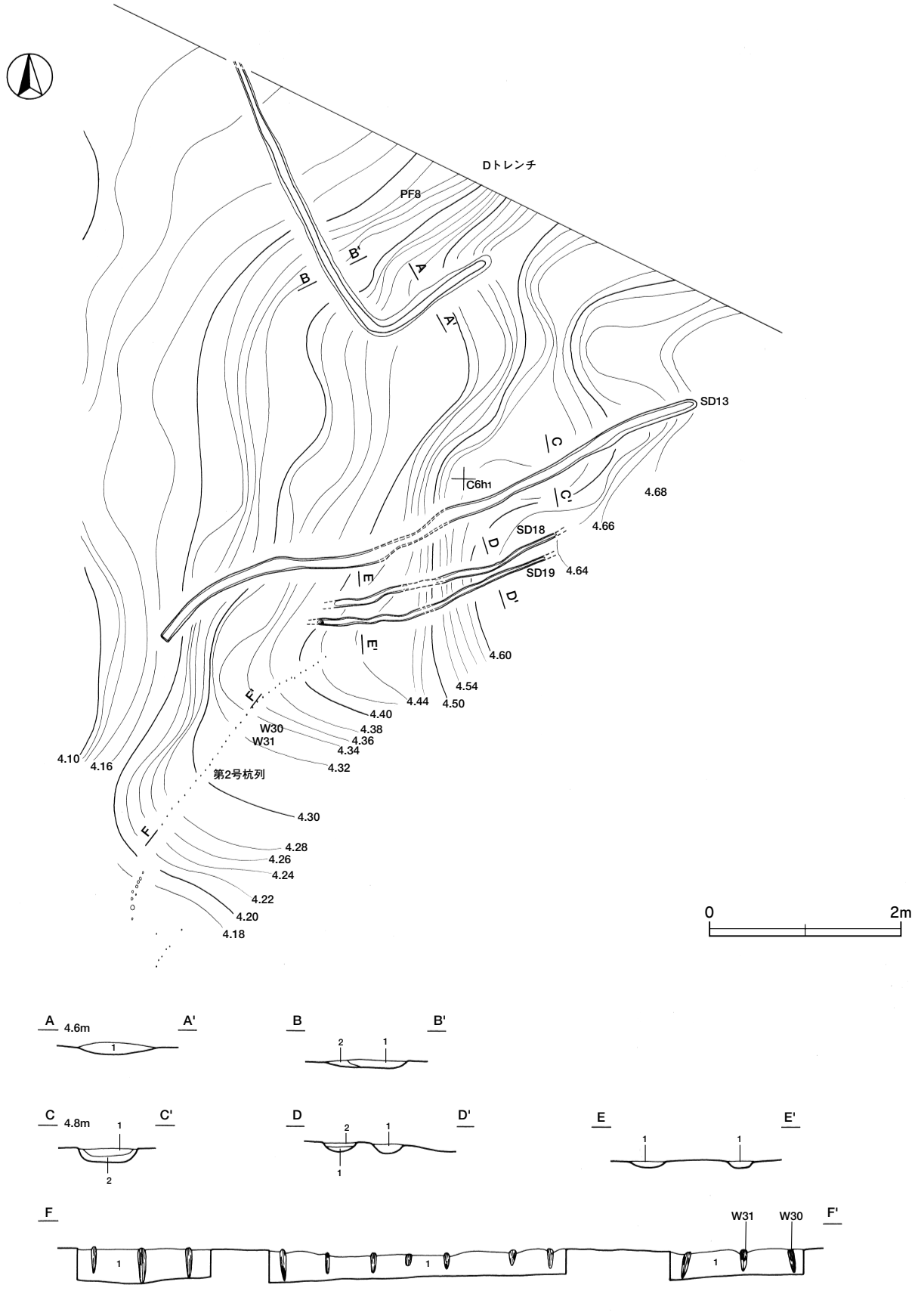
第13号溝跡（第48・57図・付図）

位置　調査Ⅲ区のC6g3～C5j7区で，東側の台地裾部に沿って北東から南に向かって走行している。

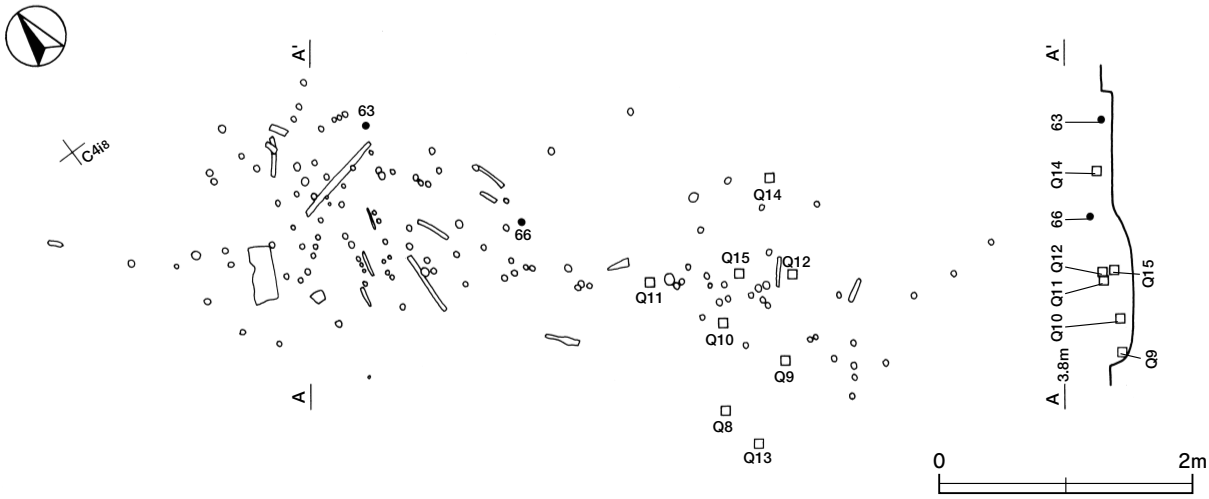
規模と形状　上幅0.5～0.7ｍ，下幅0.3～0.5ｍ，深さ４～15㎝で，弓状に延びている。長さは31.5ｍが確認され，北東から南にかけて低くなり，南北の比高は58㎝である。

覆土　２層に分層される。レンズ状を呈していることから自然堆積である。

土層解説
１　黒 褐 色　粘土粒子微量
２　黒 褐 色　粘土粒子・砂粒微量



第48図　水田二次面②　第２号杭列跡，第13・18・19号溝跡，第８号水田畦実測図



第49図　第１号杭列跡遺物出土状況図

出土遺物　細片のため図示できないが，土師器片６点（坏１，甕５），須恵器片３点（甕），不明鉄製品１点が出土している。M14は覆土中から出土している。

第18号溝跡（第48図・付図）

位置　調査Ⅲ区のC6h2～C5i9区で，東側の台地裾部に沿って北東から南に向かって走行している。

規模と形状　上幅0.25～0.4m，下幅0.13～0.26m，深さ５～12cmで，弓状に延びている。長さは12.6mが確認され，北東から南にかけて低くなり，南北の比高は20cmである。

覆土　２層に分層される。粘土ブロックが混入していることから人為堆積である。

土層解説
1　オリーブ黒色　ローム粒子少量，砂粒微量
2　オリーブ色　粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量

出土遺物　細片のため図示できないが，土師器の甕片２点が出土している。

第19号溝跡（第48図・付図）

位置　調査Ⅲ区のC6h2～C5i9区で，東側の台地裾部に沿って北東から南に走行している。

規模と形状　上幅25～40cm，下幅15～26cm，深さ５～10cmで，弓状に延びている。長さは12.9mが確認され，北東から南にかけて低くなる。比高は15cmである。

覆土　単一層である。不規則に混入した土器片が出土していることから人為堆積である。

土層解説
1　黒 褐 色　ローム粒子・砂粒微量

出土遺物　細片のため図示できないが，土師器片９点（坏２，甕７），須恵器片５点（坏）が出土している。

d　水田面からの出土遺物

土師器片1,304点（坏・椀532，甕・甑772）須恵器片876点（坏274，高台付坏54，蓋62，壺２，盤２，甕・甑482）陶器片97点（碗34，皿６，甕57），磁器片６点（碗・皿），土師質土器片104点（皿８，

鍋96），土製品14点（土玉９，紡錘車３，管状土錘２），瓦片414点，古銭10点，煙管４点が出土している。63～66とＭ４～Ｍ９は第１号杭列跡，M31～M36は第５号水田跡，109は第６号水田跡，110は第７号水田跡，111～114とM37～M39は第８号水田跡，115～117は第９号水田跡から出土している。

e　所見

部分的な検出のため，耕作面積や区画などの規格性は不明である。第８号水田跡を区画する畦は，構築材に粘土を混ぜて使用している。また，第二次面で検出された水田跡の中では第８号水田跡だけ主軸方向が異なり，出土遺物もやや古い様相を示している。第５～７・９・10号水田跡では，大畦が確認されている。幅が1.6mほどあり，作業道を兼ねて機能していたと考えられる。掘り方調査による土層断面には，構築材の補填が認められ，補修しながら長期間利用されていたものと推定される。構築材には粘土・ローム土・黒色土を交互に充填して版築している。構築材の中からは常滑片（６ｂ形式）や土師質土器（皿），五輪塔，宝篋印塔などが出土しており，水田部から出土している遺物と同時期である。時期は，出土遺物や出土状況などから中世から江戸時代と考えられる。

（５）第三次面

a　被覆土と水田の残存状態

第三次面は，土層断面の第６層上面に相当するが，水田跡を示すような痕跡は確認できなかった。しかし，前述したように基本土層断面の第６～８層で，土壌分析の結果からイネ属の植物珪酸体が検出されており，水田として利用されていた可能性が高い。第８層直下の土質は灰白色の粘土質シルト層で，さらに下の層になると木片が多く含まれている。土壌分析によると，「沼よりも浅く水深が１m前後で，一面に水生植物が繁茂している沼沢や水深の浅い湿地で，木片は洪水堆積物」であるとし，「第８層より上層と下層では様相に大きな変化がみられ，土地改変などの可能性もある。」と報告されている。また，第９層には畝状を呈する断面が確認され，自然堆積した土層としては不自然さが見うけられ，鋤などの工具痕が残っていた可能性が考えられる。

b　取配水方法

第３・11・12号溝跡は基本土層断面第６層と共に，第５層に覆われていることから同時期に機能していたと考えることもできる。第６層が水田面であったと仮定すると，第３・12号溝跡は第６層上に機能していた水田への取配水施設であった可能性が高い。第３号溝跡は東側の台地裾部に沿って，第12号溝跡は西側で，谷頭から南西に走行している。また，第12号溝跡は第263号土坑に接続しており，水量調節を行っていた可能性が考えられる。

第３号溝跡（第50図・付図）

位置　調査Ⅲ区のC6e4～C5g0区に位置し，東側台地の裾部に沿って，北から南西に走行している。

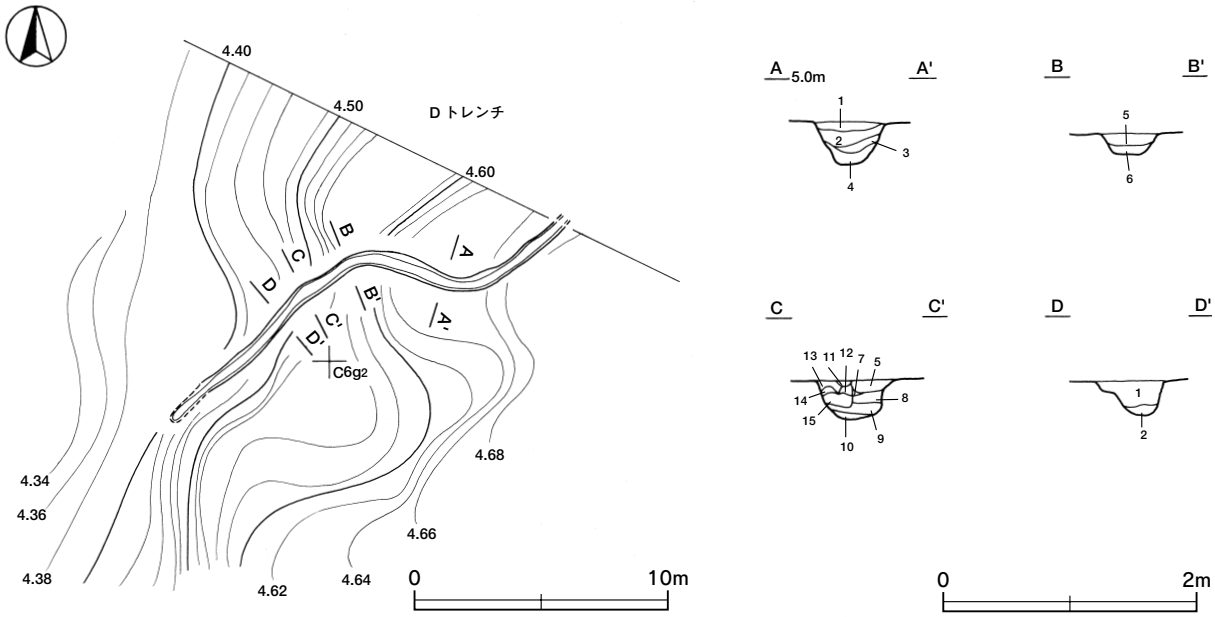
規模と形状　一部が調査区域外に延びているため確認されたのは18.5mだけである。平面形はＳ字状を呈し，上幅0.38～0.7m，下幅0.24～0.47m，深さ17～34㎝で，軸線はＮ－55°－Ｅを指している。北から南西に低くなり，南北の比高は25㎝である。

覆土　15層に分層される。第11～15層は，第７～９層を掘り込んだ後に堆積した層であることから，掘り返しが行われたものと考えられる。堆積状況は，レンズ状を呈していることから自然堆積である。

土層解説

1　暗赤褐色　ローム粒子中量，粘土粒子少量
2　黒 褐 色　粘土粒子中量
3　黒 褐 色　粘土粒子多量
4　にぶい橙色　鉄分多量，粘土粒子少量
5　黒 褐 色　鉄分多量，粘土粒子少量
6　にぶい赤褐色　粘土粒子多量，鉄分少量
7　黒 褐 色　粘土粒子少量
8　黒 褐 色　粘土ブロック少量
9　黒 褐 色　粘土粒子少量
10　黒 褐 色　粘土粒子少量
11　褐 灰 色　粘土ブロック中量
12　極暗褐色　粘土粒子少量
13　黒 褐 色　粘土粒子中量
14　褐 灰 色　粘土粒子中量
15　黒 褐 色　粘土ブロック少量

出土遺物　細片のため図示できないが，土師器片50点（坏４，甕・甑46），須恵器片９点（高台付坏３，蓋２，甕４）が出土している。



第50図　水田三次面　①第３号溝跡実測図

第11号溝跡（第51図・付図）

位置　調査Ⅲ区のB4h0～B4i6に位置し，谷部の中央部から南西に走行している。

重複関係　第12号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状　一部が調査区域外に延びているため14.0mだけ確認された。平面形はＪ字状を呈し，上幅0.46～2.86m，下幅0.23～2.18m，深さ27～29㎝で，軸線はN－25°－Eを指し，南西から北に低くなり，南北の比高は２㎝である。

覆土　２層に分層される。

土層解説

1　黒 褐 色　粘土粒子・砂粒少量，鉄分微量
2　黒 褐 色　粘土粒子・砂粒・鉄分少量

出土遺物　細片のため図示できないが，土師器片11点（坏１，甕・甑10），須恵器片10点（坏３，蓋１，甕６）が出土している。

第12号溝跡（第51・57図・付図）

位置　調査Ⅲ区のB4h0～C4b2区に位置し，谷部の中央部から南西に走行している。

重複関係　第11号溝に掘り込まれている。

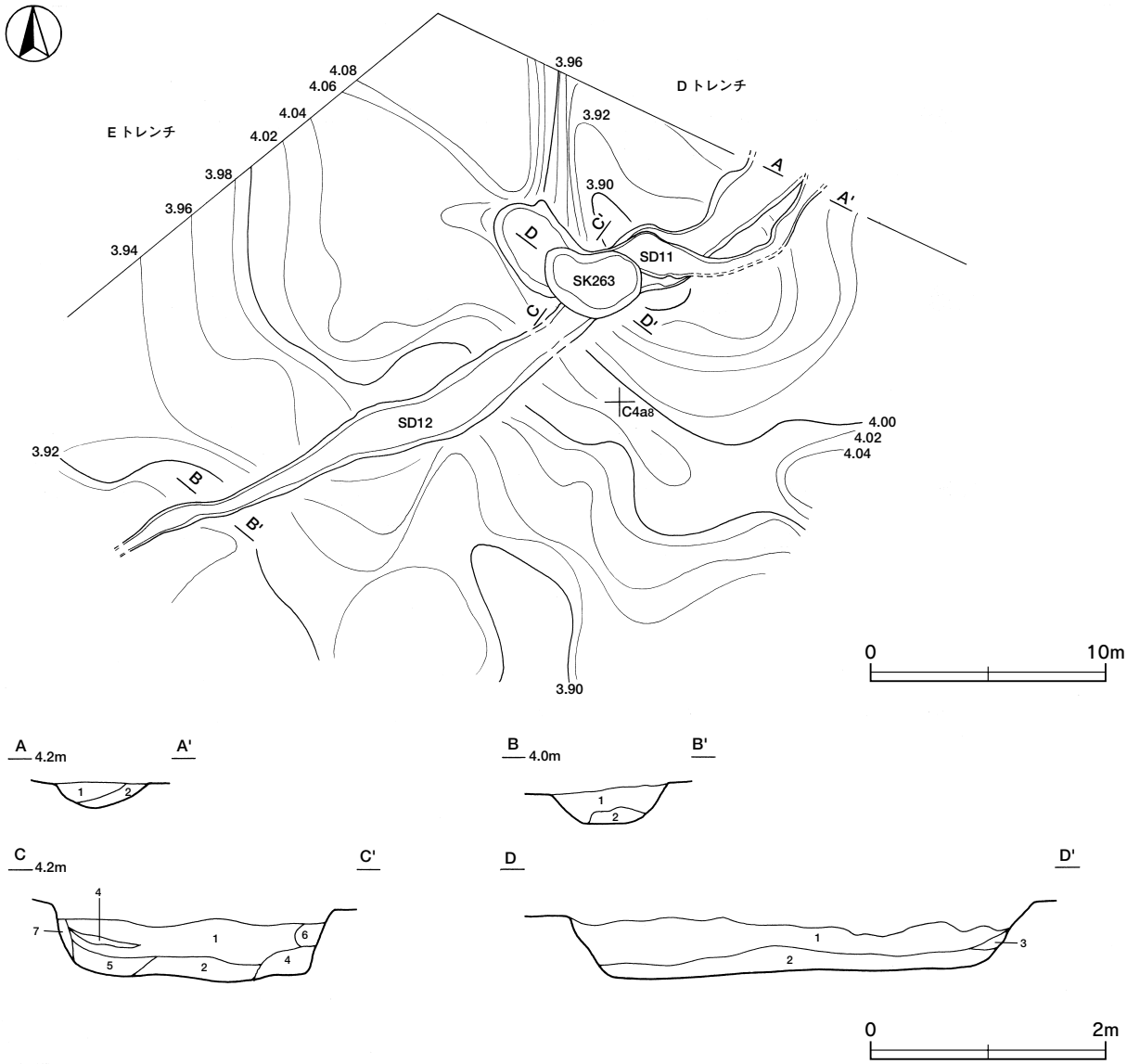
規模と形状　一部が調査区域外に延びているため確認されたのは31.8mだけである。上幅0.56～2.84m，下幅0.32～2.42m，深さ34～74cmで，軸線はN－61°－Eを指している。高さは南西側3.74m，北側3.61mで北に低くなり，南北の比高は13cmである。

覆土　2層に分層される。ブロック状で不規則に堆積していることから人為堆積である。

土層解説

1　灰 褐 色　粘土粒子・鉄分多量，ローム粒子・砂粒微量　　2　褐 灰 色　粘土粒子多量，砂粒・鉄分中量

出土遺物　土師器片277点（坏57，椀2，甕・甑218），須恵器片127点（坏46，高台付坏8，蓋11，壺2，長頸瓶1，甕・甑59），灰釉陶器片1点（椀），瓦片8点が出土している。85は南部の覆土中層，86は覆土中から出土している。



第51図　水田三次面②　第11・12号溝跡，第263号土坑実測図

第263号土坑（第51図・付図）

位置　調査Ⅲ区のB3i7区で，谷部の平坦地に位置している。

規模と形状　長径4.2m，短径2.5mの楕円形を呈し，深さは68㎝である。長径方向はN－87°－Eを指している。

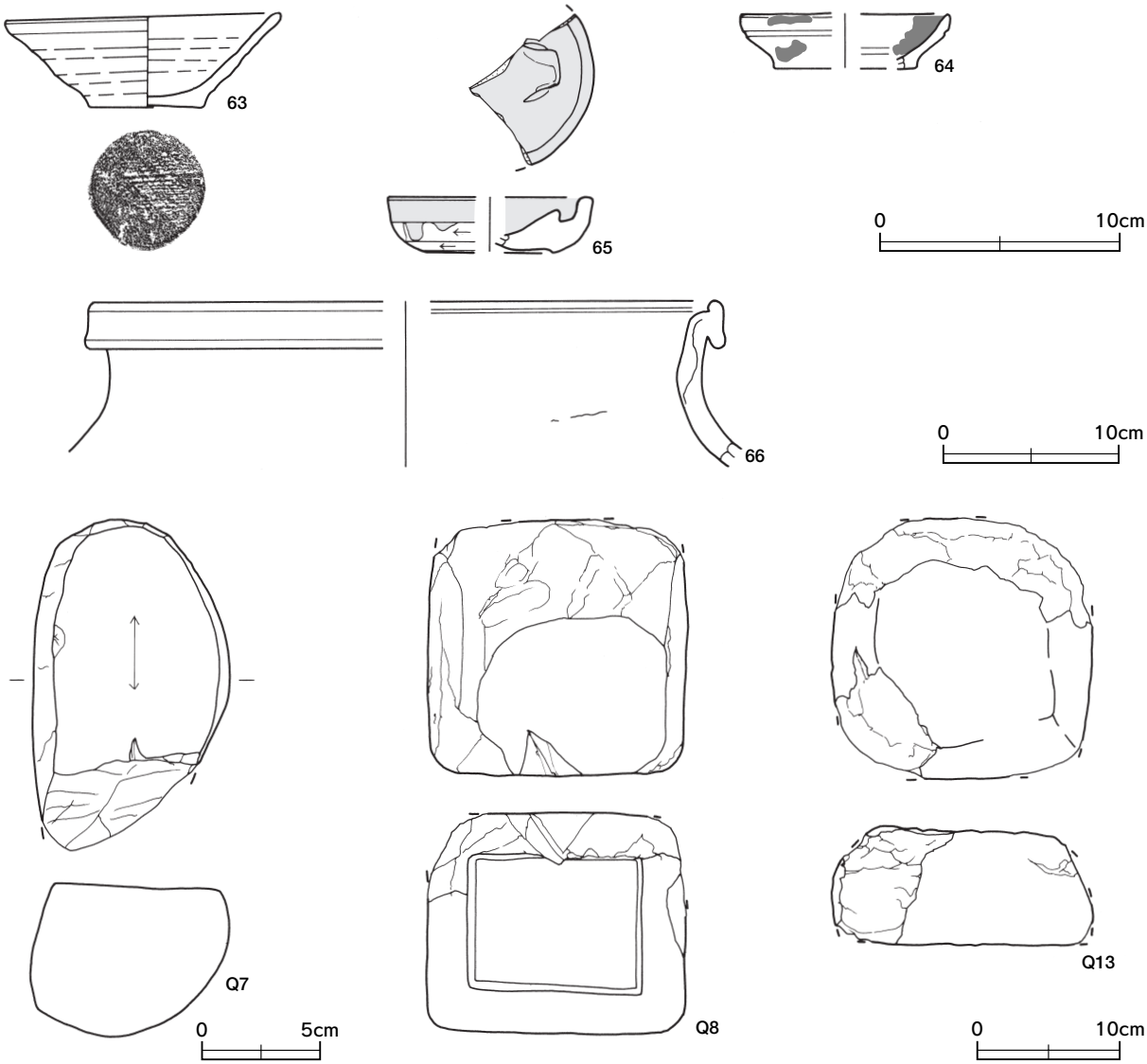
覆土　7層に分層される。ブロック状で不規則に堆積していることから人為堆積である。

土層解説

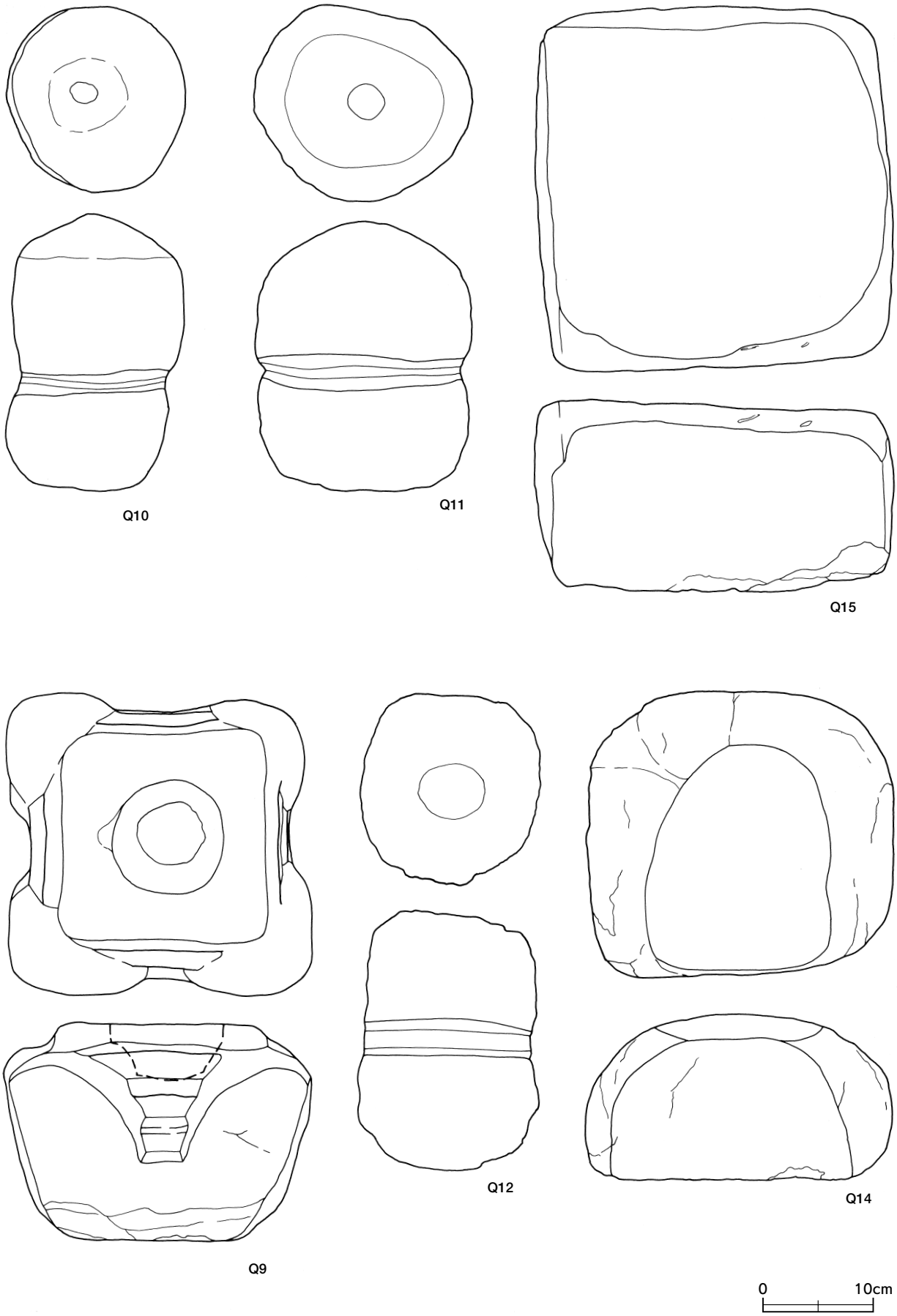
1　褐 灰 色　炭化物・砂粒・鉄分少量，細礫微量
2　黒 褐 色　砂粒多量，腐植土少量
3　褐 灰 色　砂粒・鉄分少量
4　にぶい黄橙色　砂粒中量
5　暗 褐 色　腐植土多量，砂粒中量
6　黒 褐 色　砂粒・腐植土中量
7　黒　　色　砂粒・鉄分・腐植土少量

c　所見

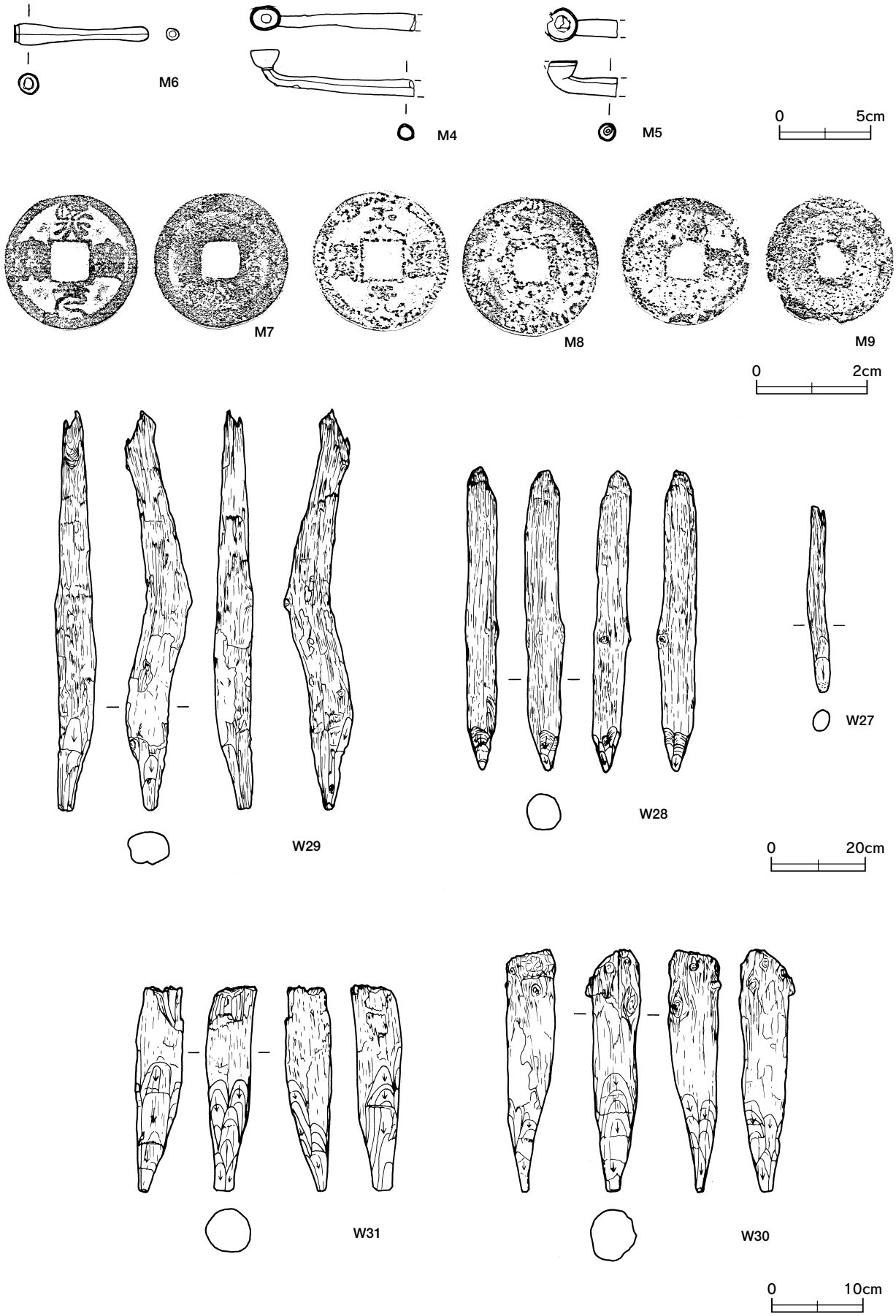
第三次面では水田跡が検出されていないが，水田として利用されていた可能性が高いと考えられる。第12号溝跡は南西から北に向かって低くなり，地形とは逆行して流れている。第３号溝跡とセットで捉えれば取水路と排水路の関係が想定される。また，基本土層の第８層直下は自然堆積した砂質粘土層であるが，平面上に不自然な凹凸があり，鋤などの農具痕の可能性も考えられる。



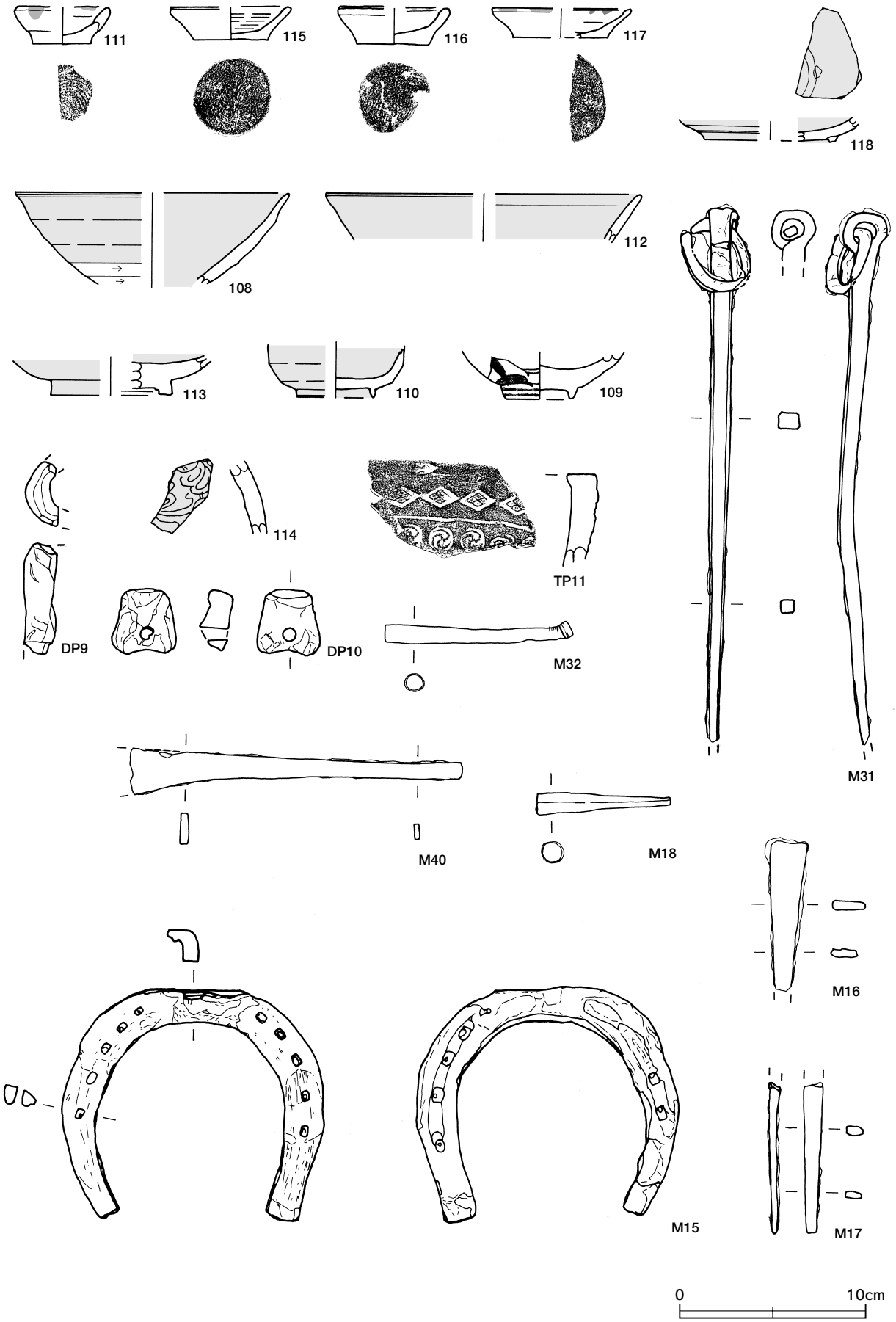
第52図　第１号杭列跡出土遺物実測図（１）



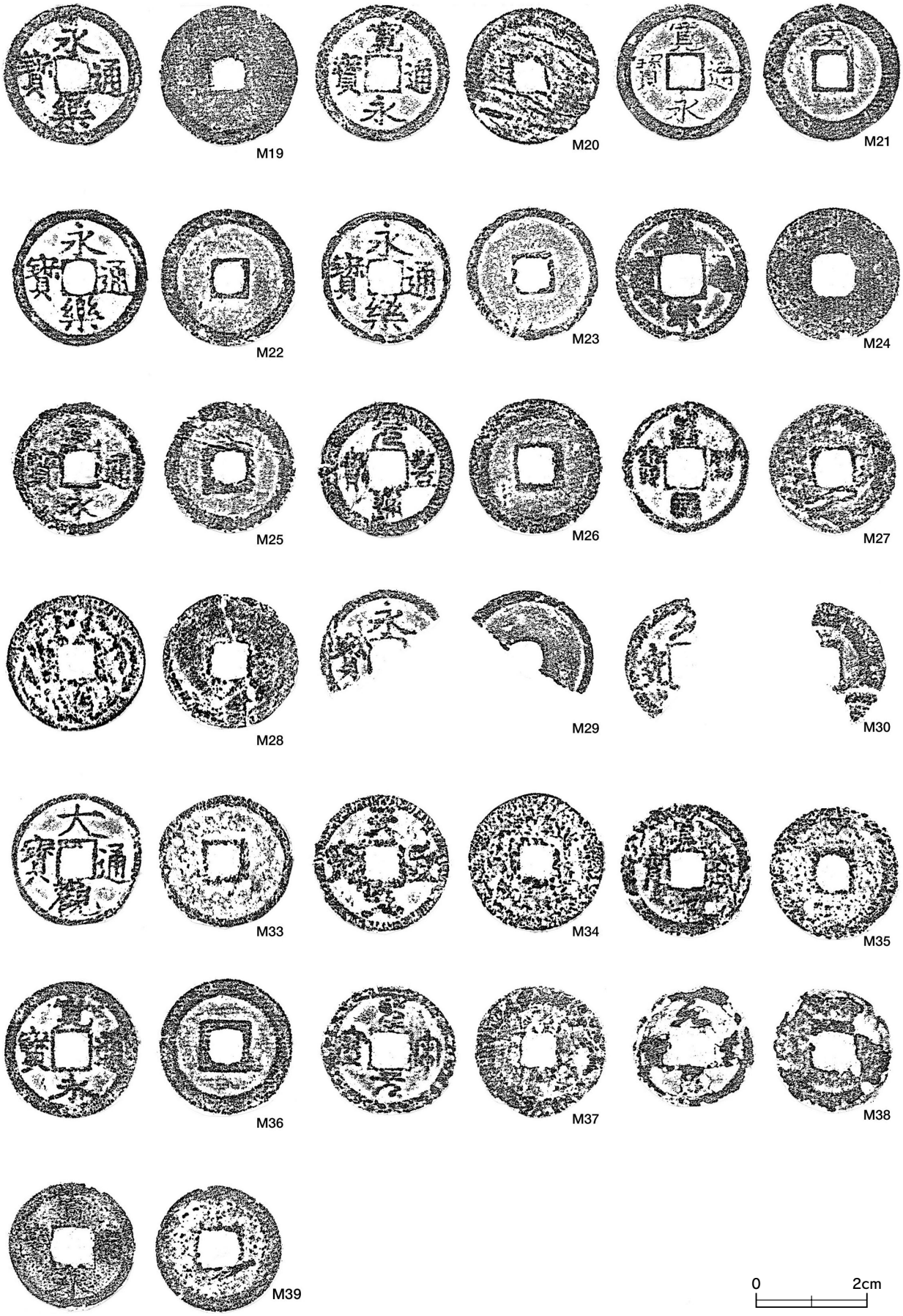
第53図　第１号杭列跡出土遺物実測図（２）



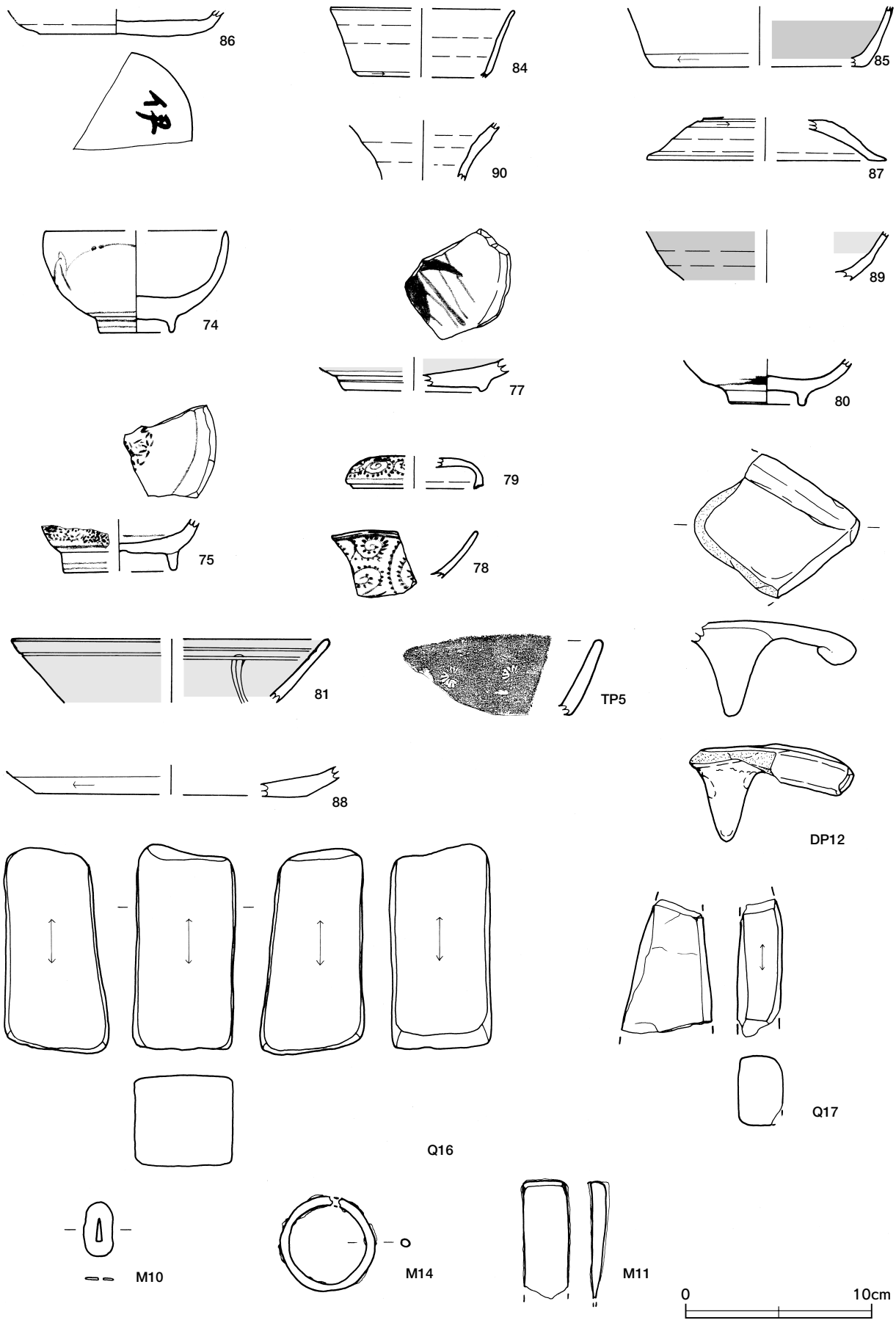
第54図　第１・２号杭列跡出土遺物実測図



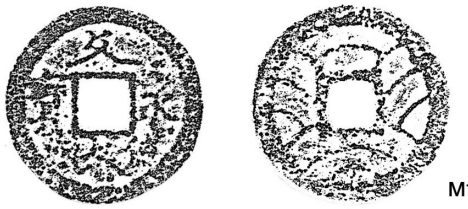
第55図　第１～10号水田跡出土遺物実測図（１）



第56図　第１～10号水田跡出土遺物実測図（２）



第57図　第４・５・12・13号溝跡出土遺物実測図



第58図　第５号溝跡出土遺物実測図

第１号杭列跡出土遺物観察表（第52・53図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
63	土師質土器	皿	11.4	4.0	4.8	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転糸切り	C4i8	100%　ＰＬ11
64	土師質土器	小皿	[8.6]	2.3	[5.8]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面沈線１条　体部内・外面ナデ	覆土中	油煙付着
65	陶器	灯明皿	[8.4]	2.3	[5.2]	長石・緻密	灰・黒	良好	体部外面ヘラ削り　底部ヘラ削り　鉄釉漬け掛け	覆土中	25%
66	常滑	甕	[34.8]	(9.2)	－	長石・石英・黒色粒子	にぶい赤褐・暗オリーブ	普通	体部外面降灰による釉　内面ヘラナデ　輪積み痕	C4i8	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Ｑ７	砥石	(13.8)	8.2	6.6	(1,000)	安山岩	砥面１面	C4j8	

番号	種別	幅	奥行き	高さ	重量(kg)	材 質	特　　徴	出土位置	備　考
Ｑ８	宝篋院塔	18.2	17.9	15.4	(9.1)	花崗岩	塔身部　側面には長方形の縁取り　梵字・四仏の彫りは不明	C4j8	
Ｑ９	宝篋院塔	27.9	27.1	19.7	21.2	花崗岩	笠部　隅飾突起部破損　上部に凹み有り	C4j8	
Ｑ10	五輪塔	16.1	16.7	25.0	7.6	花崗岩	空風輪　空輪舞やや逆台形　風輪部やや台形	C4j8	
Ｑ11	五輪塔	19.7	17.5	24.2	9.6	花崗岩	空風輪　空輪部楕円形	C4i8	
Ｑ12	五輪塔	16.4	17.2	20.4	7.8	花崗岩	空風輪　空輪舞やや逆台形　風輪部やや台形	C4j8	
Ｑ13	五輪塔	18.3	18.1	8.4	(4.0)	花崗岩	火輪　風化顕著　軒先やや外反　上面やや凹む	C4j8	
Ｑ14	五輪塔	27.7	25.8	15.0	15.4	花崗岩	火輪　風化が著しいため軒先の形状不明　表裏面平坦	C4i8	
Ｑ15	五輪塔	32.4	32.7	17.5	34.0	花崗岩	地輪　表裏面平坦　側面はやや台形を呈す	C4i8	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Ｍ４	煙管	(8.9)	1.3	2.5	(5.6)	真鍮	火皿部孔径４㎜　左継目　断面円形	C4g2	ＰＬ23
Ｍ５	煙管	(3.8)	1.8	1.9	(7.9)	真鍮	火皿部一部欠損　断面円形　羅宇残存　左継目	C4g2	ＰＬ23
Ｍ６	煙管	7.3	1.1	1.2	5.9	真鍮	羅宇残存　継目有り	C4g2	ＰＬ23

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鋳年	材 質	特　　徴	出土位置	備　考
Ｍ７	熙寧元寳	2.5	0.65	4.0	1068	銅	北宋銭　篆書　無背銭	覆土中	ＰＬ22
Ｍ８	天聖元寶	2.5	0.6	3.7	1023	銅	北宋銭　真書　無背銭	覆土中	ＰＬ22
Ｍ９	元□□寶	2.3	0.6	(2.08)	－	銅	元豊通寳ヵ　篆書　無背銭	覆土中	ＰＬ22

番号	器種	長さ	幅	厚さ	特　　徴	出土位置	備　考
W27	杭	(41.0)	3.8	5.8	丸材　先端部鉈状工具による削り痕	C4i8	
W28	杭	(65.2)	8.4	7.6	丸材　先端部鉈状工具による削り痕	C4f3	
W29	杭	(86.3)	8.9	8.6	丸材　先端部鉈状工具による削り痕	C4i8	

第２号杭列跡出土遺物観察表（第54図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	特　　徴	出土位置	備　考
W30	杭	(26.1)	5.3	5.3	丸材　先端部鉈状工具による削り痕	D5a8	
W31	杭	(22.1)	5.5	4.8	丸材　先端部鉈状工具による削り痕	D5a8	

第１～４号水田跡出土遺物観察表（第55・56図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M15	蹄鉄	12.6	14.1	1.7	230	鉄	鉄唇部は敲打による作り出し　蹄面の溝に釘目10穴　鉄側から鉄尾にかけて細くなる	ＰＦ１	ＰＬ23
M16	不明	(8.3)	(2.3)	(0.5)	(26.2)	鉄	断面長方形　下部に向かって細くなる	ＰＦ２	ＰＬ23
M17	不明	(8.1)	(1.1)	(0.6)	(8.0)	鉄	断面長方形　下部に向かって細くなる	覆土中	M16と同一個体ヵ
M18	煙管	7.3	1.1	1.2	3.8	銅	吸口径0.3㎝　継目有り	ＰＦ３	

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鋳年	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M19	永樂通寶	2.6	0.5	2.3	1408	銅	明銭　無背銭　裏面摩滅	ＰＦ１	ＰＬ22
M20	寛永通寶	2.5	0.5	2.7	1656	銅	古寛永　無背銭	覆土中	ＰＬ22
M21	寛永通寶	2.6	0.5	2.5	1668	銅	新寛永　文銭	ＰＦ１	ＰＬ22
M22	永樂通寶	2.5	0.6	2.6	1408	銅	明銭　無背銭	覆土中	ＰＬ22
M23	永樂通寶	2.5	0.5	2.2	1408	銅	明銭　無背銭	ＰＦ１	ＰＬ22
M24	□宋通寶	2.4	0.7	2.3	中世期	銅	真書　皇宋通寶ヵ　無背銭	ＰＦ１	ＰＬ22
M25	寛永通寶	2.4	0.5	2.2	1637	銅	無背銭	ＰＦ１	ＰＬ22
M26	元豊通寶	2.5	0.6	2.6	1078	銅	北宋銭　刻書　無背銭	ＰＦ３	ＰＬ22
M27	嘉□□寶	2.3	0.6	3.1	中世期	銅	刻書　無背銭	ＰＦ４	ＰＬ22
M28	不明	2.5	0.6	(2.1)	－	銅	判読不明　無背銭	覆土中	ＰＬ22
M29	永□□寶	－	－	(1.2)	－	銅	永楽通寶ヵ　無背銭	ＰＦ３	
M30	元豊□□	－	－	(0.9)	－	銅	元豊通寶ヵ	ＰＦ１	40%

第５～10号水田跡出土遺物観察表（第55・56図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
108	陶器	平碗	[14.6]	(4.9)	－	長石・緻密	灰白・浅黄橙	普通	体部内・外面ロクロナデ　外面下端回転ヘラ削り	ＰＦ５	10%　ＰＬ14
109	磁器	碗	－	(2.5)	3.8	緻密・黒色粒子	灰白・明オリーブ灰	良好	ロクロナデ　草花文の染め付け	ＰＦ６	
110	白磁	碗	－	(2.8)	[4.2]	緻密・黒色粒子	灰白	良好	ロクロナデ	ＰＦ７	
111	土師質土器	小皿	[4.8]	2.0	3.1	長石・石英・雲母	橙	普通	体部内・外面ナデ　底部回転糸切り	ＰＦ８	30%　油煙付着
112	青磁	碗	[16.8]	(2.6)	－	緻密・白色流離	灰白・オリーブ黄	良好	ロクロナデ	ＰＦ８	ＰＬ14
113	青磁	割花文碗	－	(2.1)	[6.4]	緻密	灰白・灰オリーブ	良好	底部内面に印刻による花文　高台削り出し	ＰＦ８	ＰＬ14
114	古瀬戸	梅瓶	－	(4.0)	－	緻密・白色粒子	灰白・灰黄	良好	体部外面印刻による草花文	ＰＦ８	ＰＬ14
115	土師質土器	小皿	[6.4]	1.8	4.0	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	ナデ　底部回転糸切り	ＰＦ９	60%
116	土師質土器	小皿	[5.8]	2.0	3.8	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	ナデ　底部回転糸切り	ＰＦ９	30%　油煙付着
117	土師質土器	小皿	[7.6]	1.6	[5.0]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	ナデ　底部回転糸切り	ＰＦ９	20%　油煙付着
118	志野	皿	－	(1.4)	[7.0]	長石・緻密	灰白	良好	高台貼り付け　底部内面に重ね焼き痕	ＰＦ９	
TP11	土師質土器	鉢	－	(4.9)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	ナデ　外面に襷文と巴文の型押し	ＰＦ９	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
DP９	管状土錘	(5.9)	(3.5)	－	(34.1)	長石・石英・雲母	ナデ	ＰＦ８	
DP10	不明	(3.6)	(3.4)	(1.8)	(18.4)	長石・石英・赤色粒子	ナデ	ＰＦ８	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M31	不明	26.8	1.1	1.1	134.0	鉄	頭部敲打による折り返し　環状鉄製品付属	ＰＦ５	ＰＬ23
M32	煙管	10.1	1.0	1.0	9.5	真鍮	吸口径0.5㎝　右継目	ＰＦ５	ＰＬ23
M40	不明	(17.9)	(2.5)	(0.4)	(39.1)	鉄	断面長方形　端部欠損	ＰＦ９	ＰＬ23

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鋳年	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M33	大観通寶	2.4	0.5	3.38	1107	銅	北宋　無背銭	ＰＦ５	ＰＬ22
M34	天聖元寶	2.5	0.5	3.68	中世期	銅	真書　無背銭	ＰＦ５	ＰＬ22
M35	不明	2.4	0.6	(2.1)	－	銅	判読不明　無背銭	覆土中	ＰＬ22

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鋳年	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M36	寛永通寶	2.5	0.6	3.1	1636	銅	古寛永　無背銭	覆土中	ＰＬ22
M37	聖宋元寶	2.4	0.6	3.2	1101	銅	北宋　篆書　無背銭	覆土中	ＰＬ22
M38	元豊通寶	(2.2)	0.6	(2.4)	中世期	銅	行書　無背銭	覆土中	ＰＬ22
M39	寛永通寶	2.3	0.6	2.7	1636	銅	古寛永　無背銭	覆土中	

第４号溝跡出土遺物観察表（第57図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
74	磁器	碗	[10.0]	5.5	4.0	緻密	灰白・明オリーブ灰	普通	梅樹文の染め付け　高台削り出し	覆土中	45%
75	磁器	皿	－	(2.8)	[6.0]	緻密	灰白	普通	環状松竹梅文　型紙刷り　蛇の目高台	覆土中	
77	志野	皿	－	(1.8)	[7.4]	黒色粒子	灰白・浅黄	普通	高台外面にヘラ状工具による沈線１条	覆土中	
78	磁器	皿	－	(2.6)	－	緻密	灰白	普通	蛸唐草の染め付け　輪花皿	覆土中	
79	磁器	蓋	[6.6]	1.7	－	緻密	灰白	普通	蛸唐草の染め付け	覆土中	
TP５	瓦質土器	鉢	－	4.0	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	ヘラナデ　外面に菊花文の型押し	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎　土	特　　徴	出土位置	備　考
DP12	不明	－	－	－	97.9	長石・雲母・赤色粒子	脚部貼り付け　ナデ	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q16	砥石	11.0	5.4	5.6	570	凝灰岩	砥面４面	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M10	切羽	2.6	1.6	0.9	1.18	銅	楕円形　孔部三角形	覆土中	ＰＬ23
M11	楔	(6.4)	2.5	0.9	(34.4)	鉄	側面三角形　頭部に敲打痕　先端部欠損	覆土中	ＰＬ23

第５号溝跡出土遺物観察表（第57図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
80	磁器	碗	－	(2.3)	4.0	緻密	明緑灰	普通	体部外面に草花文の染め付け	覆土中	10%
81	青磁	皿	[17.2]	(3.4)	－	緻密	灰・灰オリーブ	良好	体部外面に沈線１条　内面に印刻による文様	覆土中	ＰＬ14

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q17	砥石	(7.1)	2.4	3.7	(113.9)	凝灰岩	砥面１面	覆土中	

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鋳年	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M12	文久永寶	2.6	0.7	2.9	1863	銅	草文　11波	覆土中	

第12号溝跡出土遺物観察表（第57図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
84	須恵器	坏	[10.0]	3.7	[8.8]	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外面下端回転ヘラ削り　内・外面ロクロナデ	覆土中	
85	須恵器	坏	－	(3.2)	[11.6]	長石・石英・針状鉱物	灰	普通	体部外面下端回転ヘラ削り　内・外面ロクロナデ	覆土中	内面に漆付着
86	須恵器	坏	－	(1.3)	8.4	長石・石英・針状鉱物	褐灰	普通	底部回転ヘラ切り	覆土中	墨書「伊」ＰＬ16
87	須恵器	蓋	－	(2.3)	[13.0]	長石・石英・雲母	灰	普通	天井部回転ヘラ削り　内・外面ロクロナデ	覆土中	
88	陶器	皿	－	(1.7)	[14.4]	長石・石英	灰オリーブ	普通	体部外面下端回転ヘラ削り　底部回転ヘラ切り	覆土中	
89	灰釉陶器	碗	－	(2.8)	－	長石・黒色粒子・緻密	灰・明オリーブ灰	良好	内・外面ロクロナデ　釉は漬け掛け	覆土中	
90	須恵器	甕	－	(3.3)	－	長石・石英・白色粒子	灰白	良好	頸部内・外面ロクロナデ	覆土中	

第13号溝跡出土遺物観察表（第57図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M14	不明	5.1	4.2	0.5	(7.3)	鉄	断面円形の鉄材で環状を呈している	覆土中	ＰＬ23

5　遺物包含層

調査Ⅲ区は，標高20～30mの台地に入り込んだ谷津部で，流れ込んだ黒色土が堆積して広がっている。周辺の台地上にも遺跡の所在が確認されていることから，遺構の有無を確認するため，南北方向に１本，東西方向に２本の試掘坑を設定した。表土から2.5mほど掘り込んだ土層断面には，奈良時代から平安時代にかけての土器片を含む層と，縄文時代早期から前期にかけての土器片を含む層の２層が確認された。

なお，奈良時代から平安時代にかけての遺物包含層は，土壌分析によりイネ属の植物珪酸体が検出されていることから，この遺物包含層の上面は，水田として利用していた可能性が高いことは前述したとおりである。以下，遺物包含層と主な遺物について記述する。

（１）縄文時代

第１号遺物包含層（第59～69図・付図）

位置　調査Ⅲ区の北西部，埋没谷の中央部に位置している。

規模　南北軸35m，東西軸30m，厚さ80㎝ほどにわたって土器片の包含層が確認できる。

木杭　調査区域北部のB4g5区に刺さった状態で１本出土している。木杭は長さ30㎝，径15㎝ほどの丸材を半截したもので，下部には先を尖らせた痕跡がみられる。粘土質の地山に，15㎝ほど打ち込んでいる。

土層解説　覆土の第１層に相当する。
1　黄 灰 色　粘土粒子多量，砂粒少量，鉄分微量

種子集積地点　調査区北西部のB4g7～C4a2に位置している。西側傾斜地の裾部に広がっている。

土層解説　覆土の第２層，基本土層の第18層に相当する。
1　黒 褐 色　砂粒中量，粘土粒子少量，木片微量

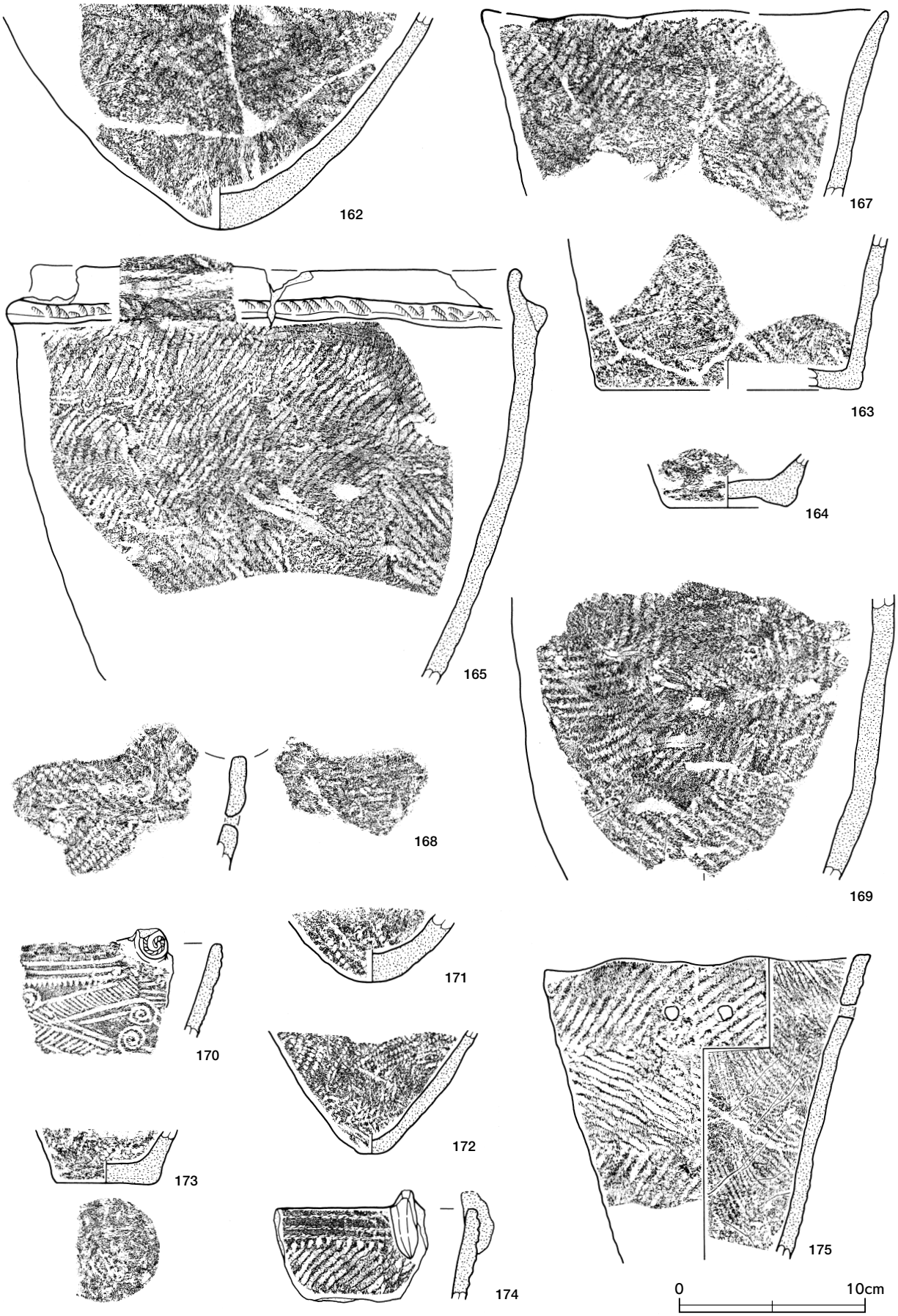
覆土　11層に分層される。低湿地に流れ込んで堆積した自然堆積である。第７層は土器片・剥片などがまとまって出土していることから人為堆積で，第８層は第７層が流れ出した層である。

土層解説　第２層と第４層は基本土層の第18層と第12層に相当する。
1　黄 灰 色　粘土粒子多量，砂粒少量，鉄分微量
2　黒 褐 色　砂粒中量，粘土粒子少量，木片微量
3　黒 褐 色　粘土粒子中量，砂粒少量
4　極暗赤褐色　木片中量，砂粒少量，粘土粒子・鉄分微量
5　灰　　色　砂粒多量，鉄分・木片微量
6　黄 褐 色　粘土粒子少量，木片微量
7　黒 褐 色　砂粒中量，粘土粒子微量
8　暗オリーブ色　粘土粒子・黒色土粒子・砂粒少量
9　オリーブ黒色　砂粒多量，粘土粒子中量，細礫微量
10　緑 灰 色　粘土ブロック中量
11　黒オリーブ色　砂粒・粘土粒子微量

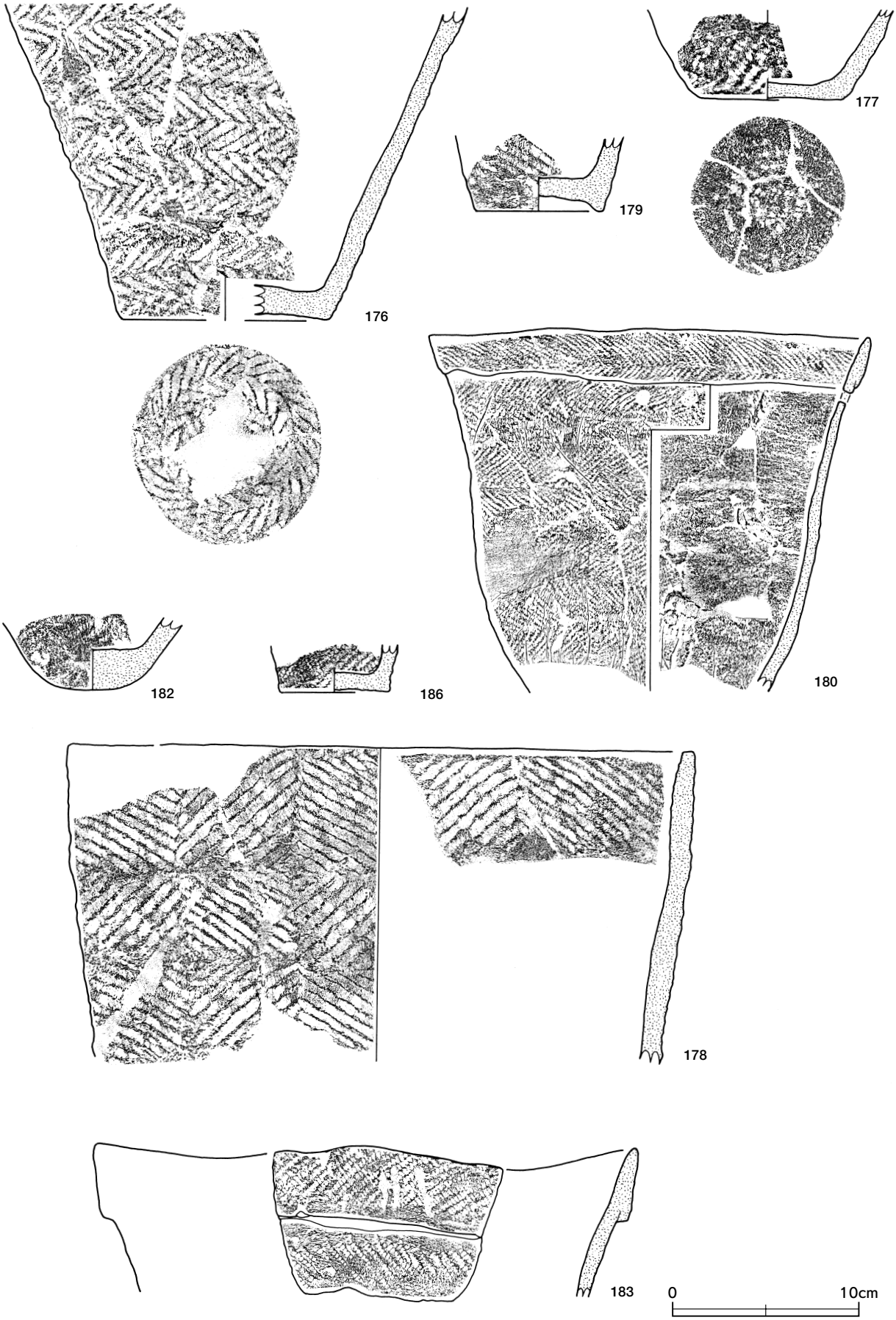
出土遺物　縄文土器片5,261点，石器93点（鏃４，尖頭器１，錐１，匙１，錘１，斧３，砥石２，磨石62，敲石15，凹石３），石製耳飾り１点，剥片，杭１点，胡桃1,307個体分，栃の実が出土している。

所見　早期から前期にかけての土器片が出土している。土器は破片であるが，同一個体として接合できるものが多く，割れ口も比較的シャープである。また，種子（胡桃，栃の実，山栗）も多く，台地裾部に沿って土器片と共伴している。土器や種子が出土した北部からは，木杭が立ったままの状態で検出されており，足場や柵が存在していた可能性も考えられる。栃の実を土器に入れてアク抜きしたことも考えられ，生活に必要な水場として使われていた可能性もある。

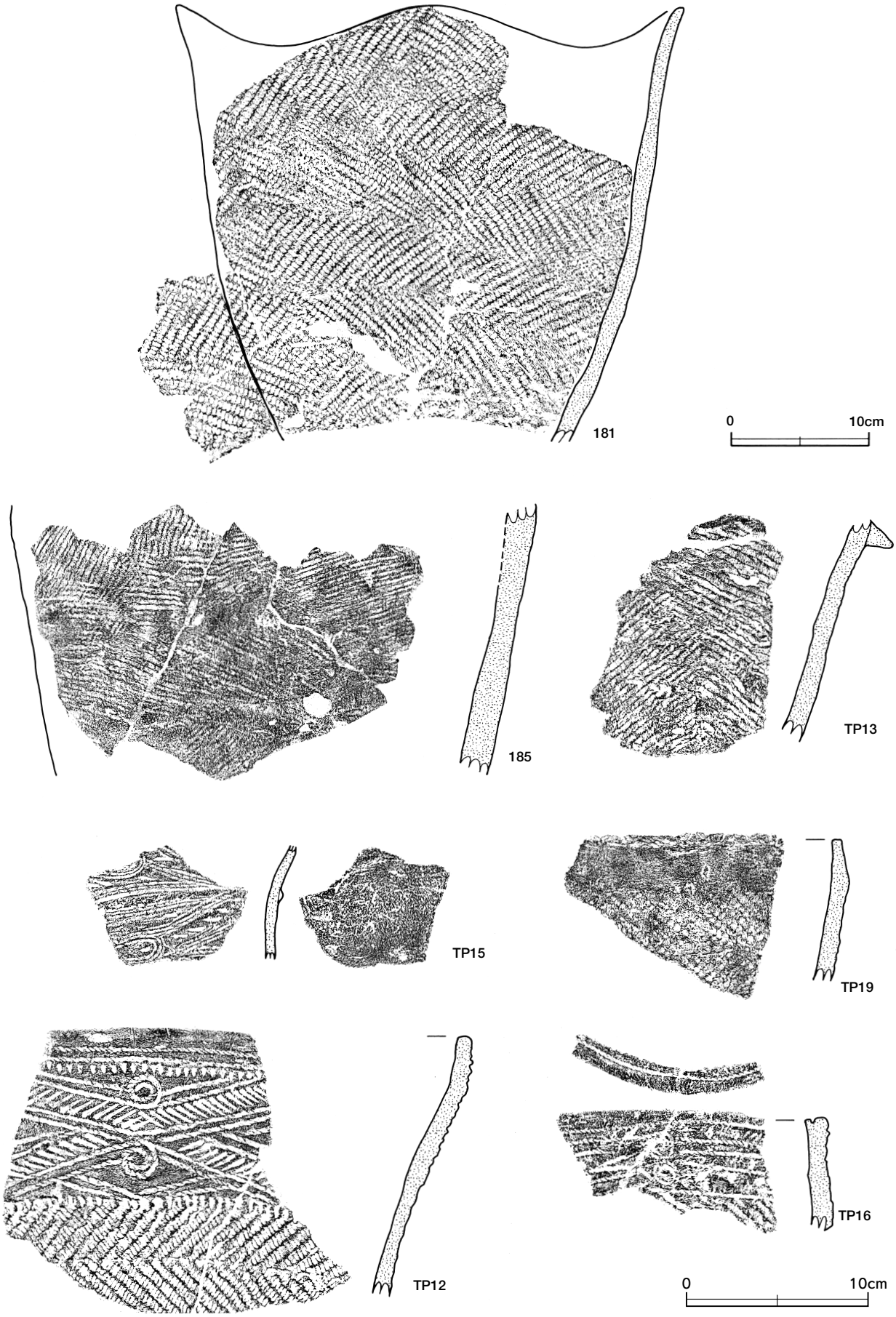
第59図　第１号遺物包含層実測図



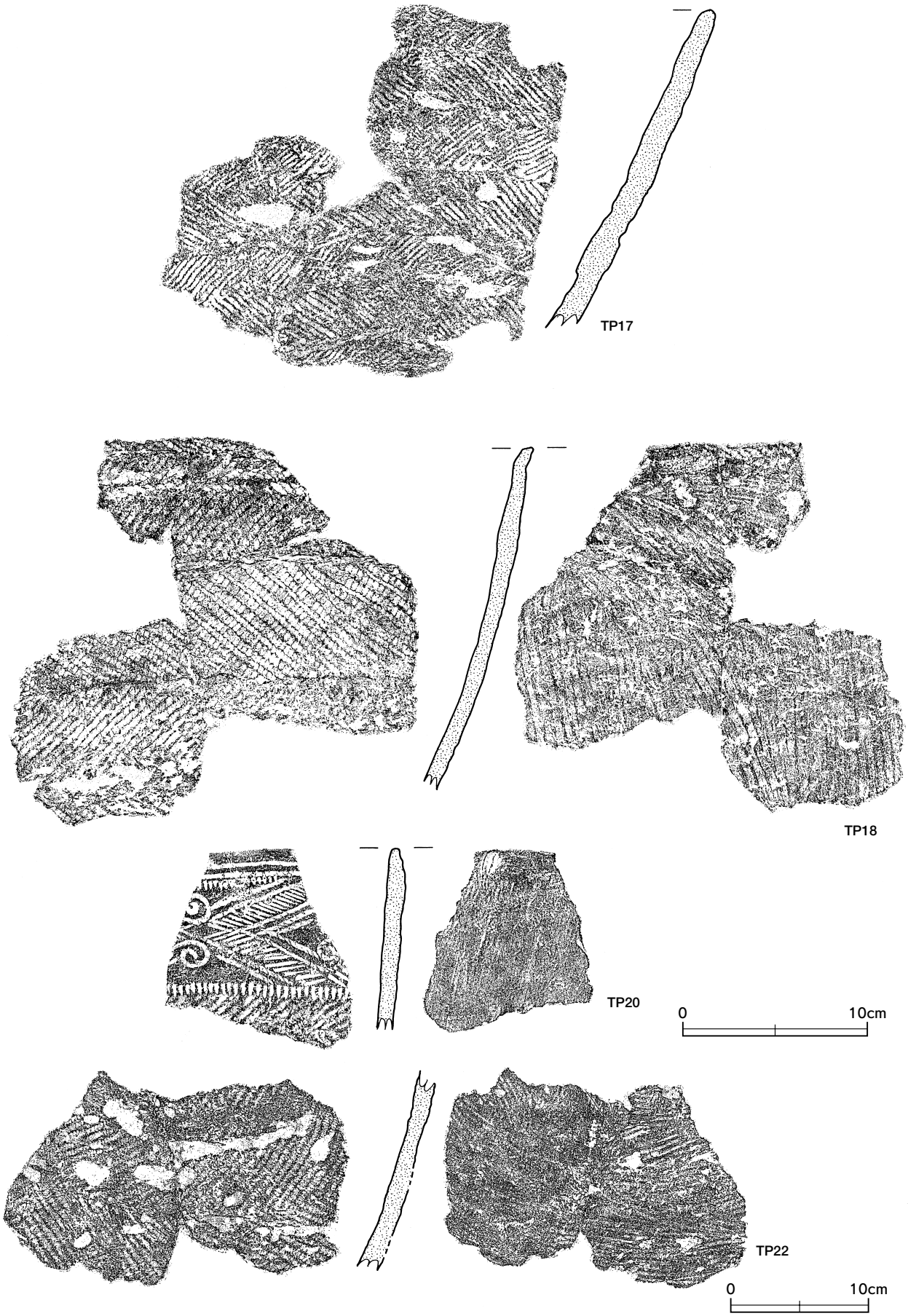
第60図　第１号遺物包含層出土遺物実測図（１）



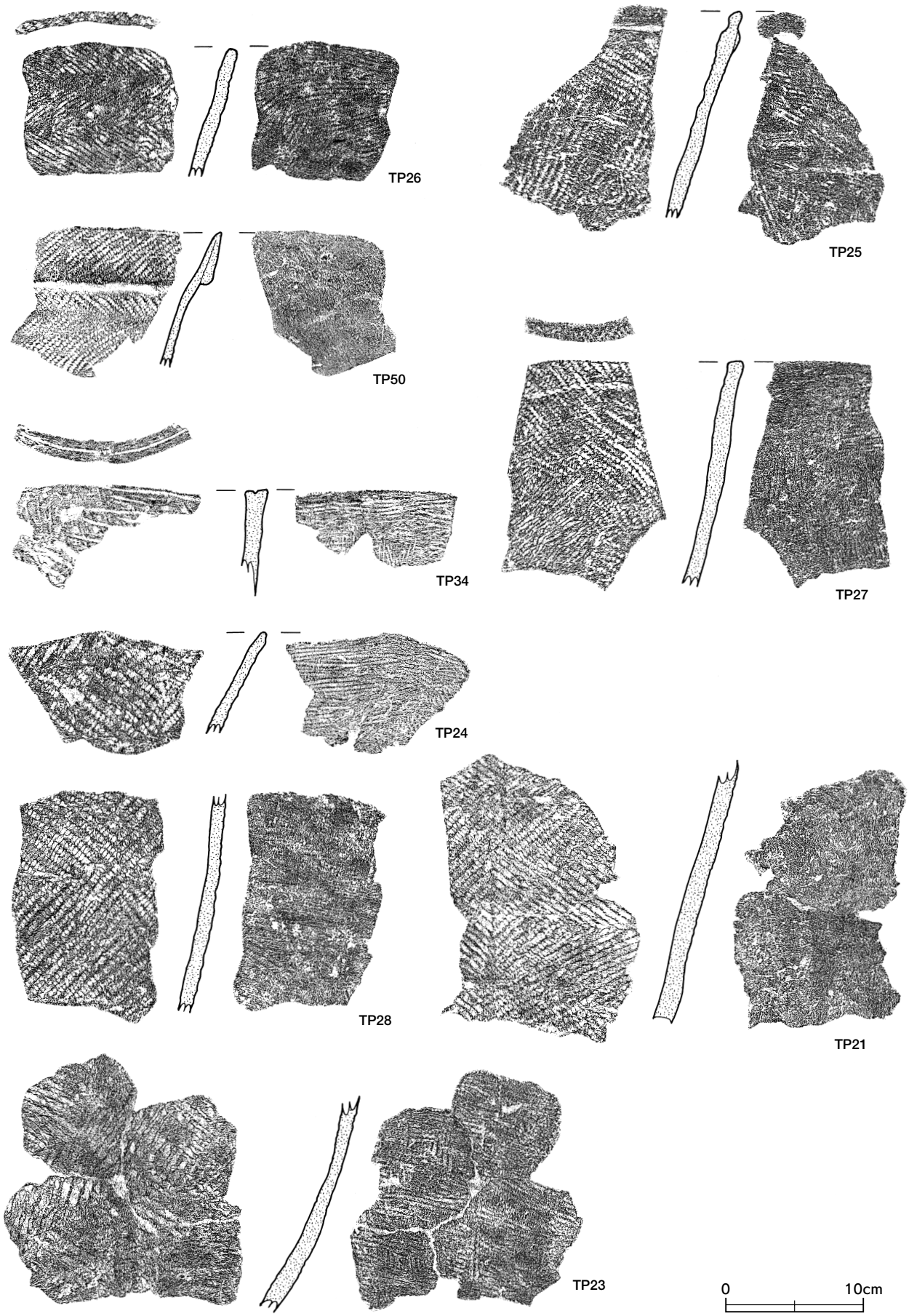
第61図　第１号遺物包含層出土遺物実測図（２）



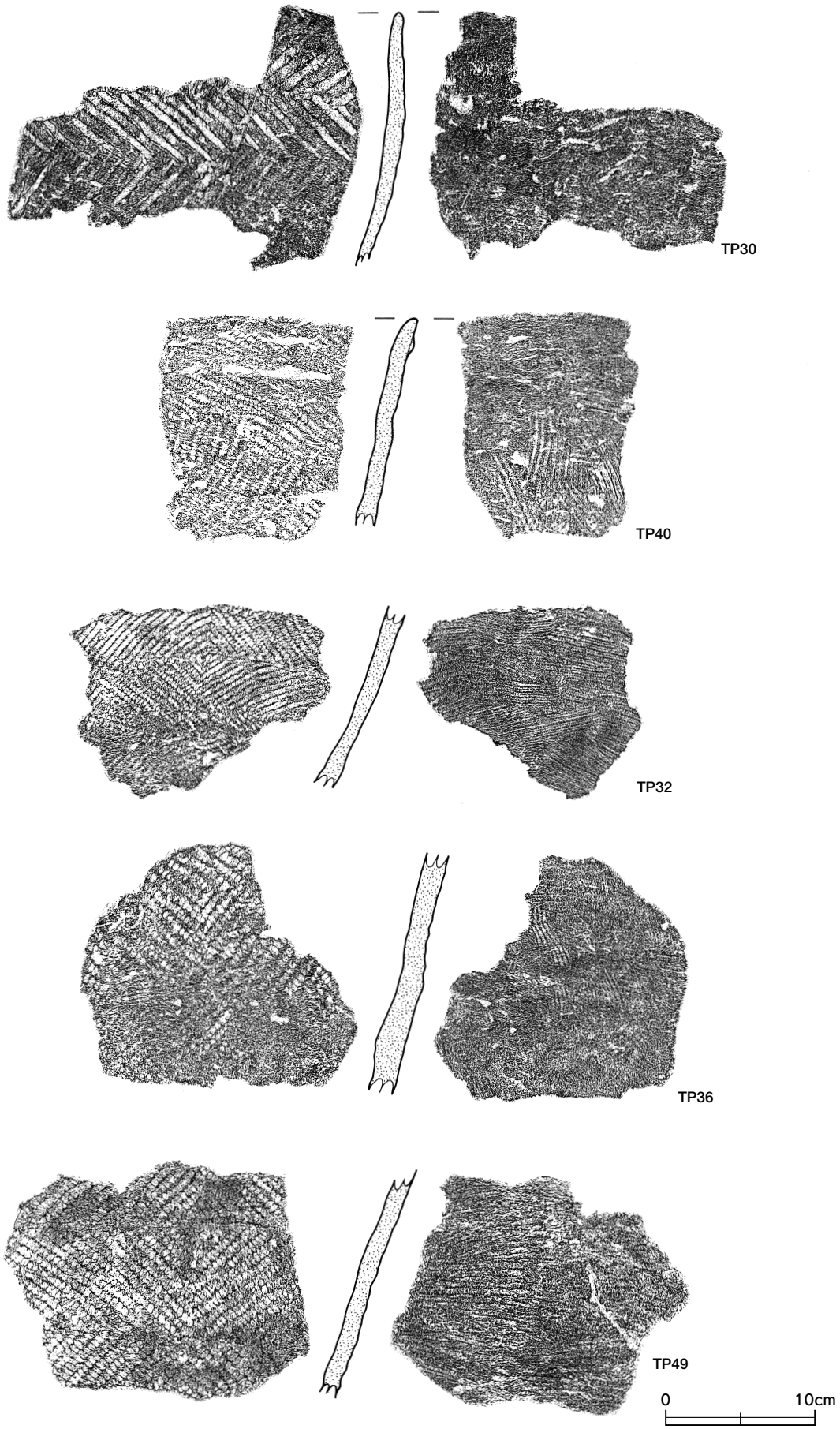
第62図　第１号遺物包含層出土遺物実測図（３）



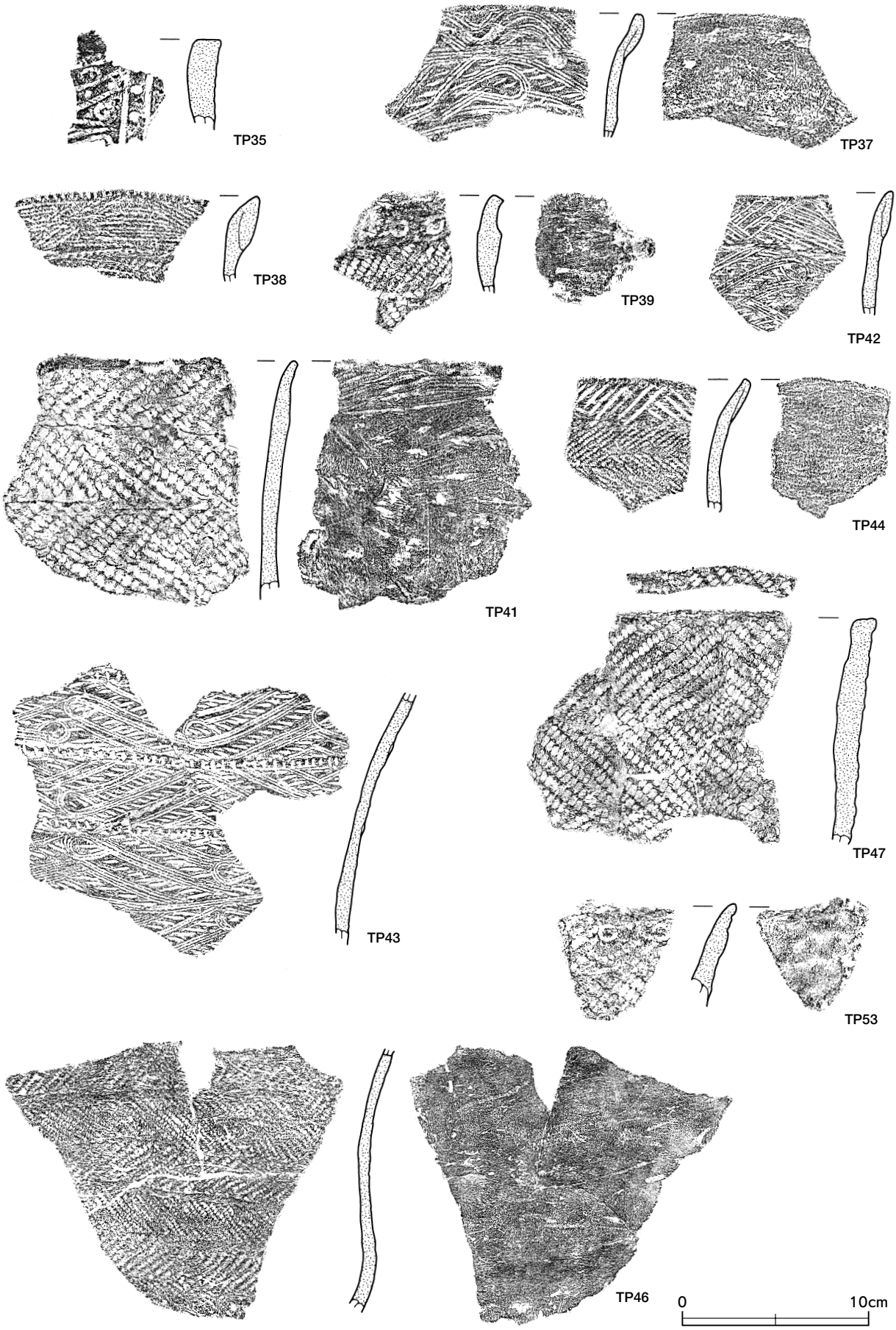
第63図　第１号遺物包含層出土遺物実測図（４）



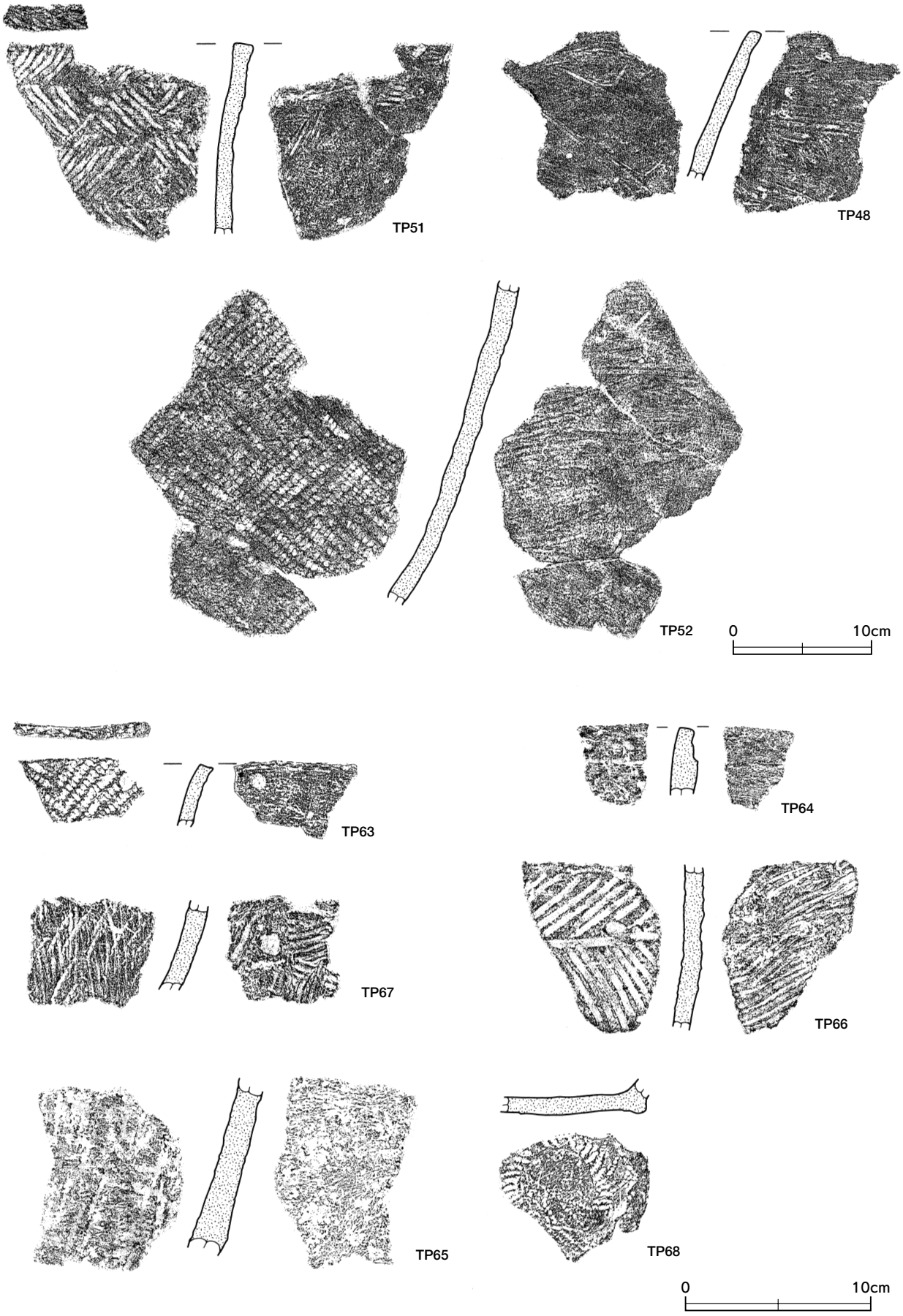
第64図　第１号遺物包含層出土遺物実測図（５）



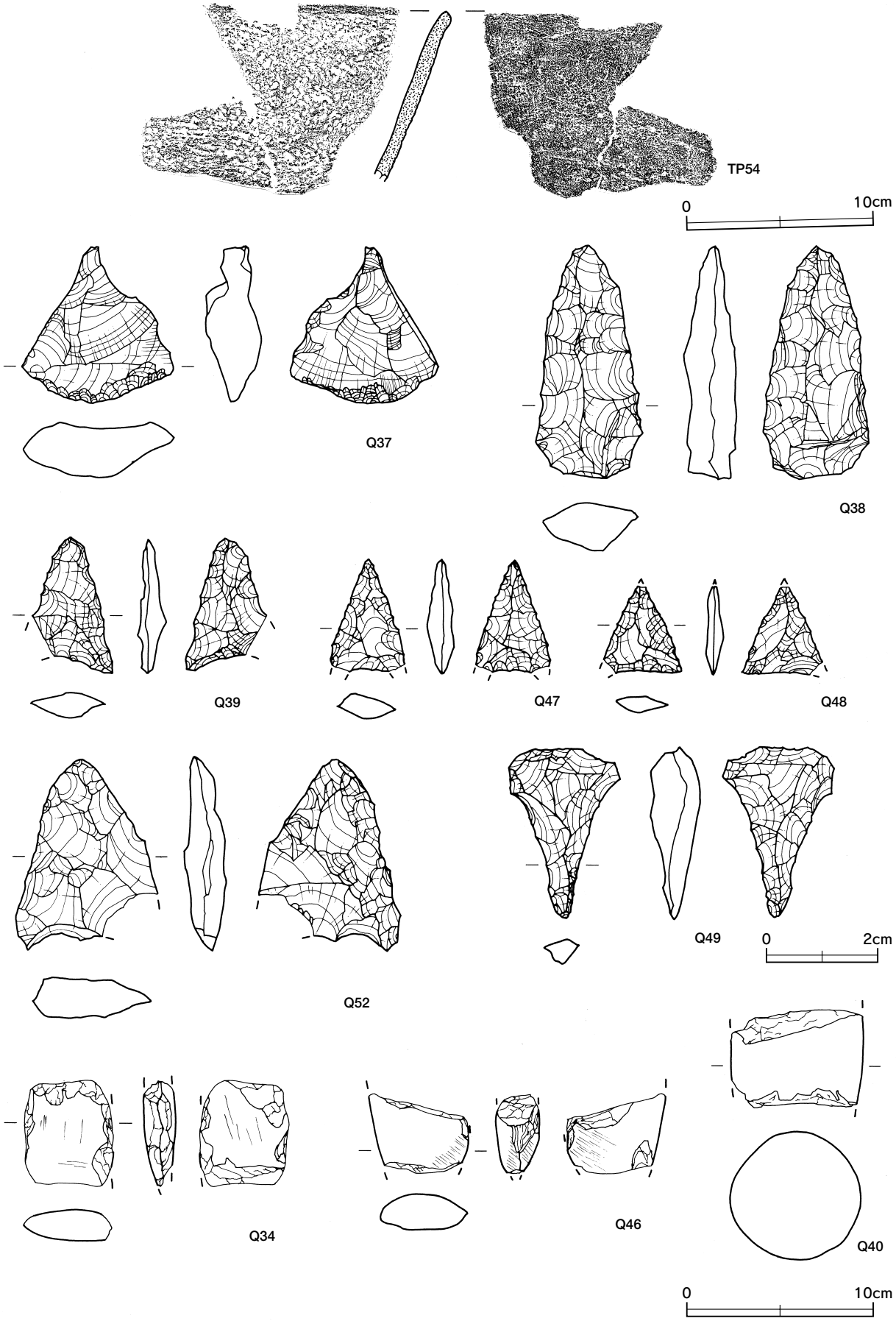
第65図　第１号遺物包含層出土遺物実測図（６）



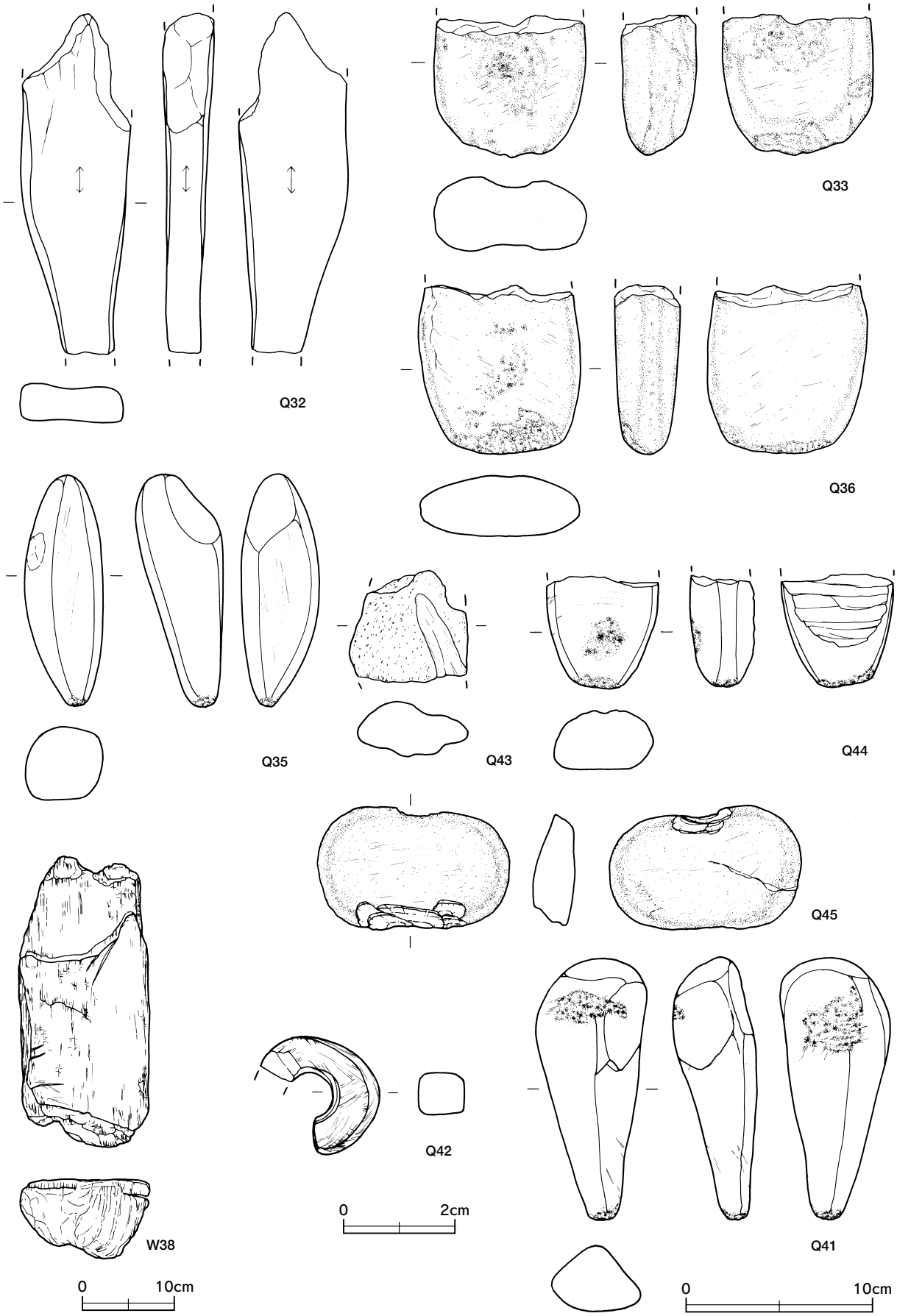
第66図　第１号遺物包含層出土遺物実測図（７）



第67図　第１号遺物包含層出土遺物実測図（８）



第68図　第１号遺物包含層出土遺物実測図（９）



第69図　第１号遺物包含層出土遺物実測図（10）

第１号遺物包含層出土遺物観察表（第60～69図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
162	縄文土器	深鉢	－	(11.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外面単節ＬＲとＲＬの羽状縄文　内面ヘラ状工具による調整	B4g5	20%　内・外面炭化物付着
163	縄文土器	深鉢	－	(8.4)	[14.0]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	底裏面単節ＲＬの縄文を回転施文　胴部単節ＬＲとＲＬの羽状縄文，内面指頭痕	B4g5	10%　内・外面炭化物付着
164	縄文土器	深鉢	－	(2.9)	6.4	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	上げ底　　内・外面繊維脱痕	B4g6	内面炭化物付着　ＰＬ19
165	縄文土器	深鉢	[25.8]	(22.5)	－	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	口縁部に隆帯貼付　横位の縄文圧痕　外面無節ＬとＲの羽状縄文　内面条痕文	B4g7	内・外面炭化物付着　ＰＬ18
167	縄文土器	深鉢	[21.7]	(10.0)	－	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	外面単節ＬＲとＲＬ羽状縄文　内面条痕文	B4h6	内・外面炭化物付着　ＰＬ18
168	縄文土器	深鉢	－	(7.7)	－	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	外面単節ＬＲとＲＬの羽状縄文　内面条痕文	B4h6	内・外面炭化物付着
169	縄文土器	深鉢	－	(15.0)	－	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	外面単節ＬＲとＲＬの羽状縄文　内面条痕文	B4h6	内・外面炭化物付着
170	縄文土器	深鉢	－	(5.0)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部に円柱形の突体貼付　口縁部を管状工具による刺突列で区画　区画上位には平行沈線　下位には沈線と撚糸による蕨手文と矢羽状刺突列を施文　菱形をモチーフに構成	B4i3	内・外面炭化物付着　ＰＬ19
171	縄文土器	深鉢	－	(3.8)	－	長石・石英・雲母	浅黄	普通	外面単節ＬＲの縄文を回転施文　内面繊維脱痕	B4i3	内・外面炭化物付着
172	縄文土器	深鉢	－	(6.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	外面単節ＲＬの縄文を回転施文　内面繊維脱痕	B4i4	内・外面炭化物付着　ＰＬ18
173	縄文土器	深鉢	－	(2.9)	5.6	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	単節ＲＬの縄文を底裏面と胴部に施文　内面繊維脱痕	B4i4	内・外面炭化物付着
174	縄文土器	深鉢	－	(4.9)	－	長石・石英・雲母	オリーブ黒	普通	口唇部に楕円形の隆帯を貼付けた角状突起を有す　管状工具による刺突列による区画　区画内に撚糸圧痕　胴部単節ＬＲとＲＬの羽状縄文　内面条痕文	B4i5	内・外面炭化物付着　ＰＬ19
175	縄文土器	深鉢	17.5	(16.3)	－	長石・石英・雲母	黄褐	普通	外面無節ＬとＲの羽状縄文　内面条痕文　補修孔２か所有り	B4i6	内・外面炭化物付着　ＰＬ18
176	縄文土器	深鉢	－	(16.9)	[11.0]	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	外面無節ＬとＲの羽状縄文　底裏面無節Ｌの縄文を回転施文　内面繊維脱痕	B4i6	内・外面炭化物付着　ＰＬ17
177	縄文土器	深鉢	－	(4.8)	8.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外面単節ＬＲの縄文　内面ヘラ状工具による調整	B4i6	内・外面炭化物付着　ＰＬ18
178	縄文土器	深鉢	[33.2]	(16.9)	－	長石・石英・雲母	黄灰	普通	口唇部無節Ｒの縄文施文　外面無節ＬとＲの羽状状文　菱形構成　縦・横位の疑似貼付　内面口縁部にも同一原体による施文	B4i7	内・外面炭化物付着　ＰＬ20
179	縄文土器	深鉢	－	(4.1)	6.8	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	底裏面外周部から緩やかに立ち上がる上げ底　胴部無節Ｌの縄文施文	B4j3	内・外面炭化物付着
180	縄文土器	深鉢	23.5	(19.0)	－	長石・石英・雲母	灰黄	普通	折り返しによる縁帯部　外面単節ＬＲとＲＬの羽状縄文　内面ヘラ条工具による調整　補修孔２か所	B4j5	内・外面炭化物付着　ＰＬ17
181	縄文土器	深鉢	[36.3]	(31.3)	－	長石・石英・雲母	灰黄	普通	波状口縁　外面単節ＬＲとＲＬ羽状縄文　内面条痕文	B4j5	30%　内・外面炭化物付着　ＰＬ20
182	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	外面単節ＲＬの縄文　内面ヘラ状工具による調整	B4j6	内・外面炭化物付着
183	縄文土器	深鉢	[29.2]	(7.9)	－	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	折り返しによる縁帯部　外面単節ＬＲとＲＬの羽状縄文　内面ヘラ状工具による調整	C4a2	内・外面炭化物付着　ＰＬ19
185	縄文土器	深鉢	－	(14.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	外面無節ＬとＲの羽状縄文　内面ヘラ状工具による調整	C4a3	内・外面炭化物付着
186	縄文土器	深鉢	－	(2.5)	5.8	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	底裏面単節ＲＬの縄文を全面に回転施文　胴部同一原体による施文	C4b2	ＰＬ18

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
TP12	縄文土器	深鉢	－	(14.2)	－	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	菱形をモチーフとする　横位の刺突列で区画　上位区画内に撚糸による蕨手文を圧痕　撚糸圧痕文内に平行沈線　下位は単節ＬＲとＲＬの羽状縄文を施文　内面ヘラ状工具による磨き	B4g6	内・外面炭化物付着 ＰＬ19
TP13	縄文土器	深鉢	－	(12.0)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部隆帯貼付　外面無節ＬとＲの羽状縄文　内面条痕文	B4h4	内・外面炭化物付着
TP15	縄文土器	深鉢	－	(6.2)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外面に細い隆帯による区画　区画内に撚糸による蕨手文を圧痕　菱形をモチーフにした刺突列	B4h4	内・外面炭化物付着 ＰＬ19
TP16	縄文土器	深鉢	－	(6.1)	－	長石・石英・雲母	褐灰	普通	管状工具による横位の刺突列で区画　区画内に撚糸による蕨手文を圧痕し菱形を構成　撚糸圧痕文内に平行沈線　胴部単節ＬＲとＲＬの羽状縄文を施文　内面ヘラ状工具による磨き	B4h5	内・外面炭化物付着 ＰＬ20
TP17	縄文土器	深鉢	－	(17.3)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	外面無節ＬとＲの羽状縄文　菱形構成　補修孔１か所	B4h5	内・外面炭化物付着
TP18	縄文土器	深鉢	－	(18.5)	－	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部単節Ｒの縄文　口縁部横位の縄文圧痕２条　外面単節ＬＲとＲＬの羽状縄文　横位の疑似貼付，内面条痕文	B4h6 B4i5	内・外面炭化物付着
TP19	縄文土器	深鉢	－	(7.7)	－	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部単節ＲＬの縄文押圧　外面単節ＬＲとＲＬの羽状縄文　口縁部磨り消し内面条痕文	B4h6	内・外面炭化物付着
TP20	縄文土器	深鉢	－	(9.9)	－	長石・石英・雲母	灰褐	普通	管状工具による横位の刺突列で区画　区画内に撚糸による蕨手文を圧痕し菱形を構成　撚糸圧痕文内に平行沈線　胴部単節ＬＲとＲＬの羽状縄文を施文　内面ヘラ状工具による磨き	B4h6	内・外面炭化物付着 ＰＬ19
TP21	縄文土器	深鉢	－	(18.8)	－	長石・石英・雲母	灰褐	普通	外面単節ＬＲとＲＬの羽状縄文　菱形構成　縦位の疑似貼付　繊維脱痕	B4h6	内・外面炭化物付着
TP22	縄文土器	深鉢	－	(14.0)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	外面単節ＬＲとＲＬの羽状縄文　内面条痕文　繊維脱痕	B4h6	内・外面炭化物付着
TP23	縄文土器	深鉢	－	(15.5)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	外面無節Ｒを横位に施文後無節Ｌを斜位に施文　内面条痕文	B4i2	内・外面炭化物付着
TP24	縄文土器	深鉢	－	(7.4)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	外面波状口縁　単節ＬＲとＲＬ羽状縄文菱形構成　内面条痕文	B4i3	内・外面炭化物付着
TP25	縄文土器	深鉢	－	(14.3)	－	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	口縁部に隆帯貼付　外面単節ＬＲとＲＬの羽状縄文　内面条痕文	B4i3	内・外面炭化物付着
TP26	縄文土器	深鉢	－	(9.2)	－	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	口唇部単節ＲＬの縄文　外面無節ＬＲとＲＬの羽状縄文　内面条痕文	B4i4	内・外面炭化物付着
TP27	縄文土器	深鉢	－	(16.0)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部単節ＲＬの縄文を施文　口縁部に横位の縄文押圧　外面単節ＬＲとＲＬの羽状状文を施文　内面条痕文	B4i4	内・外面炭化物付着 ＰＬ19
TP28	縄文土器	深鉢	－	(15.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	外面単節ＬＲとＲＬの羽状縄文　菱形構成　横位の疑似貼付　内面条痕文	B4i4	内・外面炭化物付着
TP30	縄文土器	深鉢	－	(16.6)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	外面無節ＬとＲの羽状縄文　内面条痕文	B4i5	内・外面炭化物付着
TP32	縄文土器	深鉢	－	(12.1)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	外面無節Ｒと単節ＬＲの羽状縄文　菱形構成に施文　内面貝殻条痕文を施文	B4i5	内・外面炭化物付着 ＰＬ20
TP34	縄文土器	深鉢	－	(7.5)	－	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口唇部と外綿に圧痕による撚糸文を施文　撚糸文沿いに管状工具による刺突列　内面条痕文	B4i6	内・外面炭化物付着
TP35	縄文土器	深鉢	－	(4.9)	－	長石・石英・雲母	黒褐	普通	撚糸による２条の圧痕が下垂し区画　区画内に管状工具による刺突列　撚糸による蕨手文を押圧し刺突列を施文	B4i6	内・外面炭化物付着 ＰＬ19
TP36	縄文土器	深鉢	－	(16.0)	－	長石・石英・雲母	黄灰	普通	外面単節ＬＲとＲＬの整った羽状縄文菱形構成に施文　内面貝殻条痕文を施文	B4i6	内・外面炭化物付着
TP37	縄文土器	深鉢	－	(6.6)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	折り返しによる縁帯部に撚糸の山形文を施文　細い隆帯を貼付け区画　区画内に撚糸による蕨手文を押圧し　ヘラ条工具による刺突列を施文　補修孔１か所	B4j2	内・外面炭化物付着 ＰＬ19

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
TP38	縄文土器	深鉢	－	(4.5)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	縁帯部に撚糸を横位に押圧後同一原体を山形に押圧　胴部単節Ｌの縄文を施文　内面繊維脱痕	B4j2	内・外面炭化物付着 ＰＬ19
TP39	縄文土器	深鉢	－	(5.2)	－	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口縁部管状工具による刺突列　外面単節ＲＬの縄文　内面条痕文	B4j2	内・外面炭化物付着 ＰＬ19
TP40	縄文土器	深鉢	－	(12.0)	－	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	口縁部に隆帯貼付　外面単節ＬＲとＲＬの羽状縄文　内面条痕文	B4j3	内・外面炭化物付着
TP41	縄文土器	深鉢	－	(12.2)	－	長石・石英・雲母		普通	外面単節ＬＲとＲＬの羽状縄文　菱形構成に施文　横位の疑似貼付　内面条痕施文後ヘラ状工具による磨り消し	B4j3	内・外面炭化物付着
TP42	縄文土器	深鉢	－	(6.7)	－	長石・石英・雲母	黒褐	普通	折り返しによる縁帯部　山形の集合沈線を施文　胴部菱形をモチーフに撚糸による蕨手文を押圧し区画　区画内にヘラ条工具による刺突列	B4j3	内・外面炭化物付着 ＰＬ19
TP43	縄文土器	深鉢	－	(13.4)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	外面に細い隆帯貼付による区画　隆帯に半截竹管状工具による刺突列　区画内に撚糸による蕨手文を圧痕　菱形をモチーフとしたヘラ状工具による刺突列　内面丁寧な磨き	B4j3	内・外面炭化物付着 ＰＬ19
TP44	縄文土器	深鉢	－	(7.2)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	折り返しによる縁帯部　山形の集合沈線を施文　胴部単節ＬＲとＲＬの羽状状文を施文　内面磨き	B4j4	内・外面炭化物付着 ＰＬ19
TP46	縄文土器	深鉢	－	(14.2)	－	長石・石英・雲母	褐灰	普通	外面単節ＬＲの羽状縄文　内面丁寧な磨き　繊維脱痕有り	B4j4	内・外面炭化物付着
TP47	縄文土器	深鉢	－	(12.2)	－	長石・石英・雲母	黒	普通	口唇部単節ＬＲの縄文施文　体部外面単節ＬＲとＲＬ羽状縄文　菱形構成　内面ヘラ条工具による調整　指頭痕	B4j5	内・外面炭化物付着 ＰＬ19
TP48	縄文土器	深鉢	－	(10.8)	－	長石・石英・雲母	灰褐	普通	内・外面ヘラ条工具による調整　指頭痕	B4j5	内・外面炭化物付着 ＰＬ19
TP49	縄文土器	深鉢	－	(16.2)	－	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	外面単節ＬＲとＲＬの羽状縄文　菱形構成文　縦・横位の疑似貼付　内面条痕文	B4j5	内・外面炭化物付着 ＰＬ20
TP50	縄文土器	深鉢	－	(9.5)	－	長石・石英・雲母	灰褐	普通	折り返しによる縁帯部　外面単節ＬとＲの羽状状文を施文　内面磨き　繊維脱痕	C4a2	内・外面炭化物付着 ＰＬ19
TP51	縄文土器	深鉢	－	(13.6)	－	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	口唇部無節縄文　外面無節ＬとＲの縄文施文　菱形構成　内面条痕文	C4a2	内・外面炭化物付着
TP52	縄文土器	深鉢	－	(22.9)	－	長石・石英・雲母	黒褐	普通	外面単節ＬＲとＲＬの羽状縄文　菱形構成　縦位の疑似貼付　内面条痕文	C4a2	内・外面炭化物付着
TP53	縄文土器	深鉢	－	(5.4)	－	長石・石英・雲母	黒	普通	口縁部隆帯貼付による区画　区画内に管状工具による刺突列　内面繊維脱痕	C4b4	内・外面炭化物付着 ＰＬ19
TP54	縄文土器	深鉢	－	(9.2)	－	長石・石英・雲母	灰褐	普通	外面にＬＬＲＲの組紐文　内面指頭痕　繊維脱痕有り	C4d7	内・外面炭化物付着 ＰＬ19
TP63	縄文土器	深鉢	－	(3.3)	－	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部単節ＬＲの縄文　外面単節ＬＲとＲＬの縄文　内・外面に補修痕有り	B4j2	内・外面炭化物付着 ＰＬ20
TP64	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部外面半截竹管条工具による刺突列　胴部外面無節Ｌの縄文	B4j3	内・外面炭化物付着
TP65	縄文土器	深鉢	－	(9.7)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外面縦位の貝殻復縁文　内面指頭痕　繊維脱痕	B4j2	内・外面炭化物付着
TP66	縄文土器	深鉢	－	(9.0)	－	長石・石英・雲母	褐灰	普通	外面ヘラ条工具による横位の沈線で区画　平行沈線による羽状構成　内面条痕文	B4i5	内・外面炭化物付着
TP67	縄文土器	深鉢	－	(4.8)	－	長石・石英・雲母	灰褐	普通	外面縦位の条痕文施文後斜位の貝殻復縁文　内面条痕文	B4i5	内・外面炭化物付着
TP68	縄文土器	深鉢	－	(1.9)	－	長石・石英・雲母	灰褐	普通	底裏面外周部から緩やかに立ち上がる上げ底　単節ＬＲの縄文を回転施文	B4j2	内・外面炭化物付着

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q32	砥石	(18.2)	(5.5)	(2.6)	(320)	砂岩	砥面４面　表裏面中央部に凹み	B4g5	ＰＬ21
Q33	磨石	(7.6)	8.1	(4.0)	(360)	安山岩	全面を研磨面に使用　端部に敲打痕　表裏面に凹み有り	B4h3	
Q34	石斧	(5.7)	(4.7)	(1.8)	(77.0)	緑色片岩	表裏面研磨痕　刃部欠損　摩滅	B4h6	
Q35	敲石	12.6	4.3	4.6	280	砂岩	端部に敲打痕　側面研磨　１面に凹み有り　磨石兼用ヵ	B4h7	ＰＬ21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q36	磨石	(9.1)	8.6	(3.5)	(450)	安山岩	全面を研磨面に使用　端部に敲打痕	B4i4	
Q37	石匙	2.8	2.7	1.0	3.7	黒曜石	形状は扇状　表裏先端部剥離調整	B4i5	ＰＬ21
Q38	尖頭器	(4.5)	(2.0)	(0.9)	(6.1)	硬質頁岩	木葉形　表裏押圧剥離調整　基部欠損	B4i5	ＰＬ21
Q39	鏃	(2.4)	(1.5)	0.5	(1.0)	瑪瑙	凹基無茎鏃　表裏押圧剥離調整	B4i5	ＰＬ21
Q40	石棒ヵ	(5.4)	(7.1)	7.9	(380)	安山岩	側面は丁寧な研磨	B4i6	
Q41	敲石	14.1	6.0	4.6	360	安山岩	端部に敲打痕　側面研磨　１面に凹み有り　磨石兼用ヵ	B4j2	
Q42	玦状耳飾り	2.1	(2.1)	0.8	3.8	滑石	一方向からの穿孔　孔径0.8～1.0㎝	B4j4	ＰＬ21
Q43	砥石	(6.0)	6.3	(2.8)	(68.3)	軽石	砥面１面　溝状の研磨痕	B4j5	ＰＬ21
Q44	敲石	(6.0)	(6.0)	(3.4)	(175.3)	頁岩	端部に敲打痕　１面に凹み有り	B4g7	
Q45	石錘	6.6	10.3	2.3	220	緑色凝灰岩	長軸両端に抉れ　自然礫使用	B4i4	
Q46	磨製石斧	(4.3)	(5.3)	(2.3)	(69.6)	凝灰岩	刃部欠損　弱凸強凸片刃ヵ　表裏丁寧な研磨	B4j4	
Q47	鏃	(2.0)	1.35	0.5	(0.4)	チャート	平基無茎鏃　表裏面押圧剥離	B4i6	ＰＬ21
Q48	鏃	(1.6)	(1.4)	0.35	(0.5)	珪岩	平基無茎鏃　表裏面押圧剥離	B4j3	ＰＬ21
Q49	石錐	3.1	2.0	0.9	3.3	チャート	表裏押圧剥離調整　断面菱形	Aトレンチ	ＰＬ21
Q52	鏃	(3.45)	(2.55)	0.7	(5.1)	チャート	表裏押圧剥離調整　未製品ヵ	B4j3	ＰＬ21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	特　　徴	出土位置	備　考
W38	杭	(31.5)	13.6	8.5	丸材　打割による半截ヵ　底部に段有り　調整痕ヵ　樹皮面全体に焦げ痕	B4g5	ＰＬ24

（２）奈良時代・平安時代

第２号遺物包含層（第70～74図・付図）

位置　調査Ⅲ区の東部の台地裾部から南西に傾斜する谷部に位置している。

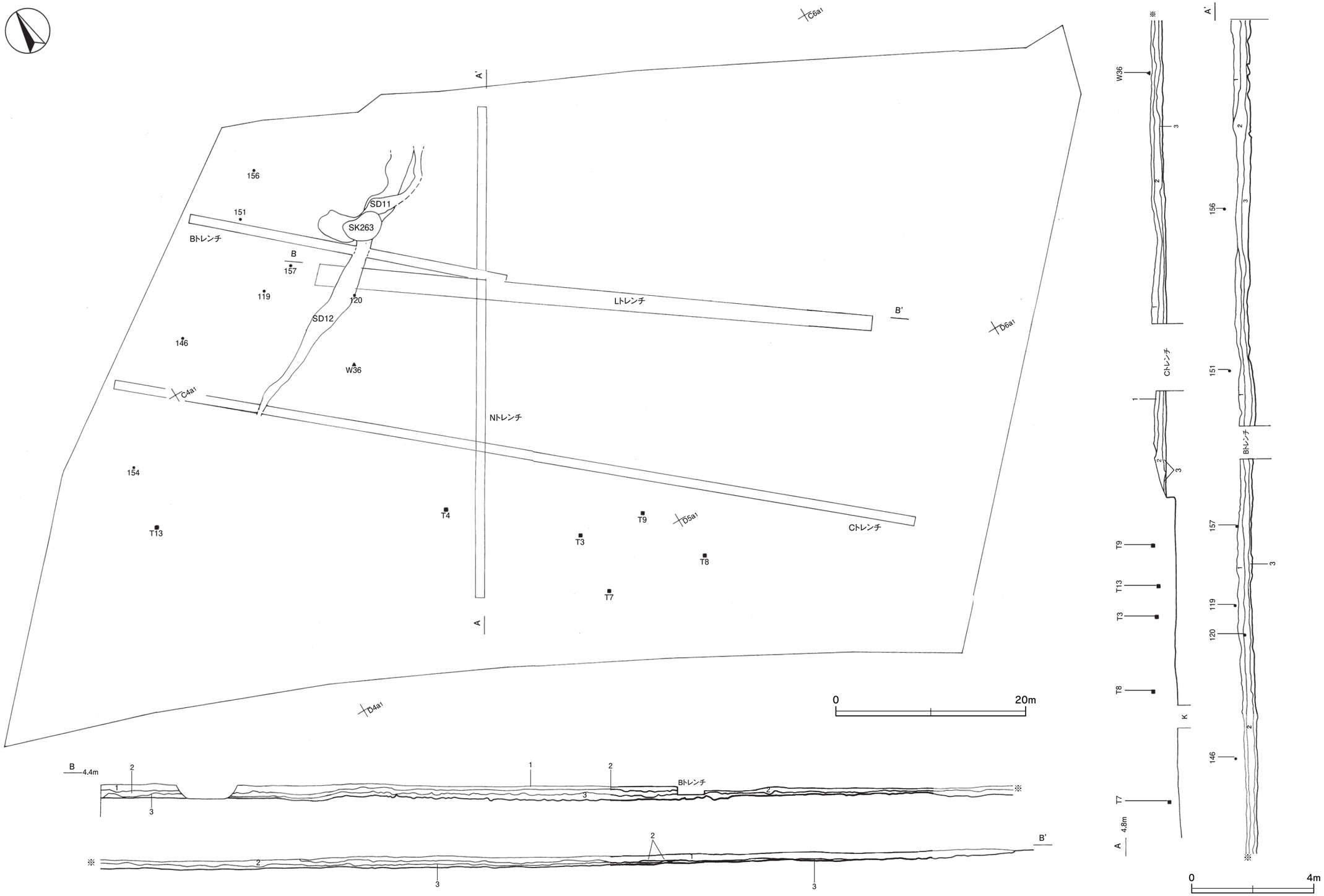
規模　南北軸70m，東西軸110m，厚さ50㎝ほどにわたって遺物が包含されている。

覆土　３層に分層される。流れ込みによる自然堆積と考えられるが，遺物が全体的に混入しており，耕作により撹拌されている可能性がある。

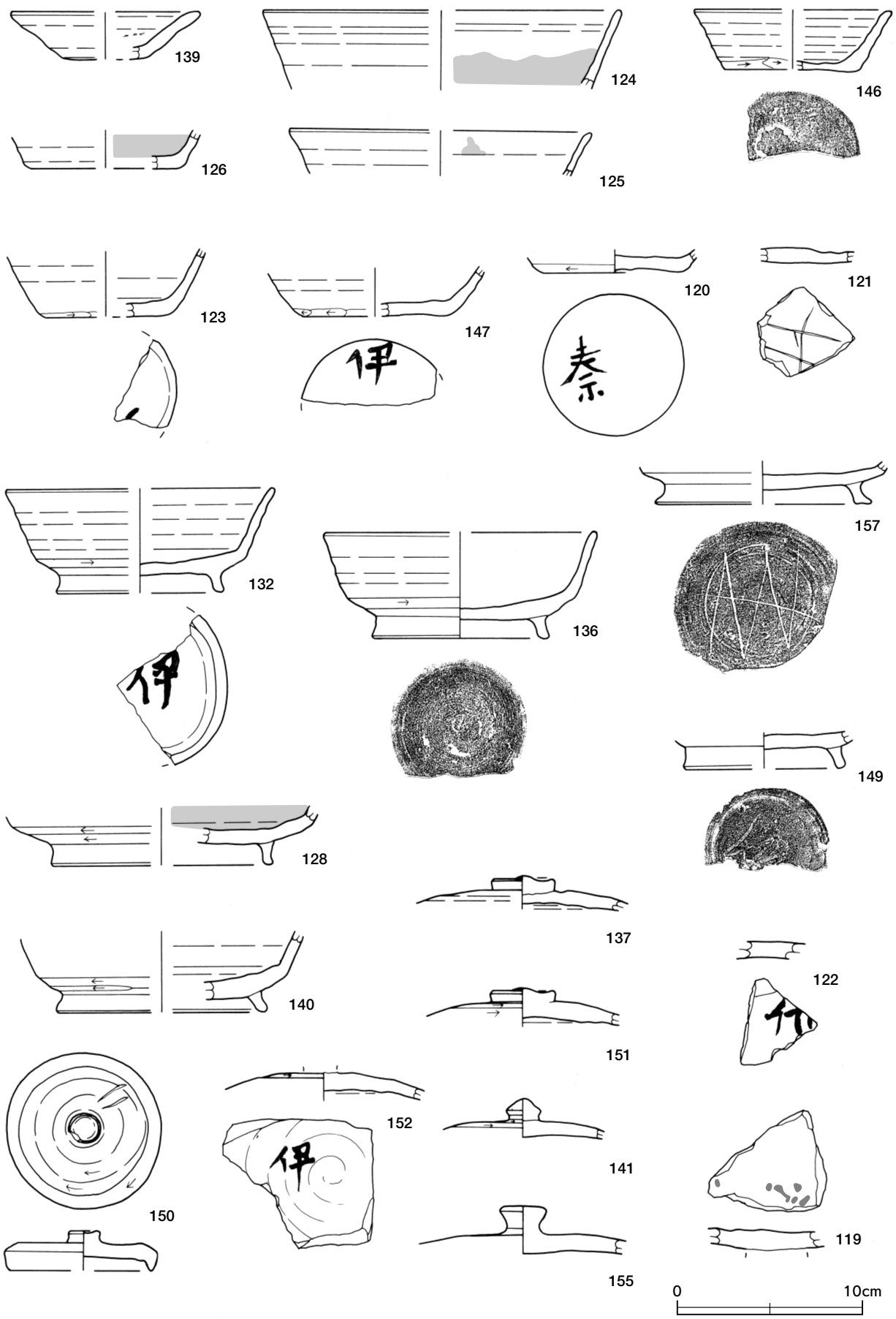
土層解説　第１～３層は基本土層の第６～８層に相当する。
1　黒 褐 色　鉄分少量，細礫微量
2　黒 褐 色　鉄分少量，砂粒・木片微量
3　黒 褐 色　炭化物・粘土粒子・鉄分・木片微量

遺物出土状況　土師器片4,930点（坏740，高坏19，椀106，鉢１，甕4,064），須恵器片2,137点（坏657，高台付坏162，蓋224，盤６，高盤９，瓶11，壺４，甕1,064），灰釉陶器片84点，瓦片551点，刀子１点，土鈴１点，砥石５点，炉壁３点，鉄滓９点，種子９点（桃）が出土している。北部からは墨書土器「伊」や線刻された土器片が，北東部からは漆が付着した須恵器片（坏，高台付坏）が出土している。中央部付近では，硯に転用した須恵器片（鉢ヵ），南東に位置するD5a1区では，緑釉陶器片（皿）２点，Ｔ３・Ｔ４は南部で出土している。

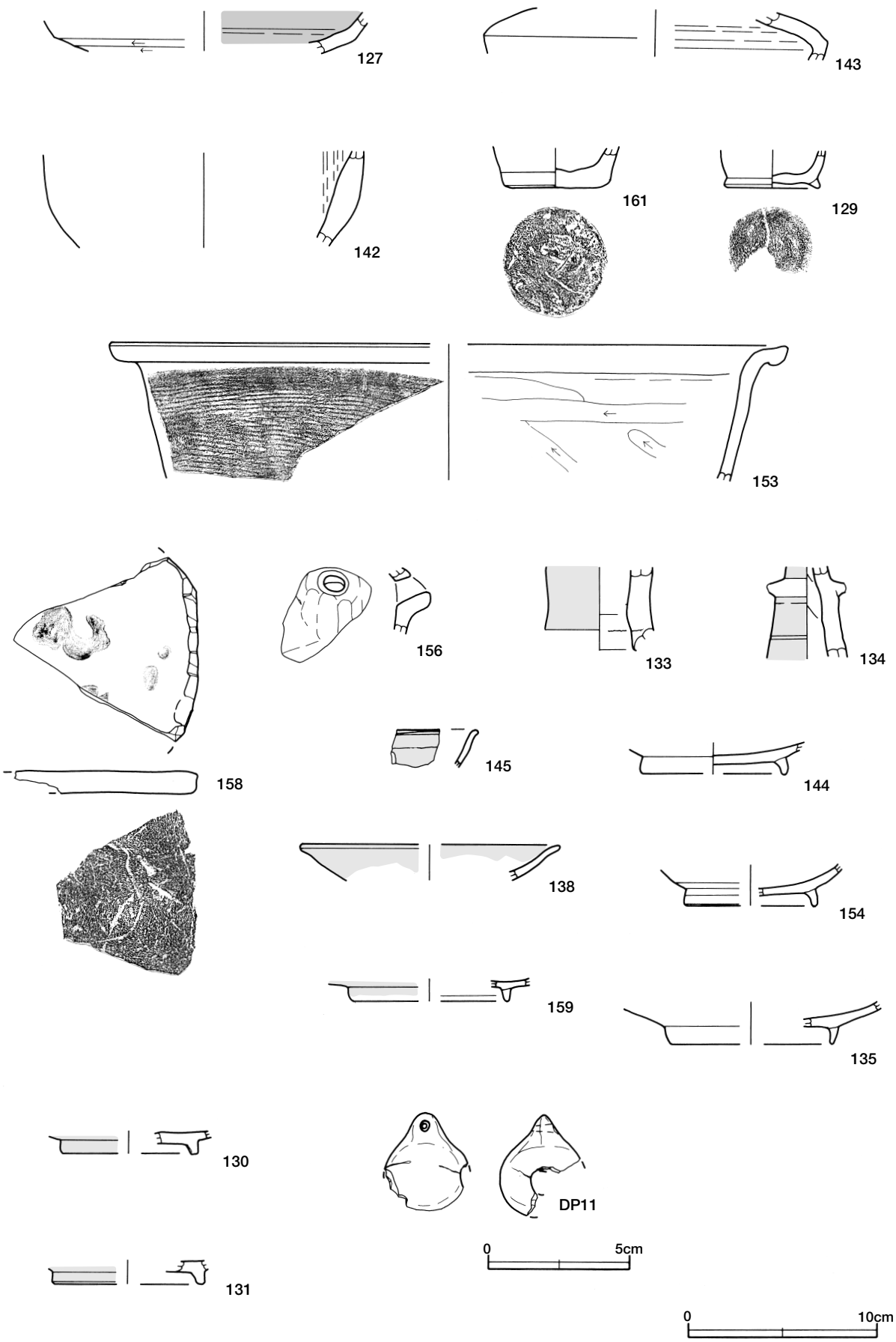
所見　奈良時代から平安時代にかけての土器片が多量に出土している。ほとんどが細片で，中には摩滅が激しいものもあることから，投棄又は流れ込んだものと考えられる。覆土は３層に分層されるが，遺物は全体的に分布しており，覆土の上層から下層にかけて８世紀～９世紀末を中心とする土器片が混在している。水田として利用されていたことが推測されることから，水田耕作により撹拌されている可能性がある。出土遺物の中には瓦，浄瓶，緑釉陶器（小皿），漆が付着した土器片なども出土しており，周辺遺跡との関わりを考慮しなければならない。



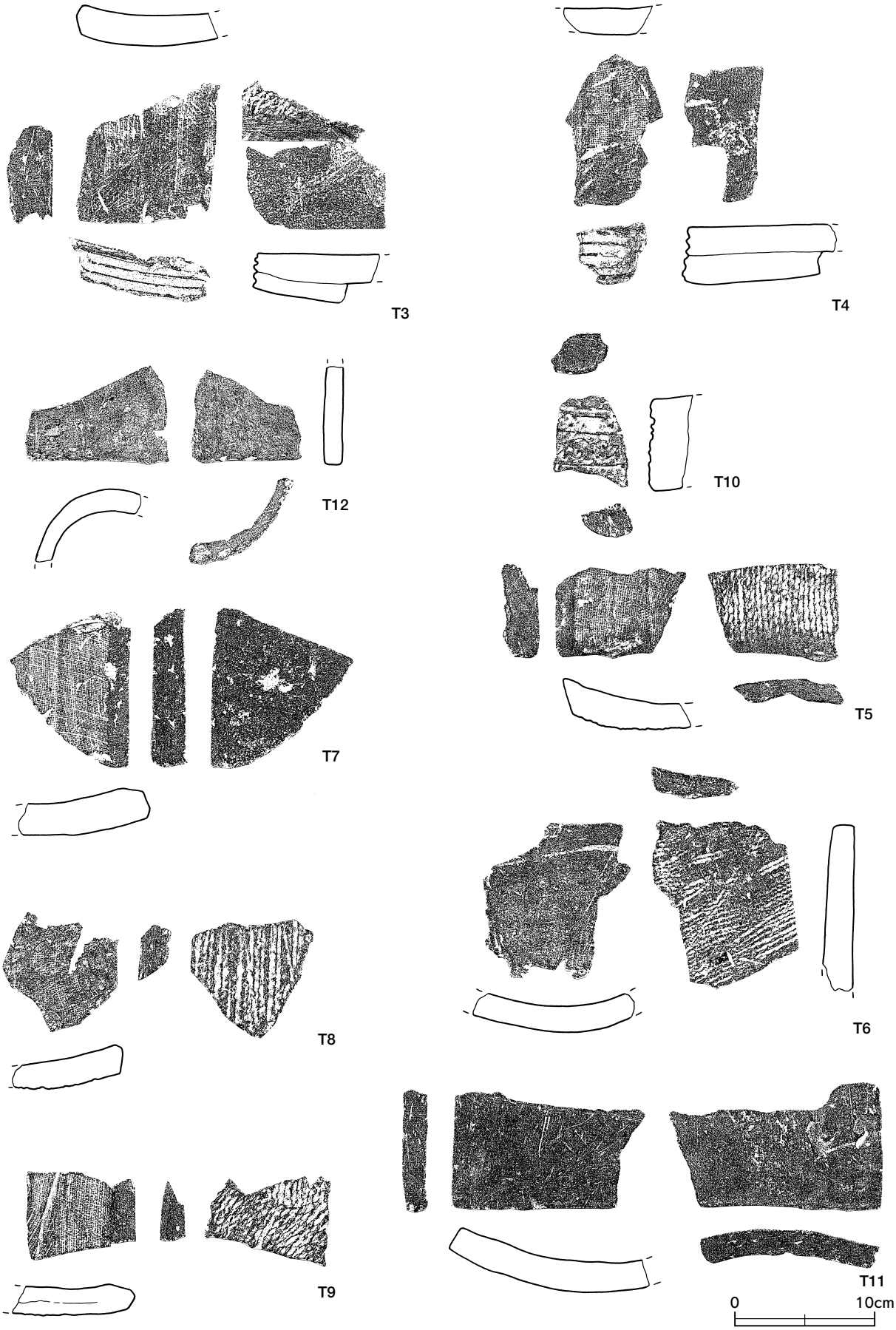
第70図　第２号遺物包含層実測図



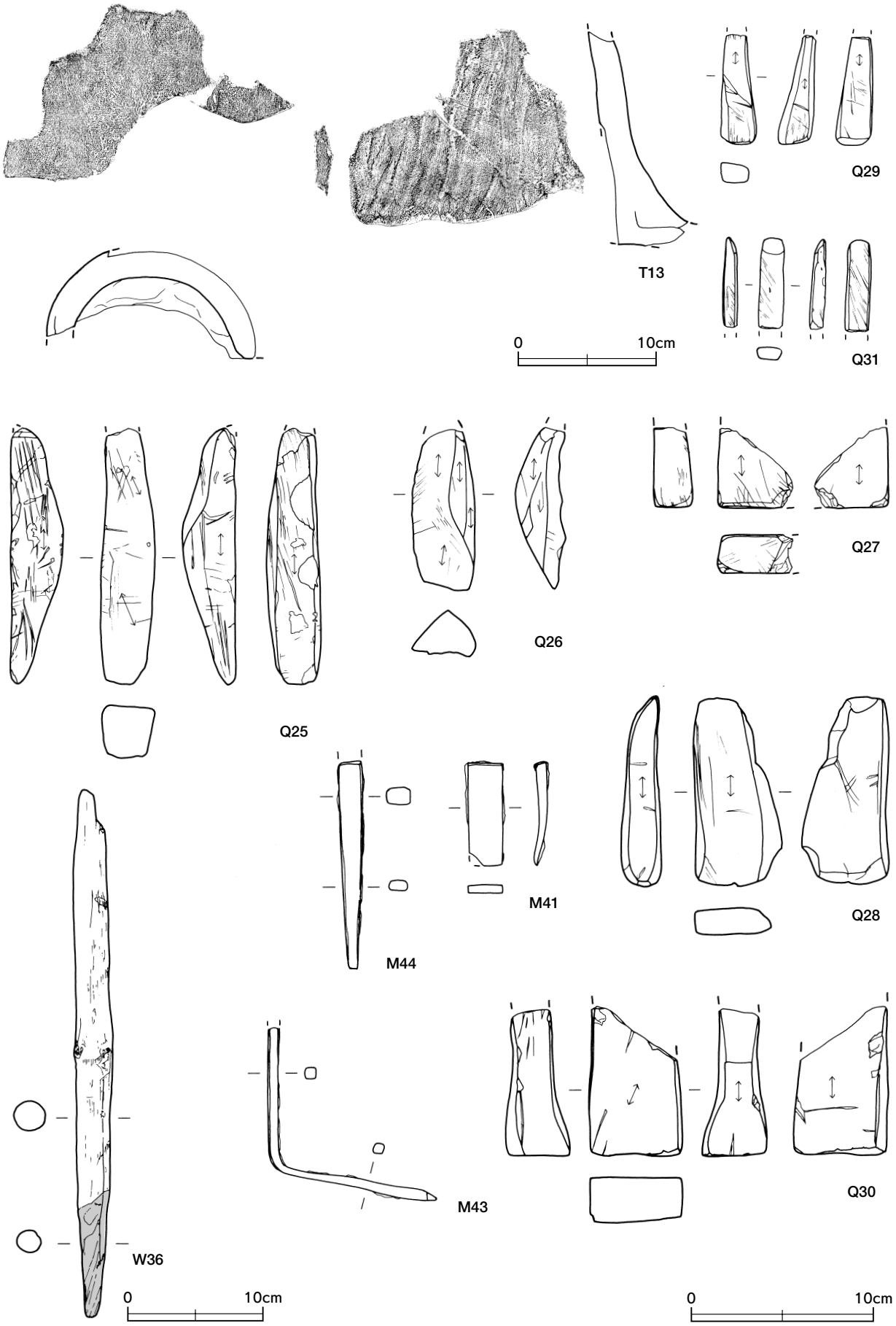
第71図　第２号遺物包含層出土遺物実測図（１）



第72図　第２号遺物包含層出土遺物実測図（２）



第73図　第２号遺物包含層出土遺物実測図（３）



第74図　第２号遺物包含層出土遺物実測図（４）

第２号遺物包含層出土遺物観察表（第71～74図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
119	須恵器	蓋	－	－	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	つまみ部剥離　天井部回転ヘラ削り	B4i4	灯明皿転用
120	須恵器	坏	－	(1.3)	7.6	長石・石英	灰白	普通	体部外面下端回転ヘラ削り　底部回転ヘラ切り	C4a6	25% 底部外面墨書「上色ヵ」 PL17
121	須恵器	坏	－	(0.9)	－	長石・石英・雲母	灰白	普通	底部回転ヘラ切り	南西部第２層中	底部外面線刻　ＰＬ17
122	須恵器	蓋	－	(1.0)	－	長石・石英・雲母	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り	南西部覆土中	内面墨書「□」　ＰＬ16
123	須恵器	坏	－	(3.6)	[6.6]	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外面下端回転ヘラ削り　底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	C4a4	15% 底部外面墨書「□」 PL16
124	須恵器	坏	[19.2]	(4.3)	－	長石・白色粒子	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	C5g6	漆付着
125	須恵器	坏	[16.2]	(2.5)	－	長石・白色粒子	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	C5f9	漆付着
126	須恵器	坏	－	(2.1)	[8.0]	長石・白色粒子	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り後ナデ	C5f6	漆付着
127	須恵器	盤	－	(2.2)	－	長石・針状鉱物	灰	普通	体部外面下端回転ヘラ削り	C5h3	漆付着
128	須恵器	盤	－	(3.1)	[11.7]	長石・針状鉱物	灰	普通	底部外面下端回転ヘラ削り　底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	C5f8	漆付着　127と同一個体ヵ
129	須恵器	瓶	－	(2.0)	4.8	長石・石英	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ　高台貼り付け	C5b5	
130	緑釉陶器	皿	－	(1.2)	[7.2]	緻密・白色粒子	灰・オリーブ	良好	ロクロナデ　釉は刷毛塗り　底部内面に印刻	D5a1	10%　ＰＬ14
131	緑釉陶器	皿	－	(1.3)	[7.8]	緻密	にぶい橙・オリーブ灰	良好	ロクロナデ　釉は刷毛塗り	D5a1	ＰＬ14
132	須恵器	高台付坏	[14.4]	5.7	[8.9]	長石・石英	灰	普通	体部外面下端回転ヘラ削り　底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	Ａトレンチ中央部	30% 底部外面墨書「伊」PL16
133	須恵器	長頸瓶	－	(4.4)	－	長石・黒色粒子・緻密	灰白・暗オリーブ	良好	頸部内面貼り付け痕	Ａトレンチ北部	外面灰釉
134	灰釉陶器	浄瓶	－	(4.9)	－	石英・緻密	灰白・灰オリーブ	良好	頸部外面１本の沈線　内面ヘラナデ　釉は刷毛塗り	Ａトレンチ北部	外面火熱痕　ＰＬ14
135	灰釉陶器	皿	－	(2.3)	[8.5]	緻密	灰白	良好	底部回転ヘラ切り後　高台貼り付け　釉は刷毛塗り　底部内面に重ね焼き痕	Ａトレンチ北部	ＰＬ14
136	須恵器	高台付坏	[14.6]	5.8	9.5	長石・石英・針状鉱物	灰	普通	体部外面下端回転ヘラ削り　底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	Ｂトレンチ西部	50%
137	須恵器	蓋	－	(2.0)	－	長石・石英・雲母	灰	普通	天井部回転ヘラ削り後ナデ　つまみ部貼り付け	Ｂトレンチ西部	ＰＬ14
138	灰釉陶器	皿	[13.5]	(1.8)	－	緻密・黒色粒子	にぶい黄橙・灰白	良好	ロクロナデ	Ｂトレンチ西部	
139	土師器	坏	[10.0]	2.6	[4.8]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り	Ｃトレンチ西部	
140	須恵器	高台付坏	－	(4.4)	[11.0]	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外面下端回転ヘラ削り　底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	Ｃトレンチ西部	10%
141	須恵器	蓋	－	(2.1)	－	長石・石英・雲母	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	Ｃトレンチ西部	10%
142	須恵器	平瓶ヵ	－	(5.0)	－	白色粒子	灰	良好	ロクロナデ	Ｃトレンチ中央部	
143	須恵器	短頸壺	－	(2.5)	－	長石・緻密	灰白	良好	ロクロナデ	Ｃトレンチ西部	
144	灰釉陶器	皿	－	(1.7)	[7.6]	緻密・黒色粒子	灰白	良好	底部回転ヘラ切り後　高台貼り付け	Ｃトレンチ中央部	ＰＬ14
145	灰釉陶器	碗	－	(2.0)	－	緻密・黒色粒子	灰白	良好	ロクロナデ	Ｃトレンチ中央部	
146	須恵器	坏	[10.8]	3.2	[7.4]	長石・石英	灰	普通	体部外面下端手持ちヘラ削り　底部回転ヘラ切り	Ｅトレンチ	15%
147	須恵器	坏	－	(2.7)	[7.8]	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部外面手持ちヘラ削り　底部回転ヘラ切り	Ｅトレンチ	10% 底部外面墨書「伊」PL16
149	須恵器	高台付坏	－	(2.0)	[8.4]	長石・石英・雲母	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	Ｅトレンチ	10%, 底部外面線刻　PL17
150	須恵器	蓋	7.7	2.2	－	長石・石英・雲母	灰	普通	天井部回転ヘラ削り　内面ロクロナデ	Ｅトレンチ中央部	90%　ＰＬ13
151	須恵器	蓋	－	(2.1)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	不良	天井部回転ヘラ削り　つまみ部貼り付け	Ｅトレンチ	40%
152	須恵器	蓋	－	(1.5)	－	長石・石英	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り　内面ロクロナデ	Ｅトレンチ中央部	20% 内面墨書「伊」PL16
153	須恵器	甑	[35.6]	(7.2)	－	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外面平行叩き　内面ヘラ削り	Ｅトレンチ北部	
154	灰釉陶器	碗	－	(2.2)	[6.7]	黒色粒子・緻密	灰白・オリーブ灰	良好	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け　釉は刷毛塗り	B3c8	10%　ＰＬ14
155	須恵器	蓋	－	(2.6)	－	長石・石英	灰	普通	ロクロナデ　つまみ部貼り付け	Ｆトレンチ	30%
156	須恵器	甕	－	(5.1)	－	黒色粒子・緻密	灰白	良好	注口貼り付け後ナデ　降灰による釉付着	B4f5	
157	須恵器	高台付坏	－	(2.4)	[10.6]	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	B4i5	10% 底部外面線刻　PL17
158	須恵器	転用硯	－	(1.2)	－	長石・石英	灰	普通	鉢の底部ヵ　側面鑿状工具による加工痕	Ｌトレンチ東部	墨痕有り　ＰＬ13
159	灰釉陶器	皿	－	(1.2)	[8.4]	黒色粒子・緻密	灰白・灰オリーブ	良好	高台貼り付け　釉は刷毛塗り　重ね焼き痕有り	南東部覆土中	
161	須恵器	短頸壺ヵ	－	(2.2)	5.4	長石・石英・雲母	灰白	普通	底部回転ヘラ切り　内面降灰による釉付着	Ｅトレンチ北部	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
DP11	土鈴	(3.5)	(2.9)	(2.9)	(9.0)	長石・石英・雲母	ナデ　孔径0.3～0.2㎝　一方向からの穿孔	Ａトレンチ北部	ＰＬ21

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
Ｔ３	軒片瓦	(10.6)	(9.6)	(3.4)	(420)	長石・石英	灰	普通	顎部貼り付け　4重連弧文　凹面布目痕　凸面縄目の叩き　側面ヘラ削り　角面取り	C4i8	ＰＬ15
Ｔ４	軒片瓦	(11.1)	(7.0)	(4.2)	(360)	長石・石英	灰	普通	顎部貼り付け　5重連弧文　凹面布目痕　凸面ヘラ削り	C4g5	
Ｔ５	平瓦	(6.5)	(8.6)	(2.2)	(180)	長石・石英・雲母	灰	普通	凹面布目痕　凸面縄目の叩き　側面ヘラ削り	C5g3	ＰＬ15
Ｔ６	平瓦	(12.2)	(11.2)	(2.4)	(310)	長石・石英・雲母	灰	普通	凹面布目痕　上部に縄目押圧痕1条　ヘラ削り　凸面縄目の叩き　側面ヘラ削り	D5a1	
Ｔ７	平瓦	(11.8)	(8.9)	(2.6)	(310)	長石・石英・雲母	灰	普通	凹面布目痕　面取り　凸面・側面ヘラ削り	D4a8	ＰＬ15
Ｔ８	平瓦	(8.5)	(7.5)	(2.1)	(168.1)	長石・石英・雲母	灰	普通	凹面布目痕　面取り　凸面縄目の叩き　側面ヘラ削り	D4b0	
Ｔ９	平瓦	(6.5)	(8.2)	(2.2)	(147.7)	長石・石英・雲母	灰	普通	凹面布目痕　凸面縄目の叩き　角面取り　側面ヘラ削り	C4j0	
Ｔ10	軒片瓦	(3.0)	(5.8)	(6.9)	(130.9)	長石・石英・雲母	灰	普通	瓦当に均整唐草文　凹面ヘラ削り	Ａトレンチ	ＰＬ15
Ｔ11	平瓦	(9.0)	(14.7)	(2.4)	(410)	長石・石英・雲母	灰	普通	凹面・凸面・側面ヘラ削り	Ｂトレンチ西部	
Ｔ12	堤瓦	(7.0)	[11.0]	(5.2)	(104.5)	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	凹面・凸面・側面ヘラ削り	南部表土中	ＰＬ15
Ｔ13	軒丸瓦	(15.1)	(15.1)	(7.2)	(840)	長石・石英・雲母	灰	普通	凹面・凸面ヘラ削り　瓦当部貼り合わせ	C3c8	40%　ＰＬ15

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Ｑ25	砥石	(13.9)	2.9	2.9	(129.1)	凝灰岩	砥面５面　１面で２か所の使用面有り	Ｂトレンチ西部	
Ｑ26	砥石	(8.8)	3.4	2.7	(69.2)	凝灰岩	砥面４面　１面で２か所の使用面有り	Ｂトレンチ西部	ＰＬ21
Ｑ27	砥石	(4.4)	(4.0)	(1.6)	(47.1)	凝灰岩	砥面２面　側面の使用は不明	Ｂトレンチ西部	
Ｑ28	砥石	(10.2)	(4.6)	1.4	(129.2)	凝灰岩	砥面２面	Ｅトレンチ中央部	ＰＬ21
Ｑ29	砥石	(5.9)	(1.9)	(1.8)	(23.4)	凝灰岩	砥面３面	Ｅトレンチ北部	ＰＬ21
Ｑ30	砥石	(8.0)	4.9	3.4	(178.8)	凝灰岩	砥面３面　断面長方形	Ｆトレンチ西部	ＰＬ21
Ｑ31	不明石製品	(4.9)	1.4	0.8	(7.2)	安山岩	断面長方形	東部表土中	ＰＬ21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M41	楔	5.7	1.9	0.5	(27.7)	鉄	頭部敲打痕　先端部一部欠損	Ｂトレンチ西部	ＰＬ23
M43	釘	16.5	0.6	0.6	(27.1)	鉄	断面方形　先端部四角錐形　中央部で屈曲	Ｆトレンチ東部	ＰＬ23
M44	鑿ヵ	(11.3)	1.2	0.9	(50.3)	鉄	断面長方形	西部覆土中	ＰＬ23

番号	器種	長さ	幅	厚さ	特　　徴	出土位置	備　考
W36	火鑽杵	(38.2)	2.3	2.2	断面円形　先端部は細くなる　煤付着	C4b5	ＰＬ24

6　その他の遺構と遺物

（1）方形竪穴遺構

方形竪穴遺構１基を確認した。以下，その概要を記述する。

第１号方形竪穴遺構「ＳＫ－10」（第75図）

位置　調査Ｉ区のB3h7区で，平坦地に位置している。

規模と形状　長軸2.25ｍ，短軸1.38ｍの長方形で，主軸方向はＮ－43°－Ｗである。壁高は10～18㎝で，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦である。南西側で炭化物の広がりが確認されている。

ピット　２か所。深さはＰ１が７㎝，Ｐ２が11㎝で，平面形は円形を呈している。

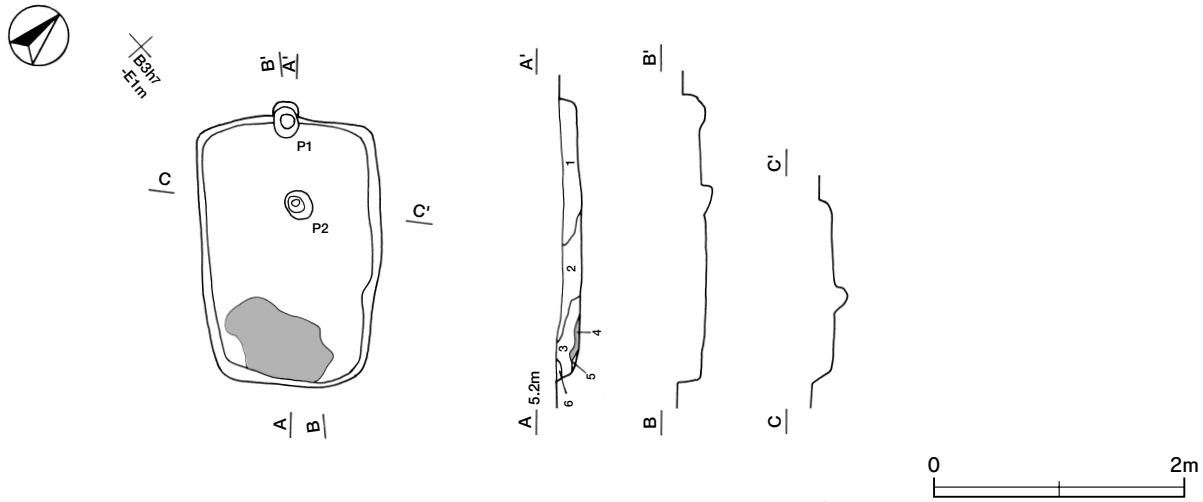
覆土　６層に分層される。層中に焼土，炭化物，粘土ブロックが含まれていることから人為堆積である。

土層解説

1　黒 褐 色　ロームブロック少量，粘土ブロック微量
2　暗 褐 色　ロームブロック・粘土ブロック少量，焼土粒子微量
3　暗 褐 色　ローム粒子少量，粘土ブロック・焼土粒子微量
4　黒 褐 色　炭化粒子中量，焼土粒子少量，ローム粒子微量
5　黒 褐 色　ローム粒子少量
6　黒 褐 色　ローム粒子少量，粘土ブロック微量

遺物出土状況　細片のため図示できないが，土師器片39点（坏12，甕・甑27），須恵器片３点（坏２，甕１），土師質土器片３点（小皿）が出土している。

所見　廃絶時期は，土師質土器（小皿）が出土していることから中世と考えられる。



第75図　第１号方形竪穴遺構実測図

（２）溝跡

溝跡が19条確認された。第３～５，７～９，11～13，18～20号溝跡は水田に伴う取配水路と考えられる。以下，検出された性格不明な溝跡について記述する。

第１号溝跡（第76図・付図）

位置　調査Ⅰ区のA2i9～A3j1区で，平坦地に位置している。

重複関係　第６号掘立柱建物跡，第47号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　上幅0.48～2.20m，下幅0.24～0.74m，深さ50～73㎝で走行方向はN－56°－Wである。調査区域外に延びているので，長さは11.36mだけ確認された。直線的に西へ延びており，底面の形状はU字状を呈している。底面の標高は東側4.09m，西側4.32mで，比高は23㎝となり，東に向かって傾斜している。

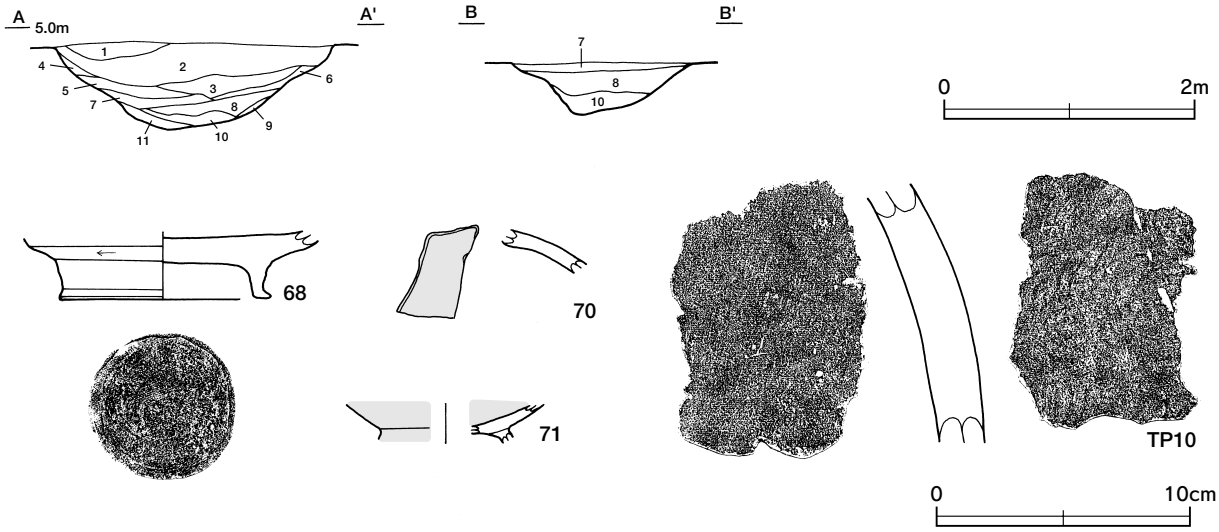
覆土　11層に分層される。第１～６層には焼土，炭化物，粘土ブロックが含まれていることから人為堆積である。第７～11層はレンズ状を呈した自然堆積である。

土層解説

1　黒 褐 色　粘土ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒 褐 色　粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒 褐 色　粘土ブロック・ローム粒子微量
4　黒 褐 色　ローム粒子少量，焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック微量
5　黒 褐 色　ローム粒子少量，粘土ブロック微量
6　黒 褐 色　粘土ブロック・ローム粒子微量
7　黒 褐 色　粘土ブロック・粘土粒子微量
8　黒 褐 色　粘土ブロック少量，ロームブロック微量
9　黒 褐 色　砂粒少量，粘土ブロック微量
10　褐 灰 色　灰褐色粘土粒子中量，白色粘土ブロック微量
11　褐 灰 色　灰褐色粘土粒子中量，黄色粘土ブロック少量

遺物出土状況　縄文土器片12点，土師器片39点（坏７，甕32），須恵器片25点（坏10，高台付坏１，甕14），緑釉陶器片１点（碗），土師質土器片25点（皿３，内耳鍋22）が出土している。68，TP10は中央部，70・71は東部の覆土中から出土している。

所見　廃絶時期は，内耳鍋等の土師質土器が出土していることから中世と考えられる。



第76図　第１号溝跡・出土遺物実測図

第１号溝跡出土遺物観察表（第76図）

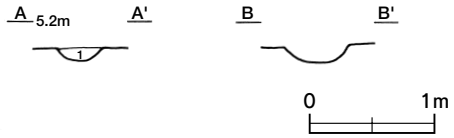
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
68	須恵器	高台付坏	－	(2.7)	8.4	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外面下端回転ヘラ削り　底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土中	10%
70	灰釉陶器	長頸壺	－	(1.8)	－	黒色粒子・緻密	褐灰・灰オリーブ	良好	ロクロナデ　施釉方法は不明	覆土中	
71	緑釉陶器	碗	－	(1.6)	－	白色粒子・緻密	褐灰	良好	高台貼り付け	覆土中	ＰＬ14
TP10	須恵器	甕	－	(10.1)	－	長石・石英	灰	普通	体部外面平行叩き　内面同心円状の当て具痕	覆土中	

第２号溝跡（第77図・付図）

位置　調査Ｉ区のA3j1～B3a2区で，平坦地に位置している。

重複関係　第６号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状　上幅0.29～0.66ｍ，下幅0.12～0.39ｍ，深さ10～14㎝で走行方向はＮ－45°－Ｗである。長さは6.85ｍで，直線的に延びている。底面の形状は浅いＵ字状を呈しており，北西側と南東側の比高は２㎝で，緩やかに南東に低くなっている。



第77図　第２号溝跡実測図

覆土　単一層である。ローム・粘土ブロックの混入がないことから自然堆積である。

土層解説
１　暗 褐 色　ローム粒子少量，粘土粒子微量

所見　時期は，出土遺物がないため不明である。

第６号溝跡（第78・79図・付図）

位置　調査Ⅲ区のC3f3・C3f4区で，平坦地に位置している。

規模と形状　調査区域外に延びているため，上幅4.50m，下幅1.35m，深さ83㎝だけ確認された。長さ及び走行方向は不明である。底面の形状は浅いU字状を呈していると推定される。

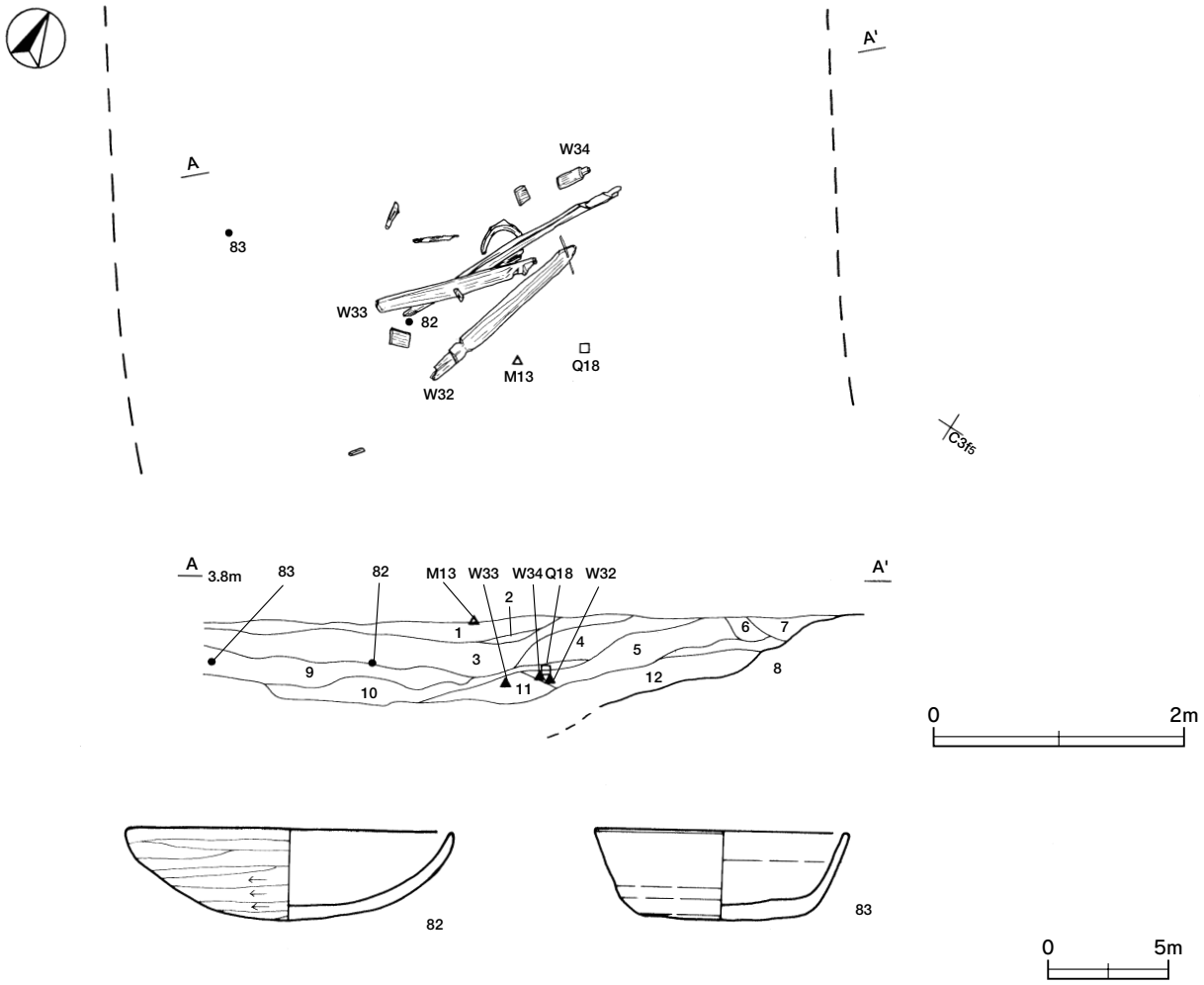
覆土　12層に分層される。レンズ状を呈していることから自然堆積である。

土層解説

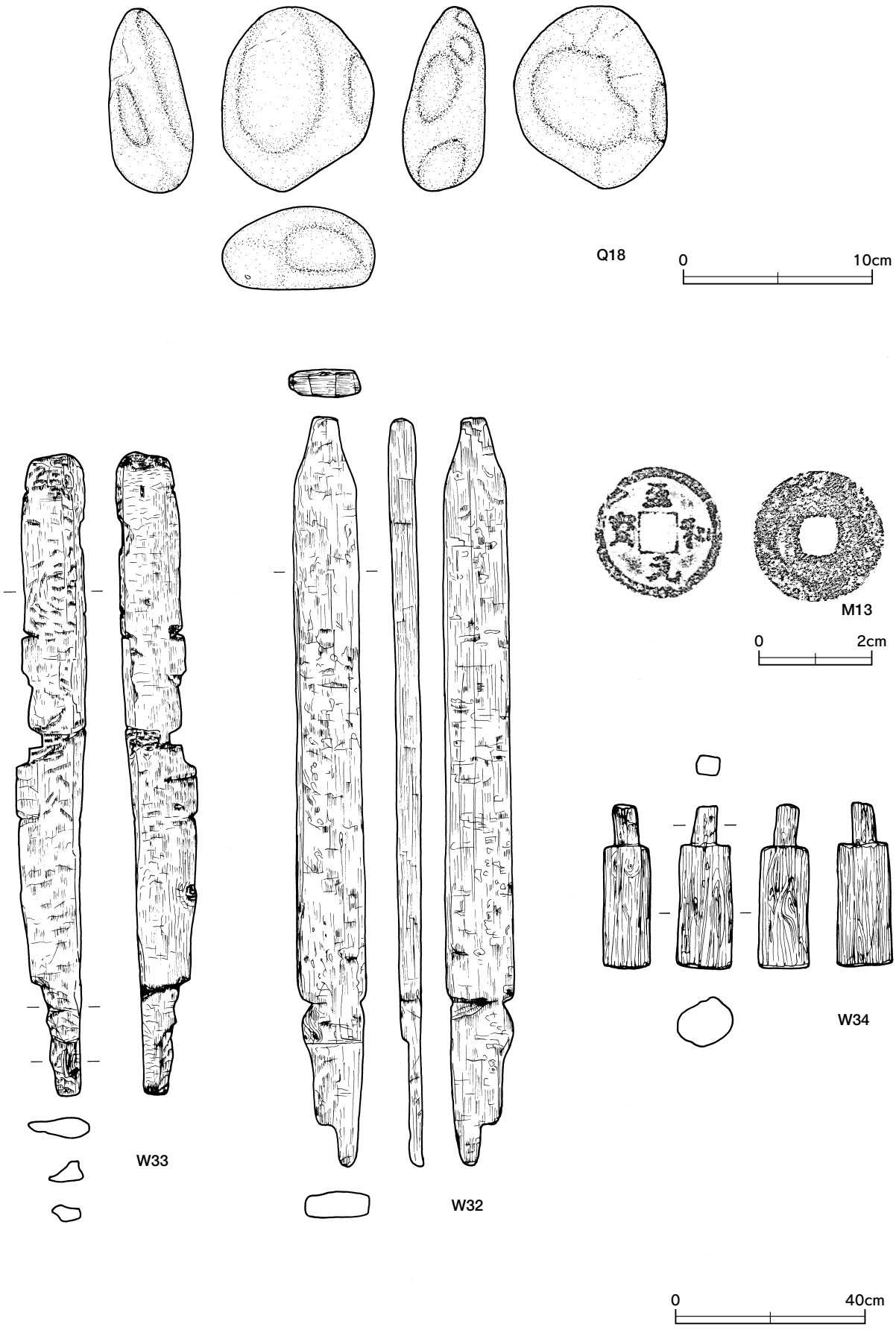
1	灰黄褐色	鉄分中量，砂粒・細礫少量	
2	黒褐色	鉄分中量，細礫少量，砂粒微量	
3	黒色	砂粒・腐植土ブロック中量，細礫少量	
4	黒色	砂粒多量，黒色土粒子中量，砂礫少量	
5	黒色	砂粒多量，黒色土粒子少量，細礫微量	
6	黒褐色	鉄分中量，細礫少量，砂粒微量	
7	黒色	砂粒多量，細礫中量，鉄分少量	
8	黒色	砂粒多量，細礫中量	
9	黒色	砂粒多量，細礫・木片少量	
10	黒色	砂粒多量，腐植土中量，細礫少量	
11	黒色	砂粒多量，細礫中量，木葉片少量	
12	黒色	砂粒多量，細礫中量，木片少量	

遺物出土状況　縄文土器片５点，土師器片77点（坏17，甕60），須恵器片33点（坏19，蓋１，甕13），瓦片２点，古銭２点，鉄滓３点，砥石１点が出土している。遺物はまとまって出土している。82，W32～W34は覆土下層，M13は中央部の覆土上層，83は南壁際の底面から出土している。

所見　覆土の状態から水流があったことが確認できる。底面付近には腐植土の堆積層があり，木葉や木枝などが残っている。覆土の下層部から７世紀後葉と考えられる土器が出土しているが，流れ込みの可能性も考えられることから，時期は不明である。



第78図　第６号溝跡・出土遺物実測図



第79図　第６号溝跡出土遺物実測図

第６号溝跡出土遺物観察表（第78・79図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
82	土師器	坏	13.1	3.6	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ　体部外面ヘラ削り　内面ナデ	中央部中層	70%　ＰＬ12
83	須恵器	坏	10.2	3.7	7.8	長石・石英・白色粒子	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り	西側中層	60%　ＰＬ12

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q18	磨石	9.7	8.0	4.4	410	安山岩	全面を研磨面に使用	中央部中層	

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鋳年	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M13	至和元寳	2.4	0.6	2.1	1054	銅	真書　無背銭	中央部上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	特　　徴	出土位置	備　考
W32	不明	(158.1)	14.5	5.8	アカガシ亜属　辺材　各面に斧状工具による削り痕　先が細くなる　建築部材ヵ	中央部中層	
W33	不明	(135.7)	14.0	4.7	アカガシ亜属　辺材　各面に斧状工具による削り痕　断面隅丸三角形	中央部中層	
W34	不明	34.3	11.7	10.1	丸材　先端部柄　断面四角形　建築部材ヵ	中央部中層	

第14号溝跡（第80図・付図）

位置　調査Ⅲ区のC6e3～C5g7区で，台地裾部の緩斜面に位置している。

重複関係　第15号溝跡を掘り込んでいる。

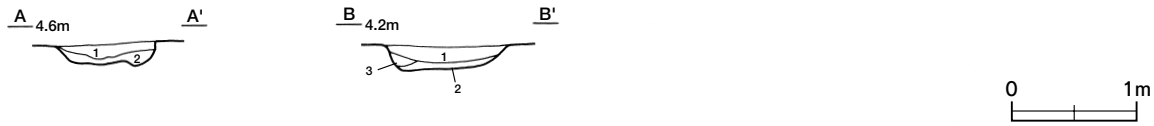
規模と形状　上幅0.50～1.06m，下幅0.19～0.56m，深さ10～18㎝で走行方向はＮ－30°－Ｅである。北側が調査区域外に延びているので，長さは24.0mだけ確認された。ほぼ直線的に延びており，底面の形状は浅いＵ字状を呈している。底面の標高は北側で4.21m，南側で3.87m，比高は34㎝であり南に傾斜している。

覆土　３層に分層される。レンズ状を呈していることから自然堆積である。

土層解説（Ａ・Ｂ共通）
1　黒　　色　黒色土粒子多量，粘土粒子少量
2　黒　　色　黒色土粒子多量，粘土粒子中量
3　オリーブ黒色　粘土粒子中量，黒色土粒子・砂粒少量

遺物出土状況　縄文土器片10点，土師器片91点（坏１，坩21，甕69），須恵器片７点（坏２，甕５），土製品１点（土玉）が出土している。いずれも第15号溝跡との交点であるＣ５g0区から出土していることから，混入したものと考えられる。

所見　出土遺物がないため，時期は不明である。



第80図　第14号溝跡実測図

第15号溝跡（第81～84図・付図）

位置　調査Ⅲ区のC5c8～D5b2区で，埋没谷の緩斜面部に位置している。

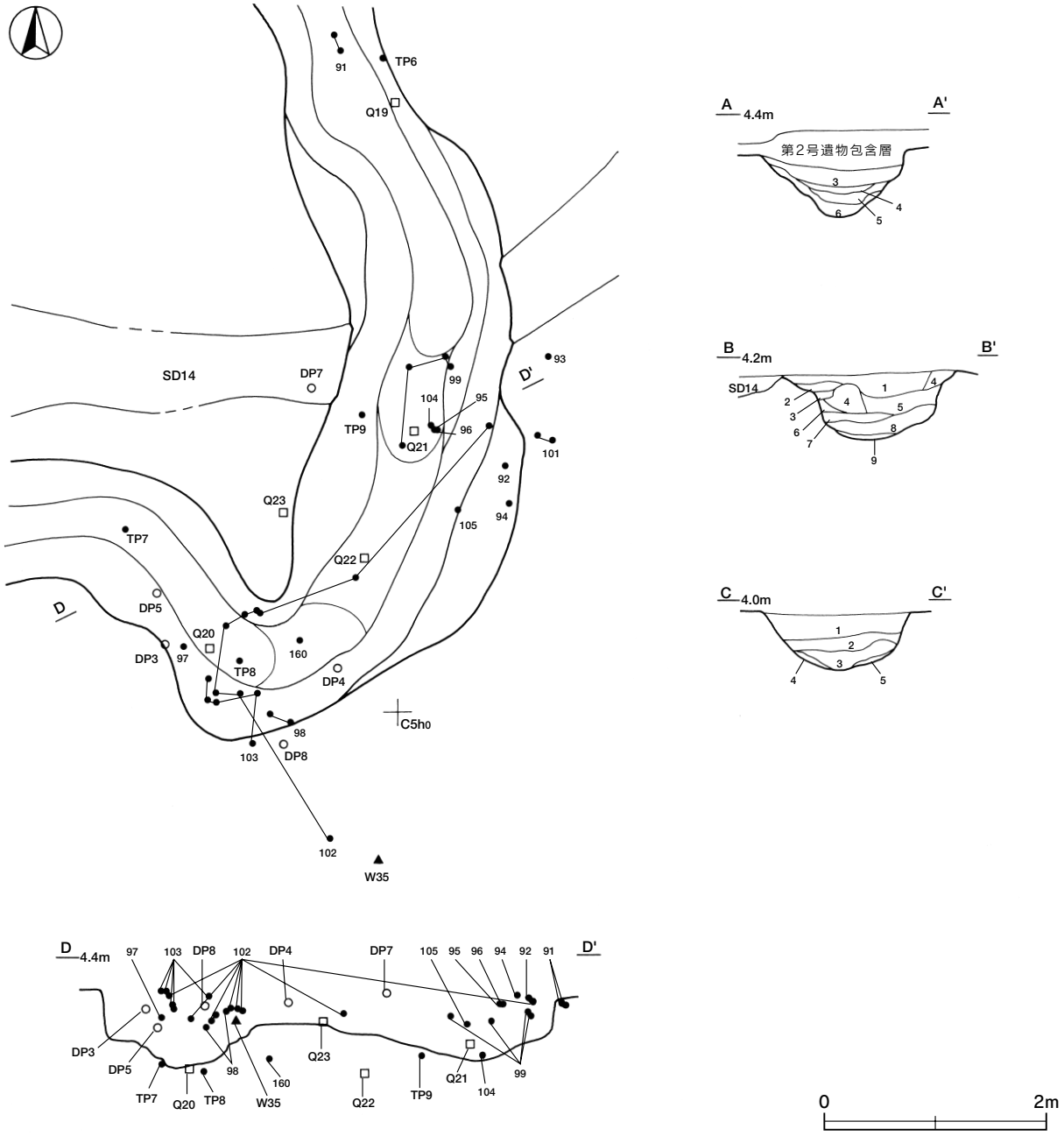
重複関係　第14号溝に掘り込まれている。

規模と形状　上幅0.63～1.49m，下幅0.24～0.75m，深さ34～58cmである。北側は調査区域外に延びているため全容は不明で，確認できた長さは55.5mである。底面の標高は北側で3.47m，南側で3.41mである。比高は6cmで，緩やかに南に傾斜している。平面形は北から南東に17.9mの地点で，ほぼ直角に向きを南西に向け，その先はやや蛇行しながら弧を描くように南に向いている。

覆土　9層に分層される。第1～7層はブロック状の堆積状況であることから人為堆積である。第8，9層はレンズ状を呈していることから自然堆積である。

土層解説（共通）

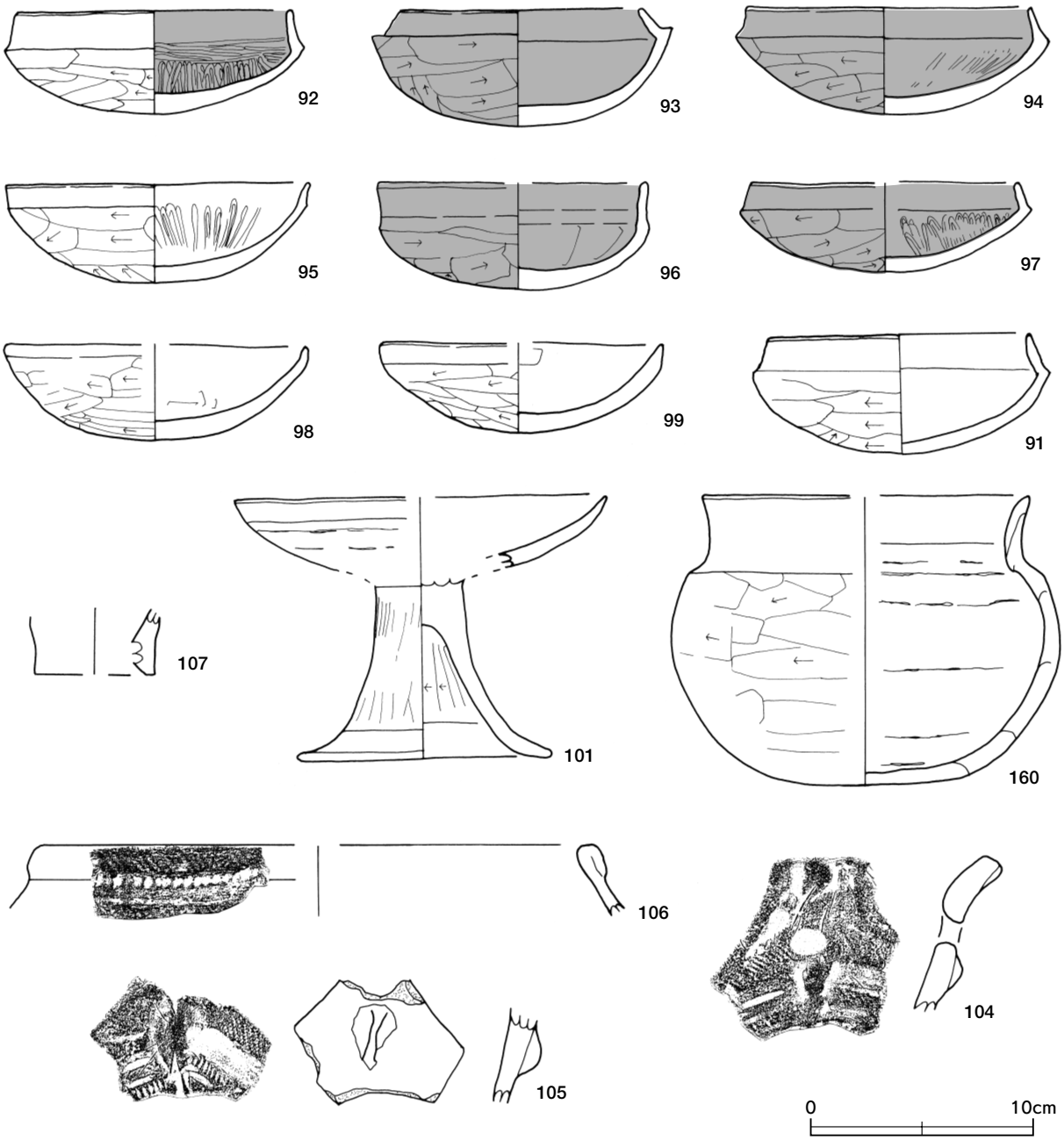
1　黒　　色　黒色土粒子多量，粘土粒子少量，鉄分微量
2　ｵﾘｰﾌﾞ黒色　黒色土粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量
3　ｵﾘｰﾌﾞ黒色　粘土粒子中量，黒色土粒子少量，砂粒微量
4　灰ｵﾘｰﾌﾞ色　粘土粒子中量，黒色土粒子・鉄分少量
5　黒　　色　黒色土粒子中量，粘土粒子少量，木片微量
6　ｵﾘｰﾌﾞ黒色　黒色土粒子・砂粒少量，粘土粒子微量
7　暗 黒 色　黒色土粒子・砂粒・粘土粒子少量
8　ｵﾘｰﾌﾞ黒色　黒色土粒子・砂粒・粘土粒子中量，炭化粒子少量
9　暗ｵﾘｰﾌﾞ色　砂粒多量



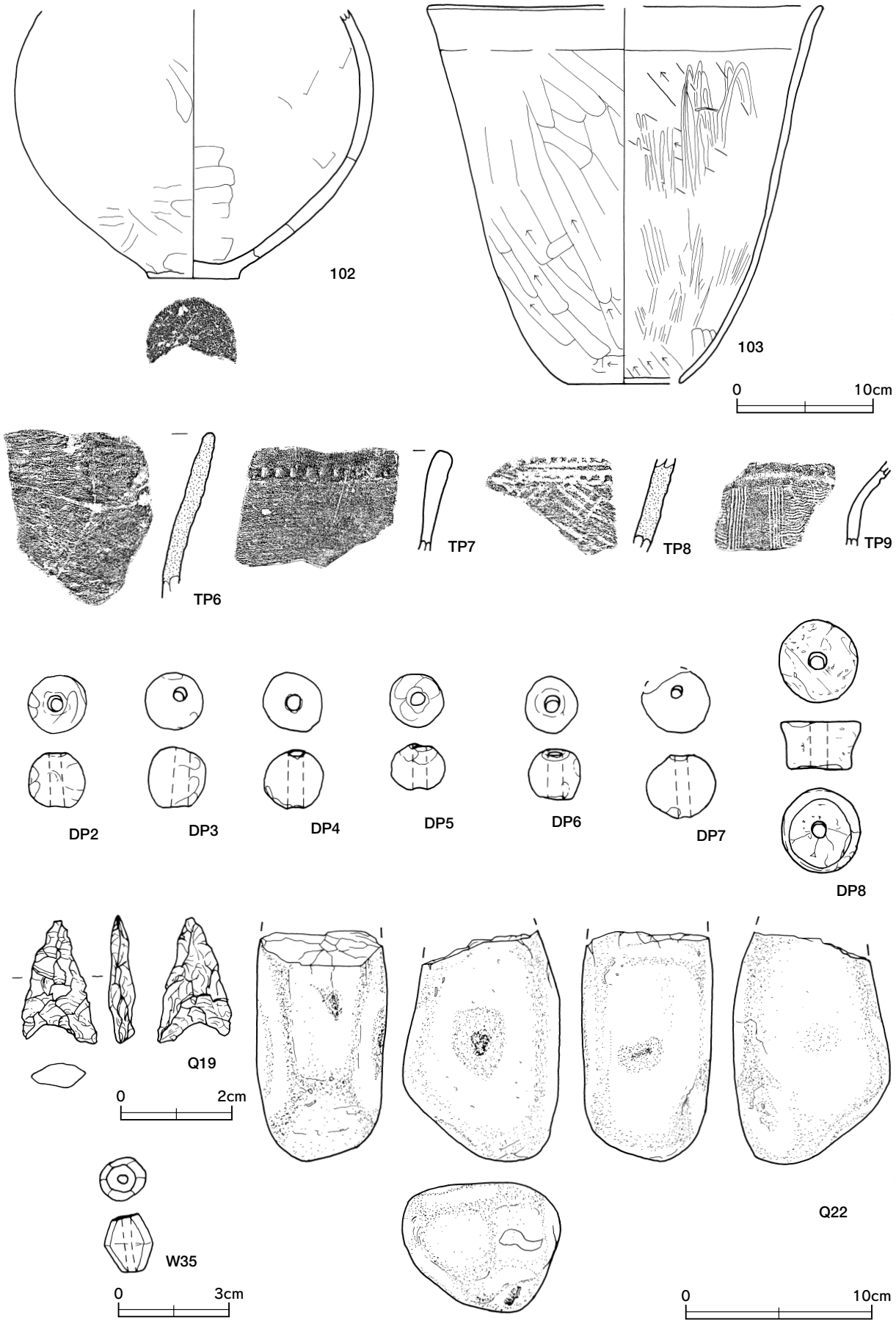
第81図　第15号溝跡実測図

遺物出土状況　縄文土器片188点，土師器片1,112点（坏279，高坏５，甕・甑828），須恵器片86点（坏），土製品７点（土玉５，紡錘車１，不明１），石器９点（磨石８，敲石１），木製棗玉１点，瓦片４点，土師質土器片９点が出土している。いずれもコーナー部に集中している。104，Ｑ20～Ｑ22は底面から出土している。92～99は東壁寄りの覆土中層から出土しており，投棄されたものと考えられる。

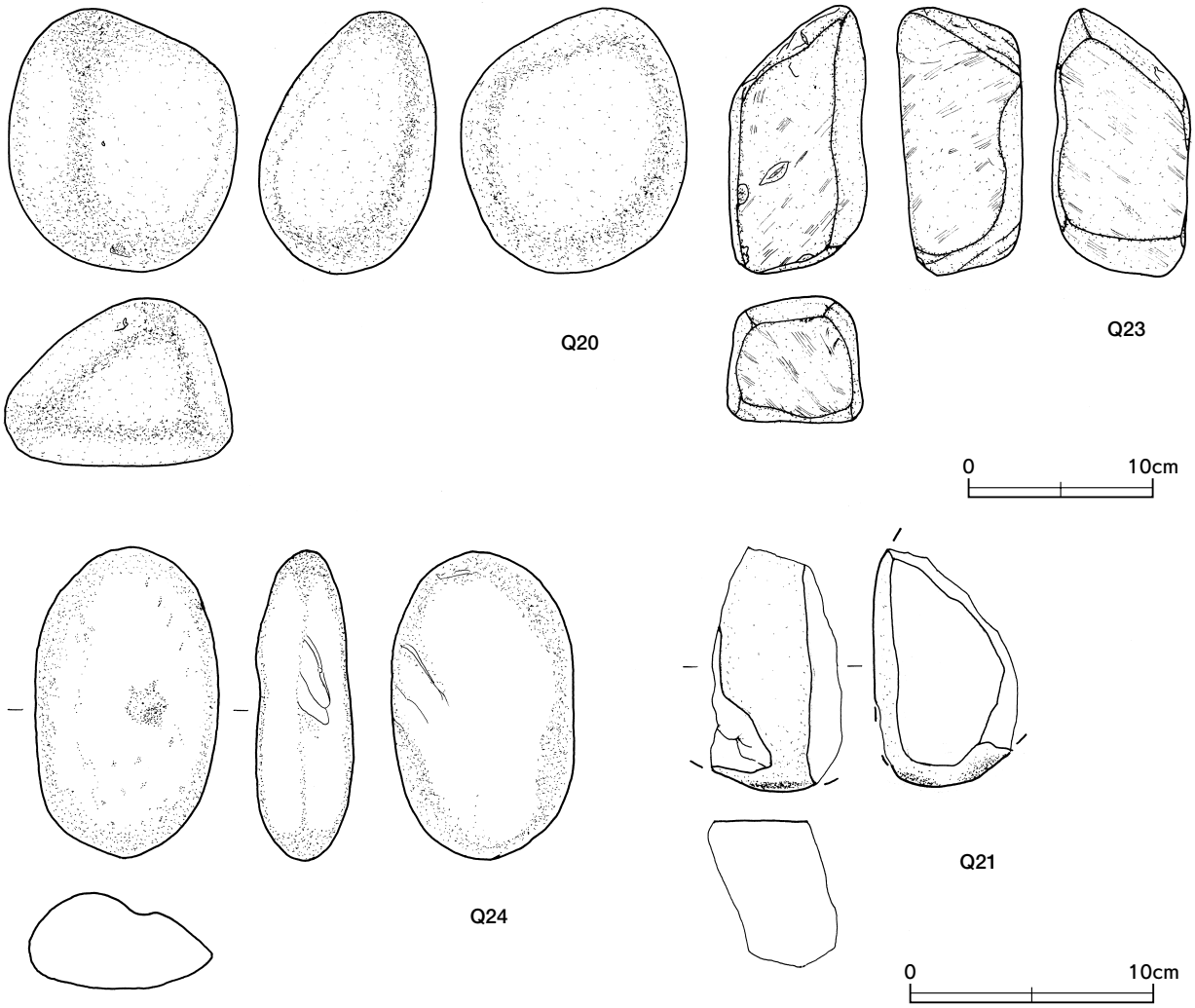
所見　時期は不明である。直角に屈曲したコーナー部の底面付近で，縄文時代前期から後期にかけての土器片が出土している。上流から流されてきた土器片が，コーナー部の流れが弱い箇所に溜まったものと考えられる。また，コーナー部の覆土中層からは古墳時代後期の土器片がまとまって出土している。コーナー部以外で，土器の出土が認められないことから，既に機能しておらず，埋まりきっていないくぼ地に投棄したものと考えられる。



第82図　第15号溝出土遺物跡実測図（１）



第83図　第15号溝出土遺物跡実測図（２）



第84図　第15号溝出土遺物跡実測図（３）

第15号溝跡出土遺物観察表（第82～84図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
91	土師器	坏	11.6	5.3	－	長石・石英・雲母	赤褐	普通	口縁部横ナデ　体部外面ヘラ削り　内面ナデ	コーナー北上層	90%　ＰＬ12
92	土師器	坏	12.4	4.6	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラ磨き	コーナー東上層	100%　ＰＬ12
93	土師器	坏	10.7	5.3	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ　体部外面ヘラ削り　内面ナデ	コーナー東上層	95%　ＰＬ12
94	土師器	坏	12.9	4.8	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面放射状のヘラ磨き	コーナー東上層	90%　ＰＬ12
95	土師器	坏	13.5	4.5	－	長石・石英・雲母	にぶい赤橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面放射状のヘラ磨き	コーナー東上層	80%
96	土師器	坏	11.8	4.8	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ痕	コーナー東上層	80%
97	土師器	坏	12.0	3.9	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面放射状のヘラ磨き	コーナー南上層	85%
98	土師器	坏	13.4	4.3	－	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口縁部横ナデ　体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ後ナデ	コーナー南上層	70%
99	土師器	坏	12.6	4.1	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ後ナデ	コーナー中央上層	50%
101	土師器	高坏	［16.6］	［11.8］	11.3	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	坏部外面輪積み痕　脚部外面ヘラナデ　内面ヘラ削り　裾部内・外面横ナデ	コーナー北上層	60%
102	土師器	甕	－	（19.3）	6.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラナデ　ヘラ磨き痕　内面ヘラナデ輪積み痕	コーナー東～南上層	
160	土師器	甕	［14.6］	13.1	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ　輪積み痕	コーナー南下層	40%
103	土師器	甑	28.2	27.1	8.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラ削り後ヘラ磨き	コーナー南上層	45%　ＰＬ13
104	縄文土器	深鉢	－	（7.0）	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	２本の隆起帯にＬＲの単節縄文を施文　把手部上下に粒状突起貼り付け	コーナー東下層	
105	縄文土器	深鉢	－	（4.2）	－	長石・石英・雲母	灰褐	普通	刻みを有する隆起帯による区画内に４本の平行沈線を施文	コーナー東下層	
106	縄文土器	浅鉢	［25.0］	（3.1）	－	長石・石英・白色粒子	にぶい橙	普通	単節ＲＬ縄文　口縁部に半截竹管状の工具による連続的な押捺２列	覆土中	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
107	縄文土器	深鉢	－	(3.0)	[5.4]	長石・石英・雲母，繊維	灰褐	普通	単節ＬＲ縄文　繊維脱痕有り	覆土中	
TP 6	縄文土器	深鉢	－	(8.8)	－	長石・石英	灰黄褐	普通	単節ＬＲとＲＬ羽状縄文　内面繊維脱痕	コーナー北底面	
TP 7	縄文土器	深鉢	－	(5.3)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁隆帯部にキザミ目	コーナー西下層	
TP 8	縄文土器	深鉢	－	(5.3)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	棒状工具による集合沈線文	コーナー南底面	
TP 9	弥生土器	広口壺	－	(4.3)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	頸部上部に２本の隆帯貼り付け　胴上部に櫛歯状工具による縦区画　区画内に波状文	コーナー中央底面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q19	鏃	2.2	1.3	0.4	0.9	チャート	凹基無茎鏃　表裏押圧剥離	コーナー北底面	ＰＬ21
Q20	磨石	14.2	12.3	9.2	2,060	安山岩	全面研磨面使用	コーナー南底面	
Q21	磨石	(9.7)	(5.2)	(5.8)	370	安山岩	研磨面１面　その他は欠損のため不明	コーナー中央下層	
Q22	磨石	(12.4)	8.5	7.0	1,060	ホルンフェルス	全面研磨面使用　２面に凹み有り	コーナー中央底面	
Q23	磨石	(14.6)	7.4	6.8	1,180	雲母片岩	研磨面４面　１面に凹み有り	コーナー西上層	
Q24	磨石	12.5	7.4	3.9	510	安山岩	研磨面２面　１面に凹み有り　表面摩滅	覆土中	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
DP 2	土玉	3.2	2.9	0.8	26.9	長石・石英	ナデ	覆土中	
DP 3	土玉	3.0	3.2	0.9	25.1	長石・石英・雲母	ナデ	コーナー南上層	
DP 4	土玉	3.1	3.1	0.9	28.6	長石・石英・細礫	ナデ	コーナー南上層	
DP 5	土玉	2.9	2.4	0.8	17.0	長石・石英・雲母	ナデ　一方向からの穿孔	コーナー西上層	
DP 6	土玉	3.0	2.6	0.9	18.4	長石・石英	ナデ	覆土中	
DP 7	土玉	3.7	3.4	0.7	(30.0)	長石・石英・雲母	ナデ	コーナー西上層	70%
DP 8	紡錘車	4.8	2.6	0.9	41.1	長石・石英・雲母	ナデ　円錐台形　側面やや括れ	コーナー南上層	90%　ＰＬ21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
W35	棗玉	1.6	1.3	1.1	1.4	木	孔径0.3㎝　側面は６面を削り出し後面取り	コーナー南上層	

第16号溝跡（第85図・付図）

位置　調査Ⅲ区のB5i2～C4f4区で，低地の緩斜面に位置している。

規模と形状　上幅1.30～4.22m，下幅0.36～1.31m，深さ16～46㎝で，蛇行しながら北から南方向に延びている。北側が調査区域外に延びているので，長さは48.0mだけ確認された。底面の形状は浅いＵ字状を呈している。南北の比高は24㎝である。

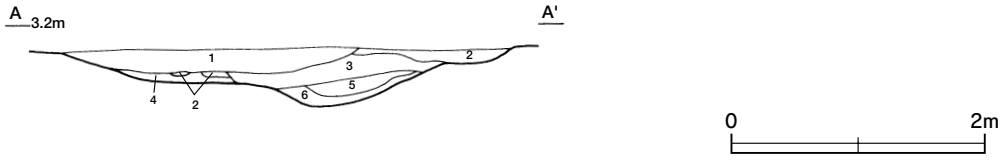
覆土　６層に分層される。レンズ状を呈していることから自然堆積である。

土層解説

1　灰　　色　砂粒多量，細礫中量
2　オリーブ黒色　砂粒・木片中量
3　灰　　色　砂粒多量，木片微量
4　灰　　色　砂粒多量，木片少量
5　灰オリーブ色　砂粒多量，木片微量
6　灰オリーブ色　砂粒多量，細礫少量

遺物出土状況　細片のため図示できないが，縄文土器片が出土している。遺物包含層からの流れ込みと考えられる。

所見　東西の台地に挟まれた谷地に位置しており，土層断面から埋没する以前は，湿地の低位部を流れていたことがうかがえる。本跡は，そこに流れていた自然流路と推定され，機能していた時期は，出土土器から縄文時代前期以前と考えられる。



第85図　第16号溝跡実測図

第17号溝跡（第86図・付図）

位置　調査Ⅲ区のB4h4～B4h5区で，低地の緩斜面に位置している。

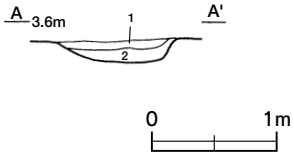
規模と形状　上幅0.92～1.32m，下幅0.33～0.52m，深さ17㎝で，蛇行しながら北から南方向に延びている。北側が調査区域外に延びているので，長さは8.0mだけ確認された。底面の形状は浅いU字状を呈している。南北の比高は24㎝である。

覆土　２層に分層される。レンズ状を呈していることから自然堆積である。

土層解説
1　灰　　色　砂粒多量，細礫中量　　2　オリーブ黒色　砂粒・木片中量

遺物出土状況　細片のため図示できないが，縄文土器片が出土している。遺物包含層からの流れ込みと考えられる。

所見　東西の台地に挟まれた谷地に位置しており，土層断面からも埋没する以前は，湿地の低位部を流れていたことがうかがえる。本跡は，そこに流れていた自然流路と推定され，機能していた時期は，出土土器から縄文時代前期以前と考えられる。



第86図　第17号溝跡実測図

表５　溝跡一覧表

溝番号	位　置	方　向	形状	規　模(m)				壁面	底面	覆土	出　土　遺　物	備　考
				確認長	上　幅	下　幅	深さ(cm)					
1	A2i8～A3j1	N－56°－W	直線状	(11.36)	0.48～2.20	0.24～0.74	50～73	外傾	皿状	人為	須恵器，緑・灰釉陶器	
2	A3j2～B3a2	N－45°－W	直線状	6.85	0.29～0.66	0.12～0.39	10～14	外傾	皿状	人為		
6	C3e4	－	－	－	－	－	－	外傾	－	自然	土師器，須恵器，木製品	
14	C6e3～C5g7	N－30°－E	直線状	(24.0)	0.50～1.06	0.19～0.56	10～18	外傾	皿状	人為		
15	C5c8～C5h0～D5b3	N－15°－W，N－50°－E	L字状	(16.86)(38.64)	0.63～1.49	0.24～0.75	34～58	外傾	皿状	人為	縄文土器，弥生土器，土師器，石器，土製品，棗玉	
16	B4i2～C4f4	N－47°－E	直線状	(48.0)	1.30～4.22	0.36～1.31	16～46	外傾	皿状	自然		
17	B5h4～B4h5	N－79°－E	U字状	(8.0)	0.92～1.32	0.33～0.52	17	外傾	皿状	自然		

（３）不明遺構

耕作による削平のため壁の立ち上がりがなく，周辺の土色と比べ黒ずんだ範囲を確認した。以下，その概要について記述する。

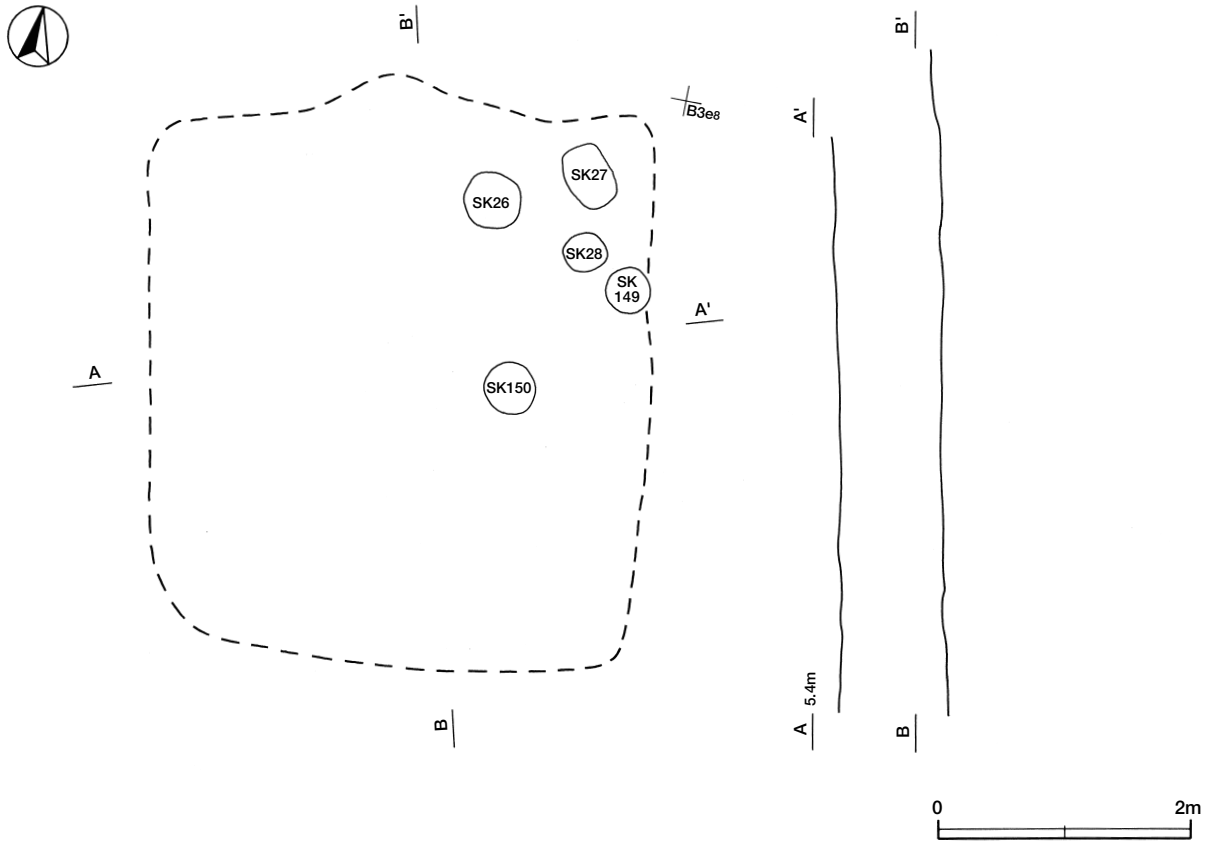
第１号不明遺構（第87図）

位置　調査Ｉ区のB3e7区で，平坦地に位置している。

重複関係　北東部を第26～28・149・150号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　耕作により削平され，壁の立ち上がりは認められないが，周辺の土色に比べ黒ずんだ極暗褐色の範囲が確認された。長軸4.2m，短軸4.0mほどの方形で，長軸方向はＮ－11°－Ｗである。面はほぼ平坦で，やや締まりがある。

所見　時期・性格ともに不明である。耕作による削平のため壁の立ち上がりがなく，遺物も検出されていないが，周囲の土色に比べ黒ずんだ範囲が確認された。遺物や竈などの生活跡は確認されていないが，締まりもやや強く，踏み固められた可能性があり，住居の床面であった可能性も考えられる。



第87図　第１号不明遺構実測図

（４）土坑（第88～91図）

土坑258基が確認された。その多くは，出土遺物がなく性格及び時期は不明である。中には径15～25㎝で，円筒形に掘り込まれていることから柱穴跡と考えられるものもある。柱穴跡は３区域で検出されたことからピット群とし，第１ピット群をA2j0～B3d4区，第２ピット群をB3a5～B3d9区，第３ピット群をB3f3～B3j6区で設定した。ここでは，主な遺物が出土した土坑について，実測図及び土層解説を記載し，それ以外の土坑及び柱穴跡と考えられるものについては平面図を全体図に示し，規模及び形状は一覧表で記載する。

第１号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック少量
2　黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子微量

第２号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量
2　暗 褐 色　粘土ブロック中量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
3　暗 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量
4　黒 褐 色　ロームブロック・粘土ブロック中量，焼土ブロック・炭化物少量
5　極暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物・鉄分少量
6　黒　　色　ロームブロック少量，焼土ブロック・粘土ブロック微量

第７号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック中量
2　黒 褐 色　ローム粒子微量
3　暗 褐 色　ロームブロック少量，粘土ブロック微量
4　黒 褐 色　ロームブロック・焼土粒子微量
5　暗 褐 色　ロームブロック中量，焼土粒子微量
6　黒 褐 色　ローム粒子少量
7　暗 褐 色　ローム粒子微量
8　暗 褐 色　ローム粒子少量
9　黒 褐 色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
10　極暗褐色　ロームブロック中量
11　黒 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
12　黒 褐 色　ローム粒子中量
13　黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子微量
14　黒 褐 色　焼土ブロック・ローム粒子微量

第８号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ローム粒子少量，炭化物・焼土粒子微量
2　黒 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗 褐 色　ローム粒子少量，粘土ブロック微量
4　暗 褐 色　ロームブロック少量，粘土ブロック微量
5　極暗褐色　ローム粒子微量
6　暗 褐 色　ロームブロック少量
7　黒 褐 色　ロームブロック微量
8　黒 褐 色　ローム粒子微量

第16号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック少量，粘土ブロック微量
2　褐　　色　ロームブロック微量
3　暗 褐 色　ローム粒子少量，粘土ブロック微量
4　暗 褐 色　ロームブロック中量，粘土ブロック微量
5　黒 褐 色　ローム粒子微量

第47号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック中量，粘土ブロック微量
2　黒 褐 色　粘土ブロック少量，ロームブロック微量
3　褐 灰 色　粘土ブロック中量

第236号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土ブロック・粘土粒子微量
2　黒 褐 色　焼土ブロック少量，炭化物・粘土粒子微量
3　褐　　色　焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量，砂粒微量
4　極暗褐色　焼土ブロック少量，粘土ブロック・炭化物・鉄分微量

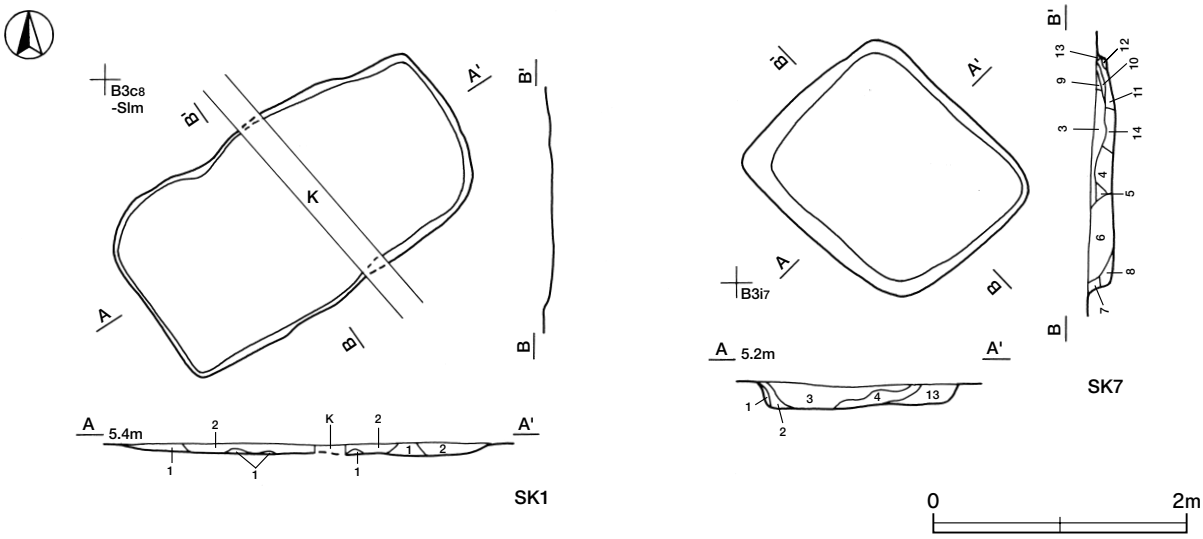
第257号土坑土層解説
1　黒　　色　黒色土粒子多量，鉄分少量
2　黒 褐 色　黒色土粒子中量，粘土粒子・鉄分少量
3　黒 褐 色　黒色土粒子中量，粘土粒子少量
4　黒　　色　黒色土粒子多量，鉄分少量

第258号土坑土層解説
1　黒 褐 色　黒色土粒子多量，木片少量
2　黒 褐 色　黒色土粒子多量，粘土ブロック・木片少量
3　ｵﾘｰﾌﾞ黒色　粘土ブロック・黒色土粒子中量，木片微量
4　黒　　色　黒色土粒子多量，粘土ブロック中量，木片微量
5　黒 褐 色　黒色土粒子中量，粘土ブロック少量，砂粒微量
6　黄 褐 色　砂粒多量，鉄分微量
7　黒 褐 色　黒色土粒子中量，木片微量
8　灰ｵﾘｰﾌﾞ色　粘土粒子多量，鉄分微量

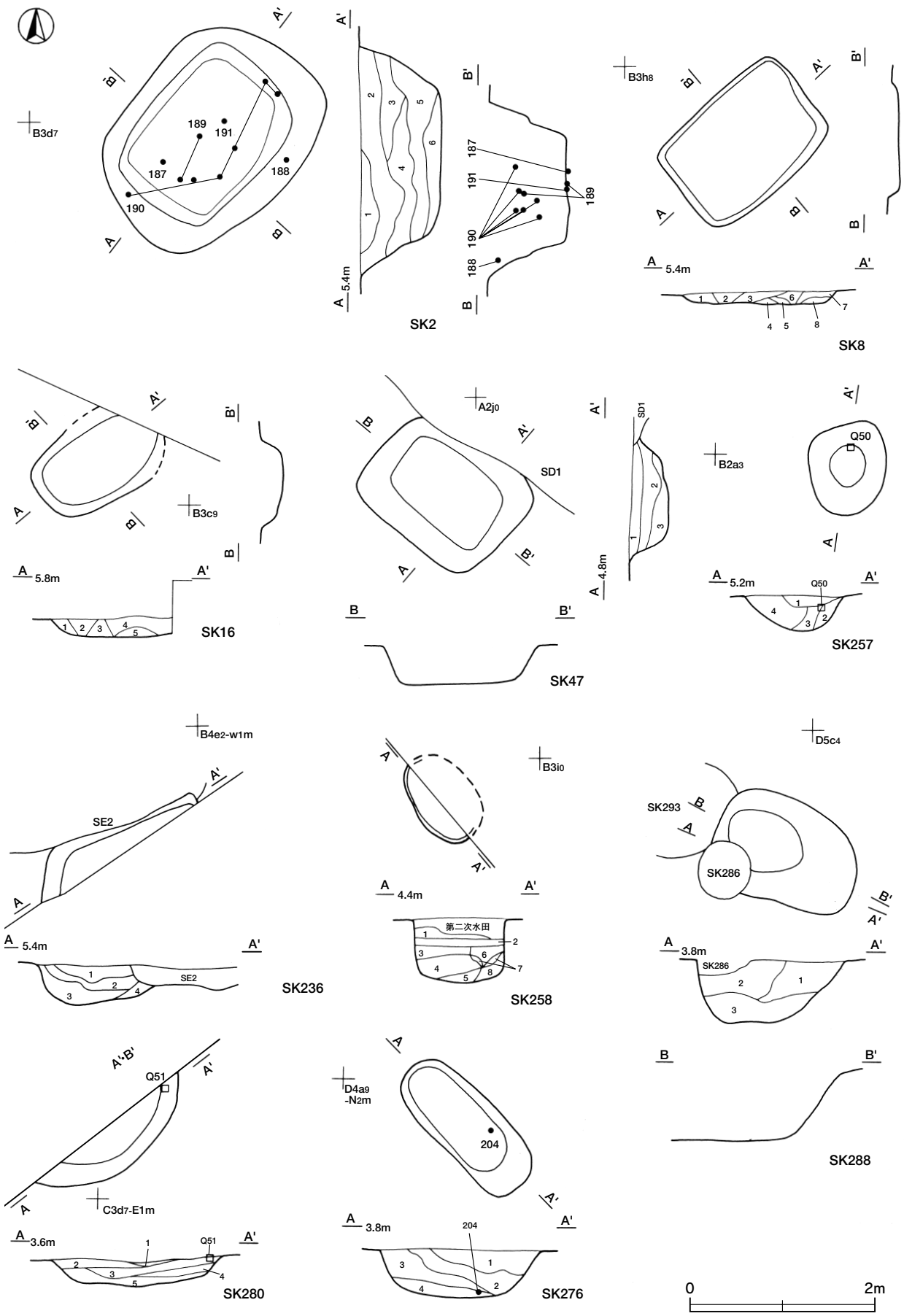
第276号土坑土層解説
1　黒 褐 色　黒色土粒子中量，焼土ブロック・砂粒少量
2　極 褐 色　黒色土粒子中量,焼土ブロック・粘土ブロック少量,
3　極暗褐色　黒色土粒子中量，焼土ブロック・粘土粒子少量
4　黒暗褐色　黒色土粒子中量，粘土ブロック・焼土粒子少量

第281号土坑土層解説
1　黒　　色　黒色土粒子中量
2　黒 褐 色　砂粒中量，粘土ブロック・黒色土粒子少量
3　暗 褐 色　砂粒中量，鉄分少量
4　褐　　色　砂粒中量，鉄分少量
5　黒 褐 色　粘土粒子中量，黒色土粒子・砂粒微量
6　暗 褐 色　砂粒少量，粘土粒子微量

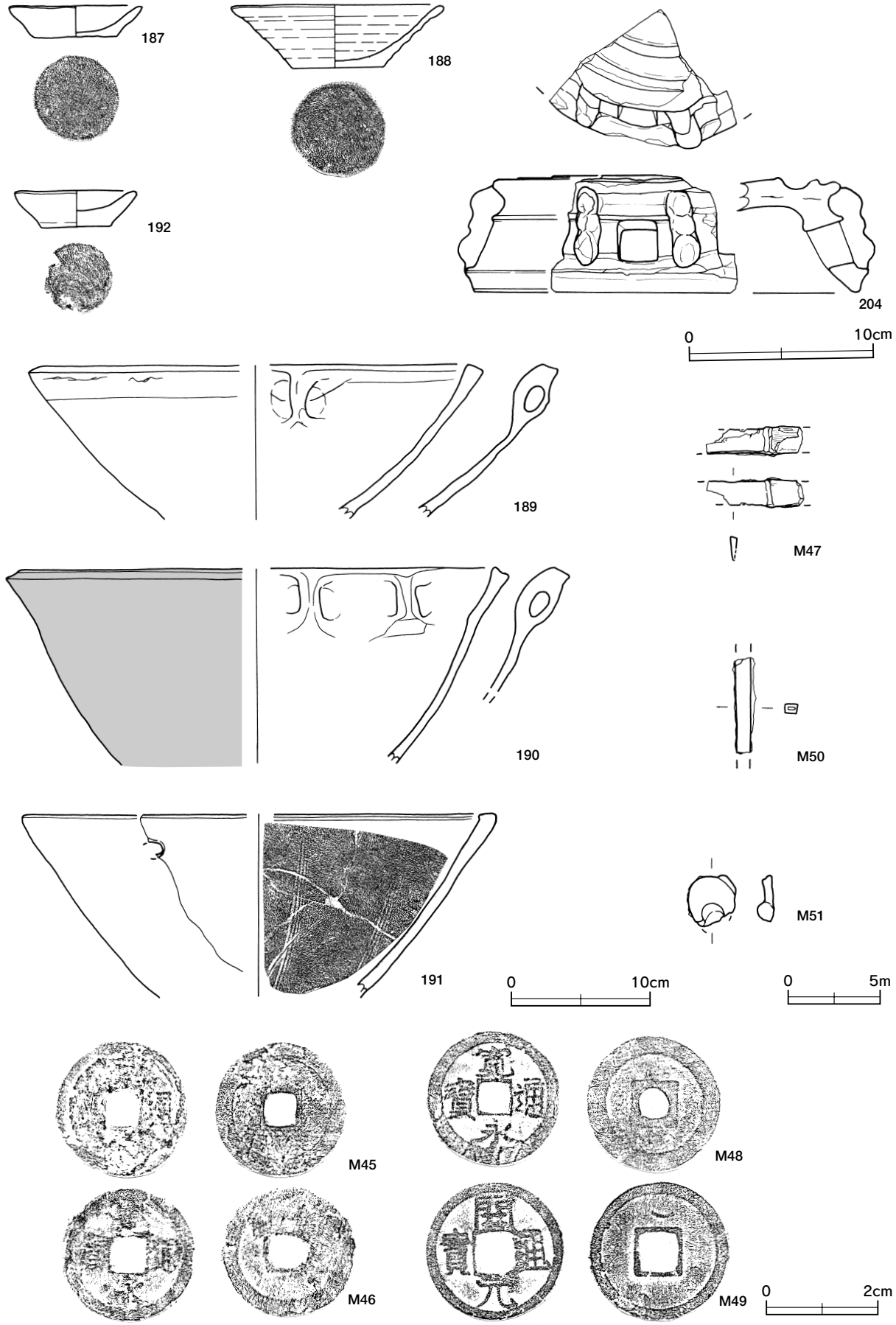
第288号土坑土層解説
1　暗ｵﾘｰﾌﾞ色　黒色土粒子中量，粘土粒子・鉄分少量，炭化粒子微量
2　暗灰黄色　粘土ブロック中量，砂粒・鉄分少量
3　緑 灰 色　粘土ブロック・黒色土ブロック・砂粒中量



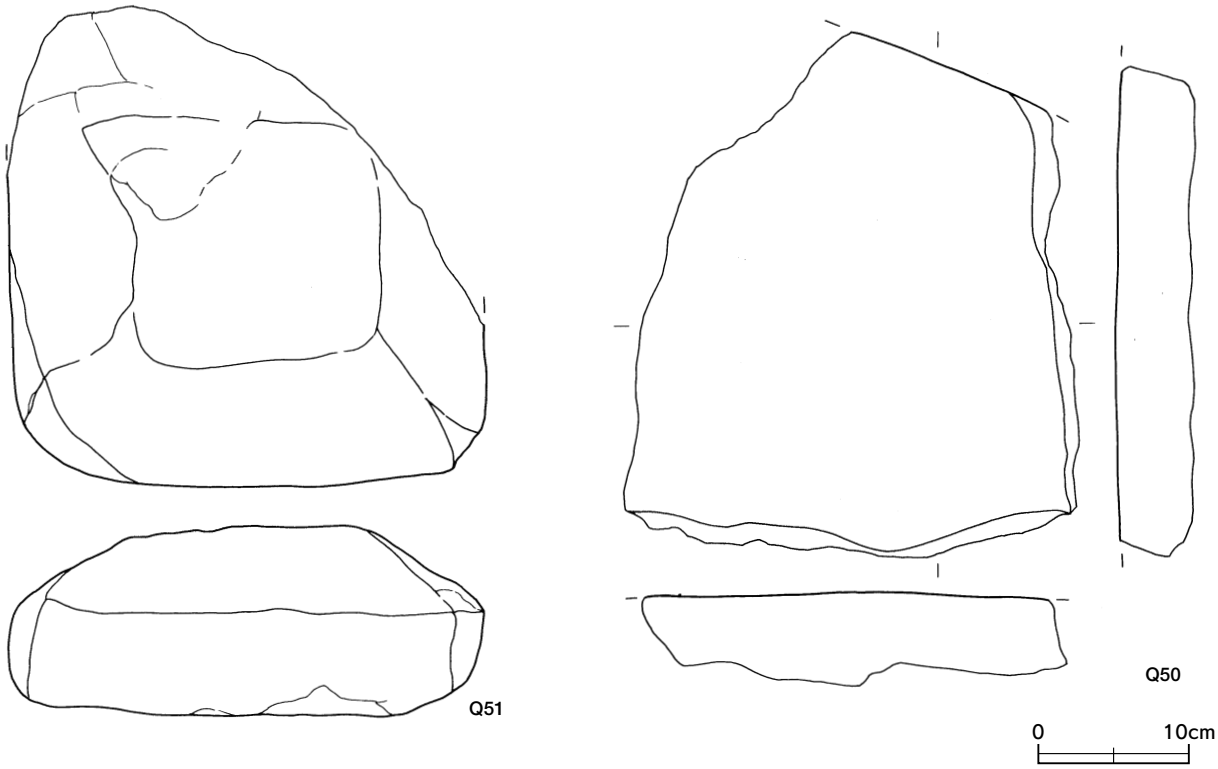
第88図　土坑実測図（１）


B3d7
189
191
187
188
190
SK2
5.4m
B3h8
5.4m
SK8
B3c9
5.8m
SK16
A2j0
SD1
SK47
SD1
4.8m
B2a3
Q50
5.2m
SK257
B4e2-w1m
SE2
5.4m
SK236
B3i0
4.4m
第二次水田
SK258
D5c4
SK293
SK286
3.8m
SK288
Q51
C3d7-E1m
3.6m
SK280
D4a9
-N2m
204
3.8m
SK276
0
2m

第89図　土坑実測図（2）



第90図　土坑出土遺物実測図（1）



第91図　土坑出土遺物実測図（２）

第２号土坑出土遺物観察表（第91・92図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
187	土師質土器	小皿	6.9	1.7	4.5	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ナデ　底部回転糸切り	南側底面	100%　ＰＬ11
188	土師質土器	皿	11.2	3.3	4.8	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	内・外面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り	東側上層	60%
189	土師質土器	内耳鍋	［30.6］	（11.0）	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ　体部内・外面ナデ　内耳１か所遺存	中央部中層・底面	
190	土師質土器	内耳鍋	［34.0］	（14.1）	－	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ　体部内・外面ナデ　内耳２か所遺存	北～南上層	20%　外面煤付着
191	土師質土器	擂鉢	［33.9］	（13.1）	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ナデ　内面４単位の櫛目　焼成前の穿孔部有り	中央部底面	

第47号土坑出土遺物観察表（第90図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
192	土師質土器	小皿	6.4	1.9	3.7	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ナデ　底部回転糸切り	覆土中	100%　ＰＬ11

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鋳年	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M45	寛永通寶	2.4	0.6	2.6	1697	銅	新寛永　無背銭	覆土中	
M46	寛永通寶	2.4	0.6	3.3	1697	銅	新寛永　無背銭	覆土中	

第226号土坑出土遺物観察表（第91・92図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M47	刀子	（5.3）	（1.5）	（0.5）	（2.6）	鉄	刀身部から茎部　刃部断面三角形　茎部木質遺存	覆土中	ＰＬ23

第236号土坑出土遺物観察表（第90図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M50	釘	(5.2)	0.8	0.6	(8.5)	鉄	断面長方形	覆土中	ＰＬ23
M51	不明	(2.6)	2.5	0.9	(8.8)	鉄	中央部に凸有り　留め具ヵ	覆土中	ＰＬ23

第257号土坑出土遺物観察表（第91図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q50	墓標ヵ	(34.7)	(30.2)	6.4	9,800	雲母片岩	表面に加工痕	中央部中層	

第258号土坑出土遺物観察表（第90図）

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鋳年	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M48	寛永通寶	2.4	0.5	3.2	1656	銅	古寛永　無背銭	覆土中	

第276号土坑出土遺物観察表（第90図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
204	須恵器	円面硯	[18.0]	6.2	[20.6]	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	脚部に隆帯貼り付け　上下にずらした方形の透かしが巡る	北東側下層	ＰＬ13

第280号土坑出土遺物観察表（第91図）

番号	器種	幅	奥行き	厚さ	重量(kg)	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q51	五輪塔	31.8	31.7	12.6	15.0	花崗岩	火輪　軒先は直線的	北東壁際上層	

第288号土坑出土遺物観察表（第90図）

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鋳年	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M49	開元通寶	2.5	0.7	3.3	中世期	銅	背面判読不明	覆土中	

表６　土坑一覧表

土坑番号	位　置	長径方向	平面形	規　　模		壁面	底面	覆土	出　土　遺　物	備　　考（新→旧）
				長径（軸）×短径（軸）（m）	深さ(cm)					
1	B3c8	N－56°－E	長方形	2.84×1.56	10	外傾	平坦	人為		
2	B3c7	N－41°－E	長方形	2.51×1.91	86	外傾	平坦	人為	土師質土器（皿，内耳鍋，擂鉢）	
4	B3f5	N－16°－W	長方形	1.14×0.88	28	外傾	平坦	人為		
5	B3e5	－	円形	0.89	77	外傾	平坦	人為		ＳＫ６→本跡
6	B3e6	－	円形	1.34	13	外傾	平坦	人為		本跡→ＳＫ５
7	B3h7	N－43°－W	長方形	1.84×1.56	16	外傾	平坦	人為		ＳＫ238→本跡
8	B3h8	N－51°－E	長方形	1.72×1.21	11	外傾	平坦	自然		
11	B3g7	－	円形	0.92	14	外傾	平坦	人為		
12	B3g7	－	円形	0.73	20	外傾	平坦	人為		
13	B3h7	－	円形	0.76	29	外傾	平坦	人為		ＳＫ14→本跡
14	B3h7	－	円形	0.46	10	外傾	平坦	自然		本跡→ＳＫ13

土坑番号	位　置	長径方向	平面形	規　　模		壁面	底面	覆土	出　土　遺　物	備　　考（新→旧）
				長径（軸）×短径（軸）（m）	深さ(cm)					
15	B3e6	－	円形	0.69	6	外傾	平坦	人為		
16	B3b8	N－56°－E	長方形	［1.50］×（0.95）	21	外傾	平坦	自然	土師質土器（皿，内耳鍋，擂鉢）	
18	B3a3	－	円形	0.32	10	外傾	平坦	人為		本跡→ＳＥ４
19	B3b7	－	［円形］	0.39	20	外傾	平坦	人為		柱穴，ＳＫ20→本跡
20	B3b7	－	円形	0.71	55	外傾	平坦	自然		本跡→ＳＫ19
21	B3c6	－	円形	0.39	25	外傾	平坦	人為		柱穴
22	B3c6	－	円形	0.33	22	外傾	平坦	人為		柱穴
23	B3b6	－	円形	0.39	29	外傾	平坦	人為		柱穴
24	B3d8	－	円形	0.48	84	外傾	平坦	人為		ＳＤ３→本跡
25	B3d8	－	円形	0.51	29	外傾	平坦	人為		柱穴
26	B3e7	－	円形	0.43	13	外傾	平坦	人為		柱穴
27	B3e7	－	円形	0.4	17	外傾	平坦	人為		柱穴，本跡→ＳＸ１
28	B3e7	－	円形	0.33	22	外傾	平坦	人為		柱穴，本跡→ＳＸ１
29	B3b3	－	円形	0.65	8	外傾	平坦	人為		
32	B3a3	－	円形	0.28	12	外傾	平坦	人為		柱穴
33	B3a3	－	円形	0.25	14	外傾	平坦	人為		柱穴
34	B3a3	－	円形	0.33	12	外傾	平坦	人為		柱穴
35	B3a3	－	円形	0.41	16	外傾	平坦	人為		柱穴
36	B3a3	－	円形	0.43	6	外傾	平坦	人為		柱穴
37	A3j3	N－66°－W	楕円形	1.21×0.38	14	外傾	平坦	人為		
38	B3a2	－	円形	0.59	30	外傾	平坦	人為		柱穴
40	B3b2	－	円形	0.42	10	外傾	平坦	人為		
41	B3c2	－	円形	0.86	14	外傾	平坦	人為		
42	B3b2	－	円形	0.33	11	外傾	平坦	人為		柱穴
43	B3b2	－	円形	0.22	13	外傾	平坦	人為		柱穴
45	B3a2	－	［円形］	0.59	32	外傾	平坦	人為		柱穴，ＳＫ46→本跡
46	B3a2	－	円形	0.58	31	外傾	平坦	人為		柱穴，本跡→ＳＫ45
47	A2j9	N－53°－W	長方形	1.68×1.29	37	外傾	平坦	人為	土師質土器（皿），古銭	
48	B3b1	－	円形	0.4	8	外傾	平坦	人為		柱穴
49	B2j1	－	円形	0.34	22	外傾	平坦	人為		柱穴
51	B3b1	－	円形	0.26	9	外傾	平坦	人為		柱穴
53	B3a3	－	円形	0.22	12	外傾	平坦	人為		柱穴
56	A3j1	－	円形	0.49	31	外傾	平坦	人為		
57	B3a2	－	円形	0.25	14	外傾	平坦	人為		柱穴
58	B2a0	－	円形	0.27	7	外傾	平坦	人為		柱穴
59	B2j1	－	円形	0.44	23	外傾	平坦	人為		柱穴
60	B3a2	－	円形	0.29	4	外傾	平坦	人為		柱穴
61	B3a1	－	円形	0.24	13	外傾	平坦	人為		柱穴
62	B3a1	N－67°－E	長方形	0.89×0.71	44	外傾	平坦	人為		柱穴
63	B3a2	N－88°－W	楕円形	0.47×0.31	20	外傾	平坦	人為		
64	B3a2	－	円形	0.28	8	外傾	平坦	人為		柱穴
66	B2a0	－	［円形］	0.38	19	外傾	平坦	人為		柱穴，ＳＫ102→本跡
68	B2a2	－	円形	0.43	26	外傾	平坦	人為		
69	B3c4	－	円形	0.97	28	外傾	平坦	人為		
70	B3b1	－	円形	0.28	8	外傾	平坦	人為		柱穴
72	B2j1	－	円形	0.27	15	外傾	平坦	人為		柱穴

土坑番号	位　置	長径方向	平面形	規　　模		壁面	底面	覆土	出　土　遺　物	備　　考（新→旧）
				長径（軸）×短径（軸）（m）	深さ(cm)					
73	B2j2	－	円形	0.26	46	外傾	平坦	人為		柱穴
74	B3b1	N－37°－W	長方形	0.91×0.64	46	外傾	平坦	人為		
75	B2j2	－	円形	0.41	51	外傾	平坦	人為		柱穴
76	B2j2	－	円形	0.18	8	外傾	平坦	人為		柱穴
77	B3d6	N－34°－W	長方形	1.0×0.63	20	外傾	平坦	人為		ＳＫ86→本跡
78	B3g6	－	円形	0.29	33	垂直	平坦	人為		柱穴
79	B3g6	－	円形	0.22	14	垂直	平坦	人為		柱穴
80	B3h7	－	円形	0.18	15	外傾	平坦	人為		柱穴
81	B3a2	－	円形	0.18	24	外傾	平坦	人為		柱穴
82	B3c2	N－51°－W	楕円形	1.46×1.21	33	外傾	平坦	人為		本跡→ＳＫ83
83	B3c2	－	［円形］	［1.10］	33	外傾	平坦	人為		ＳＫ82→本跡
84	B3g7	－	円形	0.2	17	外傾	平坦	人為		柱穴
85	B3h7	－	円形	0.24	8	外傾	平坦	人為		柱穴
86	B3d6	－	円形	0.18	8	外傾	平坦	人為		柱穴，本跡→ＳＫ77
88	B3f9	N－28°－W	方形	0.57×0.52	22	外傾	平坦	人為		本跡→ＳＩ７
89	B3g6	－	円形	0.21	10	外傾	平坦	人為		柱穴
90	B3g6	－	円形	0.24	30	外傾	平坦	人為		柱穴
91	B3g6	－	円形	0.21	11	外傾	平坦	人為		柱穴
92	B3h7	－	円形	0.28	22	外傾	平坦	人為		柱穴
93	B3g7	－	円形	0.28	34	外傾	平坦	人為		柱穴
94	B4g7	－	円形	0.29	11	外傾	平坦	人為		柱穴
95	A3j1	－	円形	0.12	4	外傾	平坦	人為		柱穴
96	B3a1	－	円形	0.22	4	外傾	平坦	人為		柱穴
98	B2a0	－	円形	0.38	37	外傾	平坦	人為		柱穴
99	B2a0	－	円形	0.29	23	外傾	平坦	人為		柱穴
101	B2a0	－	円形	0.26	12	外傾	平坦	人為		柱穴
102	B2a0	N－34°－W	楕円形	0.48×0.34	23	外傾	平坦	人為		柱穴，本跡→ＳＫ66
103	B3c7	N－18°－E	楕円形	0.58×0.34	3	外傾	平坦	人為		
105	B2a0	－	円形	0.2	4	外傾	平坦	人為		柱穴
106	B2a1	－	円形	0.28	6	外傾	平坦	人為		柱穴
107	B3a1	－	円形	0.21	4	外傾	平坦	人為		柱穴
108	B3b1	－	円形	0.28	8	外傾	平坦	人為		柱穴
109	A3j1	－	円形	0.2	12	外傾	平坦	人為		柱穴
110	A3j1	N－59°－E	楕円形	0.44×0.24	25	外傾	平坦	人為		柱穴，本跡→ＳＫ111
111	A3j1	－	円形	0.36	20	外傾	平坦	人為		柱穴，ＳＫ110→本跡
112	B3a2	－	円形	0.28	8	外傾	平坦	人為		柱穴
113	B3a2	－	円形	0.21	7	外傾	平坦	人為		柱穴
114	B3a3	－	円形	0.39	24	外傾	平坦	人為		柱穴
115	B3a3	－	円形	0.23	9	外傾	平坦	人為		柱穴
116	B3a3	－	円形	0.25	8	外傾	平坦	人為		柱穴
117	B3a3	－	円形	0.26	10	外傾	平坦	人為		柱穴
118	B3a4	－	円形	0.24	14	外傾	平坦	人為		柱穴
119	B3b2	－	円形	0.26	23	外傾	平坦	人為		柱穴
120	B3b2	－	円形	0.36	36	外傾	平坦	人為		柱穴
121	B3c2	N－84°－W	楕円形	0.40×0.21	14	外傾	平坦	人為		
122	B3b3	－	円形	0.24	22	外傾	平坦	人為		柱穴

土坑番号	位　置	長径方向	平面形	規　　模		壁面	底面	覆土	出　土　遺　物	備　　考（新→旧）
				長径（軸）×短径（軸）（m）	深さ(cm)					
123	B3b2	－	円形	0.29	35	外傾	平坦	人為		柱穴
124	B3b3	－	円形	0.28	26	外傾	平坦	人為		柱穴
125	B3b3	－	円形	0.29	7	外傾	平坦	人為		柱穴
126	B3c2	－	[円形]	[0.41]	(18)	外傾	平坦	人為		
127	B3b3	－	円形	0.23	6	外傾	平坦	人為		本跡→ＳＫ128
128	B3b3	－	[円形]	[0.33]	(22)	外傾	平坦	人為		ＳＫ127→本跡
129	B3c3	－	円形	0.21	34	外傾	平坦	人為		柱穴
130	B3c3	－	円形	0.20	29	外傾	平坦	人為		柱穴
131	B3c3	－	円形	0.21	9	外傾	平坦	人為		柱穴
132	B3d3	－	円形	0.32	17	外傾	平坦	人為		柱穴
133	B3d3	－	円形	0.22	6	外傾	平坦	人為		柱穴，本跡→ＳＩ１
134	B3b4	－	円形	0.24	14	外傾	平坦	人為		柱穴
135	B3b4	－	円形	0.2	6	外傾	平坦	人為		柱穴
136	B3b4	－	円形	0.29	9	外傾	平坦	人為		柱穴
137	B3b5	－	円形	0.3	29	外傾	平坦	人為		柱穴
144	B3b5	－	円形	0.22	20	外傾	平坦	人為		柱穴
145	B3b5	Ｎ－89°－Ｗ	楕円形	0.24×1.4	10	外傾	平坦	人為		柱穴
146	B3b5	－	円形	0.26	18	外傾	平坦	人為		柱穴
147	B3b5	Ｎ－41°－Ｗ	楕円形	0.42×0.35	19	外傾	平坦	人為		柱穴
148	B3e8	－	円形	0.42	24	外傾	平坦	人為		柱穴，本跡→ＳＸ１
149	B3e7	－	円形	0.36	29	外傾	平坦	人為		柱穴，本跡→ＳＸ１
150	B3e7	－	円形	0.46	33	外傾	平坦	人為		柱穴，本跡→ＳＸ１
151	B3c5	－	円形	0.31	27	外傾	平坦	人為		柱穴
152	B3c5	－	円形	0.25	12	外傾	平坦	人為		柱穴
153	B3c5	Ｎ－28°－Ｅ	楕円形	0.46×0.31	22	外傾	平坦	人為		柱穴
154	B3c6	－	円形	0.49	26	外傾	平坦	人為		
155	B3c5	－	円形	0.28	32	外傾	平坦	人為		柱穴，本跡→ＳＢ８，Ｐ８
156	B3b5	－	円形	0.31	22	外傾	平坦	人為		柱穴
157	B3c6	－	円形	0.46	17	外傾	平坦	人為		
158	B3b6	Ｎ－56°－Ｅ	楕円形	0.52×0.40	7	外傾	平坦	人為		
159	B3b6	－	円形	0.43	7	外傾	平坦	人為		
160	B3b6	－	円形	0.41	7	外傾	平坦	人為		
161	B3c6	－	円形	0.3	10	外傾	平坦	人為		柱穴
162	B3b6	Ｎ－48°－Ｅ	楕円形	0.4×0.24	5	外傾	平坦	人為		柱穴
163	B3c7	Ｎ－29°－Ｅ	方形	0.4×0.39	3	外傾	平坦	人為		
164	B3c7	－	円形	0.36	9	外傾	平坦	人為		柱穴
165	B3c7	－	円形	0.38	13	外傾	平坦	人為		柱穴
166	B3c6	－	円形	0.42	13	外傾	平坦	人為		
167	B3c6	－	円形	0.19	8	外傾	平坦	人為		柱穴
168	B3c6	－	円形	0.29	26	外傾	平坦	人為		柱穴
169	B3c6	－	円形	0.28	9	外傾	平坦	人為		柱穴
170	B3c6	－	円形	0.22	11	外傾	平坦	人為		柱穴
171	B3c6	Ｎ－41°－Ｅ	楕円形	0.27×0.18	9	外傾	平坦	人為		柱穴
172	B3c6	－	円形	0.3	40	外傾	平坦	人為		柱穴
173	B3d6	－	円形	0.33	16	外傾	平坦	人為		柱穴
174	B3e7	Ｎ－30°－Ｅ	楕円形	0.69×0.31	17	外傾	平坦	人為		

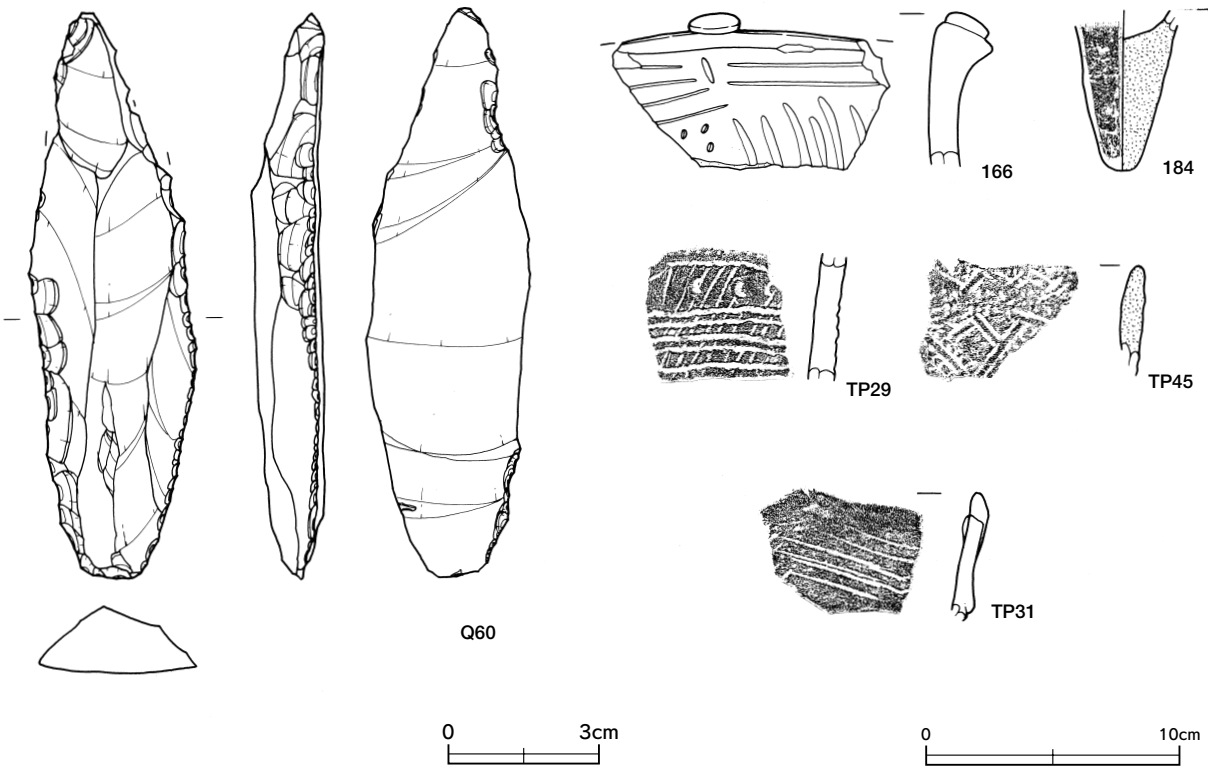
土坑番号	位　置	長径方向	平面形	規　　模		壁面	底面	覆土	出　土　遺　物	備　　考（新→旧）
				長径（軸）×短径（軸）（m）	深さ(cm)					
175	B2j1	－	円形	0.36	58	外傾	平坦	人為		柱穴
177	B3f4	N－29°－E	［方形］	［0.4］×0.38	19	外傾	平坦	人為		柱穴
178	B3f4	－	円形	0.49	18	外傾	平坦	人為		柱穴，本跡→ＳＫ201
179	B3f4	－	［円形］	［０．26］	20	外傾	皿状	人為		柱穴
180	B3g4	N－23°－W	長方形	1.06×0.81	11	外傾	平坦	人為		本跡→ＳＫ199
181	B3g4	N－41°－E	楕円形	0.86×0.68	14	外傾	平坦	人為		
182	B3g4	－	円形	0.8	10	外傾	平坦	人為		本跡→ＳＫ193
183	B3g4	－	円形	0.41	13	外傾	平坦	人為		本跡→ＳＫ182
184	B3g3	N－60°－E	楕円形	0.48×0.33	20	外傾	平坦	人為		柱穴，ＳＫ223→本跡
185	B3f3	－	円形	0.31	7	外傾	平坦	人為		柱穴
186	B3g4	N－45°－E	楕円形	0.99×0.74	5	外傾	平坦	人為		
187	B3g4	N－２°－W	方形	0.6×0.57	35	外傾	平坦	人為		柱穴
188	B3g3	－	円形	0.26	5	外傾	平坦	人為		柱穴
189	B3g3	－	円形	0.6	40	外傾	平坦	人為		柱穴，本跡→ＳＫ190
190	B3g3	N－51°－E	［長方形］	［0.8］×0.7	32	外傾	平坦	人為		ＳＫ189→本跡
191	B3h5	－	円形	0.33	15	外傾	平坦	人為		柱穴
192	B3h4	－	円形	0.38	21	外傾	平坦	人為		柱穴
193	B4g4	－	円形	0.38	23	外傾	平坦	人為		柱穴，本跡→ＳＫ182
194	B3h4	N－９°－W	方形	0.29×0.28	23	外傾	平坦	人為		柱穴
195	B3h4	－	円形	0.18	20	外傾	平坦	人為		柱穴
196	B3i5	－	円形	0.24	47	外傾	平坦	人為		柱穴
197	B3i5	－	円形	0.23	16	外傾	平坦	人為		柱穴
198	B3i4	－	円形	0.22	19	外傾	平坦	人為		柱穴
199	B3g4	N－41°－W	［楕円形］	［0.6×0.4］	7	外傾	平坦	人為		ＳＫ200→本跡
200	B3g4	－	［円形］	0.7	8	外傾	平坦	人為		本跡→ＳＫ199，217
201	B4f4	－	円形	0.36	26	外傾	平坦	人為		柱穴，ＳＫ178→本跡
202	B3i5	－	円形	0.21	22	外傾	平坦	人為		柱穴
203	B3i5	－	円形	0.24	7	外傾	平坦	人為		柱穴
204	B3i5	－	円形	0.46	12	外傾	平坦	人為		柱穴，本跡→ＳＫ205
205	B3i6	－	円形	0.46	24	外傾	平坦	人為		柱穴，ＳＫ204→本跡
206	B3i5	－	円形	0.29	11	外傾	平坦	人為		柱穴，本跡→ＳＫ207
207	B3i6	－	円形	0.51	18	外傾	平坦	人為		ＳＫ206→本跡
208	B3i6	－	円形	0.4	48	外傾	平坦	人為		柱穴
209	B3i6	－	円形	0.27	36	外傾	平坦	人為		柱穴
210	B3g4	N－１°－E	方形	0.4×0.38	12	外傾	平坦	人為		柱穴
211	B3g4	N－16°－E	楕円形	0.47×0.34	24	外傾	平坦	人為		柱穴
212	B3i5	－	円形	0.22	9	外傾	平坦	人為		柱穴，本跡→ＳＫ213
213	B3i5	－	円形	0.21	10	外傾	平坦	人為		柱穴，ＳＫ212→本跡
214	B3i5	－	円形	0.23	22	外傾	平坦	人為		柱穴
215	B3i5	－	円形	0.22	6	外傾	平坦	人為		柱穴
216	B3i6	－	円形	0.28	15	外傾	平坦	人為		柱穴
217	B3g4	N－28°－E	楕円形	0.46×0.4	11	外傾	平坦	人為		柱穴ヵ,ＳＫ200→本跡
218	B3f3	－	円形	0.3	13	外傾	平坦	人為		柱穴
219	B3i5	－	円形	0.24	34	外傾	平坦	人為		柱穴
220	B3h6	－	円形	0.39	33	外傾	平坦	人為		柱穴
221	B3i6	－	円形	0.22	24	外傾	平坦	人為		柱穴

土坑番号	位　置	長径方向	平面形	規　　模		壁面	底面	覆土	出　土　遺　物	備　　考（新→旧）
				長径（軸）×短径（軸）（m）	深さ(cm)					
222	B3i6	－	円形	0.33	27	外傾	平坦	人為		柱穴
223	B3g3	－	円形	0.24	16	外傾	平坦	人為		柱穴，本跡→ＳＫ184
224	B3h6	－	円形	0.28	18	外傾	平坦	人為		柱穴
225	B3g2	－	円形	0.4	16	外傾	平坦	人為		柱穴
226	B3h6	Ｎ－21°－Ｗ	長方形	［0.68］×0.59	46	外傾	平坦	人為	古銭	ＳＫ227→本跡
227	B3h6	－	円形	0.29	46	外傾	平坦	人為		本跡→ＳＫ226
228	B3h6	Ｎ－51°－Ｗ	長方形	0.51×0.39	38	外傾	平坦	人為		本跡→ＳＫ237
229	B3h5	－	円形	0.8	62	外傾	皿状	人為		本跡→ＳＫ232
230	B3h5	－	円形	42	35	外傾	皿状	人為		柱穴，本跡→ＳＩ－２
231	B3h6	Ｎ－26°－Ｗ	長方形	0.54×0.34	56	垂直	平坦	人為		柱穴
232	B3h6	Ｎ－30°－Ｗ	長方形	0.98×0.51	52	外傾	平坦	人為		ＳＫ229→本跡
233	B3h6	－	円形	0.33	27	外傾	平坦	人為		柱穴
234	B3h6	－	円形	0.34	36	外傾	平坦	人為		柱穴
236	B4e1	［Ｎ－34°－Ｅ］	[長･方形]	（1.64×0.56）	（48）	外傾	平坦	人為	鉄製品（釘，不明）	ＳＥ２→本跡
237	B3g6	－	［円形］	［0.82］	21	外傾	平坦	人為		ＳＫ228→本跡
238	B3h7	－	円形	0.29	12	外傾	平坦	人為		本跡→ＳＫ７
239	B3i6	－	円形	0.48	18	外傾	平坦	人為		柱穴
240	B3h6	－	円形	0.21	19	外傾	平坦	人為		柱穴
241	B4e2	－	円形	0.34	22	外傾	平坦	人為		柱穴
242	B4e1	－	円形	0.2	7	外傾	平坦	人為		柱穴
243	B4d1	－	円形	0.25	11	外傾	平坦	人為		柱穴
244	B3e0	－	円形	0.21	8	外傾	平坦	人為		柱穴
245	B3e0	－	円形	0.24	6	外傾	平坦	人為		柱穴
246	B3d5	－	円形	0.31	26	外傾	平坦	人為		柱穴
247	B2c5	Ｎ－59°－Ｗ	長方形	1.97×1.32	41	外傾	平坦	人為		本跡→ＳＫ256
248	B2b5	－	円形	0.2	24	外傾	平坦	人為		ＳＢ12→本跡
249	B2d6	Ｎ－53°－Ｗ	楕円形	0.8×0.44	8	外傾	平坦	人為		
251	B2d8	－	円形	0.61	17	外傾	平坦	人為		
252	A2h5	Ｎ－70°－Ｅ	不定形	1.01×0.43	8	外傾	平坦	人為		
253	A2j3	Ｎ－87°－Ｗ	不定形	1.62×0.76	12	外傾	平坦	人為		
256	B2c6	Ｎ－63°－Ｗ	不定形	［2.23］×1.36	35	外傾	平坦	人為		ＳＫ247→本跡
257	B2a3	Ｎ－３°－Ｅ	[楕円形]	［1.20］×0.81	24	外傾	平坦	人為	墓標ヵ	
258	B3i9	Ｎ－49°－Ｗ	[長方形]	（0.98）×［0.60］	71	外傾	平坦	人為	古銭	
259	B2c7	Ｎ－44°－Ｗ	方形	2.70×2.66	6	外傾	平坦	人為		
260	C5h0	－	円形	1.1	40	外傾	平坦	自然		
261	D5a6	Ｎ－35°－Ｗ	長方形	1.85×［0.6］	30	外傾	平坦	人為		
262	D5a6	－	円形	0.75	18	外傾	平坦	人為		
267	D5b3	－	円形	0.63	85	外傾	平坦	人為		
268	D5b3	Ｎ－23°－Ｅ	楕円形	0.64×0.42	40	外傾	平坦	人為		
269	B5b2	Ｎ－43°－Ｗ	[楕円形]	［2.00］×（1.71）	79	外傾	平坦	人為		ＳＫ270→本跡
270	D5b2	Ｎ－15°－Ｗ	不定形	（2.70）×1.45	64	外傾	平坦	人為		ＳＫ294→本跡→ＳＫ269
271	D5b1	Ｎ－34°－Ｗ	楕円形	1.88×0.68	44	外傾	平坦	人為		
272	D5b1	Ｎ－24°－Ｗ	長方形	1.21×1.02	90	外傾	平坦	人為		
273	D4a9	Ｎ－59°－Ｗ	長方形	5.02×1.92	92	外傾	平坦	人為		本跡→ＳＫ274
274	D4a8	Ｎ－30°－Ｗ	[長方形]	2.16×［1.8］	（70）	外傾	平坦	人為		ＳＫ273→本跡
275	D5c3	Ｎ－44°－Ｗ	不定形	0.82×0.39	33	外傾	平坦	人為		

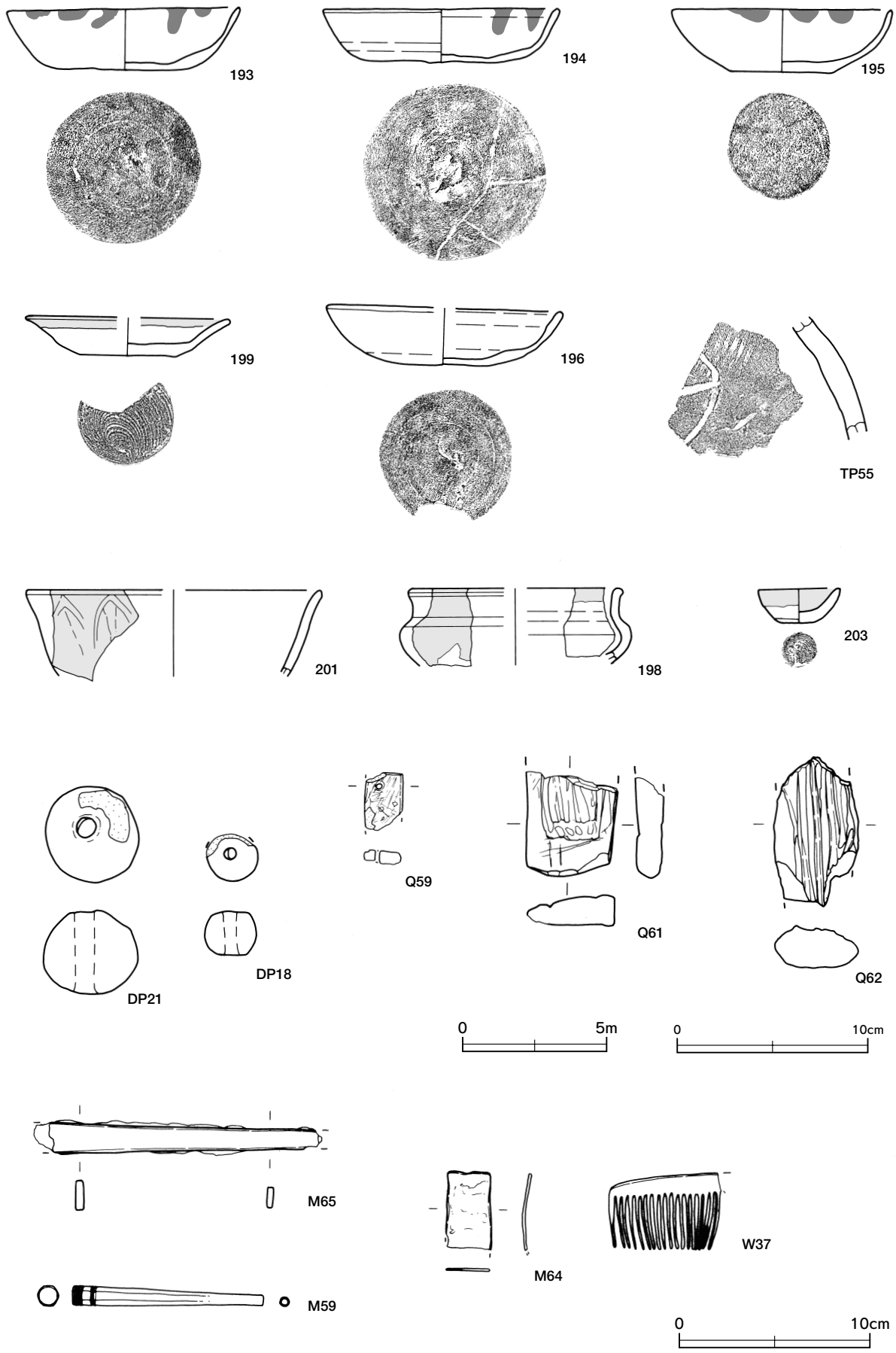
土坑番号	位　置	長径方向	平面形	規　　模		壁面	底面	覆土	出　土　遺　物	備　　考（新→旧）
				長径（軸）×短径（軸）（m）	深さ(cm)					
276	C4a0	N－43°－W	長方形	1.64×0.69	51	外傾	平坦	人為	円面硯	
280	C3c7	－	［円形］	（1.82）	23	外傾	平坦	人為	五輪塔（火輪部）	
282	C5e4	N－55°－W	隅丸長方形	［2.19］×1.21	45	外傾	平坦	人為		
283	C4j8	N－38°－E	不定形	1.58×1.25	16	外傾	平坦	自然		
284	D5c3	N－6°－W	楕円形	0.86×［0.70］	37	外傾	平坦	人為		
285	D5b2	N－36°－W	不定形	［1.50］×1.18	39	外傾	平坦	人為		本跡→ＳＫ284→ＳＫ289
286	D5c3	－	［円形］	［0.56］	20	外傾	平坦	人為		本跡→ＳＫ291,293
287	D5c3	N－56°－W	［長方形］	［1.70］×0.66	（35）	外傾	平坦	人為		ＳＫ286,289→本跡→ＳＫ293
288	D5c3	N－62°－W	不定形	1.64×1.14	64	外傾	平坦	人為	古銭	ＳＫ286→本跡
289	D5c3	N－37°－W	［長方形］	［1.50］×0.9	26	外傾	平坦	人為		ＳＫ284→本跡→ＳＫ291,287
290	D5c3	－	［円形］	［1.20］	（43）	外傾	平坦	人為		ＳＫ291→本跡
291	D5c3	－	［円形］	［1.18］	（63）	外傾	平坦	人為		ＳＫ286,289→本跡→ＳＫ290
292	D5c3	N－22°－W	［楕円形］	1.12×［0.90］	46	外傾	平坦	人為		ＳＫ284→本跡
293	D5c3	－	［円形］	［1.10］	（68）	外傾	平坦	人為		ＳＫ287,289→本跡
294	D5c2	N－50°－W	不定形	1.62×1.47	42	外傾	平坦	人為		本跡→ＳＫ270,284,285,296
295	D5c2	N－10°－W	［長方形］	（0.97×0.50）	35	外傾	平坦	人為		ＳＫ296→本跡
296	D5c2	N－39°－E	長方形	2.14×1.52	26	外傾	平坦	人為		ＳＫ294→本跡→ＳＫ295

（５）遺構外出土遺物（第92～94図）

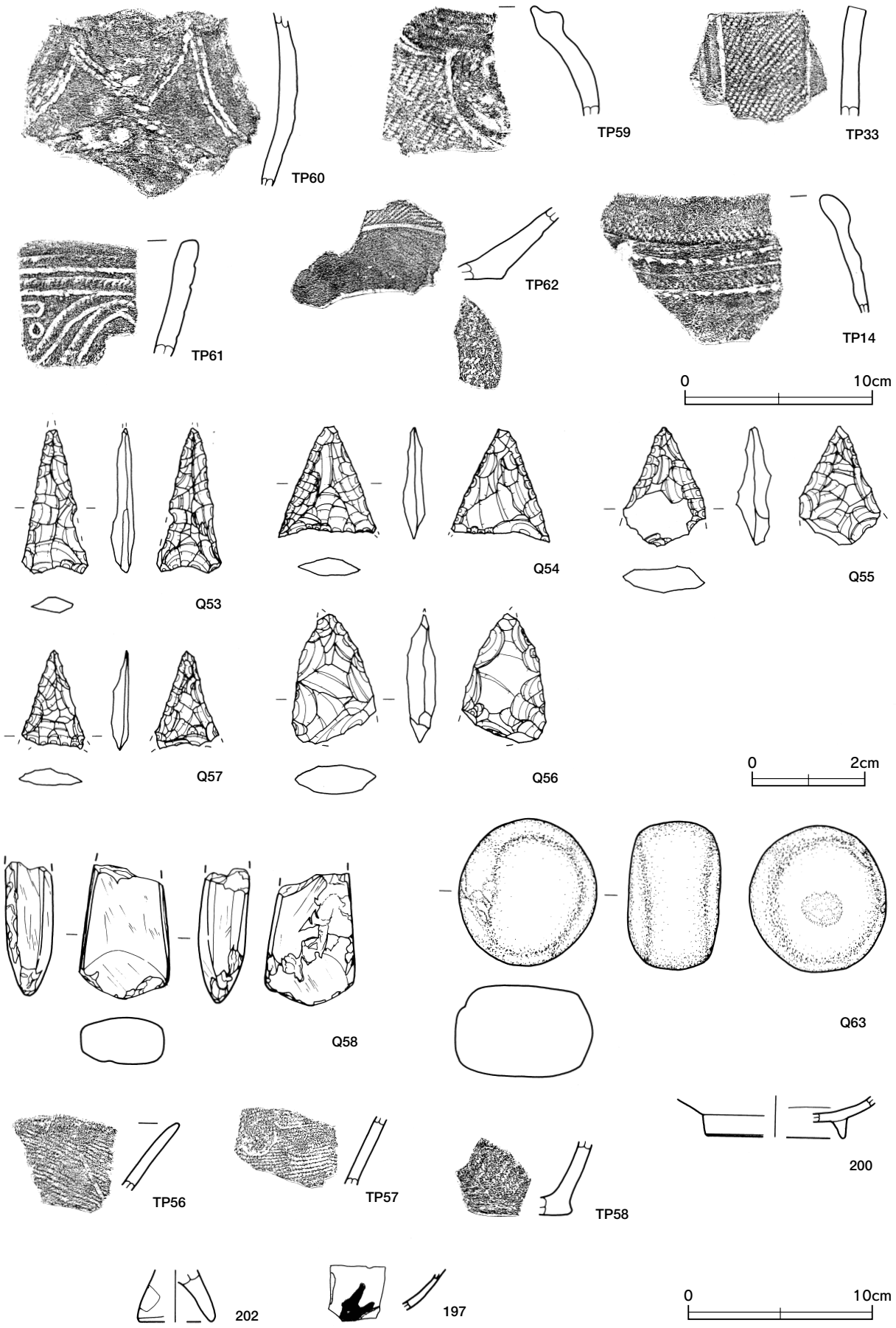
遺構に伴わない主な遺物について，実測図及び遺物観察表で掲載する。



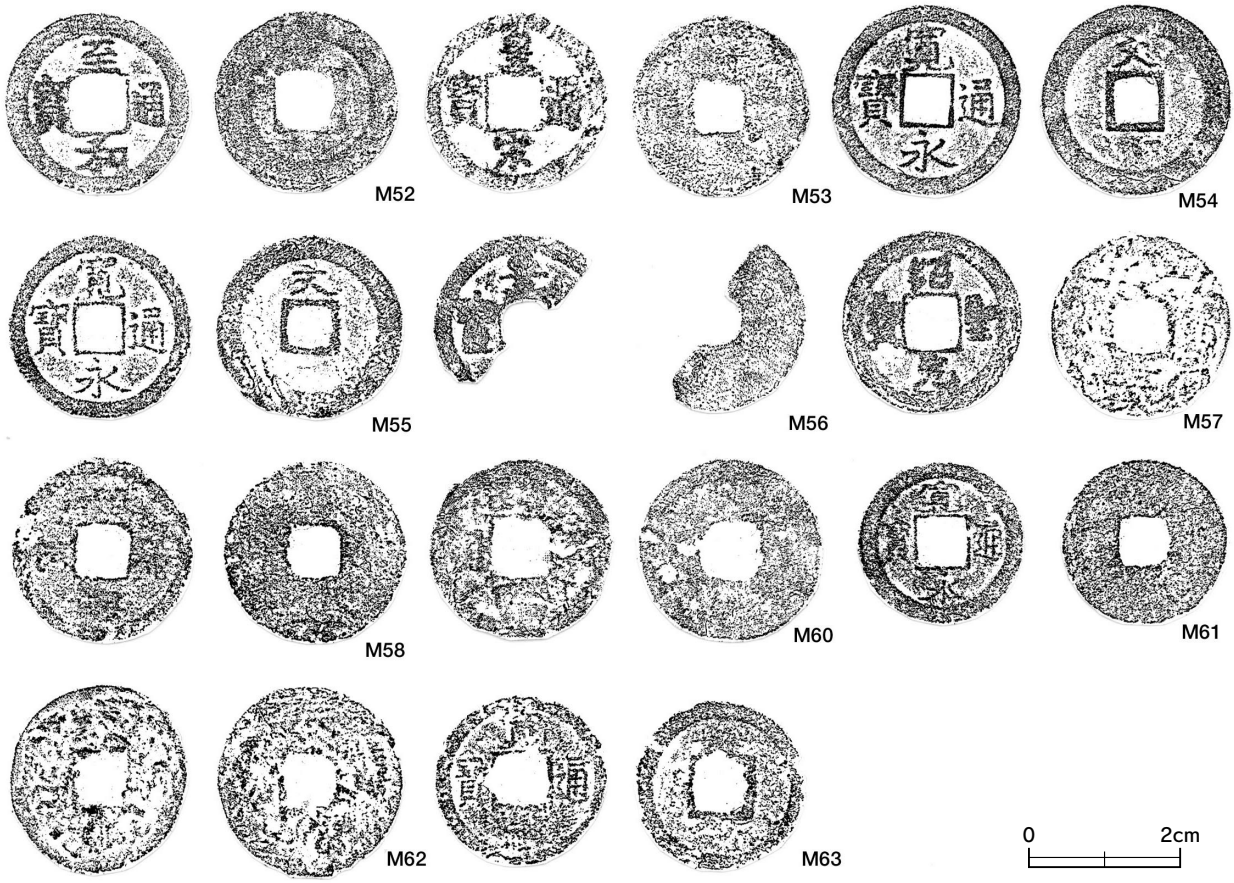
第92図　遺構外出土遺物実測図（１）



第93図　遺構外出土遺物実測図（２）



第94図　遺構外出土遺物実測図（3）



第95図　遺構外出土遺物実測図（４）

遺構外出土遺物観察表（第92～95図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
166	縄文土器	深鉢	－	(6.1)	－	長石・石英・雲母	灰黄	普通	口唇部にボタン状の突体貼付　口縁部にヘラ状工具による沈線文で文帯し刺突文を施文	B4h4	早期後半
184	縄文土器	深鉢	－	(6.3)	－	長石・石英・雲母	灰黄	普通	尖底部　無紋	第1包含層覆土中	早期後半　内・外面炭火物付着
193	土師質土器	皿	12.3	3.3	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	内・外面ナデ　底部回転ヘラ切り	SE2覆土上層	100%　油煙付着　ＰＬ11
194	土師質土器	皿	12.3	2.9	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	内・外面ナデ　底部回転ヘラ切り	SE2覆土上層	90%　油煙付着　ＰＬ11
195	土師質土器	皿	11.4	3.3	5.3	長石・石英・赤色粒子	黄橙	普通	内・外面ナデ　底部回転ヘラ切り	SE2覆土上層	80%　油煙付着　ＰＬ11
196	土師質土器	皿	12.3	3.0	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	内・外面ナデ　底部回転ヘラ切り	SE2覆土上層	70%
197	土師器	坏	－	(2.2)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	内・外面ナデ	表土中	外面墨書「□」ＰＬ16
198	古瀬戸	香炉	[10.8]	(4.0)	－	石英・緻密	灰・オリーブ灰	普通	ロクロナデ　釉は刷毛塗り	Cﾄﾚﾝﾁ覆土中	ＰＬ14
199	陶器	緑釉小皿	[10.6]	2.0	5.0	白色粒子・緻密	灰白・オリーブ灰	良好	ロクロナデ　釉は漬け掛け　底部回転糸切り	Dﾄﾚﾝﾁ覆土中	60%　ＰＬ14
200	灰釉陶器	碗	－	(2.3)	[7.3]	白色粒子・緻密	灰白・明オリーブ灰	良好	ロクロナデ　釉は刷毛塗り	表土中	
201	磁器	蓮弁文碗	[15.4]	(4.5)	－	白色粒子・緻密	灰白・明緑灰	良好	外面陽刻による連弁文	第2包含層覆土中	ＰＬ14
202	土師器	ミニチュア	－	(2.8)	3.8	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	外面ヘラナデ後ナデ　内面ナデ	Cﾄﾚﾝﾁ覆土中	50%
203	陶器	ミニチュア	4.2	1.8	1.7	石英・白色粒子	灰白・黒褐	普通	ナデ　釉は刷毛塗り	Cﾄﾚﾝﾁ覆土中	95%　ＰＬ14
TP14	縄文土器	深鉢	－	(6.2)	－	長石・石英・雲母	灰褐	普通	折り返しによる縁帯部及び貼付隆帯部に単節ＬＲの縄文　棒状工具による横位の刺突列　補修孔有り	B4h4	後期
TP29	縄文土器	深鉢	－	(4.9)	－	長石・石英・雲母	褐灰	普通	外面横位と斜位の撚糸による圧痕文　半截竹管状工具による刺突列	B4i4	早期後半
TP31	縄文土器	深鉢	－	(5.0)	－	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	口唇部に角状突起　沈線による山形文	B4i5	前期前半
TP33	縄文土器	深鉢	－	(5.8)	－	著石・石英・雲母	灰褐	普通	単節ＬＲの縄文地に平行沈線が下垂	B4i5	中期
TP45	縄文土器	深鉢	－	(4.4)	－	長石・石英・雲母	褐灰	普通	角状突起を有する　口縁部に平行沈線による山形文　沈線沿いに半截竹管状工具による爪形文	B4j4	前期前半　内・外面炭火物付着
TP55	須恵器	甕	－	(6.4)	－	長石・石英・白色粒子	灰	普通	外面平行叩き　内面ヘラ削り　指頭痕	Ⅲ区表土中	外面線刻有り
TP56	弥生土器	広口壺	－	(3.6)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	附加条一種附加２条の縄文を施文	ＳＢ５	後期

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
TP57	弥生土器	広口壺	－	(3.6)	－	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	附加条一種附加２条の縄文を施文	Ｌトレンチ	後期
TP58	弥生土器	広口壺	－	(3.9)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	附加条一種附加２条の縄文を施文	Ｃトレンチ	後期，内面に炭化物付着
TP59	縄文土器	深鉢	－	(5.9)	－	長石・石英・雲母	赤褐	普通	隆帯区画の口縁部　単節ＬＲの縄文を施文	Ａトレンチ	中期
TP60	縄文土器	深鉢	－	(9.4)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	波状口縁　隆帯貼付による区画に沿って刺突文を施文	Ａトレンチ	中期
TP61	縄文土器	深鉢	－	(6.3)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	撚糸による押圧文　口縁部に横位の爪形文を施文	第一次水田面	後期
TP62	縄文土器	深鉢	－	(3.8)	－	長石・石英・白色粒子	にぶい黄橙	普通	横位の沈線で区画　区画内に単節ＬＲの縄文　ヘラ状工具による磨き	Ａトレンチ	後期，内・外面黒色処理

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎　土	特　　徴	出土位置	備　考
DP18	土玉	1.8	1.6	0.4	4.88	長石・石英・雲母	ナデ	PF8覆土中	
DP21	土玉	3.4	2.9	0.8	28.8	長石・石英・雲母	ナデ　指頭痕	SK281覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q53	鏃	(2.6)	(1.2)	0.4	(0.88)	チャート	表裏面押圧剥離調整　凹基無茎鏃	SI1覆土中	ＰＬ21
Q54	鏃	2.05	(1.85)	0.35	(0.9)	珪岩	表裏面押圧剥離調整　平基無茎鏃	SI6覆土中	ＰＬ21
Q55	鏃	(2.1)	(1.45)	0.6	(1.5)	瑪瑙	表裏面押圧剥離調整　基部欠損	第一次水田面	ＰＬ21
Q56	鏃	(2.3)	(1.55)	0.55	(2.0)	チャート	表裏面押圧剥離調整　基部破損	Ａトレンチ	ＰＬ21
Q57	鏃	(1.25)	(1.15)	0.35	(0.9)	チャート	表裏面押圧剥離調整　平基無茎鏃	PF8	ＰＬ21
Q58	磨製石斧	(7.5)	4.8	(2.6)	(146.5)	凝灰岩	刃部欠損　丁寧な研磨	SD5覆土中	
Q59	垂れ飾り	(1.2)	(1.3)	(0.5)	(2.1)	滑石	片面穿孔　孔径0.21㎝	Ｌトレンチ	ＰＬ21
Q60	ナイフ	(7.45)	2.25	0.95	(14.5)	頁岩	両縁調整	調査Ⅲ区表土中	ＰＬ21
Q61	硯ヵ	(3.6)	(3.2)	(1.1)	(16.7)	粘板岩	表面に刃物状工具による加工痕　側面研磨	Ａトレンチ	ＰＬ21
Q62	砥石	(7.8)	4.4	2.2	(102.7)	ホルンフェルス	筋状の研磨痕　磨石転用ヵ	Ａトレンチ	ＰＬ21
Q63	磨石	8.0	7.4	4.9	440	安山岩	全面を研磨面に使用	調査Ⅲ区表土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M59	煙管	10.0	1.0	1.0	13.4	真鍮	吸口径３㎜　肩部断面六角形　1-6-4の条線	Ｆトレンチ	ＰＬ23
M64	不明	(4.1)	2.4	0.1	(5.60)	銅	板状	表土中	ＰＬ23
M65	小刀ヵ	(15.2)	(1.7)	0.4	(58.0)	鉄	茎部ヵ　断面台形	表土中	ＰＬ23

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鋳年	材　質	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
M52	至和通寶	2.4	0.7	2.4	1054	銅	北宋　真書　無背銭	SD12覆土中	
M53	皇宋通寶	2.5	0.6	3.3	1038	銅	北宋　真書　無背銭	Ｂトレンチ	
M54	寛永通寶	2.6	0.6	3.1	1668	銅	新寛永　背「文」	Ｂトレンチ	
M55	寛永通寶	2.5	0.6	3.7	1668	銅	新寛永　背「文」	Ｃトレンチ	
M56	□□□寶	－	－	(1.08)	－	銅	景祐元寶ヵ　無背銭	Ｄトレンチ	
M57	紹聖元寶	2.4	0.7	1.8	1094	銅	北宋　行書　無背銭	Ｅトレンチ	
M58	寛永通寶	2.4	0.6	2.4	－	銅	新寛永ヵ　摩滅により書体不明	Ｆトレンチ	
M60	□□□寶	2.5	0.7	2.7	－	銅	摩滅により判読不明	Ｆトレンチ	
M61	寛永通寶	2.2	0.6	2.6	1961	銅	新寛永　無背銭	調査Ⅲ区表土中	
M62	不明	2.5	0.7	2.6	－	銅	摩滅により判読不明	調査Ⅲ区表土中	
M63	寛永通寶	2.3	0.7	(1.7)	1691	銅	新寛永　無背銭	調査Ⅲ区表土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
W37	櫛	4.1	(5.8)	(0.23)	(2.70)	木	横長　留櫛　挽歯式	調査Ⅱ区表土中	ＰＬ24

第４節　まとめ

今回の調査では，集落跡，水田跡，遺物包含層が確認された。当遺跡は，北側に広がる台地に入り込んだ谷津部にある。南側には恋瀬川に沿って低地が帯状に広がっており，標高３～５ｍの地域では畑と水田に利用され良好な耕作地帯となっている。低地における集落の構成に着目して行われた調査結果を基に，若干の考察を行いまとめとしたい。

１　集落と生産遺構

今回の調査では，台地に入り込んだ谷津の地形を利用して構成された集落跡と生産遺構（水田跡）が確認された。ここで焦点となることは，水田と集落の関連性であるが，結論付けられる資料が得られなかった。しかし，得られた資料からいくつかの事象に対する可能性を考えることができる。ここでは集落跡と生産遺構との関連性を考察するために時期及び性格が判明している住居・掘立柱建物・井戸について検討する。

①集落の変容

確認された住居跡の時期は古墳時代後期から奈良時代初頭で，第２号住居跡だけが８世紀前葉の奈良時代である。しかし，主に集落として機能していた時期は古墳時代後期から終末期で，住居跡は７世紀末ないし８世紀の初頭には姿を消してしまいその後は，掘立柱建物と井戸だけが存在していたことになる。確認された掘立柱建物跡は面積が25㎡前後で，使用された柱は径20㎝ほどの丸材で，柱材の底部は手斧状の工具による加工痕がある。検出された柱根は乾燥が進んでいる上，すべての柱根について樹種同定できたわけではないが，第14号掘立柱建物跡に使われた柱材は，栗と考えられる材質の丸材が使われていたことが判明した。規模と形状から国衙や郡衙に見られる正倉の様な建物ではなく，納屋的なものと考えられる[1)]。　調査範囲が狭く，今回の調査結果だけで結論付けることはできないが，後に述べる水田との関わりを考えた場合，当遺跡は台地裾部に立地しており，地形的には谷津を利用した水田耕作に適した環境にあることから，農作物の一時的な保管場所として収蔵区域に変わった可能性が考えられ，居住区域から収蔵区域へ区画整備されたことが想定できる。

さらに集落の様相を変化させる事象として，８世紀に制定された大宝律令の影響も考えられる。天皇を中心とした中央集権国家の形成が進められ，地方では郡・里制を導入し，組織的な国の構造改革が行われた[2)]。土地は国の所有となり居住地にも統制が加えられ[3)]，人民は口分田による租税が課せられた。昭和55年に調査が行われた石岡市鹿の子Ｃ遺跡[4)]から出土した漆紙文書からは，戸籍・田籍・出挙・人口などに関わる事象を読みとることができ，当遺跡の所在する市域にも律令制度の整備が進められていることを知ることができる。今回の調査では，政治的なつながりを示す資料は確認されていないが，このような時代背景から当遺跡においても，集落構成に大きな影響を及ぼしたことは間違いなく，当時代の集落遺跡の調査では念頭に置いた調査が必要である。

②生産遺構（水田跡）

検出された水田面は２面である。現在も稲作が行われており，第一次面は現耕作土の直下，第二次面は第一次面の直下で重層して検出されている。時期は出土遺物から判断して，第一次面は江戸時代後期から明治時代，第二次面は中世から江戸時代後期で，重層して検出されたことからも継続して利用されてきたことが推定される。

今回の調査では水田が経営され始めた明確な時期は判明しなかった。水田の出現は弥生時代に遡り，当遺跡が所在する石岡市でも石川山崎鹿島神社境内で，稲作が行われていたことを実証する籾痕が土器底部に残って

いる弥生土器が発見されている[5)]。このことから，当地で稲作が行われていたことは間違いなく，当遺跡及びその周辺でも稲作が行われていたことは十分考えられる。 水田には灌漑設備が必要であるが，大きな労力を必要とするため，当時の水田の多くは，水が得られやすい自然地形を利用した方法で行われていたと考えられる。谷地部に立地している当遺跡は水が得やすく稲作に適していると考えられる。しかし，今回の調査では弥生時代の土器片は，数点検出されただけで生活跡は確認されなかった。さらに，水田部からの出土した遺物も時期的には奈良時代以降のものであり，当地での水田耕作は遡っても奈良時代からということになる。

次に出土遺物に着目したい。水田部（調査Ⅲ区）における奈良時代以降の遺物は，土層断面の第６～８層から出土している。時期は８世紀前葉から10世紀頃で，台地裾部に位置している調査Ⅰ・Ⅱ区で確認された掘立柱建物の時期と同じである。ここで注目されるのは調査Ⅰ・Ⅱ区との関連性である。調査Ⅰ区の第２号井戸跡（ＳＫ－100）からは「伊」と墨書された土器片が２点出土している。同様に調査Ⅰ区に近い第２号遺物包含層の西側からも「伊」の文字が読み取れる土器片が４点出土している。その他，第２号井戸跡からは灰釉陶器片や瓦片，同区の第１号溝跡からは緑釉陶器片が出土しており，いずれも第２号遺物包含層から出土している施釉陶器や瓦と同時期のものと考えられ，地形的にみても調査Ⅲ区は谷地部に広がっているため，調査Ⅰ・Ⅱ区の遺物が流れ込んだ可能性が高い。谷地部が水田として利用されていたと仮定すれば，利用され始めたのは８世紀以降で，低湿地だった谷地部が埋没してから水田として利用したとすればさらにもう少し時間を要すことになり，８世紀後半頃から利用され始められた可能性が考えられる。

しかし，一つ疑問が残る。水田に利用され始めた時期の可能性は説明がつくが，水田からは土師器片，須恵器片，瓦片などの遺物が多く出土しており，耕作面として使用できるのかである。このことについては，今回の調査過程の中で答えが見つけられた。現代の耕作土を除去して床土を露出させると，江戸時代から明治時代の遺物が出土し，今回の調査で確認された第一次面の水田跡が出現した。つまり，継続して利用されているため直下に旧水田の床土だけが遺存していたことになる。第６～８層面でも同様のことを言うことができ，第二次面で検出された水田の耕作により撹拌され，床土だけが遺存していたと考えることができる。遺物の出土状況からみても，時期的には奈良時代から平安時代まであり開きが認められる。土層断面では３層に分層できることを踏まえれば，遺物も時期ごとに分層された状態で確認することができるはずである。しかし，実際には上下逆転して，時には常滑や古瀬戸などの土器片混入も認められたことから，第６～８層は継続して水田に利用されてきたため，耕作面は残っておらず，床土の部分だけが遺存したものと考えられる。

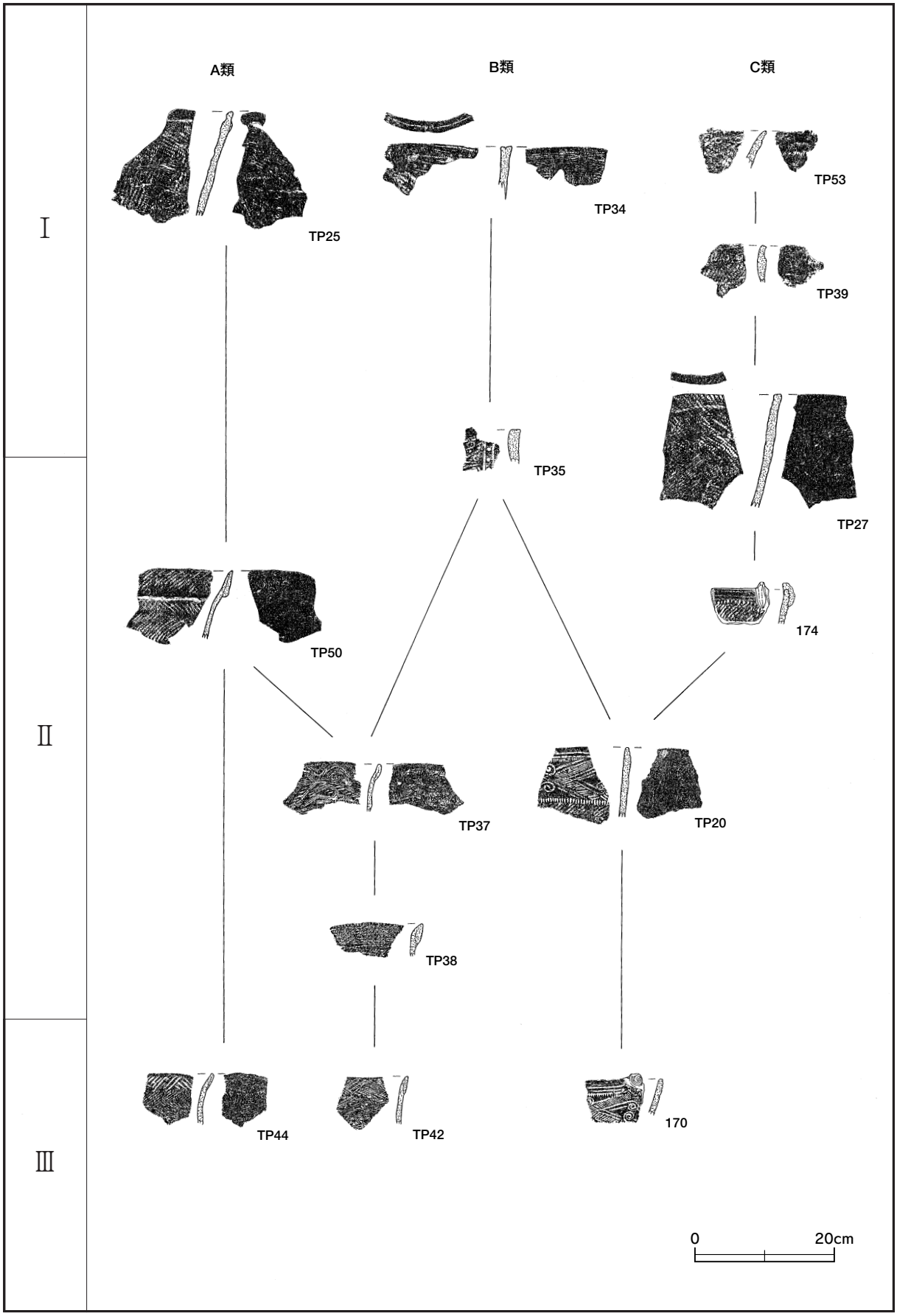
以上のことから断定することはできないが，奈良時代になり律令体制下に置かれた人々によって開墾され，田畑の経営が始まった可能性を考えることができる。

２　遺物包含層

当遺跡では谷地部にあたる調査Ⅲ区で，水田跡の下から縄文時代と奈良時代から平安時代を中心とする遺物包含層が検出された。以下では，出土した遺物に焦点をあてて考察を述べる。

①　第１号遺物包含層

第１号遺物包含層は，北側に広がる台地に入り込んだ谷地部の中心に位置している。現耕作面から2.0ｍ下位の標高3.0ｍほどの地点で，斜面に堆積した縄文時代前期の土器片を含む遺物包含層であった。当時の環境は，木片を多量に含む洪水層が確認されていることから，水辺若しくはその周辺であったと推定される。出土した遺物は土器片以外に，磨石，敲石，尖頭器，石鏃，石錐，剥片，石匙，石錘,玦状耳飾り，胡桃，栃の実，山栗などがある。


A類
B類
C類
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
TP25
TP34
TP53
TP39
TP35
TP27
TP50
174
TP37
TP20
TP38
TP44
TP42
170
0
20cm

第96図　土器の様相

a　出土土器（第96図）

出土した土器は縄文時代前期の花積下層式がほとんどである。羽状縄文系土器群の一形式に属し，縄文が施されている土器が多いが，縄文以外の文様もある。形状及び手法からいくつかに分類することができ時間的経過が見出せる。出土した土器は，口縁部に縁帯部をもつもの…Ａ類，撚糸による蕨手文を圧痕したもの…Ｂ類，口縁部に文様列を施すもの…Ｃ類に分類することが可能で，時間の経過と共に次のような変化が見られる。

Ⅰ期は，内面に貝殻条痕文が施されている。

Ａ類…隆帯貼り付けによる縁帯部を構成する。

Ｂ類…口縁部の断面形状は箱形をしており，口唇部に撚糸による圧痕文が施される。管状工具による刺突列を配するタイプも見られ，Ｃ類と共通性がみられる。

Ｃ類…口縁部に横位の文様列が施される。同期内でも文様に変化があり，前段階では管状工具による刺突列が施され，後段階になると縄文による横位の押圧文に変化する。

Ⅱ期は，各タイプ間での融合性がみられる。内面に施されていた貝殻条痕文が消えていく。

Ａ類…口縁に折り返しによる縁帯部が構成され，縄文が施される。前段階では条痕文を残す。

Ｂ類…口縁部の断面形状が台形を呈するもが前段階にはみられるが，後段階では姿を消し，替わってＡ類の折り返しによる縁帯部をもつタイプに撚糸による山形文が施される。

Ｃ類…Ｂ類の影響が強くなり，口縁部に施す横位の文様列が撚糸に換わり，菱形をモチーフにした構成の蕨手文が施される。

Ⅲ期は，簡略化の傾向がみられる。

Ａ類…口縁縁帯部に施された山形文が棒状工具による集合沈線文になる。

Ｂ類…口縁縁帯部の縄文が棒状工具による平行沈線文になる。

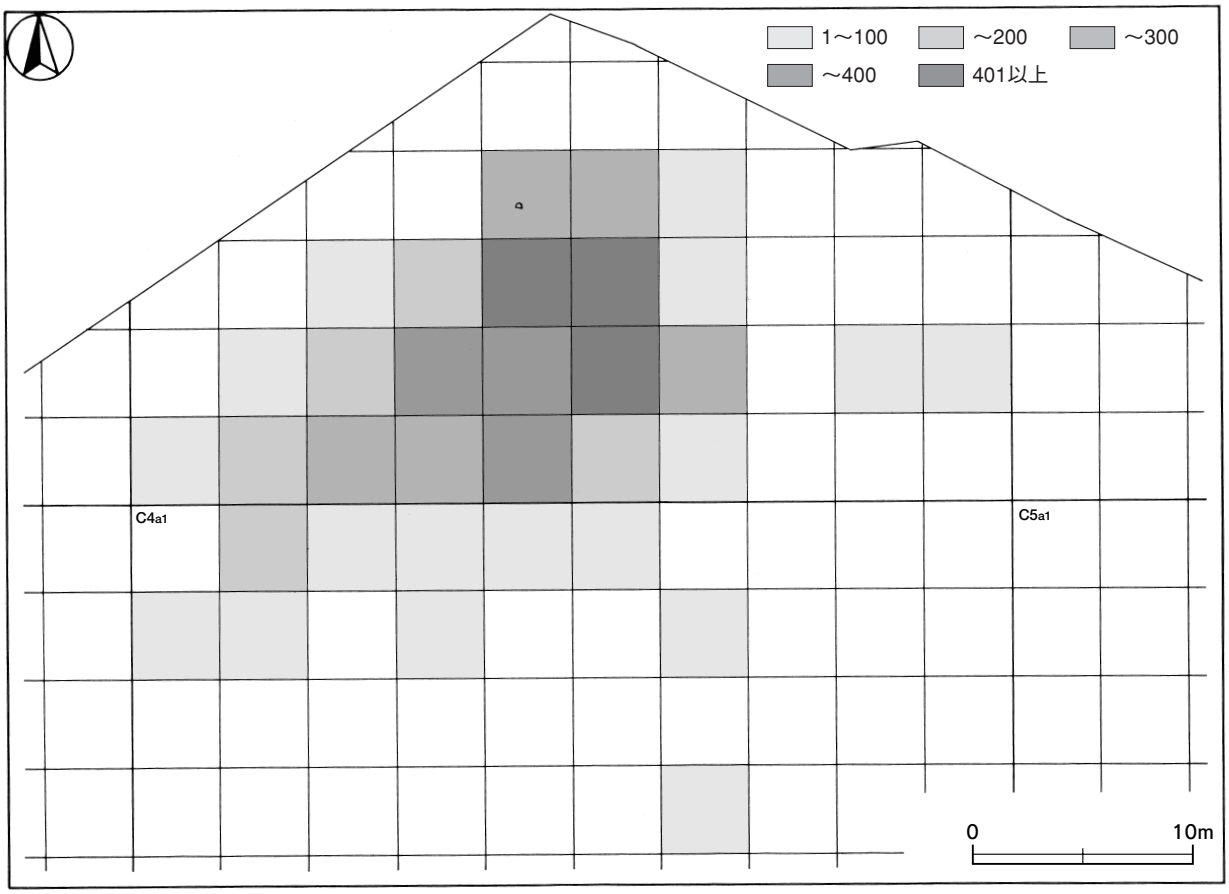
Ｃ類…口縁部に施される横位の文様が棒状工具による沈線になり，蕨手文も渦巻部を除き沈線で施文される。

b　土器と胡桃の分布（第97・98図）

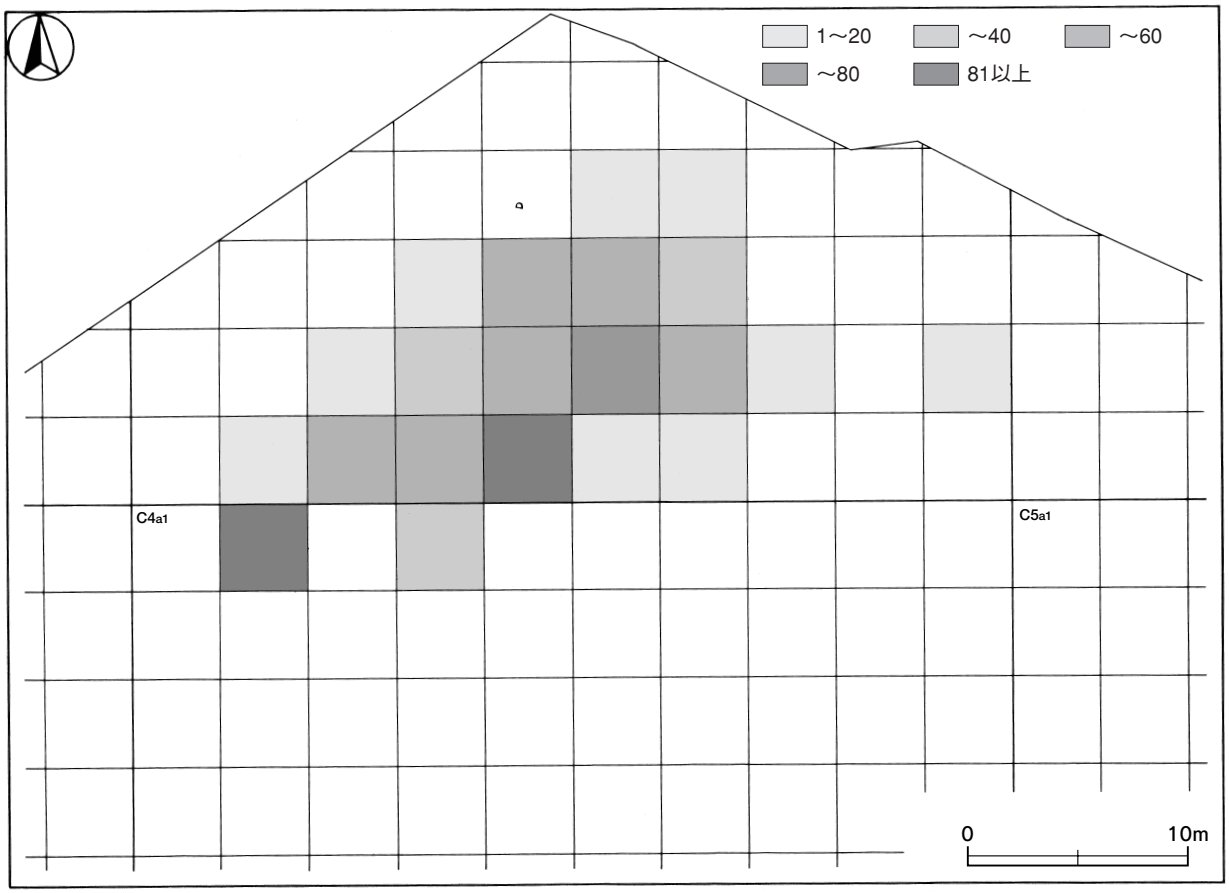
遺物包含層から出土した土器片は5,000点，胡桃は1,000個体分を超える。土器と胡桃の出土位置を平面図化すると北側の台地裾部に集中している。重ね合わせてみると出土位置がほぼ一致していることが確認できる。出土した土器片の割れ口はシャープで，中には接合できた土器片もある。胴部の内・外面には炭化物（粒子）の付着が顕著にみられる。また，胡桃は出土した数の97％は1/2または1/4以下の割れた状態で検出しており，完存状態のものは無かった。わずか３％の胡桃だけが形状を保ったまま検出されたが，穴が開いておりリスや鼠などの齧歯類の動物によって食べられたものと思われる。この３％の胡桃を除けば，人為的に割られて食されたものと推定されることから，出土した遺物は流れ込んで堆積したと考えるよりも投棄されたものと考えた方が自然である。

出土した土器には時間的経過があることは前述したとおりである。正確な時間的経過を知ることはできないが，短期間ではなく長期的な経過があったと考えられる。これらのことは，至近距離に集落があったことを示唆するもので，土器及び胡桃の分布状況から北側の台地の縁辺部に集落が形成されていた可能性が考えられる。

多数の土器や木製品，石器などが出土した神奈川県小田原市に所在する羽根尾貝塚[6]は，縄文時代前期前半から後半にかけての遺跡であり，当時の生活様相を色濃く残している。この遺跡は低地台地へ向かって張り出



第97図　土器の出土分布図



第98図　胡桃の出土分布図

す馬の背状の尾根端部に立地しているが，当時の地形とは大きく異なり，珪藻分析によると遺跡周辺には淡水湖が広がり，標高は現在よりもはるかに低かったことが報告されている。当遺跡で判明した古環境と比較すると出土遺物に相違はあるが状況的に類似点が多く，周辺に集落が存在していたとすれば，生活に必要な水場としての可能性も高く，低地に暮らす当時の生活様相を知る資料となり興味深い。

② 第２号遺物包含層

奈良時代から平安時代を中心とする遺物を包含する第２号遺物包含層は，東西を標高20mほどの台地に挟まれた谷地部で，現表土下60㎝の標高3.9mほどの地点で検出され，谷地部のほぼ全面に広がっている。出土遺物は土師器・須恵器片を中心とし，施釉陶器片，瓦片，転用硯なども出土している。

出土した土師器・須恵器片は，８世紀初頭から10世紀頃までのもので，時期的な差が認められる。須恵器片の胎土には雲母が顕著にみられ，地理的関係からも新治窯の須恵器と考えられる。中には胎土がやや緻密で針状鉱物を含んでいるものや，雲母が含まれておらず細礫を多く含む土器片も少量ではあるが出土している。これらは新治窯産と比較すると器形や焼成にも相違が認められ，新治窯産のものとは明らかな違いがみられる。地理的に柏崎窯産や木葉下窯産の可能性も考えられる[7]。また，当時においては奢侈品であった灰釉陶器片や緑釉陶器片も出土している。出土土器における施釉陶器片の割合は算出していないが，比較的多く出土している。灰釉陶器の碗にみられる高台はハの字状に開き，下端がやや内湾するいわゆる三日月高台で，黒笹90号窯式と考えられ，年代は９世紀後葉に比定される。

検出された陶器片はほとんどが細片であることから破棄したものと考えられるが，東海系の陶器片が搬入されていることは，当時の流通を知る資料として貴重である。

瓦は重弧文軒平瓦２点（三重１，五重１），均整唐草文軒平瓦１点，軒丸瓦１点，堤瓦ヵ１点と平瓦が出土している。軒丸瓦が１点出土しているが，瓦当部が欠損しているため断定はできないが，同時期と考えられる瓦を使用している寺院は，九重廃寺や結城廃寺，新治廃寺である。そのなかでも結城廃寺や新治廃寺では，鋸歯文縁単弁十六葉花文軒丸瓦と組まれて重弧文の軒平瓦が使用されており８世紀前半に位置づけられている。均整唐草文軒平瓦は，複弁十葉花文軒丸瓦，単弁十八葉花文軒丸瓦と組まれて常陸国分寺で使用されており８世紀中頃に位置づけられている[8]。当遺跡周辺では茨城廃寺跡や三面寺廃寺跡が確認されており，これらの寺院で使用されていた可能性もある。瓦片以外に浄瓶など寺院に関係の深い遺物も出土しているが，浄瓶は１点だけで火熱痕があり，瓦も破片ばかりであることから，投棄されたか流れ込んだものと考えられる。いずれにしても寺院との直接的な関連性が断定できる資料に乏しく，今後の調査を加味して性格付けをしなければならない。

註

１）奈良文化財研究所　『古代の官衙遺跡　Ⅱ遺物・遺跡編』　2004年３月

２）石岡市文化財関係資料編纂会　『常府石岡の歴史　－ひたちのみやこ1300年の物語－』　石岡市教育委員会　1997年３月

３）広瀬和雄・小路田康直　『日本古代王権の成立』　青木書店　2002年５月

４）佐藤正好・川井正一　「常磐自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（５）　鹿の子Ｃ遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第20集　1983年３月

５）石岡市史編纂委員会　『石岡市史』（上巻）　石岡市　1990年７月

６）戸田哲也・麻生順司・坪田（舘）弘子　『羽根尾工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　羽根尾貝塚』　多摩川文化財研究所　2003年２月

７）赤井博之　『古代常陸国新治窯跡群の基礎的研究（１）　－奈良・平安時代の須恵器編年を中心に－』　1997年

８）石岡市文化財関係資料編纂会　『石岡市の遺跡　歴史の里の発掘100年史』　茨城県石岡市教育委員会1995年３月

付　　章

田島遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

田島遺跡（茨城県石岡市田島に所在）は、恋瀬川左岸の微高地から低地部にかけて位置する。これまでの発掘調査により、微高地上では奈良・平安時代の竪穴住居跡、低地部では縄文時代前期、古墳時代前期～奈良・平安時代の遺物包含層などが確認されている。

本遺跡では、微高地上が奈良・平安時代に居住域として利用されていたことから、遺跡周辺の低地部は生産域として利用されていたことが推定される。ただし、現時点では水田遺構が検出されておらず、その土地利用が課題とされている。そこで、今回、低地の堆積環境を検討するために珪藻分析を、稲作などを含めた周辺植生を検討するために花粉分析と植物珪酸体分析を行い、これらの結果に基づき、古墳時代前期頃から古代頃にかけて低地の土地利用状況について検討を試みる。

１.試料

試料は、Aトレンチから12点（上位より試料番号1-12）、Bトレンチから13点の土壌試料（上位より試料番号1-13）を採取した。基本的には各層1点とし、層厚が比較的厚い層準については、2点を採取した。図1に試料採取地点の層序および試料採取位置を示す。

〈Aトレンチ〉

古墳時代前期から古代の遺物包含層（試料番号9-12採取層準）の中で、中下部の試料番号10-12は、砂分を多く含む堆積物で木材が不規則に多く含まれることから、洪水堆積物と考えられる。最上部の試料番号9採取層準は、一部で畝状の断面形を呈する灰色の細粒砂混じりシルトである。また、試料番号8より上位が奈良・平安時代の遺物包含層とされる。本地点では、試料番号9について珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を、試料番号8について植物珪酸体分析を実施する。

〈Bトレンチ〉

古墳時代前期から古代の遺物包含層（試料番号8-9採取層準）は、Aトレンチの同時期の最上部層（試料番号9採取層準）と層相が比較的類似する白灰色の細粒砂混じり粘土質シルトである。その下位には古墳時代前期以前の遺物包含層（試料番号10-13採取層準）が認められ、中下部で粗粒、最上部で細粒な層相を示す。中下部の粗粒砂～粗粒砂混じりシルト中には木材が含まれ、洪水堆積物と考えられる。縄文時代前期の遺物も検出されている。最上部は黒色粘土が堆積し、洪水後の後背湿地堆積物と考えられる。また、上位には奈良・平安時代の遺物包含層（試料番号7より上位）が認められ、さらに上位には斑鉄やマンガン斑を伴った水田耕土の可能性のある層が表土まで数層観察される。本地点では、古墳時代前期から古代の遺物包含層とされる試料番号8を中心として上位と下位の試料について分析を行い、各化石の層位的な産状や変化を明らかにするため、珪藻分析3点（試料番号7,8,10）、花粉分析2点（試料番号8,10）、植物珪酸体分析7点（試料番号4,6-11）を実施する。

２.分析方法

（1）珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986,1988,1991a,1991b）などを参照する。

同定結果は、海～汽水生種、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。さらに、産出率2.0％以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性か判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種については小杉（1988）、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性についてはAsai & Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

（2）花粉化石

試料を湿重で約10g秤量し、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離（臭化亜鉛，比重2.3）、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸:濃硫酸=9:1）の順に物理的、化学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の各種類の出現率は木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフォン（－）で結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

（3）植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水、塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離、濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下、乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から稲作や古植生について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の層位分布図を作成する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

3.結果

(1) 珪藻分析

Aトレンチ、Bトレンチとも珪藻化石が豊富に産出する。各地点とも完形殻の出現率が70%前後と化石の保存状態が比較的良い。産出分類群数は、合計で23属151種類である。以下、各トレンチ別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

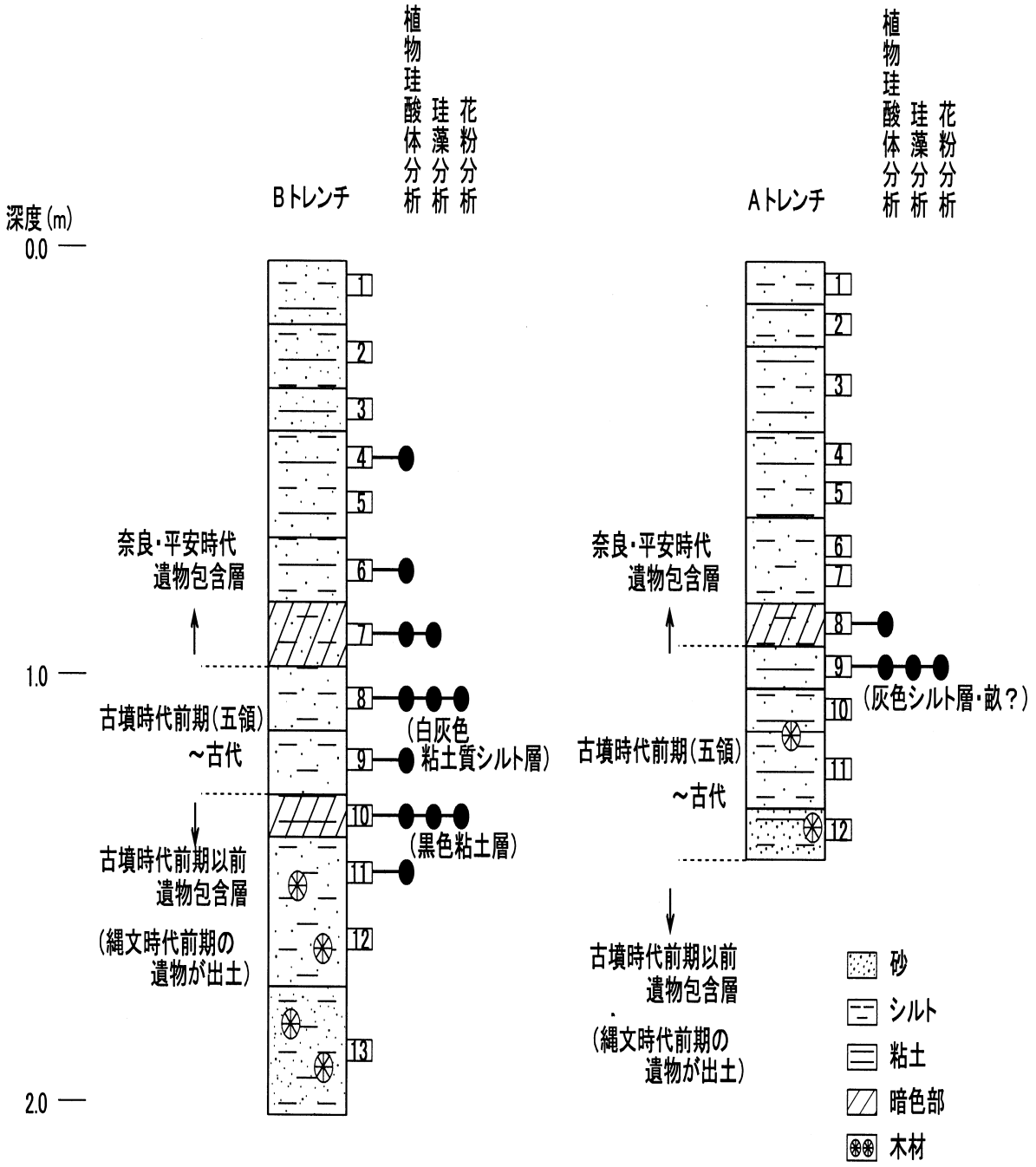


図1　試料採取地点の模式柱状図および分析層位

〈Aトレンチ〉

試料番号9は、水生珪藻が優占する。淡水性種の生態性の特徴は、貧塩不定性種、真＋好アルカリ性種、流水不定性種が優占する。流水不定性のAmphora affinisが約15％産出し、好流水性のNavicula elginensis var. neglecta、流水不定性のCaloneis silicula、Cymbella silesiaca、Diploneis ovalis、流水不定性で沼沢湿地付着生種群のCymbella naviculiformis等を伴う。なお、沼沢湿地付着生種群とは、沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られることから、その環境を指標することができる種群のことである(安藤，1990)。

〈Bトレンチ〉

珪藻化石群集は、試料番号7と試料番号8,10で異なる。試料番号8,10は、淡水域に生息する珪藻化石の他、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻も30-45%産出する。淡水性種の生態性(塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能)の特徴は、貧塩不定性種(少量の塩分には耐えられる種)、真＋好アルカリ性種(pH7.0以上のアルカリ性水域に最もよく生育する種)、流水不定性種(流水域にも止水域にも普通に生育する種)が優占する。流水不定性のDiploneis ovalis、流水不定性で沼沢湿地付着生種群のNavicula elginensis、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻A群(伊藤・堀内，1991)のNavicula mutica等が多産する。

これに対し、試料番号7になると陸生珪藻がほとんど検出されなくなり、水域に生育する珪藻化石が優占し、また前試料に比べて真＋好流水性種が増加する。特に多産する種が認められず、好流水性のNavicula elginensis var. neglecta、流水不定性のAmphora affinis、流水不定性で沼沢湿地付着生種群のCymbella naviculiformis、流水不定性のGomphonema parvulum等が検出される。

(2) 花粉分析

３試料とも花粉化石が良好に検出される。以下、各トレンチの結果を示す。

〈Aトレンチ〉

木本花粉では、ハンノキ属が最も高率に産出し、モミ属、マツ属、スギ属、クマシデ属－アサダ属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ属、カエデ属などを伴う。

草本花粉では、イネ科が多産し、ガマ属、オモダカ属、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、クワ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、アブラナ科、バラ科、ヨモギ属などを伴う。

〈Bトレンチ〉

花粉化石群集は、試料番号10と試料番号8で異なる。試料番号10は、ハンノキ属が多産し、モミ属、マツ属、スギ属、クマシデ属－アサダ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ属、カエデ属を伴い、Aトレンチ試料番号9と類似した組成を示す。また、草本花粉の産状も類似しており、イネ科が多産し、ガマ属、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、クワ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、バラ科、セリ科、ヨモギ属、サンショウモなどを伴う。

これに対し、試料番号8では、ハンノキ属の出現率が低下し、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属が増加する。また、草本花粉の産状も変化し、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が僅かに検出される程度にとどまり、シダ類胞子が多産する。

(3) 植物珪酸体分析

各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、各トレンチの産状を述べる。

〈Aトレンチ〉

植物珪酸体群集は、試料番号9と試料番号8で異なる。試料番号9では、栽培植物であるイネ属がわずかに認められる。また、ネザサ節の産出が目立ち、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。

試料番号8になるとネザサ節が減少し、イネ属やススキ属が増加する。イネ属では機動細胞珪酸体の産出が多く、その出現率は約19%である。

〈Bトレンチ〉

植物珪酸体群集は、試料番号8-11と試料番号4-7で異なる。試料番号8-11ではネザサ節の産出が目立ち、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。また、試料番号8では、イネ属がわずかに認められる。

これに対し、試料番号4-7ではネザサ節が減少し、イネ属とススキ属が増加する。イネ属は、短細胞珪酸体が約5-18%、機動細胞珪酸体が約21-44%に増加する。また、栽培種を含む分類群であるキビ属とオオムギ族も認められるが、検出された植物珪酸体の形態からは栽培種か否かの判別が難しい。

4.考察

(1) 低地の環境変遷および土地利用

古墳時代前期以前の遺物包含層最上部（Bトレンチ試料番号10）では、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種や陸生珪藻が比較的多いことで特徴付けられる。このことから、周辺は、表層がしばしば乾くこともあるような比較的水位の浅い沼沢～湿地のような状態で、腐植が集積したことが推定される。おそらく、下位の洪水堆積後に本層準が堆積した時期は、後背湿地のような環境下にあったと考えられる。このような低地では、ガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属、サンショウモなどの水生植物が生育していたと考えられる。ここで植物珪酸体では、ネザサ節が最も高率に産出する。調査地が丘陵地の縁辺部に近い低地にあることから、本地点には後背丘陵地から流入してくる化石も含まれていることが考えられる。植物珪酸体群集において多産するネザサ節などは、そのような後背丘陵地の植生を反映していると推定される。なお、本層準では栽培植物のイネ属が全く認められない。この産状を見る限り、当時、周辺において稲作が行われた可能性は低いと判断される。

古墳時代前期～古代の遺物包含層になると、Bトレンチ試料番号8では引き続き沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種や陸生珪藻が多産するが、これらに加えて流水性種も低率ながら産出する。これに対し、同時期とみられているAトレンチ試料番号9では、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種が多産し、流水性種も低率ながら産出するが、陸生珪藻をほとんど伴わない点でBトレンチと異なる産状である。このような違いは、それぞれ局地的な堆積環境を反映しているとみられる。したがって、この時期、流水の影響を受ける沼沢湿地のような状態が広がっていたが、場所により水深が浅いために表層が乾くようなこともあったと考えられ、Bトレンチでその傾向が強く現れていると考えられる。この時期も、植物珪酸体の産状をみると、古墳時代前期以前とほぼ同様な景観が広がっていた可能性がある。なお、本層準になると、Aトレンチ、Bトレンチとも、上部においてイネ属が検出されている。ただし、その出現率は、短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体ともに10%以下と極めて低率である。この出現率を見る限り、当時、この遺物包含層が水田として利用されていた可能性は低いと判断される。本層準で検出されるイネ属は、その上位で高率に産出している点を考慮すると、おそらく上位からの落ち込みに由来している可能性がある。

奈良・平安時代遺物包含層になると、真＋好流水性種が増加し沼沢湿地付着生種群も産出する。このことか

ら、周辺低地は、流水の影響のある沼沢湿地のような湿潤な場所となったと考えられる。また、本層より上位では、イネ属の植物珪酸体が、短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体だけでなく、これらの組織片、さらに稲籾に形成される頴珪酸体も検出され、その産状が特徴的である。中でもイネ属機動細胞珪酸体の出現率は、包含層の下部（Aトレンチ試料番号8、Bトレンチ試料番号6,7）で約20%、上部（Bトレンチ試料番号4）で約44%に増加する。現在の水田土壌中に含まれる植物珪酸体の調査によれば、機動細胞珪酸体中のイネ属の割合は約9%であるが、稲藁を堆肥として与えている水田では16%に上がるという結果が得られている(近藤,1988)。この調査例を考慮すれば、奈良・平安時代遺物包含層には現代の水田耕土と同等もしくはそれ以上、イネ属植物珪酸体が土壌中に混入していると思われる。このことから、本時期になると、遺跡周辺では稲作が行われていたと考えられる。このことは、層相ともよく一致する。また、本層準になると、キビ属とオオムギ族が検出されており、これらが栽培種に由来するものであれば、周辺でキビやムギ類の栽培なども行われていた可能性がある。なお、下位の古墳時代前期～古代遺物包含層から、奈良・平安時代遺物包含層への変化が極めて極端であることから、堆積物の削剥など、そこに時間的間隙が存在していると考えられる。このことから、水田耕作に伴う土地改変などが行われたことも考えられる。この点については、今後、平面的かつ層位的な調査を行うことにより資料を蓄積し、検討を重ねていくことが望まれる。

（2）周辺森林植生

今回得られた花粉化石群集をみると、各試料ともハンノキ属が多い。ただし、Bトレンチ試料番号8になると、ハンノキ属の出現率が減少し、これに変わってニレ属－ケヤキ属が増加する。これらの種類は、低地部において、湿地林や河畔林などを形成する種類を含む分類群である。おそらく、低地や河道沿いなどに分布していた母植物に由来しており、そのような場所での局地的な変化を反映していると推定される。この他では、落葉広葉樹のコナラ亜属や常緑広葉樹のアカガシ亜属などとともに、針葉樹のマツ属、温帯性針葉樹のモミ属やスギ属などを伴う。これらの種類は、高木性であり、花粉生産量が多いことから、後背地の植生を反映していると考えられる。このような広葉樹や温帯性針葉樹を伴う組成は、霞ヶ浦東岸にある玉造町三昧塚古墳の堀覆土からも得られている(パリノ・サーヴェイ株式会社,1995)。ここで、関東地方などでは、縄文時代晩期以降になると温帯性針葉樹が増加する事例が確認されており(例えば、増渕・上西,1999)、それがいわゆる「弥生の小海退」に相当する時期にあたるとされている。「弥生の小海退」は縄文時代晩期に始まり弥生時代まで続く海水準の低下期のことであり、日本国内の各地において報告されている。本遺跡周辺に成立していた植生も、このような環境変動を反映していることが考えられる。

引用文献

安藤　一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.

Asai, K. & Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10, 35-47.

原口　和夫・三友　清・小林　弘,1998,埼玉の藻類　珪藻類.埼玉県植物誌,埼玉県教育委員会,527-600.

伊藤　良永・堀内　誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.珪藻学会誌,6,23-45.

近藤　錬三,1988,十二遺跡土壌の植物珪酸体分析.鋳師屋遺跡群十二遺跡－長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書－,御代田町教育委員会,377-383.

近藤　錬三・佐瀬　隆,1986,植物珪酸体分析,その特性と応用.第四紀研究,25,31-64.

小杉　正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用.第四紀研究,27,1-20.

Krammer, K.,1992,PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J.CRAMER,353p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1986,Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1. Gustav Fischer Verlag,876p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1988,Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae,Bacillariaceae,Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag,536p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991a,Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag,230p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991b,Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae,Kritsche Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4. Gustav Fischer Verlag,248p.

増渕　和夫・上西　登志子,1999,総説多摩川流域における過去1万6000年間の古植生変遷.川崎市青少年科学館紀要,10,1-14.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1995,三昧塚古墳築造前後の古環境.三昧塚古墳発掘調査報告書, 玉造町教育委員会・玉造町遺跡調査会,18-20.

写　真　図　版

田島遺跡（田島下地区）全景

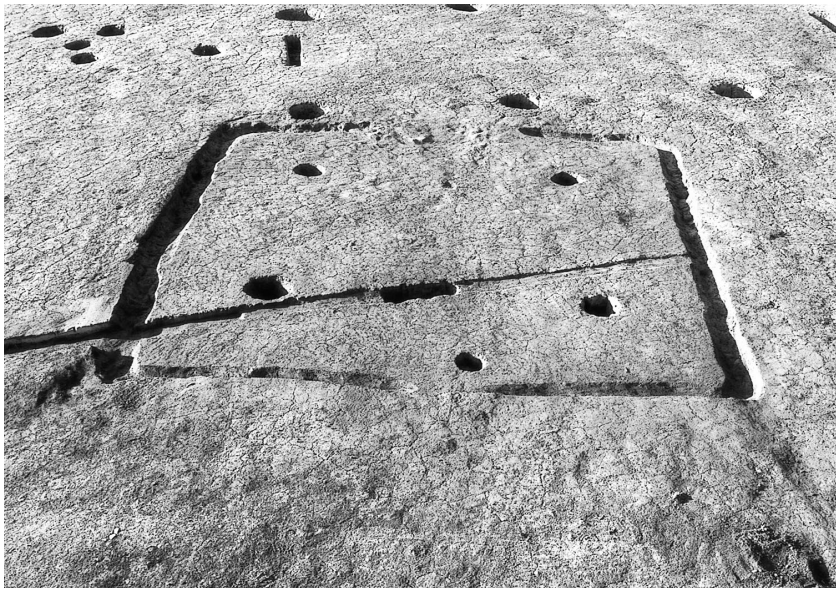
Ｃトレンチ
土層断面（東部）

Ｄトレンチ
土層断面（西部）

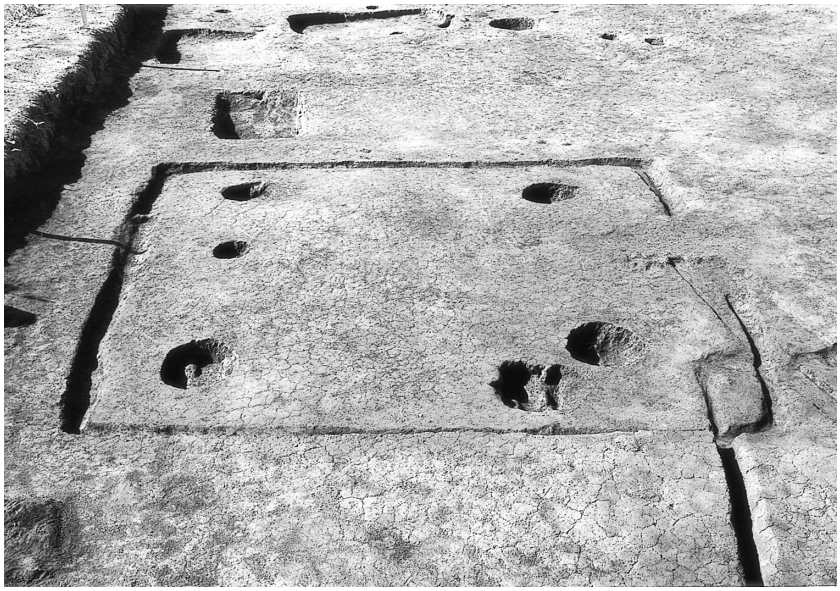
Ｅトレンチ
土層断面（北部）

第２号住居跡
完掘状況

第２号住居跡
遺物出土状況



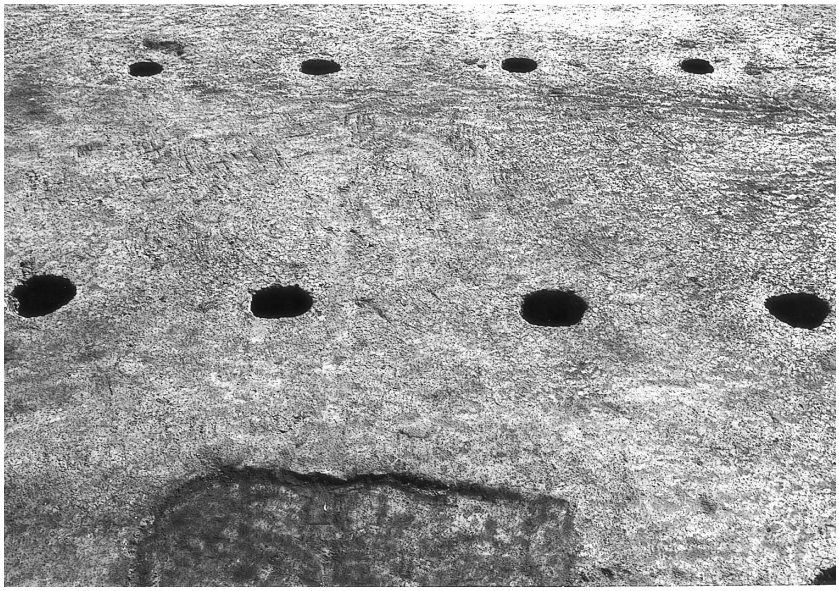
第６号住居跡
完掘状況



第７号住居跡
完掘状況

第７号住居跡
遺物出土状況

第７号住居跡
遺物出土状況（接写）



第１号掘立柱建物跡
完掘状況

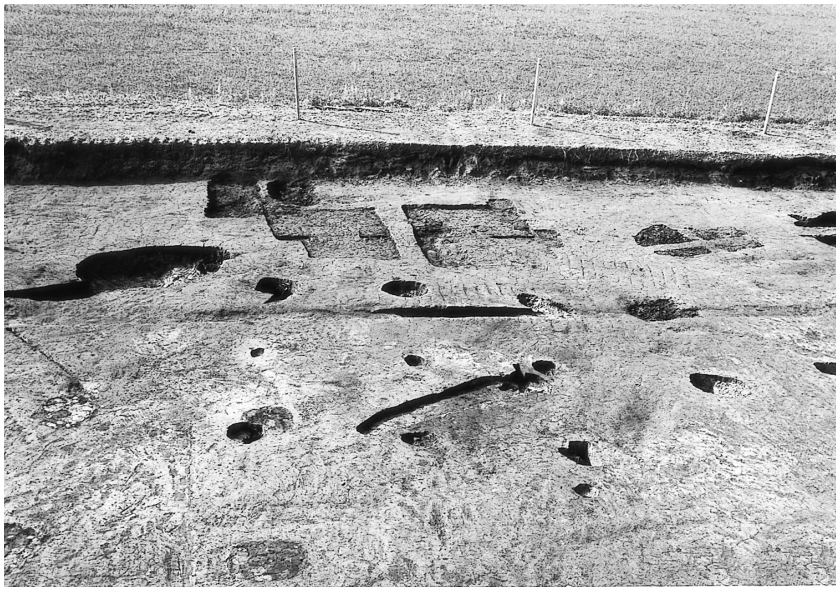
第１号掘立柱建物跡
ピット２土層断面

第５号掘立柱建物跡
完掘状況

第４号掘立柱建物跡
完掘状況

第10号掘立柱建物跡
完掘状況

第11・15号掘立柱建物跡
完掘状況



第14号掘立柱建物跡
完掘状況

第14号掘立柱建物跡
ピット３柱根出土状況

第14号掘立柱建物跡
ピット１柱根出土状況

第１号井戸跡
遺物出土状況

第２号井戸跡
完掘状況

第２号井戸跡
遺物出土状況

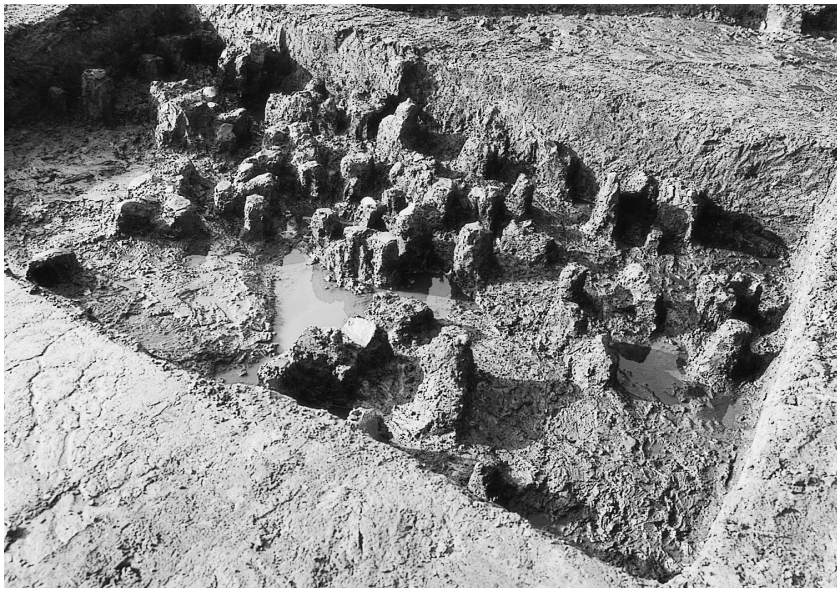
第８号井戸跡
遺物出土状況

第１次水田面
完掘状況

大畔・第１号杭列跡
完掘状況

第１号遺物包含層
完掘状況

第１号遺物包含層（B4i3区）
遺物出土状況



第１号遺物包含層（B4i4区）
遺物出土状況

第１号遺物包含層（B4i5区）
遺物出土状況

第１号遺物包含層（B4i5区）
遺物出土状況

第１号遺物包含層（B4j2区）
遺物出土状況（胡桃）

SE4-60

遺構外-193

SK47-192

SK2-187

SE3-59

SA3-63

遺構外-195

遺構外-194

SE2-42

土師質土器

SD6-83

SD6-82

SI7-14

遺構外-197

SD15-92

SD15-94

SD15-93

SD15-91

SD15-95

SE2-47

SE2-45

SE2-46

土師器，須恵器（１）

HG2-150

SI2-6

SK276-204

HG2-158

SD15-103

土師器，須恵器（2）

SD1-71

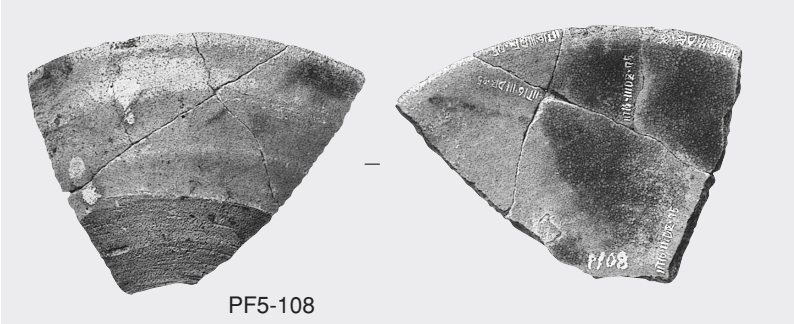
HG2-131

HG2-130

SE2-52・53・54・48

HG2-134・135・138・144・154

遺構外-201　PF8-112　SD5-81　PF8-113


PF5-108

PF8-114

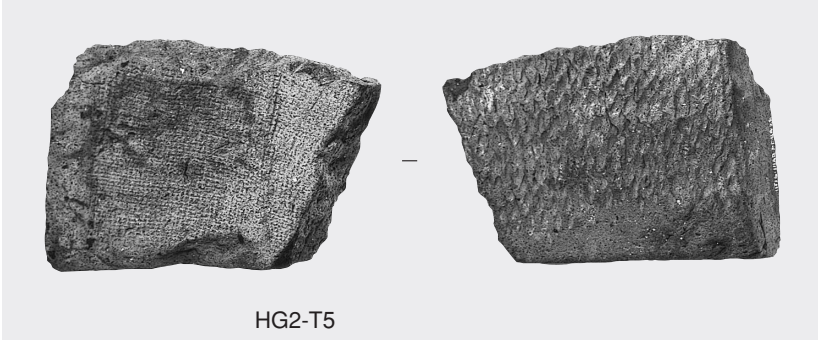
遺構外-198

遺構外-199

遺構外-203

陶器・磁器

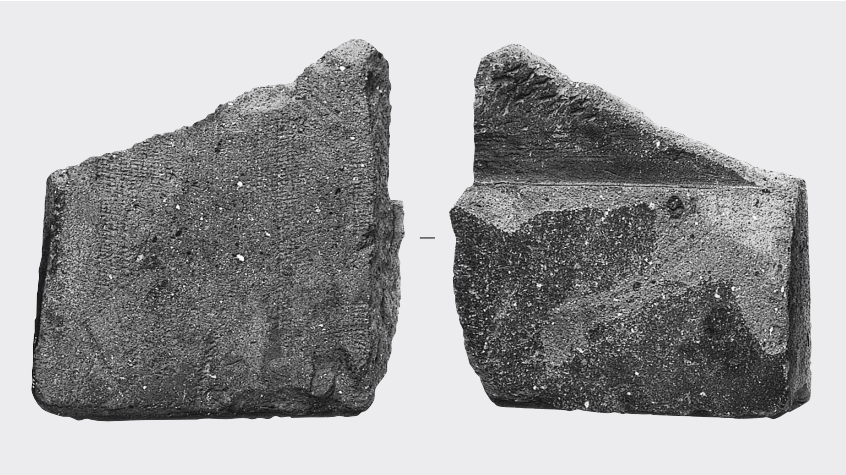
HG2-T12


HG2-T5

HG2-T10

HG2-T7

HG2-T3

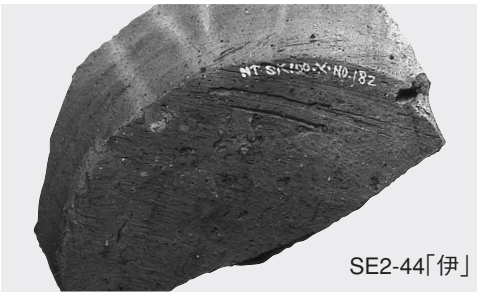


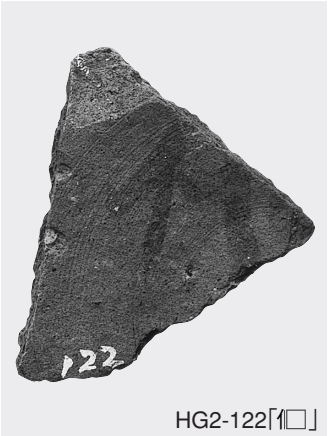
HG2-T13

瓦

遺構外-197「□」

SE2-43「□□」


SE2-44「伊」


HG2-122「仙□」

HG2-123「□」

SD12-86「伊」

HG2-147「伊」

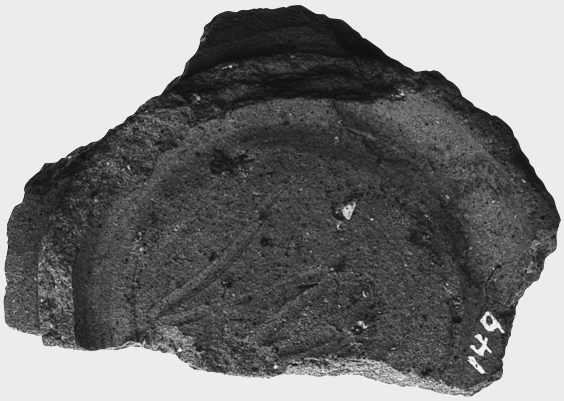
HG2-152「伊」

SE2-49「伊」

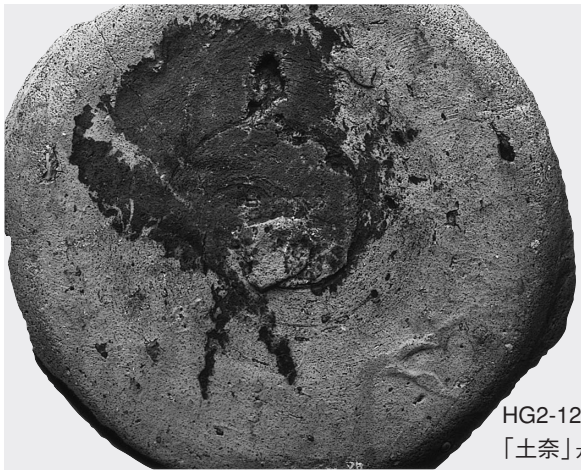
HG2-132「伊」

墨書土器（１）

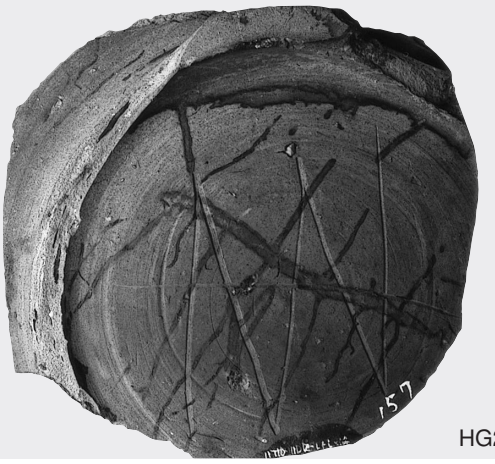
HG2-121



HG2-149



HG2-120
「土奈」ヵ



HG2-157

HG2-124・125・126・127・128

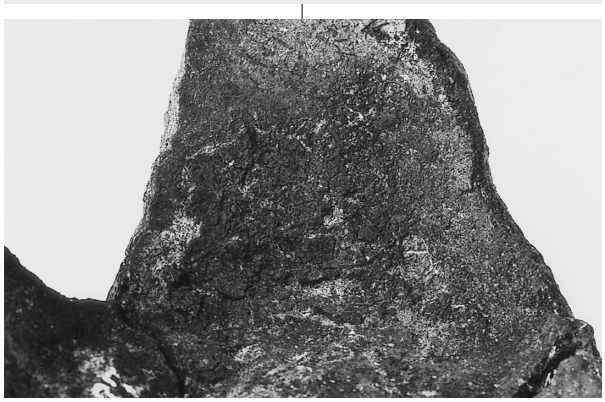
B4j5-180

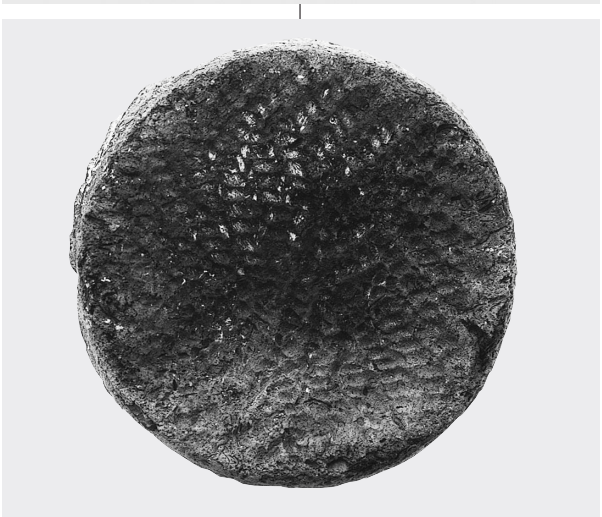
B4i6-176

墨書土器（２），刻書土器，漆付着土器，縄文土器（１）

B4i6-177

C4b2-186

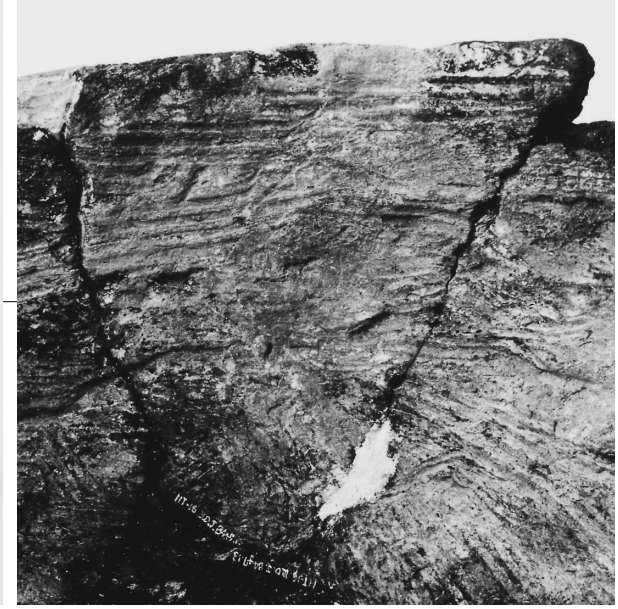




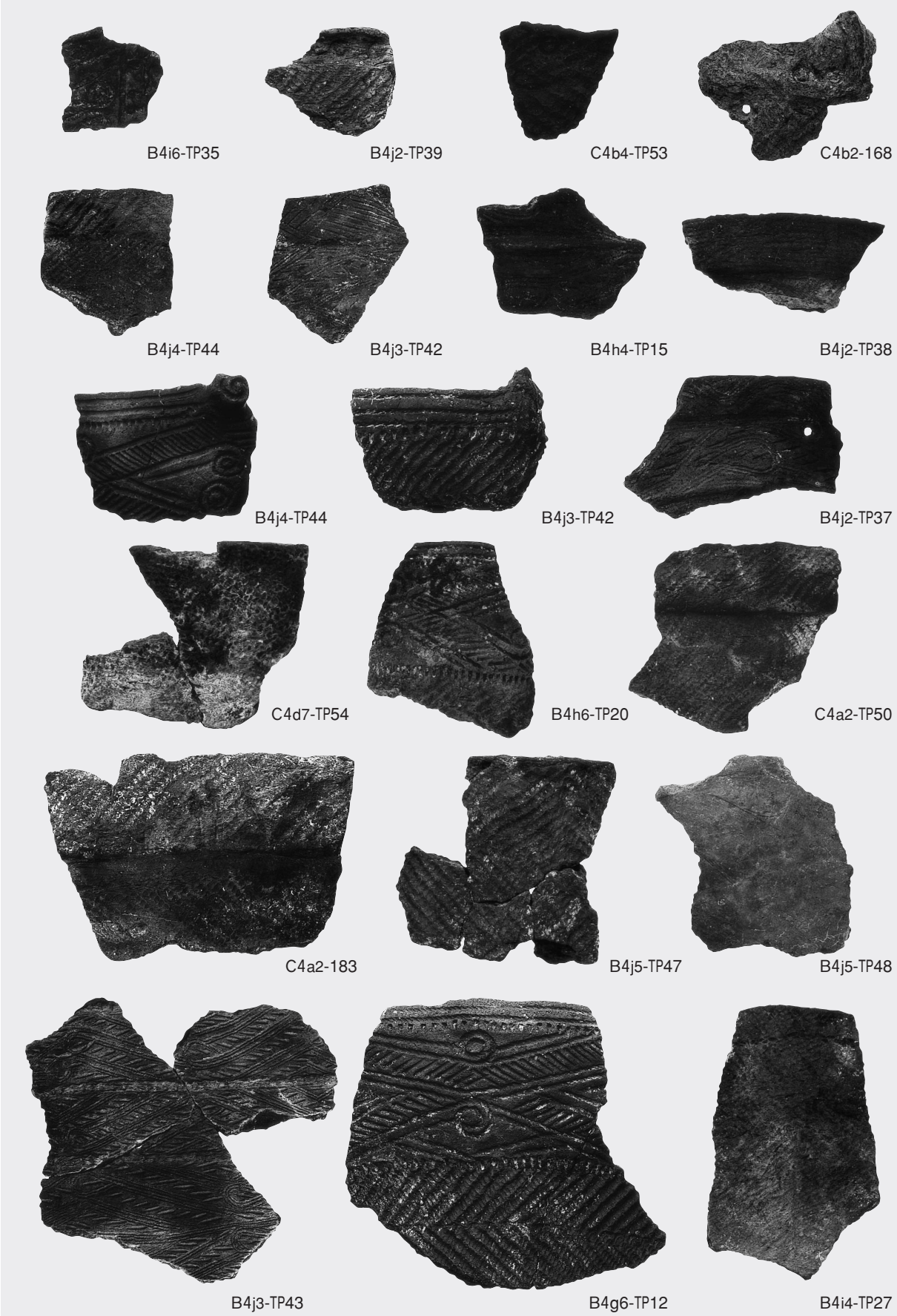
B4i6-175

B4i4-172

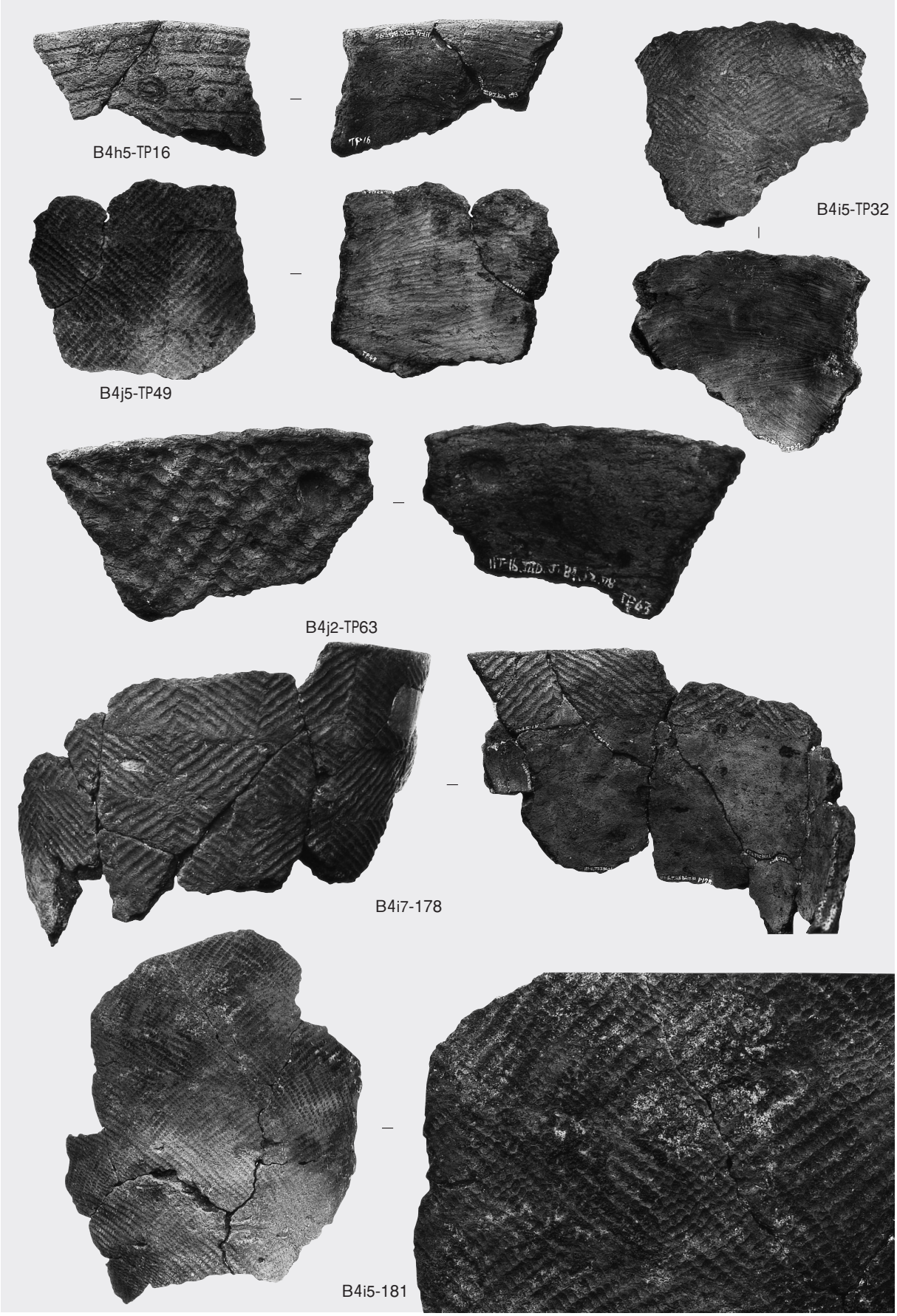
B4g7-165



第１号遺物包含層出土縄文土器（２）



第１号遺物包含層出土縄文土器（３）



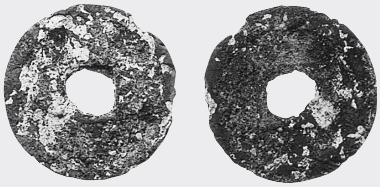
第１号遺物包含層出土縄文土器（４）

SE2-DP1
SD15-DP8
HG2-DP11
遺構外-Q57
HG1-Q47
SD14-Q19
遺構外-Q54
HG1-Q48
遺構外-Q55
HG1-Q39
HG1-Q37
HG1-Q49
遺構外-Q56
HG1-Q52
遺構外-Q53
HG1-Q38
遺構外-Q60
遺構外-Q59
HG1-Q42
遺構外-Q61
HG1-Q43
遺構外-Q62
HG2-Q31
HG2-Q35
HG2-Q32
HG2-Q29
HG2-Q26
HG2-Q28
HG2-Q30

土製品，石製品，石器

SA3-M7

SA3-M8


SA3-M9

SD5-M12

SD6-M13

第一次面-M19

第一次面-M20

第一次面-M21

第一次面-M22

第一次面-M23

第一次面-M24

第一次面-M25

第一次面-M26

第一次面-M27

第一次面-M28

第二次面-M33

第二次面-M34

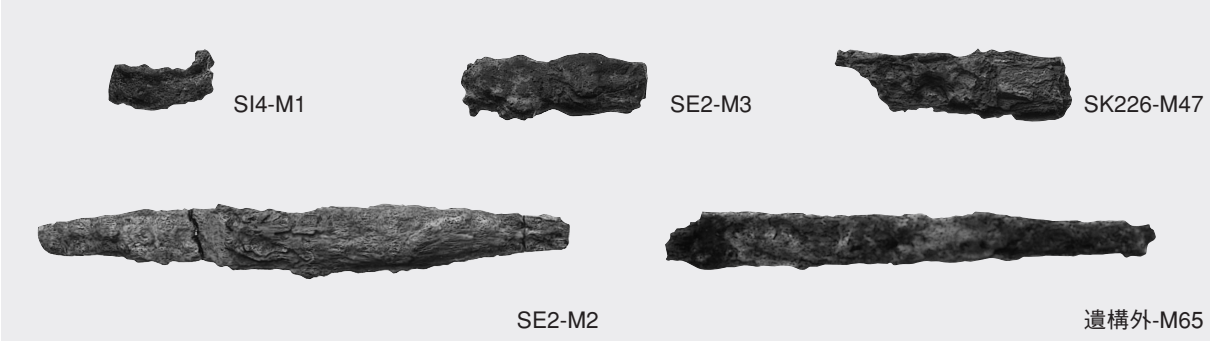
第二次面-M35

第二次面-M36

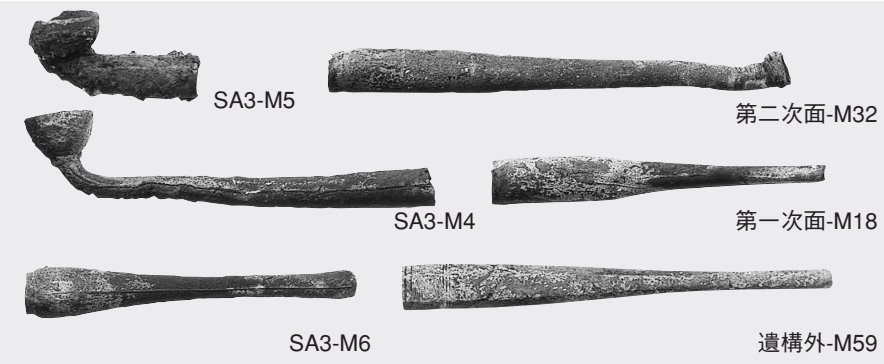
第二次面-M37

第二次面-M38

古銭

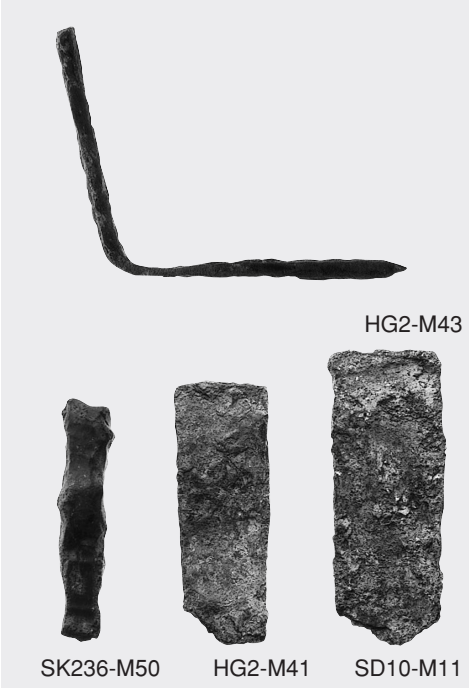

SI4-M1
SE2-M3
SK226-M47
SE2-M2
遺構外-M65

SD13-M14


SA3-M5
第二次面-M32
SA3-M4
第一次面-M18
SA3-M6
遺構外-M59

SD4-M10

第一次面-M15


HG2-M43
SK236-M50
HG2-M41
SD10-M11

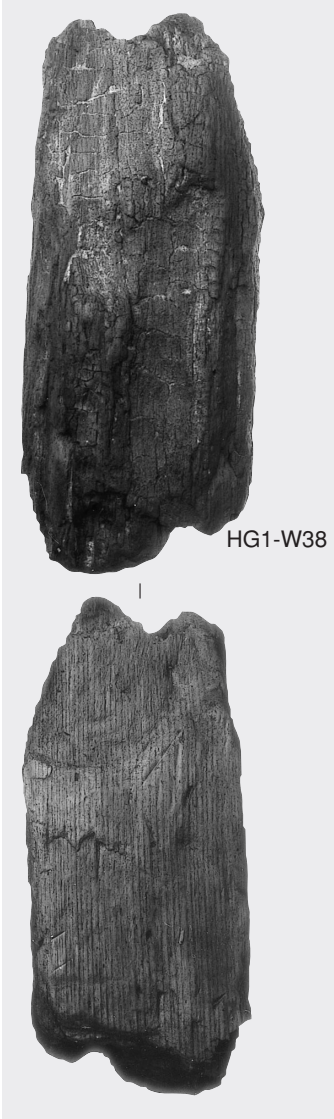
第二次面-M40
SK236-M51
遺構外-M64
第一次面-M16
HG-M44
第二次面-M31

金属製品

SB14-W3

SB14-W4

SB12-W1


HG1-W38

HG2-W36

SE2-W10

遺構外-W37

HG1

木製品，胡桃

茨城県教育財団文化財調査報告第253集

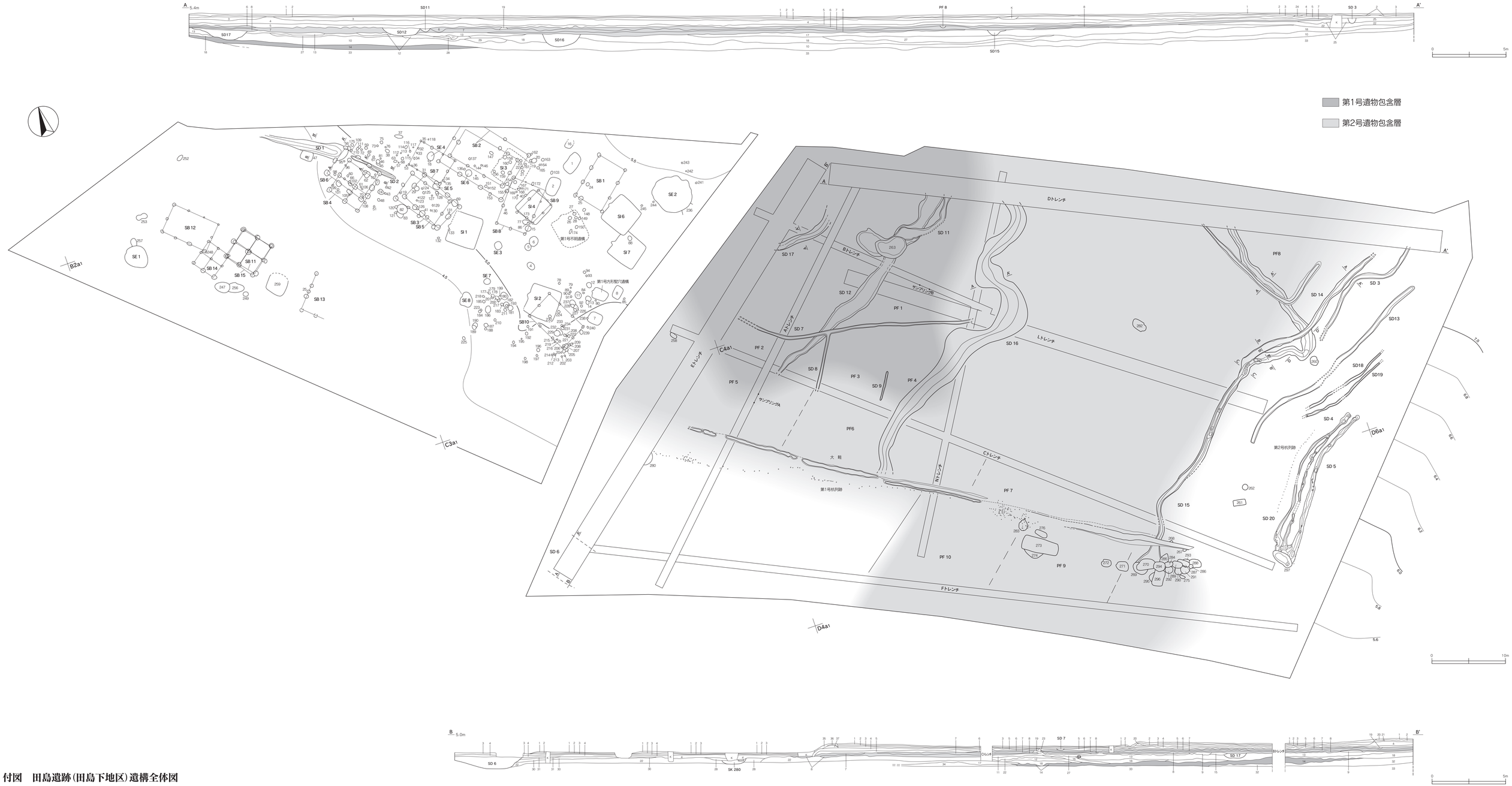
田 島 遺 跡
（田島下地区）

一 般 国 道 6 号 千 代 田 石 岡 バ イ パ ス
（ か す み が う ら 市 市 川 ～ 石 岡 市 東 大 橋 ）
事 業 地 内 埋 蔵 文 化 財 調 査 報 告 書 1

平成18（2006）年３月20日印刷
平成18（2006）年３月24日発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
〒310-0911　水戸市見和１丁目356番地２
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL　029-225-6587

印刷　株式会社　光和印刷
〒310-0836　水戸市元吉田町1823-22
TEL　029-247-4362



付図　田島遺跡（田島下地区）遺構全体図